
ひきわり

夏乃市

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひきわり

【Nコード】

N9505E

【作者名】

夏乃市

【あらすじ】

学園でおこる不可思議な事件。対応に奔走する生徒会書記の向井毅瑠。「ひきわり霊鬼割」と名乗る美少女、神坂八千穂が導く事件の真実とは――。第一幕「テレパシー事件」第二幕「銅像生け贄事件」第三幕「夢喰い事件」第四幕「八千穂事件」すべて完結！

テレパシー事件 プロローグ

それは奇妙な事件だった。

梅雨が中休みに入ったような六月のとある火曜日。私立涼心学園りようしんがくえん高校二年C組で、国語現代文の授業中に実施された小論文の抜き打ちテスト。そのテストで、クラス三十八人中、実に三十人が満点であつたのだ――

成績が良かったにも拘わらず、それが事件となつてしまったのは、三十人が三十人、一言一句同じ論文を提出したためだった。しかもそれは、テストを実施した国語教諭が、模範解答として用意した物とまったく同じ文章だった――それこそ、句読点の打ち方まで。

当然のようにカンニングを疑つた国語教諭の蛭原えびはらは、二年C組全員を赤点にする、と息を巻いた。当日の放課後、蛭原とクラス担任の倉持教諭を含めた、長い長いホームルームが開かれたのは言うまでもない。

しかし、生徒たちは、まるで身に覚えがないことだと言い張つた。なるほど、三十人がまったく同じ論文を提出すれば、カンニングの疑いを免れえないことくらい、高校二年生にもなれば重々承知している。本当に不正を行ったのなら、言い回しや「てにをは」、句読点の位置を変えるなどの小細工があつてしかるべきである。

生徒たちは、いささか説得力に欠けることを承知しつつ、偶然説を主張して、徹底抗戦の構えを取つたのだった。

そんな生徒たちの態度に怒り心頭に発した蛭原は、「素直に謝れば今回だけは大目に見てやろうかとも思ったが、もう絶対に駄目だ」と言い切つた。

生徒たちと蛭原の対立は、ホームルームでは収まりの付かないところまでヒートアップした。結局、見兼ねたクラス担任の倉持が「ここは一旦私があずかる」と大見得を切り、なんとかその場を収めたのだった。

蛭原は再度提出された論文を精査する。生徒たちはとりあえず頭を冷やす。そして、翌週の同じ国語の授業までに再度の話し合いを持つ、ということになった。木曜日にもう一時間ある国語現代文の授業は自習に決まった。

この話は、翌日には学園中の知るところとなり、〈二年C組テレパシーカンニング事件〉と呼ばれるようになっていた。

テレパシー事件 1

「ここまでが事件の概要ね。何か質問は？」

生徒会長の戸時夏目とときなつめが、窓際で腕組みをしたまま生徒会室を見渡した。

「特にないわね。それじゃあ乙蔵おとくらさん、続けてくれる？」

「はい」

一旦棚上げになったものの、蛭原教諭がカンニングの疑いを解いていないことは明らかだった。謝る前に時間をやるからよく考えろ——そう思っていることが、その態度から見て取れた。

なにより生徒側を不利にしているのは、二十五分間と区切られたテストで、授業中にも拘わらず、蛭原が十分間席を外していたことだった。その間はもちろん教室には生徒たちしかおらず、しかも、教卓上には、蛭原が書いた模範解答が置いたままになっていた。

単に無罪を主張するだけでは埒が明かないと考えた二年C組の生徒たちは、藁すがにも縋る思いで、生徒会に応援を頼むことにした。

私立涼心学園高校は、伝統的に生徒会活動が盛んだ。学園が生徒たちに認めている自治権が大きく、その時々生徒会は、それぞれ独自の方針を掲げて生徒たちを率いてきた。現生徒会長戸時夏目は『友達以上・恋人未満』を標榜し、行事運営はもとより、喧嘩の仲裁、恋愛相談などから学園との交渉事まで、生徒一人一人に対して身近で頼れる生徒会を目指して運営をしてきた。昨年十二月の改選から七ヶ月あまり、夏目率いる生徒会は充分に生徒たちの信頼を勝ち得ていた。

そんなわけで、事件の翌日の放課後、二年C組のクラス委員、乙蔵綾音とくらあやねは、全権を委任されて、ここ特別教室棟三階にある生徒会室の扉を叩いたのだった。今現在、ホワイトボードの前に立って話す綾音の言葉に、生徒会の面々が耳を傾けている。

二年C組から生徒会への依頼——というか、要望は二つ。

一つは、蛭原との和解を仲立ちして欲しいということ。
もう一つは、現象としての事件の解明に知恵を貸して欲しいということ。

蛭原との和解については、最低限赤点さえ免れれば良い、というのが二年C組の大勢だった。蛭原との心理的なわだかまりは解消に及ばず――解消されるに越したことはないが、押してする必要を認めず――という点が、蛭原が生徒たちからどう思われているかを、端的に表していた。

それよりも、三十人が同じ論文を書いた謎を解明したい――こちらの方が、二年C組の生徒たちにとっては、深刻な問題のようだった。つまりは、彼らにしても、今回の事態――現象が、偶然ではありえないことだと重々承知しているのである。しかし、カンニングに身に覚えがないのだから、その困惑は蛭原以上だといえた。

「以上、二年C組を代表しまして、是非生徒会の皆様のお力をお借りいたしたく、よろしくお願いいたします」

綾音は背筋を伸ばし、顎を引いて、腰を九十度に折り曲げた。今日のために、トレードマークのバレッタもシックなデザインの物を選んできた。それが全員に見えたであろうことを、綾音は意識する。「ちよつといいかな」

綾音が顔を上げると、おでこの広い、細い眼鏡をかけた男子生徒が手を挙げていた。確か、生徒会副会長で名前は山瀬道生――と、綾音は頭の中を探った。綾音と同じ二年生だったはずだ。

道生は綾音の目を見据えると、淡々とした口調で訊いた。

「本当に、誰もカンニングをしていないの？」

「していません」

綾音は、目を逸らさないように努力しながら、一呼吸置いて答えた。

道生の質問は、当然されてしかるべきものだった。綾音も、ひいては二年C組の全員が、まず訊かれるだろうと予測していた。そして、生徒会に信じてもらうにはどう説明したら良いかが問題になっ

たのだった。

理論的に説明するべきだ、との意見があった。説明は不要だ、との意見もあった。事前に、不正はしていない旨の宣誓書と、全員の署名を用意しておくのはどうか、との意見もあった――そして結局、どう説明するかは綾音の判断に託されたのだった。

綾音が選択したのは、目を逸らさず、事実のみを簡潔に伝える方法。言葉を重ねて言い募るより、力一杯否定するより、一番確実で、しかし一番難しい方法だった。

生徒会室の中央には、会議用の長テーブルが二脚平行に並べられていて、その周囲に、道生を含めた六人が座っている。その全員が綾音を見つめていた。唯一、窓際に立った生徒会長戸時夏目だけが、綾音と他の面子の顔を、交互に均等に眺めている。

綾音にとって永遠にも感じられた数秒の後、ぱんっ、という乾いた音がして、全員の視線が音のした方へと流れた。夏目だった。

ぱんぱん、と夏目は再度手を打った。

「オッケー、引き受けましょう」

夏目の言葉に、綾音は、ほっと肩の力を抜いた。どうやら信じてもらえたようだ。質問を発した道生の顔にも疑念の色はない。形式的な質問だったようだ。

「まずは調査ね」夏目は窓から離れると、綾音の脇に立った。「今手が空いているのは……向井君。大丈夫？」

はい、と答えたのは、道生の隣に座っている男子生徒だった。色素の薄い柔らかな癖毛の持ち主は、生徒会書記で、二年E組の向井^{むかい}毅^{かた}瑠^る。とある理由から、彼の名前を知らない生徒はいない程の有名な人だ。

「それから、乙蔵さん。あなたもお手伝いをお願いね」

「え？ 私ですか？」

「そうよ。あなたのクラスの問題でしょ？」

綾音より頭半分ほど背の高い夏目が、にっこりと笑った。まだ稚^{いとけな}い子供に言って聞かせるように。もっとも、考えてみれば当たり前

の話で、綾音は、生徒会にすべて任せてしまえると思っていた自分に驚いた。

三度^{みたたび}夏目が手を打った。それを合図に、生徒会の面々は次の仕事へと移っていった。

ホワイトボードの前で、一瞬、置いてきぼりを喰らったような顔をした綾音に、毅瑠が声をかけた。

「じゃあ、乙蔵さん。早速、今から調べに行こうか」

言って、さっさと生徒会室を出る毅瑠の後を、綾音は慌てて追いかけた。

テレパシー事件 2

放課後の廊下に吹奏楽部が練習をする楽器の音色が響いている。窓の外からは運動部の生徒たちの掛け声が聞こえてくる。

生徒会室のある特別教室棟と、各クラスのある一般教室棟は、渡り廊下で繋がっていた。

生徒会室を出た毅瑠は、三階の渡り廊下中程で足を止めた。

「乙蔵さん」

「はい！」綾音の声が裏返った。

ちよつとの間を置いて、毅瑠が吹き出した。

「生徒会の調査だからって、そんなに気負わなくても大丈夫だよ」
毅瑠は笑いをかみしめた。「それとも、俺が生徒会役員だから緊張してる？」

「そんなことはありません」綾音は必要以上につっけんどんに答え、逆効果だったことに思い至る。「ええと……そうじゃなくて、向井君で……」

「何？」

「〈銅像生け贄事件〉の向井君でしょ？」

「そうだよ」

毅瑠が苦笑した。だから何だ——と言わんばかりに。綾音は穴があったら入りたくなった。さっき生徒会室では上手く話せたのに、今回は思考が上擦った挙げ句、この体たらくだ。

「二年C組の教室はそこだよね」

毅瑠は綾音の思考などお構いなしで、渡り廊下北側の窓から、すぐ目の前の教室を指さした。

渡り廊下は、ちょうどB組とC組の間に位置している。特別教室棟から渡りきって右に曲がれば、そこが二年C組だった。ちなみに、一年生は四階、三年生は二階が教室だ。

綾音は毅瑠の問いに無言で頷いた。外から見るとどの教室も同じに見える。しかし、綾音にとっては、学園内でのホームグラウンド、見慣れた二年C組だ。

毅瑠は窓に近付くと、しげしげと二年C組を観察した。いつの間にか、右目に虫眼鏡のような物をかけている。まるで——小説に出てくる名探偵のようだ。

それは何?——と訊こうとして、しかし、何となくタイミングを逸した綾音は、毅瑠の視線を追って窓の外を見た。そして、中庭から一般教室棟を見上げている女生徒を認めた。

すらりとした長身の立ち姿。高校生離れして大人っぽい雰囲気。切れ長の目と、すっと通った鼻筋。無表情な口元が少し冷たい印象を与えるが、それがかえって彼女の美貌に凄味を与えている。——しかし、それらすべてを抑えて、彼女には一度目にしたら忘れられない特徴があった。

正面から見ると一見ボブカット風の髪。しかし、左半分の後ろ髪だけが長く、それは腰の上まで、左一本だけの三つ編みに編み上げられていた。

(あれは……)

この涼心学園高校に彼女を知らない者はいない。

(神坂さん?)

かみさか

かみさかやちほ

彼女の名は神坂八千穂。今年入学した一年生だった。透き通った瞳が、二年C組の教室を見上げているような気がした。綾音が目を離せずに見つめていると、彼女がこちらを向き、目が合った——

「乙蔵さん、行こう」

「!」

射すくめられたように、もしくは魅せられたように、一瞬自失していた綾音は、毅瑠に声をかけられて必要以上に驚いてしまった。

「まだ緊張しているの?」

毅瑠がくすくすと笑い、綾音は耳まで真っ赤になった。

渡り廊下を渡りきる前に、綾音がもう一度中庭を振り返ったとき

には、既に八千穂の姿は見あたらなかった。

テレパシー事件 3

二年C組の教室に残っている生徒はいなかった。黒板の上に掛けられた時計が、午後四時半まであと少しのところを指している。

入り口の引き違い戸を開けたところで、毅瑠は立ち止まった。渡り廊下から、虫眼鏡様の物はかけたままだ。鼻にかけるようになっていたので、むしろ眼鏡の出来損ないと表現するべきだろうか。

「それは何？」と、今度こそ綾音は訊いた。

「片眼鏡。見たことない？」

「ないわ。……探偵気分てこと？」

「そんなところだね」

毅瑠は目を細めて教室内を見渡した。特に、教卓付近を念入りに観察しているように綾音には見えた。

どれ程そうしていたか、毅瑠はふっと息を吐くと、二年C組の教室へと足を踏み入れた。片眼鏡は外している。

「乙蔵さんの席はどこ？」

「ここよ」

綾音は教室中央の自分の席に着いた。毅瑠も手近な席に座る。

「さて、詳しい話を聞かせてくれる？」

「また？」

「今度は、乙蔵さん個人のことを含めて、最初からね」

綾音は机の上で手を組んでしばらく考えた。それから、おもむろに話し始めた。

国語科の蛭原教諭は、授業中によく抜き打ちテストを行うことで有名だった。昨日も、授業が始まって十五分程して、唐突に「これから小論文のテストをやる」と言い出したのだった。

生徒たちの控えめなブーイングもどこ吹く風で、蛭原は黒板に小論文のテーマを書いた。

『国語の勉強をする意味とは何か？』

角張った文字で大書し、嫌らしくほくそ笑みながら生徒たちを見渡した蛭原は、四百字詰め原稿用紙を配り始めた。原稿用紙一枚、最後の行まで書くこと、タイトルと名前は欄外に書くこと、時間は二十五分。そう指示を出すと、蛭原本人も教卓に向かって原稿用紙を埋め始めた。

そこまでの授業の内容とはまるっきり関連のないテーマ——なしろ、漢字の授業をしていたのだから——に、生徒たちは混乱した。多くの生徒が、教卓でボールペンを走らせる蛭原を呆然と見つめた。十五分程して、模範解答を書き上げたらしい蛭原は、しつかりやれよ、と言い残して教室を出た。トイレか、一服入れに行ったのか、戻ってきたのは十分ほどしてからだった。

原稿用紙が配られたとき、綾音も他の生徒たちと同じく途方に暮れた。——意味なんてあるわけじゃないじゃん！ と心中毒づいてみても、それをそのまま書くわけにはいかない。目立たないように周囲を見渡すと、誰もが鉛筆を手を固まっていた。

綾音は教卓に座る蛭原を睨み付けた。

（あんなに楽しそうに……何を書いているのかしら）

もちろん、それは小論文の模範解答なのだが、混乱した綾音の思考は上擦るばかりだ。なんとか一矢報いたい——これも意味不明だが——と考え、力の限り睨み続けた。

そうするうちに、教室のあちこちから鉛筆の走る音が聞こえ始めた。どんなに理不尽でも、白紙で小論文を提出するわけにはいかない。皆、それなりに原稿用紙を埋め始めたらしい。

さすがに綾音も、何か書かなければと思った。その矢先だった。

唐突に頭の中に言葉が浮かんだ。

あれっと思い、意識を集中すると、それはいかにも蛭原の好きそうな文章だった。綾音の頭の中でそれは、原稿用紙に書き付けられてすらいいた。テスト時間は既に十分近く経過していた。迷っている暇はなく、ままよとばかり、綾音はその文章を原稿用紙に書き付けた。その作業はテスト時間をぎりぎり一杯使ってようやく終わった。

ほうほうの体で原稿用紙を提出し、なんとか切り抜けたことに安堵していられたのはお昼休みまでで、五時間目の数学の授業中に、血相を変えた蛭原が飛び込んだきたのだった。

「でも、私たちだって驚いたわ」

蛭原の言動を思い出して、綾音は憤懣やるかたないという表情で机を叩いた。

「乙蔵さんも同じ論文を書いた一人なんだよね？」

綾音が頷く。

「他に、どこの席に座っていた生徒が同じ論文を書いたかわかる？」
教卓の中にはクラスの座席表が置いてある。綾音はそれを持ち出すと、端から丸を付けていった。

「この子と、この子……あと、この子ね」

教室の机の並びは六列。一列には六人から七人の生徒が並んでいる。もちろん、殆どの席に丸印が付けられた。毅瑠はそれを見ながら教室を見渡した。

「法則性はないみたいだね」

丸印の付いていない生徒がどこか一画に集中している、ということもなかった。

「テスト中のさ、原稿用紙が思い浮かんだってやつ……他の人たちはどうだったのかな？」

「どうって？」

「どんな風に例の小論文を書いたのか、みんなに訊いてみた？」

——そういえば、昨日の今日で皆興奮していて、そんな細かい話はしていないような気がする。

「あ、でも、厚子あつこは私と同じようなこと言ってたなあ」

「厚子さん？」

はねだあつこ

「羽田厚子。この子よ」綾音は、座席表の彼女の名前を指さした。

毅瑠は顎に手をあてて考え込んだ。座席表を睨み付けている。意外に眉毛が太いんだなあ、と綾音は余計なことを考えた。

「変なことを聞くけど」毅瑠が顔を上げた。「乙蔵さんが小論文の

文章を思い浮かべたとき、その文章は最初から完成していたの？
それとも、順次浮かんできたの？ どっちだったか覚えてる？」

「？」

綾音は面食らった。質問の意図がわからない。しかし、穀溜の真剣な眼差しに気圧されて、自分の記憶を辿る。

「……完成していたと思う」

「そのとき、蛭原先生はまだ模範解答を書いている最中だったかな？
それとも書き終えていた？」

「まだ書いていたわ」

綾音は視線を教卓へと泳がせた。そこに昨日の蛭原の姿を幻視する。そして、視線を戻した。そのとき――

「ひっ……」

穀溜が、例の片眼鏡をつけて綾音の顔を覗き込んでいた。顔の近さと、その射るような視線に、綾音は思わず腰が引けた。ガタガタと椅子が音を立てる。

「ああ、ごめん。驚かすつもりじゃなかったんだ」

穀溜は笑いながら片眼鏡を外した。その、爽やかな笑顔に、綾音は憎らしさが募った。

「うそ！ 向井君、サドでしょ？」

「え？」

「私、向井君に驚かされたの、今日三度目だもの」

「は？ 乙蔵さんが勝手に驚いただけじゃない？」

「記憶にご・ざ・い・ま・せ・ん！ 明日、クラスのみんなに報告するわ。生徒会書記の向井穀溜君はサドだから、気をつけるようにって」

「な、ちょ……。どっちがサドだよ！」

年相応に――そう、綾音が思ったただけだが――顔を赤らめて慌てる穀溜に、綾音は少し溜飲を下げた。とどめにと、悪戯っぽく上目遣いに見上げてみると、穀溜はため息をついて肩を竦めた。

「今日はここまでにしようか」

時計は四時五十分を指していた。

「何かあった？」

「事件……あえてそう呼ぶけど……それについての仮説はいくつか立った。でも、まだなんともいえない。蛭原先生との件は、これから生徒会で検討するよ」

「そう」綾音はちよつと肩を落とした。

「タイムリミットは来週の火曜日の三時限目開始までだろ？」焦りは禁物だよ」

「うん」

「それはそうとさ」

「？」

「このクラスで、何か最近流行っているものってない？」
毅瑠の口調は雑談に入ったようだった。

「たとえば？」

「おまじないとか、占いとか、アクセサリーとか」

「それなら……」綾音はスカートのポケットから携帯電話を取り出した。そのストラップとして、フェルト製のマスコット人形がぶら下がっている。

毅瑠は気楽にそれを手に取った。

「うわっ……何これ？ 不細工だなあ」

「それが逆に可愛いでしょ？」

小さな男の子を形作ったそのマスコット人形は、細工は非常に細かいものの、如何せん可愛さが欠けていた。

「女子のセンスってわからないなあ」

「あら、男子も結構買ったわよ」

「自分で作ったんじゃないの？」

「駅前の露店で売ってたんだって。先週、秋山さんが買ってきて、かわいいねって話になったのよ。私たちも欲しいって言ったら、じゃあ買ってきてあげるって。しかもね、これへお願い事が叶うお守りなの」

「お守り？」

「半分眉唾だけどね。露店のお姉さんがそう言って売ってたんだって。そういうの、よくあるじゃない？　で、その話をしたら、今度は男子連中が、俺たちも欲しいって」

「どの位の人が買ったの？」

「クラスのほとんど……三十人ぐらいかなあ……あれ？」

綾音は背中に何か冷たいものが走るのを感じて、慌てて座席表に目を落とした。丸印の付いている三十人は、人形を買った生徒ではなかったか――

「最初に買ってきたのは、秋山さん？」

「うん。秋山^{あきやましやうこ}彰子。……なに？　これ、どうかしたの？」

「いや。別件でね。校内の流行の広がり方ってテーマで色々調べているんだ。学園祭向けのネタだよ」

「ふーん……」

「その秋山さん、部活は？」

「帰宅部だったと思うけど」

そうか残念、と毅瑠は笑った。

「ねえ、これって」

「俺も欲しいと思ったんだけど。また明日にでも秋山さんに訊いてみるよ」

――何かをはぐらかされた気がした。毅瑠をやりこめたと思っていたら、完全にやり返された感じだ。綾音は、あんなにかわいいと思っていたマスコット人形が急に薄気味悪く思えて、携帯電話をポケットに戻すことができなかった。

テレパシー事件 4

「明日の放課後、また生徒会室に来てくれる？」

綾音にそう言い残して、毅瑠は二年C組を後にした。足早に廊下を抜け、生徒会室へと戻る。そこで、簡単な報告と、いくつかの頼み事を他の面々にすると、再び渡り廊下を越えた。目指すは厚生棟だ。

厚生棟——通称〈食堂〉は、一般教室棟の北側に位置している。二階建てで、一階に学生食堂が、二階に本や文具などを扱う売店と職員食堂がある。高等学校としては広い学生食堂は、涼心学園高校の一つの売りで、私立高校ならではの施設だった。この時間——午後五時半では、食堂はもちろん営業していない。しかし、部活動が終了する午後六時までは、テーブルを談話スペースとして使うことができる。

毅瑠は、まばらに生徒たちが点在する食堂に足を踏み入れると、入り口脇の自動販売機でカップのコーヒーを二杯買った。そして奥を目指す。敷地の北側に建っているため、食堂のほとんどは校舎の陰になる。しかし、食堂最奥の一角だけ、校舎の陰から外れ、西日が差し込んでいた。オレンジ色に染まったその席に、一人の女生徒の後ろ姿がある。

「チホ」

左側だけの長い三つ編み——それは、綾音が見た、中庭から一般教室棟を見上げていた女生徒——かみさかやちほ神坂八千穂だった。

毅瑠の声に、八千穂は読みかけの文庫本を閉じた。毅瑠はテーブルを回り込むと、彼女の向かいに腰を下ろした。

「遅くなった。これはお詫び」

毅瑠は、手にしたカップの一つを差し出した。八千穂は無言で頷き、それを受け取る。

西日の中、しばし、二人は無言でコーヒーを啜った。

「用は何？」先にコーヒーを飲み干した八千穂が訊いた。毅瑠は、携帯電話のメールを使って、八千穂をここに呼び出していた。

「二年C組テレパシーカンニング事件。聞いたか？」

小さく八千穂が頷いた。

「鬼の匂いがあるだろう？」

「学校内に鬼の気配はない」

「そうか……。二年C組の生徒を誰か視^みた？」

小さく八千穂が首を振る。

「一人……生徒会に相談をしにきた女子を〈魂^{たま}見鏡^{みきょう}〉で視たよ。……少しだけ〈魂^{たま}糸^{いと}〉が切れてはみ出していた」

「はみ出したら、少しもたくさんもない」

「そうだな」と毅瑠が苦笑した。「恐らく、同じ論文を書いた全員がはみ出しているな」

八千穂の目付きが、ずっと鋭くなった。

「毅瑠。鬼の心当たりがあるの？」

「二年C組では、駅前の露店で売っているマスコット人形が流行っている。今回テレパシーを発症した生徒たちは、恐らく全員それを持っている」

「人形？」

「親指くらいの大きさの不細工な人形だ。なんでも〈願い事が叶うお守り〉なんだそうだ」

「……いつ頃から？」

「秋山さんという女子が見つけてきたらしい。ここにくる前に電話した。秋山さんがその人形を最初に買ったのは先週の日曜日。十日程前だな。水曜には、欲しいと言ったクラスの女子の分を、金曜日には、さらに追加で男子の分を買った。全部で三十個近くだ」

無表情な八千穂の顔の中で、瞳だけが一瞬天井を見た。毅瑠は、これが、何かを考えるときの彼女の癖であることを知っている。

「俺は、その人形が怪しいと思う。例えば、人形に〈魂^{たま}糸^{いと}〉を仕込んで、時間差でそれを発動させる……なんてことはできるのかな？」

「本体から切り離された〈魂糸〉はすぐに消えてしまう」

「一瞬で？」

「しばらくは持つ場合もある。でも、切れ端なら一瞬」

「ん——、人形が犯人という説はだめか」

「売り子が怪しい」

「でも、実際に露店で売り子の女性に会ったのは秋山さんだけなんだ」

「……」

「まあ、でも怪しいのは間違いない。秋山さんに場所を訊いたから、調べてくれないか？」

八千穂は小さく頷いた。

「穀瑠は？」

「一緒に行きたいのは山々だけど、国語の蝦原先生を説得する材料も探さなきゃならないんだ。今、生徒会の人々が手分けして二年C組の全員に話を聞いている。俺も手伝わなきゃ」

「わかった。コーヒーご馳走様」八千穂は席を立つと、一人食堂を後にした。

穀瑠は、コーヒーの残りを飲み干すと、ゆっくりと八千穂の後を追った。

テレパシー事件 5

毅瑠が生徒会室に戻ったときには、時刻は午後六時近くなっていた。

部活動は午後六時までと決められている。生徒会活動も当然それに準じるのだが、あまり守られてはいない。

「ご苦労様、向井君」真っ先に夏目が声をかけてきた。「出てる人達も、そろそろ戻ってくるわよ」

生徒会室にいるのは、夏目と道生の二人だけだった。

「あとのくらい残ってる？」毅瑠が道生に訊いた。

「ほとんど終わった。みんな協力的だったよ。これが電話した分。部活動組の分は、縁田先輩たちが戻ってからだ」

「さすが、仕事が早いな」

毅瑠は、道生から紙の束を受け取った。それは、二年C組の生徒一人一人に対して行った聞き取り調査の結果で、毅瑠が、八千穂と落ち合う前に頼んでいったものだった。既に帰宅した生徒には電話で、部活動をしている生徒には直に、聞き取りを行った。綾音と秋山彰子については毅瑠が聞いた。残りの三十六人について、夏目を除く他の生徒会メンバー五人が手分けをしたのだった。

聞き取り内容は三つ。例の小論文で模範解答と同じ答えを書いたか否か。その小論文を考えた、もしくはは思いついた経緯を詳しく。そして、マスコット人形を持っているか否か。

「ねえ、マスコット人形って何なの？」夏目が訊いた。

「〈願い事が叶うお守り〉だそうです」

「その人形のお陰で、小論文の答えが見えた……とでもいうの？」毅瑠は軽く肩を竦めた。

「学園祭の生徒会企画、校内の流行の広まり方……なんてどうですか？」

「面白いけれど、今回の調査に便乗するのはどうかしら？」

夏目が小首を傾げて穀瑠を見据えた。道生も見ている。

「……すいません。それは冗談です。ええと……ちよつと説明し難いんですけど、戸時会長の説もあながち冗談では済まされないかもしれないかもしれません」

夏目と道生が顔を見合わせた。

「聞き取り調査の結果がすべて集まればはっきりしますが、同じ論文を書いた生徒は、全員マスコット人形を持っている可能性があります。偶然にしては、気持ち悪いですね？ 今回の件は、普通に考えればありえない現象です。二年C組が不正をしていないなら、もう、何らかの不可思議な力が働いたと考えるしかないと思うんです」

「人形との因果関係が証明できるのか？」と道生。

「んー、どうだろう。でも、布石にはなると思って」

「本当に人形のせいかどうかはわからなくても、二年C組の生徒たちが、人形が原因ってことで納得する布石……そういうことね？」

「ええ」

「でも、蛭原先生はそれじゃあ納得しないでしょ」

「そっちは、上手くすれば、偶然ってことで言いくるめられると思うんです」

夏目と道生が目を丸くした。道生が何か言おうと口を開きかけたとき、入り口の扉が開いた。

「お、戻ってたのか。向井」巨体を揺らして入ってきたのは、生徒会副会長の縁田太一えにしだいちだった。「ほら、概ね終わったぞ」

調査用紙の束を差し出す太一の背後には、他の三人も続いていた。生徒会書記の木谷希奈きたにきな。生徒会会計の水村作みずむらさくと、生徒会事務員の水村力みづむらき。今回戻ってきた四人は全員三年生。作と力は双子の姉弟だ。生徒会の中で、二年生は穀瑠と道生の二人だけだった。

「突貫作業だったから大変だったわ。向井君、この礼は高いわよ」作が穀瑠の肩をつつきながら言った。

「何言ってるんだ。ほとんど俺がやったのに」と力。

「双子はセットなんだから、力がやったのなら、私がやったのと同じよ」

作がくるっと体を回して力を指さす。勢いで、彼女のさらさらの短髪が穀瑠の肩口で舞った。

「二人ほど捕まえられなかった人がいるの。後で自宅に電話してみなくちゃ」

大きな眼鏡を直しながら、希奈が言った。

「それ、俺がやりますよ。希奈先輩」

「ん？ どうした山瀬。ぽかんとした顔して」

太一が、固まっている夏目と道生に気がついた。道生は、半開きだった口を閉じて穀瑠に目をやった。

穀瑠は、調査用紙の束をまとめると、うほん、とわざとらしい咳払いをした。

「先輩方、どうもありがとうございました。調査結果は俺の方でまとめます。……なんというか、乙蔵さんの話を聞く限りでは、偶然か超常現象でしかありえない気がしてきました。でもまあ、四月の事件みたいに、俺たちでは理解できないような出来事もあるわけで、生徒会としては、蛭原先生との交渉を第一義に、生徒たちにはそこで納得してもらう、という方向が良いと思うのですが、どうでしょう」

全員の視線が夏目に集まった。

「一介の高校生では説明できない現象もある。それは当然ね。いいわ。生徒会としては、二年C組は不正をしていないという観点で……そこは大丈夫よね？」

夏目が穀瑠に念を押した。

「大丈夫だと思います。時間は十分、原稿用紙一枚。三十人が写す暇はないですね？ 読み上げるという手もあるかもしれませんが、いつ先生が戻るかもわからないのに、それはないでしょう。聞き取りのときの感触はどうでしたか？」

「嘘を付いている奴はいなさそうだった」

太一が答え、他の面々もそれに同意した。

「わかったわ。では、生徒会としては、二年C組全員の赤点は不当だという方向性で行きたいと思います。交渉の窓口と、もう一つの調査、このまま向井君お願いね」

「はい」

「じゃあ、今日はここまで。お疲れ様」

夏目が、ぱんっ、と軽く手を叩いた。それを合図に、全員が思い思いに帰り支度を始める。

「道生。ちょっと頼みがあるんだけど」 毅瑠は道生に声をかけた。

「そうくると思ったよ」 道生は、眼鏡の奥で軽く毅瑠を睨んだ。「周辺を固める資料集めだろう？」

「いくつか腹案はあるんだ。後は、どれが実行可能かだ」

「下手、打つなよ」

「わかってるよ」

時刻は、午後六時十五分になっていた。

テレパシー事件 6

同じ頃、涼心学園高校から程近いK駅前の商店街に、綾音は一人で向かっていった。

日が一番長いこの時期、六時半近くなっても空には燃えるような夕焼けを見ることができた。とはいえ、あまり帰宅が遅くなると、お母さんに怒られてしまう――普段ならそう考えるとところだが、今の綾音には、そんなことを気にしている余裕はなかった。

二年C組の教室で毅瑠と別れた綾音は、一旦はまっすぐ帰ろうとした。しかし、マスコット人形のことをどうしても頭から離れなかった。散々悩んだ挙げ句、秋山彰子に電話をかけたのだった。

綾音が何の前置きもなく、マスコット人形が売っている場所を詳しく教えて欲しい、と言うと、彰子は笑いながらこう言った。

「どうしたの？ さっき生徒会の人からも同じような電話があったのよ。小論文の件はついみたいなの訊き方だったわ」

毅瑠と別れてからまだ三〇四十分ほどしか経っていなかった。生徒会の――というよりは毅瑠の行動の速さに、綾音は信頼感よりも、どうしようもない焦燥感を覚えた。彰子への礼もそこに電話を切ると、急いで商店街へと走ったのだった。

彰子によると、露店が出るときは大抵同じ場所で、商店街中程の閉店した洋品店のシャッターの前だという。

（ここら辺のはずだけど……）

聞いた場所に露店は見あたらなかった。

綾音は、気が抜けるのと同時に冷静さを取り戻した。露店を見つけてどうするつもりだったのか、実は何も考えていなかったことに思い至り、独り赤面した。

（帰ろう）

そう思ったとき、視界の隅に何かが引っかかった。シャッターの隅に何か落ちている。目を凝らすと、見覚えのあるマスコット人形

だった。綾音の携帯電話にぶら下がっているのと同じ物――

綾音は近付くと、腰を屈めて人形を拾い上げた。そのとき、図らず、洋品店脇の路地を覗き込む格好となった。

「？」

商店街のイルミネーションの影になり、路地は薄暗い。その暗がりの中に、人が二人向かい合っていた。

一人は、大学生だと思われる女の人。

一人は、涼心学園高校の制服を着た女生徒。

綾音から見て、女生徒は背を向けて仁王立ちしていた。その向こう側で女子大学生がへたり込んでいる。女子大学生が右手に握り引きずっている布は、露店用の敷物らしい。布から零れるような形で、大量の人形やアクセサリーが路地に散乱していた。――明らかに、女生徒が女子大学生を追いつめている。

女生徒――その左だけの長い三つ編みは、見間違いようもなく、神坂八千穂だった。

綾音は拾った人形を握りしめたまま棒立ちになった。路地の二人が綾音に気付いた様子はない。

「自分が何をしているのか、お前、わかっているのか？」

八千穂が糾ただした。感情のこもっていない、平坦な声だった。

「な……なになって、何よ！ 手作りのアクセサリーを売っていただけよ。確かに商店街に許可は取ってないけど……」

「そういうことじゃない」

八千穂は足下に散らばった人形を一つ摘み上げた。無造作にそれを引き千切る。そして、中から何かを引っ張り出した。綾音のところからではよく見えなかったが、細い糸のような物――

「髪の毛……。悪趣味」八千穂が呟く。

綾音は驚き、思わず人形から手を離れた。軽いフェルト製の人形は、音もなくアスファルトへと落下した。

「お前、これを買った人達に何をした？」

「か、買った人の願いが叶いますようにって、その場でお祈りをし

ただけよ」

「それで、切ったのか」

「切る？ 何のこと？」

「先週、私と同じ制服を着た生徒が、一人でたくさん買ったはずだ。そのときも同じに祈ったのか？」

「な……なんでよ……」

「祈ったのか？」八千穂が繰り返した。

「……友達の方だって言うから、その友達の願いも叶うようになって、そう祈っただけよ！ い、言いがかりをつけられる覚えはないわ。本当に願いが叶ったって随分感謝もされたのよ！」

「叶った願いが、何を犠牲にしているかも知らずに……」

——異変は突然起った。

八千穂の右のうなじ辺りから、淡く輝く光の束が現れ始めた。虹色に輝くそれは、見る見る長くなり、腰までの長さの三つ編みを形作る。やがて光は消え、それは本当に艶やかな黒髪となって揺れた。目を丸くする綾音の前で、異変はさらに続いた。

現れた右の三つ編みが先端から解け始めた——それはまるで、絡み合った三匹の蛇が、お互いの体を離していくようだった。そして、解けた三つ編みの中から、一振りの漆黒の剣が姿を現した。鍰つるぎのな、黒光る直刀。八千穂は右手でそれを逆手に握ると、引き抜いた。

「ひっ……」

女子大学生が、へたり込んだまま後退りした。

「ひっ……ひっ……」

何かを叫ぼうとして、しかし、彼女の喉は言葉を発することができない。

八千穂は、そんな女子大学生を尻目に、散らばった人形やアクセサリーを一瞥した。刹那、漆黒の剣が虚空を一閃する。その剣風に煽あおられた人形が、アクセサリーが、一斉に炎を上げた。

「あ……」

それまで怯え一辺倒だった女子大学生の声に、別の響きが混じっ

た。ちろちろと燃える炎を映した瞳が、少しずつ険しさを宿してゆく。

「……あなたは、なぜ私の想いを燃やしてしまうの？」

八千穂が女子大学生を睨み付けた。

「私が祈れば、みんなの願いが叶った。私が祈れば……世界が変わった。私が祈れば！ いのれば！ イノレバ！」

ゆらり、と女子大学生が立ち上がった。

「今はまだ目の前だけ……。でも、いずれは、私の祈りで世界が変わる！ 救われる！ 私が世界の救世主になるのよ！」

女子大学生の肩甲骨辺りまでの髪が、ぶわっと広がった。風などではない。まるで――まるで、一本一本まで意志が込められたように――

綾音は膝ががくと震えた。しかし、目を離すことができなかった。

「それが私の存在意義！ 生まれてきた意味なのよ！」

女子大学生が自分の髪の毛を一束鷲掴みにした。そして、力一杯それを引き抜く。

「ひっ！」と綾音は声をあげてしまった。

女子大学生の手中の髪束は、あり得べからざる体^{てい}をなしていた。それはまるで針金のように、硬く、鋭く、ぴんと伸びたままになっている。彼女はその束を頭上高く掲げると、叫んだ。

「邪魔はさせない！」

針のような髪が八千穂に向かって放たれた。

八千穂は剣を逆手のまま体の前に構えたと、無造作に、しかし正確にそれを振るった。一瞬で飛来した髪が炎を上げ灰となる。

続く一步で、八千穂は女子大学生の懐へと飛び込んでいた。

「終わり」

右手の剣を、くるっと順手に持ち直した八千穂は、それを女子大学生の胸の中央目掛け躊躇なく突き刺した。

綾音は息が止まった。吹き出す血飛沫を想像した。

しかし、まるで彼女だけ時間が止まったように、女子大学生は動きを止めたただけだった。

「大分減っている……」

八千穂は、剣を女子大学生の胸に突き刺したままの姿勢で、左手を広げ、それを女子大学生の額にあてた。

「魂の綾は己が内へ、環を廻し命を紡げ……」

そんな言葉と共に、八千穂の左手の指が小刻みに躍った。まるで、操り人形を繰る人形遣いのように。やがて――

「封!」という気合いと共に、八千穂は女子大学生の額を左手で叩いた。びくん、と女子大学生の体が大きく跳ねた。

どうやら、それで終わりのようだった。八千穂は大きく一つ息を吐くと、右手の剣を引き抜いた。くるっと逆手に握り直し、背後に回す。解けていた右の三つ編みがそれを巻き込む。ビデオの逆回しのように、三つ編みはじわじわと色が薄れ、消えた。ゆっくりと、八千穂は女子大学生の体から離れた。

綾音の予想と反して、女子大学生は倒れなかった。へたり込んだまま、虚ろな瞳で呆けている。しかし、間違いなく生きているようだ。薄暗がりではつきりしないが、胸元に、剣を刺したような傷を見ることはできない――綾音は、ようやく止めていた息を吐いた。

「!」

ゆっくりと八千穂が振り返る。

綾音は一目散にその場から逃げ出した。

テレパシー事件 7

「うちの生徒に見られた？」

その日の夜。毅瑠は八千穂と電話で話をしていた。

「で、誰に見られたって？」

『今日、毅瑠が渡り廊下で一緒にいた人。大きなバレッタをしてる……』

「バレッタ？」

『髪留め』

「乙蔵さんか……」

毅瑠は、綾音と別れてすぐ、秋山彰子の連絡先を調べ——生徒会は生徒に関する多くの情報を持っている——小論文の件の聞き取り調査と併せて、マスコット人形を売っているという露店の場所を訊いた。そして、その調査を八千穂に依頼した。その報告を聞いているところだった。

二人の予想通り、元凶は人形を売っていた女子大学生だった。八千穂はその女子大学生を施術したという。そして、その様子を乙蔵綾音に見られたというのだ。

「乙蔵さんのことはともかく、鬼は施術したわけだから、半分は解決だな」

『でも、次が出てくる可能性がある』

「秋山さんか？」

『そう。大学生の代りに、秋山って生徒が、他の生徒の〈魂糸^{たまいと}〉を切ったのだと思う』

「このまま終われば良いが、秋山さんがその大学生と同じになってしまう可能性もあるわけだ」

『ある』

「そうすると、二年C組の生徒全員に施術が必要だな」
『大変』

「そうだな」毅瑠は小さく笑った。八千穂が弱音を吐くのは珍しい。しかし、一クラス丸々の施術、しかも可能な限り気付かれずに、というのは、八千穂でなくても頭を抱えたくなる。

「それは、なんとか俺の方でも方法を考えてみるよ。秋山さん以外もやってくれるよな？」

『やる』

「ありがとう」

『何故？』

「うん……二年C組に代わってのありがとう、かな」

『……』

「一人につき、どの程度の時間が必要だ？」

『鬼に接触した人以外は、そんなにいららない。一呼吸くらい』

「詠唱は？」

『あれは形式だから、やらなくても平気。私の気分の問題』

「じゃあ……握手会でもするか？」

受話器の向こう側で、八千穂が小首を傾げた様子が伺えた。

「右の三つ編み……顕現させないってわけにはいかないんだよな？」

『私の意志ではどうしようもない』

「後は……乙蔵さんか。どう説明するかな——」

『どんな人？』

「ん？ 乙蔵さん？ サドだな」

再び、八千穂が小首を傾げたようだった。

『毅瑠。サドって何？』

「……いや、すまん。冗談だ。忘れてくれ。……間違っても、小母さんに訊いたりするなよ！」

『？』

「……で、乙蔵さんだよな。普通の子だよ。でも、クラス委員を任されるくらいだから、しっかりした子だと思う」

『信じられる？』

「そうだなあ……。今日、生徒会で事件の話をしたとき、道生が彼

女に質したんだ。本当に不正はしていないのか？　って。そのとき、彼女は一言『していません』とだけ答えた。まっすぐ道生の目を見てね。……だから、信じられる子だと思うよ」

『なら、本当のことを話すのが良いと思う』

「いいのか？」

『毅瑠の判断に任せる。でも、見てしまったのなら、嘘はすぐにはれると思う。だから、毅瑠のときも私は話した』

「俺が信じられると思ったのか？」

『……』

八千穂の沈黙は正直だった。毅瑠は電話口で苦笑した。

「そうだな。乙蔵さんにはちゃんと説明する必要があるかもしれないな」

——少しだけ、途方もない話を。

テレパシー事件 8

翌日の放課後。

生徒会室へと向かう綾音の足取りは重かった。

商店街で見たものは何だったのか、それをもんもんと考え、昨晩は一睡もできなかった。

神坂八千穂の登場は、あまりにもタイミングが良すぎた。生徒会と無関係だとは思われない。それに、あの現れて消えた右の三つ編み。さらには真っ黒な剣。今朝、登校時に八千穂を見かけ、急いで背後に回ってみたが、いつも通り三つ編みは左の一本だけだった。

加えて、登校した綾音は、クラス中からもみくちゃにされた。昨日中に、クラスメイト全員に生徒会から聞き取り調査が行われたらしいのだ。誰もが、生徒会に引き受けさせた綾音を賞賛した上で、マスコット人形が何か関係あるのか？ という質問を浴びせた。今日一日で、今回の事件はマスコット人形が原因なのではないか、という空気が二年C組内に醸成されつつあった。

内の悩みと外の悩みで、綾音は疲労困憊していた。疑問が解消されれば少しはすっきりするのだが、昨日の様子だと、穀溜にはまた色々とはぐらかされてしまうような気がした。――正直、気が重い。しかし、それでも帰るわけにはいかず、綾音は生徒会室のドアを叩いた。

「あら、乙蔵さん。いらっしゃい」

生徒会室にいたのは夏目だけだった。

「向井君まだ来ていないのよ。少し待っていてくれる？」

「はい……」

綾音は、手近なパイプ椅子に腰を下ろした。

「あの……戸時先輩？」

「なあに？」

「神坂さん……」

「え？」

書類に目を落としていた夏目が顔を上げた。

「神坂八千穂さんは、生徒会に関係しているんですか？」

「神坂さんて、どんな子だったかしら」

「おさが一本だけの子です。一年F組。背が高くて、スタイル良くて、美人で、でも笑わなくて、いつも文庫本を読んで……」

「おさが一本？」

「男の人に切られたとか、失恋して自分で切ったとか、右は生えてこないとか……それから……」

「それから？」

「四月の〈銅像生け贄事件〉の、実は犯人じゃないか……とか……ぱんぱん、と手を叩く音がして、綾音は我に返った。いつの間にか夏目が傍らに立っていた。綾音を見つめるその目が少し悲しげだ。

「あ、あの……」

「何があったか知らないけれど、神坂さんはいい子よ」

「先輩、知って……」

「ふふふ、ごめんなさい。乙蔵さんの意見を聞いてみたかったの」
ふわっ、と背後に回った夏目が綾音を抱きしめた。いい香りがする。

「髪型とか、普段無口だからとか、そういうことだけで誤解されるのって、悲しいことだと思わない？」

「……はい」

「何かあなたが理解できないことがあったら、憶測で決めつけたりしないで、直接聞いてご覧なさい。本人にしかわからない理由があるかもしれないでしょ？」

「はい」

生徒会長はさすがだなあ、と綾音は思った。自分と一歳しか違わないとは思えない。綾音は目を閉じて、抱きしめられる心地良さに身を委ねた。——だから、夏目の手の動きを見逃した。

「生徒会長ってだけで、品行方正な優等生だと思われるのも悲しい

わよね」

「え？」

夏目の手が無造作に綾音の胸を掴んだ。

「あら、おっきい」

「○△■×ゝ！」

綾音はパイプ椅子から飛び退いた。

「な、なななな……、なんですか——！」

笑いながら肩を竦めて、夏目は書類仕事に戻っていった。

「ああ、質問に答えてないわね。いい？ この学園に、生徒会に係のない生徒なんていないのよ」

綾音は胸を抑えて椅子に座り直す。夏目の模範解答が、さっきと違って薄っぺらに聞こえるのは何故だろう。悩み事はどこかに行ってしまう、切迫した身の危険だけが頭の中を占める。——しかし、目の前の夏目は、いつものまじめな生徒会長に戻っていた。

「ふふ……ふふふふ……」

綾音は急に肩の力が抜け、つい笑ってしまった。笑い出したら止まらず、お腹を抑えながら悶え続けた。

夏目は、そんな綾音を放っておいてくれた。

テレパシー事件 9

生徒会室に入ってきた穀瑠は、綾音を見ると一瞬怯んだ。

夏目と話をする前の綾音ならば、それだけで疑心暗鬼に陥っていただろう。でも、今は大丈夫だ。訊いてみればいい。マスコット人形のことも、神坂八千穂のことも。

穀瑠は綾音を連れて生徒会室を出た。

「また、うちのクラスを調べるの？」

「いや、それはもういい」

「じゃあ、今日はどこへ？」

「うん……話があるんだ」

「生徒会室では駄目なの？」

「みんながそれぞれの仕事をしているからね。あそこ狭いし」

穀瑠の言葉は歯切れが悪い。何かを迷っているようだった。

（たぶん……神坂さん）

昨日、綾音が商店街で八千穂を見たことを、恐らく穀瑠は知っているのだ。もちろん、八千穂の行動も承知していて、それを話すかどうか、今まさに悩んでいるのではないだろうか。

綾音の脳裏に夏目の顔が浮かんた。憶測で判断はするな、と言われたばかりなのに、随分と憶測して悦に入っているな——と綾音は反省した。そして、さっきの笑いがぶり返してくる。

「ふふふ」

「？」

「生徒会長って、素敵な人ね」

「……ええと、何かされた？」

「素敵だと言ってしているのに、どうしてそうなるの？ 私が外見から想像していた人とは、随分と違う感じだったわ」

戸時夏目の外見——さらさらのロングヘアーと、涼しげで凜とした瞳。均整のとれた体型と、優雅な立ち居振る舞い。

「まあね。美人で生徒会長の外面そとづらに惑わされやすいのは確かだ。でも、意外に暴走するし、俗っぽいところもあるよ」

「そうね。セクハラされたわ」

綾音は笑いを含んだ声で言った。毅瑠の足が止まる。

「それで、なんで素敵なんだ？ ……まさか」

「そんな気けはないわ」綾音も立ち止まった。「でも、お陰で、今日一日悩んでいたことが馬鹿らしくなる位肩の力が抜けたの」

毅瑠は、よくわからない、という顔をした。

「あの人が率いている生徒会なら信頼できるって、そう思った。でも、信頼するって、丸投げするってことじゃないと思うの。私、向井君ともっと膝を付き合わせて話をしてみたい。私にはわからないことだらけだもの」

綾音はまっすぐに毅瑠の目を覗き込んだ。

「私、昨日あれから、K 駅前の商店街で一年生の神坂八千穂さんを見たわ。例のマスコット人形を売っている露店の女の人と……何か話をしていた。その前には、二年C組を見上げている彼女も見かけた。偶然にしては……」

「待った」

毅瑠が手で綾音を制した。

「今日は、その件も含めて話をするつもりだったんだ。どう切り出したらいいか考えていたんだけど、乙蔵さんが聞く気になっれてくれているなら話は早い。場所を変えよう」

毅瑠は、渡り廊下を抜けると、一般教室棟の北側階段へと歩を進めた。

「ところでさ。戸時会長にどんなことをされたの？」

「気になる？」

「ま、まあね」

「ふふふ。ヒ・ミ・ツ」

先に立って階段を上る毅瑠の耳が朱に染まっていた。同い年の男の子なんだ——そう実感して、綾音は少し嬉しくなった。

毅瑠は階段を登り続け、生徒たちが出入りを禁止されているはずの、屋上への扉へと綾音を誘った。^{いざな}
扉の前には神坂八千穂が待っていた。

テレパシー事件 10

穀瑠は鍵で扉を開け、綾音と八千穂を屋上へと導いた。

屋上には、高さ二メートルにもなる金網が張り巡らされている。

今年の三月までは、生徒たちは簡単に屋上に出ることができた。綾音も何度か、クラスメイトと屋上で弁当を使ったことがある。当時は金網はなく、肩ぐらいの高さの、スチールの柵があった。

「屋上、久しぶりだわ。出ていいの？」

「生徒会はたまに打ち合わせに使っている。この鍵も正規の物だ。でも……これは、ないしょね」

今年の四月、屋上から生徒が二人相次いで落ちる、という事件があった。一人は亡くなり、一人は命を取り留めた。前後の騒ぎと併せて〈銅像生け贄事件〉と呼ばれるその事件以降、屋上には金網が巡らされ、生徒は立ち入り禁止になったのだ。

「乙蔵さん。彼女は一年F組の神坂八千穂さん。調査を手伝ってもらっている」穀瑠は改まって紹介をした。「で、こちらは二年C組のクラス委員、乙蔵綾音さん」

八千穂が小さく会釈をした。

綾音の脳裏に、昨日の商店街での光景が蘇る。平坦な声。漆黒の剣。ちろちろと燃える炎――しかし、話を聞くと決めたばかりだ。

綾音は思い切って右手を差し出した。

「？」

八千穂が小首を傾げる。

「握手だよ。握手」

穀瑠にそう言われて、八千穂はおずおずと綾音の手を握り返した。

「よろしくね、神坂さん」

八千穂の手は、女の子にしては大きく、ひんやりとしていた。

「さて、それじゃあ話を始めようか」

六月の空が、今にも泣き出しそうな色をしていた。肌にまとわり

つく湿り気を帯びた風が、思い出したように屋上を舞う。

三人は給水塔の土台部分に並んで腰掛けた。綾音、穀瑠そして八千穂の順だ。

「少し遠回りで長い話になる。でも、本題に入る前に必要なんだ。我慢して聞いてくれる？」

穀瑠の言葉に、綾音は頷いた。

「乙蔵さん。生き物はなぜ生きていられるのか、説明できる？」

「?……命があるから？」

「正解。じゃあ〈命〉って何？」

「……」

ある程度覚悟はしていたものの、まるっきり禅問答のような始まりに、綾音は困惑した。それでも、最後まで聞いてみよう——そう、自分に言い聞かせる。

「生き物は命があるから生きている。なら、〈命〉という何かが存在しているはずだね」

「何かって……」

「考えてもみて欲しい。俺たちは、こうやって手や脚を思い通りに動かすことができる。でも、死体から部品を集めて人間の形に繋ぎ合わせても、人は生き返ったりしない。なぜか? もちろん、命がないからだ」

「うん」

「ということは、〈命〉というのは、体中の細胞と細胞、組織と組織を繋いで、まとめて、動かしているもの……ということになる。人の腕は、脚は、すべて命という糸で繋がっているから、思い通りに動く」

「糸……」

「そう、まさに糸。ビーズ細工を想像してみるとわかりやすい。ビーズが細胞で、それを繋いでいる糸が命」

「〈魂糸〉」と初めて八千穂が口を挟んだ。

「たまいと?」

「たましいのいと、と書いて〈魂糸〉。昔から、その存在を知る一部の人は、命の糸をそう呼んできたんだ」

「……」

「乙蔵さん。これは作り話じゃない。〈魂糸〉は普通は目に見えないし、現代科学では観測されていない。でも、こうして俺たちが生きていることが、その存在の証だ。そして、ここから先の話は〈魂糸〉の存在がベースになる。だからまず、そこを信じて欲しい。……仮に信じ切れなくても、前提として受け入れて欲しいんだ」

綾音は即答できなかった。穀溜から目を逸らし、自分の掌を見つめる。この中に、〈魂糸〉という命の糸が張り巡らされているという――

ずっと影が差し、綾音は顔を上げた。八千穂が目の前に立っていた。

「見えなくても、感じることはできる」

八千穂が左手を差し出した。反射的に綾音は握り返す。その手は、さっき握手した右手よりも熱かった。

とんとん――と、八千穂の指が綾音の手の甲にリズムを刻む。

「あつ……」

唐突に全身を駆け抜けた熱さに、綾音は思わず声をあげてしまった。慌てて右手で口を抑える。ちらっと穀溜を見ると、なんともいえない顔で二人を見ている。綾音は耳まで真っ赤になった。

八千穂が刻むリズムは続いていた。最初の突き抜けるような熱さ――快感以降、体に大きな変化はない。しかし、何か――何か穏やかで暖かなものが体内を巡っているのを感じることができる。全身を巡る――命の流れ。

「これが……」

「そう。〈魂糸〉」

とんっ、と最後に一つ強く指をはじくと、八千穂は手を離れた。余韻はしばらく綾音の体を巡り、徐々に消えた。綾音は頬の熱さが引くのを待った。幾分ぼんやりとした視界の中に、八千穂の背に揺

れる二本の三つ編みが映る。——ああ、昨日と同じだな、そう思う。
傍らでは、毅瑠が辛抱強く待っていた。

「……わかったわ。とりあえず、前提は了解してあげる」

表わした言葉は、随分と上から目線になってしまった。しかし、自分の体内にある命の糸について、言葉による理解を越えたところで、綾音はその存在を実感した。とりあえずも何もないのだ。——ただ、毅瑠の目の前であげてしまった嬌声の気恥ずかしさが消えなかったただけだ。

「さて」毅瑠が話を再開した。「体の隅々まで行き渡った命の糸へ魂糸」なんだけど、すべて繋がっていて、人ひとりの中で〈環〉になっているんだ。環になって、巡っている。ちょうど、血液が巡るのと同じような感じだ。血は血管を通る。〈魂糸〉は体中のすべてを通る。そしてそれが、生まれてから死ぬまで、生き物の個体を個体として成り立たせ続ける。細胞の新陳代謝で、有機体としての生き物はどんどん変化していく。それでも、個体としてのアイデンティティが確保され続けるのは〈魂糸〉のおかげだ」

毅瑠が一旦言葉を切り、居住まいを正した。

「で、ここからが本題だ。本来〈魂糸〉は環になっていて、命の力は一個体内で巡り、消耗し、年齢と共に次第に弱り、やがて死に至る。それが自然の摂理ってやつだ。一般的な、健康的な流れなんだ。……でも、その環が切れることがある」

「切れるの？」

「切れる。怪我をしたり、何かの拍子に切れるんだ。ただ、普通はすぐに元に戻る。自己治癒する。〈魂糸〉の復元力の結果が体の自然治癒力に反映される。体より先に、まず〈魂糸〉が復元するのが普通だ。通常、傷の大小による体へのダメージと、〈魂糸〉が受けるダメージは、我々が今までに持っている常識の範囲に収まる。だから、〈魂糸〉のことを気にする必要はない……はみ出さない限りはね」

「はみ出すって……」

「簡単に言えば、体から飛び出してしまふ。そうすると、もう環には復元しない」

「どうなるの？」

「はみ出したところから〈魂糸〉はすり切れる。その分生命力が削られ、寿命も短くなる。まあ、それも含めて寿命だ、とする考え方もあるけれど……でも、問題は別のところにあるんだ」

生温い風が、綾音のうなじを撫でていった。

「はみ出した〈魂糸〉、これは力なんだ」

「どういうこと？」

「はみ出したとはいえ本人の命の一部だ。手を伸ばすのと同じように、その糸は本人の意志に呼応する」

綾音は両手で口を抑えた。いやな予感が体中を駆け巡る。

「世に超能力といわれる力は、切れて体から飛び出した〈魂糸〉によるものだ。手を触れずにスプーンを曲げる。コップを動かす」

穀溜は指を一本立てて、くいつと曲げて見せた。

「曲がれ、と念じる。すると、体からはみ出した〈魂糸〉がスプーンまで伸びて、絡んで、それを曲げる。文字通り命をすり減らしていることに、本人たちは気付いていないんだ」

「まさか……」

「そう。誰かの考えを知りたいと思えば、その人に〈魂糸〉を伸ばして繋げばいい。テレパシーの正体はそれ」

（だって、だって……）

「今回の事件の真相も同じだ」

綾音は震えが止まらなくなっていた。

〈魂糸〉は、切れなければはみ出さない。はみ出していなければ、それで何かを行うことはできない。クラスの皆がその力を使うことができたというなら、それは、既に魂糸が切れているということ——命が、すり減っているということにならないか。

——もちろん、綾音自身も。

「乙蔵さん、『文字で埋まった原稿用紙が見えた』って言ったよね

？ 二年C組に聞き取り調査を行った結果、同じ小論文を書いた生徒全員が、大なり小なり同じようなことを答えたよ。原稿用紙が見えた……ってね。それこそが、みんなが蛭原先生の頭の中を覗いた証拠だ」

綾音は言葉を発することができなかった。

「普通は、三十人もの人の〈魂糸〉が同時に切れている、なんてことはありえない。あるとすれば、それは何か人為的に仕組まれたことだ」

綾音の脳裏に昨日の光景が蘇った。――それで、切ったのか？

と、八千穂が女子大学生に向かって訊いていなかったか？

「人形……」

「うん」 毅瑠が頷いた。「案の定、同じ小論文を書いた生徒たちは、例外なく、あのマスコット人形を持っていたよ」

「それじゃあ……」と身を乗り出した綾音を、毅瑠が制した。

「待って。早合点しないでくれ。チホによると、人形の中には、女子大学生の髪の毛が仕込まれていたそうだね。今、持ってる？」

「燃やした」

綾音は、昨日帰ってすぐ、自宅マンションの駐車場の隅で人形を燃やした。髪の毛が仕込んであると知ってなお、そのマスコット人形を持っていられる程、綾音は図太くも、無神経でもなかった。

「当然か。でもね、人形自体には何の力もなかったんだ」

「？」

「基本的に〈魂糸〉は、本体に繋がっていて力を発揮する。その切れ端を髪の毛などに込めることは、できなくはないけれど、力はすぐに消えてしまうんだ。人の中には、〈魂糸〉で編み上げられた核のようなものがあって、〈魂糸〉が切れたり別れたりした場合は、核がある方が本体と見なされるんだ」

「〈魂の要^{かなめ}〉」 八千穂が言った。

毅瑠は一つ頷くと続ける。

「今回、〈鬼〉だった女子大学生に会ったのは秋山さん一人だ」

「鬼？」

「〈魂糸〉で他人の〈魂糸〉を傷つける存在のことだ。〈鬼〉は、人形を買った秋山さんに対して『願い事が叶いますように』と祈ったという。それはつまり……〈魂糸〉を使って何かが行なえるように、あなたの〈魂糸〉を切って、引きずり出してあげます……ということだ」

秋山彰子が体の中から何かを引きずり出されるイメージが浮かび、綾音は思わず口を抑えた。吐き気がして、目に涙が滲む。

「チホ」

八千穂が綾音の傍らに寄り、その背をさすった。綾音はしばらく肩を振るわせていたが、なんとか吐かずにすんだ。

「……ありがとう、神坂さん。大丈夫よ」

「毅瑠。悪趣味」

毅瑠は、心外だというように目を丸くした。

「向井君、続けて」

「ここまで来れば後は簡単だよ。今度は秋山さんが願ったんだ。人形を買ったクラスメイトの願いが叶いますようにって。それが、三十人近い生徒の〈魂糸〉を切ることになった」

「そんなに簡単に……切れるの？」

「〈魂糸〉を持てると、他人の〈魂糸〉は案外簡単に切れる」

——そして、二年C組の全員が、あの場面で小論文の例文を望んだ。望んで——〈魂糸〉を伸ばして——

再び吐き気に襲われ、綾音は奥歯をかみしめた。

雨の匂いを含んだ風が吹き始めた。風で屋上の金網が微かに軋む。ふと、綾音の脳裏に閃くものがあった。

「まさか……四月の事件も……」

「そうだよ。半分は鬼の仕業だった」

今年の新学期、学園中を震撼させた〈銅像生け贄事件〉——生徒会室での夏日との会話が蘇り、綾音は恐る恐る八千穂を見やった。

「違うよ」毅瑠が語気を強めた。「チホは鬼でも犯人でもない。む

しろ逆だ」

「逆？」

「彼女は、鬼を狩り、はみ出した〈魂糸〉を環に繋ぐことができる

……〈霊鬼割^{ひきわり}〉だ」

テレパシー事件 11

ぽつぽつと雨が降り始めた。

三人は、屋上の出入り口にある庇ひさしの下へと避難した。庇は小さかつたが、出入り口が風除けになり、雨宿りには充分だった。

「長梅雨ながつゆは いやだいやだよ ああいやだ」

雨空を見上げて、毅瑠が呟いた。

「毅瑠。何？ それ」と八千穂。

「俳句ひねを捻ひねってみたんだけど……どうだ？」

「下手」八千穂が一言で切って捨てた。

綾音は、ふっ、とため息とも、なんともつかない笑いを漏らした。しかし、それもすぐに消えた。

「クラスみんなや、蛭原先生にも同じことを説明するの？」

「いや。それは別の説明を考えているところだ」

「嘘をつくの？」

綾音の目の隈が濃い。薄暗くなった雨の屋上で、その顔は凄惨だった。

「話せ、と？」

綾音は泣きそうな顔をした。

「なんで私にだけ……」

毅瑠は答えなかった。答えなくても、綾音は答えを知っているはずなのだ。

「……帰るわ」ぼそつと言って、綾音は扉に手をかけた。「ちょっと……混乱してる」

「ああ、気をつけて」

毅瑠の言葉が終わらないうちに扉は閉められた。

残された毅瑠と八千穂は、しばらく、屋上に落ちる雨を眺めていた。

やがて、毅瑠が口を開いた。

「乙蔵さんの〈魂糸〉、繋いだのか？」

八千穂が頷く。

「みんな……、あんなに反応するのか？」

八千穂が手を繋いだときの綾音の反応を思い出して、毅瑠は頭をかいた。

「少し乱暴にやった。〈魂糸〉が実感できるように」

「なるほど……」

よく考えれば、八千穂による〈魂糸〉の環の復元は、毅瑠自身も体験したことがある。ただ、綾音の敏感な反応に驚いてしまった。

ため息をつく毅瑠を、八千穂が不思議そうな顔で眺めていた。

「あと、二十九人だな」

「鬼に会った人は別」

「そうだった。秋山さんにはいつ会いに行くか……」

「私が一人で行く。住所を教えて」

雨が強くなってきていた。二人は扉の中に入った。

毅瑠が鍵をかけるのを待って、八千穂が繰り返す。

「住所を教えて」

「わかった。ここじゃあわからない。生徒会室へ行こう」

秋山彰子の顔はわかるのか？ という質問はしない。秋山彰子は、まず間違いない〈魂糸〉が切れてはみ出している。八千穂ならば、会えばそれとわかる。

「昨日さ、校内に鬼の気配はないって言ってたよな。例の女子大学生に誘発されたとはいえ、クラスメイトの〈魂糸〉を切った時点で、秋山さんは鬼になったんじゃないのか？」

廊下を歩きながら、毅瑠が訊いた。

「彼女はまだ被害者」

「じゃあ、秋山さんの存在……というか、彼女の〈魂糸〉が切れていることには、気付いてたのか？」

八千穂は首を振った。

「〈魂糸〉が切れている生徒ならたまにいる。私が気付かないこと

もある」

それにしては、自信たっぷり「気配はない」と言い切ったな——という言葉、毅瑠は飲み込んだ。八千穂にしてみれば、自分には感じられない、という程度の発言だったのだろう。言葉数が少ない八千穂と付き合うには、その程度で目くじらを立てていてはやっていけない。

「鬼なのか、そうでないか、の線引きが、俺にはまだよくわからないんだ」

「自分の意志で他人の〈魂糸〉に手を出すのが〈鬼〉」

「つまり……女子大学生は、自分が祈ることで他人に実際に影響があることに自覚的だった。だから鬼。秋山さんに自覚はなかった。だから被害者。そういうことか？」

「そう」

毅瑠は、四月の事件の折、八千穂と偶然知り合った。そして、〈魂糸〉と〈鬼〉と〈霊鬼割〉について知ることとなった。

神坂八千穂——自らを〈霊鬼割〉だと名乗る少女を、毅瑠は疑っていない。八千穂と知り合ったとき、さっき綾音に行ったような懇切丁寧な説明はなかった——いや、八千穂による説明はあるにはあったが、言葉数はとても少なかった。それでも、毅瑠は理解することができた。なぜなら——見ることができたから。

「二年C組、覗いてみるか？」

三階の渡り廊下の手前で、毅瑠は八千穂を誘った。

教室には誰もいなかった。

毅瑠はポケットから片眼鏡を取り出してつけた。これは〈魂見鏡

たまみきよう

〉という道具で、能力のある者がかけると、〈魂糸〉を視認することができる。毅瑠はこれを使うことができたのだ。だから——見えたから、今こうして、八千穂と同じ立ち位置にいる。

「もう、一昨日の話だからな。〈魂見鏡〉でも、痕跡ははっきりしない」

八千穂は無言で目を細めている。背中では、三つ編みが左右二本

揺れていた。

「……私にもわからない」

「そうか。……よし。行こうか」

二人は二年C組を後にした。

歩きながら毅瑠は思う。綾音への説明には、欠けてしまった点が随分あった。綾音本人のはみ出た〈魂糸〉を繋ぎ直したこともそうだし、二年C組の〈魂糸〉がはみ出した生徒たちに、同じように施術するつもりであることも伝えていない。秋山彰子をどうするのか、もだ。さらには、昨日綾音が見たことへの詳しい説明も結局はできなかった。八千穂が〈霊鬼割〉だと、そう教えたただけだ。綾音は八千穂のことをどんな風に理解したのだろうか。鬼を退治する正義の味方だとも思っていないだろうか。

毅瑠は八千穂の顔を見た。相変わらずの無表情だった。

「？」

八千穂が目で尋ねる。

「いや、何でもない」

誤解があるなら、いずれ解く必要がある。――〈霊鬼割〉は、決して正義の味方などではないのだ。

テレパシー事件 12

「あら、八千穂ちゃん」

生徒会室の前で、毅瑠と八千穂は、夏目と鉢合わせた。

「こんにちは」

八千穂がたどたどしく挨拶をする。珍しいことだが、八千穂も生徒会長戸時夏目には一目置いているようだ。

「はい、こんにちは。入って頂戴」

「いえ、すぐに帰りますから」と答えたのは毅瑠。

「なんで向井君が答えるの？」

「いや……あの。と、とにかく、ここで待っててくれな」

毅瑠はそう言うと、生徒会室に飛び込んだ。中では、道生と作、力の三人が作業をしていた。

「お帰り。……どうした？」

入室するやいなや、棚の生徒名簿をひっくり返し始めた毅瑠に、道生が訊いた。

「なんでもない。……あれ、あれ？ 二年C組の名簿って……」

「落ち着け向井。今テーブルの上に出てるだろ」と言ったのは力。

「慌てている原因はあれかなあ。ふふふ」と言って、毅瑠の背後を指さしたのは作だった。

「さ、お茶をいれるから座って。八千穂ちゃん」

恐る恐る毅瑠が振り向くと、夏目に引き連れられて、八千穂が生徒会室に入ってきたところだった。

「な……」

「私が招いたのよ。何か問題でも？」夏目がほくそ笑みながら言う。「いえ……」

「毅瑠。迷惑ならすぐ行く」

八千穂の言葉に、夏目が大仰に驚いてみせた。

「とんでもない。大歓迎よ。やあねえ、ちょっと付き合おうと、すぐ

女の子は自分の物だと思い込む男の子って」

「がっ……」

口をあんどぐりと開けて絶句した毅瑠を見て、八千穂が小首を傾げた。

「コーヒーと紅茶、どっちがいい？ インスタントだけど」

作の言葉に、毅瑠が答えようとする。しかし、作に睨み付けられて、毅瑠は言葉を飲み込まざるをえなかった。

「コーヒー……」

「はいはい」

作は鼻歌を歌いながら、マグカップを用意し始めた。

「こうなったら、もう諦めろ向井。しばらくは、会長と作のおもちやだな」

力が、同情を禁じえない、という顔で毅瑠の肩を叩いた。

「今日はどうしたの？」と夏目が八千穂に訊いた。

「毅瑠の手伝い」

「あら」

夏目が毅瑠を睨む。毅瑠は肩を竦めた。

「お待たせ。どうぞ」

作がコーヒーを差し出した。夏目と自分の分もいれている。

「ありがとう」八千穂が小さく礼を言い、マグカップを手を取った。しばらく、コーヒーを啜る八千穂を、生徒会室中が見つめた。

「新発見ね」夏目が言った。「八千穂ちゃん、笑うとすごくかわいいわ」

毅瑠は舌を巻いた。八千穂は無類のコーヒー好きである。だから、たとえインスタントでも、コーヒーを飲むと表情が緩む。ただ、その変化は極僅かだ。今も、微かに嬉しそうな顔をしていた――それは自分にしかわからないだろうと思っていた。しかし、夏目はしっかり見極めていたようだ。

「ねえ、八千穂ちゃんは、向井君と付き合っているの？」と作。八千穂が小首を傾げる。その様子を見て、作は言い直した。

「ええと、恋人同士なのかしら？」

「ちょ……先輩、いきなり何を……」 毅瑠は慌てた。

「黙りなさい。私は、八千穂ちゃんに訊いてるの」

「友達」

「え？」

「私と毅瑠は友達」

「ああ……そうなんだ」

「そう。友達」 八千穂はかみしめるように言った。

夏目と作は顔を見合わせると、お互いにほくそ笑んだ。なぜか、毅瑠は背筋に寒いものが走った。

「さて、向井君」と、夏目が毅瑠を振り返った。「八千穂ちゃんに、今回の件の調査を手伝わせているそうね？」

「はい……」

「そして、今後お願いすると？」

「そう、なると思います」

「生徒会の調査をするなら、やっぱり、何か肩書きがあった方が良いわよねえ？」

「……」

「良いわよね？」

「あの……戸時会長。お願いがあるのですが……」

「なあに？」

「生徒会事務員に推薦したい生徒が……その」

「聞こえない」

「神坂八千穂さんを、生徒会事務員に推薦したいんですが！」

「了承します」

毅瑠はがつくりと肩を落とした。完全に夏目のペースに巻き込まれてしまった。当の八千穂はというと、ことの成り行きについて行けず、マグカップを持ったまま固まっている。

涼心学園高校の生徒会は、役員と事務員で構成されている。役員は当然選挙で選ばれるのだが、事務員は、役員が指名するか、自分

で立候補して、生徒会長に認められれば良いことになっていた。だから、夏目が了承した時点で、八千穂は正式に生徒会事務員となったことになる――

毅瑠は秋山彰子の住所を急いで写すと、八千穂の手を引いて生徒会室を出た。誰も何も言わなかった。

「毅瑠。何がどうなったの？」

「……事務員の話はまた今度な。これが秋山さんの住所。同じ学校の生徒だから、充分気をつけろよ」

八千穂は小さく頷いた。

「あと……作先輩に言われたこと、あんまり気にするなよ」

「何？」

「だから……恋人どうのって……」

「私と毅瑠は友達」

「……うん。そうだな」

毅瑠は、ほっとしたような、残念なような、複雑な気持ちに襲われた。そんな気持ちを持て余しているうちに、いつの間にか八千穂はいなくなっていた。

テレパシー事件 13

毅瑠が生徒会室に戻ると、全員が自分の仕事をしていた。生徒会の面々は切り替えが早い。ねちねちと引っ張るような人間はいなかった。

「毅瑠。例の物、何とかなりそうだなぞ」

そう言った道生の手に、何枚かのコピーが握られていた。

「三年生で、去年蛭原先生に教わった人にあたってみた。それがこれだ。卒業生にも何人か声をかけて調べてもらっている。覚えがあるらしいから、週末にはもう少し増えると思うよ」

「よく残ってたな」毅瑠は道生からコピーを受け取った。

「ノートやプリントを捨てずに取っておく人、結構いるからな」

「俺は捨てちゃうけどな」

「俺もだ」

わはははは、と二人して笑い、毅瑠は小さくガッツポーズをした。

「よし。これで何とかなりそうだな」

「落とし所が見つかったの？」

夏目が話に加わる。

「蛭原先生と、二年C組の生徒には別の回答を提示します」

「なるほど……」コピーの束を手に、夏目は納得した。「蛭原先生は、こっちの線で行けばなんとかなりそうね。でも、生徒たちはどうするの？ 口裏を合わせさせるわけ？」

「そうですね。でも、それだけじゃあ納得……というか、満足しないでしょう。そこで、チホ……いや、神坂さんの出番です」

「八千穂ちゃんの？」

「彼女、神社の娘なんですよ」

「まさか、神坂神社？」と割って入ったのは作だった。「知ってるわ」

「ええ、そうです」

「つまり……祓うってこと？」と夏目。

「二年C組の事件はマスコット人形の呪いでした。だからお祓いをして終わりにしましょう。……科学的ではありませんけど、一区切りつけるにはいいですね。四月の事件のときも、結局最後はそういう感じで終わったわけですし」

「ふーん」

今や生徒会室の全員が毅瑠の話聞いていた。

「当然ですけど、当該の生徒たちが〈人形の呪い説〉を信じていればいるほど、結果も良好になるわけです。ということ……皆さんに、仕込みをお願いしたいんですけれど……」

その後、毅瑠の計画を聞いた面々は、誰もが口をあぐりと開けた。

「上手くいくかしら」と夏目。

「結果は百パーセントじゃなくてもいいんです。でも、悟られるのだけは避けたい。決行は来週の月曜日。面倒ですけど、あと三日でこの仕込みをお願いしたいんです」

誰もが押し黙った。不可能ではない——でも、大変だ。

「なんだ、みんなして額を付き合わせて」

扉を開けて、太一と希奈が入ってきた。風紀委員の委員会に参加していて、今戻ってきたのだ。

「二人とも、ナイスタイミングね」と作。

「？」

夏目が顔を引きつらせながら二人に言った。

「面白い報告と、大変な報告とがあるの。どちらから聞きたい？」

毅瑠と別れた八千穂は、秋山彰子の自宅を目指した。

学校を出た時点で午後五時半を過ぎていた。学校最寄りのK駅まで徒歩で十五分。電車に乗って二駅。そこから住居表示を頼りに歩き、目的地に着いた頃には午後六時半を回っていた。晴れていれば夕焼けが見られるのだろうが、雨がそぼ降る中では、辺りは薄暗い。彰子の家は新興住宅街の中にあつた。いかにも作つたばかりという遊歩道に沿って、同じような外観の一戸建てが並んでいる。その中の一軒に〈秋山〉の表札がかかっていた。

帰宅する学生やサラリーマンに混ざって、八千穂は秋山家の前を通り過ぎ、それとなく観察した。規格住宅の二階建て。表札には四人の名前が書いてある。両親と彰子と、あとは弟だろうか。

彰子は部活動をやっていないという。学校を出るときに下駄箱を確認したところ、上履きが収まっていた。恐らく、もう帰宅しているはずだった。

どうやって彰子に接触するか――八千穂は考えた。

一番簡単なのは、同じ学校の生徒なのだから、普通に訪ねることだ。訝しがられるだろうが、この制服がものをいうはずだ。会えないということはないだろう。ただ――できれば、顔を見られたいくなかった。

別れ際に毅瑠が言った「同じ学校の生徒だから、充分気をつけろ」というのは、そういうことだ。毅瑠は、顔を見られることで、今後の八千穂の学園生活を心配してくれているのだ。

それでも、彰子が完全に鬼なら、八千穂は躊躇しない。しかし、今回はそうではない。彼女は被害者だし、ここで顔を見られると、この後に毅瑠が考えているはずの、二年C組に対する説明にも支障を来すかもしれない。

忍び込むという手もある。しかし、穏便な忍び込み方を八千穂は

知らなかった。

結局、残っている選択肢は、彰子が一人で出てくるのを待つ、という方法だけだった。

雨の住宅街というのは、張り込みに向かないことこの上ない。傘を差した女子高生が立ち尽くしていれば、それだけで目立つ。

結局八千穂は、人混みに紛れ、何度も秋山家の前を行ったり来たりすることになってしまった。時々、携帯電話をかけているふりもしてみた。目立たないように歩いている限り、誰も八千穂に目を向けない。普段は目立つ片方の三つ編みも、雨の夕暮れでは目立たなかった。

どれ程そうしていたか、日はとっぷり暮れてしまった。携帯電話の時計が午後八時近くを示している。さすがに人通りが減り始めていた。これ以上うろうろしていると、不審者に間違われる可能性が高い。

今日はこれを最後にしよう、と秋山家の前を通り過ぎたとき、玄関のドアが開いた。

「気をつけるのよ」

「わかってる。お父さん待ってると思うから、急ぐね」

中から、傘を二本持った高校生くらいの女の子が現れた。一本を差し、もう一本を小脇に抱える。会話から察するに、傘を忘れた父親を駅まで迎えに行くのだろう。八千穂は面識がなかった。でも――間違いない。八千穂の目には、彼女の体からはみ出した〈魂糸〉が見えた――秋山彰子だ。

八千穂は一旦秋山家の前を通り過ぎると、少し先で立ち止まった。彰子が八千穂に注意を払った様子はない。

駅までまっすぐ歩けば十分程の距離だ。八千穂は周辺の地理を思い浮かべた。うろうろと一時間以上も彷徨っていたおかげで、周囲の様子が頭に入っている。住宅街の外れ、駅に向かう大通りに入る手前に、小さな公園がある。そこが最適だと思われた。

十メートルほどの距離を取って、八千穂は彰子の後ろを歩いた。

雨のカーテンの中では、その距離でも目立たない。

歩きながら、八千穂は右手を背後に回す。彰子を見たときから顕現していた右の三つ編みが解け、漆黒の剣が現れた。それを逆手に握り、振り抜き様に順手に握り直した。

目の前を歩く彰子は、ちょうど公園の入り口に入ったところだった。

小さなその公園には、外灯が二本ある。しかし、お陰で影も多い。周囲に人の目がないことを確認すると、八千穂は駆けた。

《魂の要》をこの剣で貫くと、《魂糸》が痺れ、人は動きを止める。剣は《魂糸》だけに作用し、人体に傷はつかない。その間に左手で《魂糸》を繋ぐ術を行うつもりだった。歩いている間に観察すると、彰子はあちこちから《魂糸》がはみ出していた。例の女子大学生に、随分と酷く刻まれたようだ。綾音に行ったような簡単な施術では済みそうにない。

風のように彰子に迫り、剣を突き立てようとしたその瞬間――

「彰子」

前方から声がした。

「お父さん」彰子の声が弾む。「何？ 雨の中走ってきたの？」

「ああ。たいしたことないと思ってな。迎えに来てくれたんだな」

「はい。傘」

「ありがとう。ところで、今、お前の後ろに誰かいたぞ」

「え？」

間一髪、八千穂は公園の暗闇へと身をひそめていた。

「やだ、お父さん。薄気味悪いこと言わないでよ」

「変だな……、お父さんの勘違いか。ごめんごめん。さ、帰ろう」公園の入り口には、八千穂の傘がひっくり返って雨に濡れていた。

テレパシー事件 15

翌日、金曜日の昼休み。

綾音はとぼとぼと廊下を歩いていた。

なんとか学校には出てきたものの、一時間目に気分が悪くなり、保健室で寝ていたのだ。養護教諭に家に帰るように言われ、綾音は荷物を取りに教室に向かっているところだ。

体調が悪いのは本当だが、原因が体ではないことはわかっていた。クラスメイトの中にとくと、昨日屋上で想像した幻——秋山彰子が何かを引っ張り出される様——が浮かび、再びの吐き気に襲われたのだった。

二年C組の教室が近付いたとき、綾音は毅瑠の姿を認めた。誰かと一緒に二年C組から出てきた——あれは、秋山さん。二人は並んで階段の方へと消えた。

綾音は教室に飛び込むと、誰彼かまわず訊いた。

「秋山さん、どこに行ったの？」

「あれ、綾音。大丈夫なの？」

「それより、秋山さんは？」

「え？　今、生徒会役員の人が呼びに来たのよ。なんか、委員会がどうのって……ちよつと、綾音？」

最後まで聞かず、綾音は教室を飛び出した。

綾音はまず、生徒会室へ飛び込んだ。しかし、そこに毅瑠と彰子はいなかった。生徒会役員は誰も行き先を知らないという。

それから、綾音は思いつく限り、校舎内を走り回った。屋上かとも思ったが、扉には鍵がかかっていた。そして、校舎内にいないと見切りをつけると、上履きのまま、今度は外へと飛び出した。

嫌なイメージが頭から離れないのだ——毅瑠は、八千穂は、秋山さんをどうするつもりなのか。

息が上がリ、肺がずきずき痛む。脚がもつれてバランスが崩れる。

それでもなんとか前へ進もうと足掻く――

そして、体育館の裏へと足を踏み入れたとき、綾音は見覚えのある三つ編みを見つけた――腰までの長い左の三つ編みと――解けた右の三つ編み――

八千穂の右手には剣が握られ――それが、何かに突き立てられている――

「秋山……さん……」

背後から彰子に剣を突き立てた八千穂は、左手でその後頭部を掴んでいた。その向こう側には、その様子を見つめる毅瑠がいる。

毅瑠が綾音に気付いた。その瞳が、ひたと綾音を見つめる。

「魂の綾は己が内へ、環を廻し命を紡げ……」

聴いたことのある旋律――言葉――そして――

「封!」という気合いと共に、彰子の体が一つ大きく跳ねた。

その様子を見て、綾音の中で何かが切れた。

「うわあああああ――!」

そう叫び、綾音は八千穂に向けて突進した。

しかし、八千穂までは届かなかった。ずっと前に出た毅瑠が、綾音の体を抱き留めたからだ。

「乙蔵さん!」

「秋山さんに、秋山さんに何をしたの!」

「命の環を繋ぎ直したんだ。大丈夫だよ。あの剣は人体に傷は残さない」

「そんなの、信じられないわ!　だって、だって……あんな……秋山さん!　あああああ!」

綾音は絶叫し、そして気を失った。

テレパシー事件 16

気がついたら、綾音は自分のベッドに寝ていた。

後から聞いた話では、倒れた綾音を保健室に運んだのは、毅瑠と彰子だったらしい。そして、担任の倉持教諭が、車で自宅まで送ってくれたとのことだった。

「体調が悪いなら無理はしないの」とお母さんにきつくしかられた。そして、土曜日。

綾音はパジャマのままベッドの上にいた。

「綾音」お母さんが部屋のドアから顔だけ出した。「お客さんよ」「誰？」

「戸時さんって方」

「え？」

綾音がベッドの上で慌てて身繕いをしているところに、その客は、お母さんに連れられて入ってきた。誰だろう、生徒会長の戸時夏目だ。

「汚いところですが、ゆっくりしてってくださいね」とお母さん。「いえ。お体に障らないように、すぐに失礼いたします」

夏目が優等生百パーセントの笑顔で言った。

「気分はどう？」

「はい。だ、大丈夫です。あ、あの……」

「なあに？」

「どうして……」

「綾音ちゃん、私の生徒会のモットー知ってる？」

「友達以上、恋人未満？」

「そういうこと」

でも、体調を崩した生徒全員を見舞っているわけではあるまい。それが顔に出たのか、夏目が、ふっと笑った。

「綾音ちゃん、向井君と何かあった？」

「……」

「今回の依頼を向井君に任せたのは私だからね。何かあったなら、責任は私にもあるわ」

「戸時先輩は知ってらっしゃるんですか？」

「ん？」

「向井君と……その、神坂さんのこと……」

「あの二人こそが、友達以上、恋人未満だったこと？」

「そうじゃなくて……」

夏目が綾音の顔を見つめていた。

「じゃあ……八千穂ちゃんが、何か不思議な力を持っていることかしら？」

「！」

「具体的な内容は知らないわ。でも、まあ、二人の雰囲気からわかるわよね」

「怖く……ないんですか？」

「怖い？ 何故？」

「だって、見たことも聞いたこともない……あんな……」

ふわっ、と夏目が綾音を抱き寄せた。

「あんな？」

「酷いこと……女の人や……秋山さんに……」

「どんなこと？」

「剣で刺して、命をいじって……」

「怪我をさせたの？」

「……怪我はしてないようでした」

「あら」

「でも、命を……」

「命を？」

「繋いで……」

「繋いだのね？」

「……でも、鬼を狩るって」

「それも見たの？」

「女の人が、鬼だったって……」

「狩っているところを見たの？」

「だから、剣で刺して、命をいじっていたんです！」

「でもそれは、怪我はしてないし、命を繋いだんでしょ？」

「……」

「後は？」

「三つ編みが……出たり、消えたり……」

「そう」

「そう……て、不思議じゃないんですか？」

「不思議ね」

「私や、クラスのみんなも、命が切れてはみ出して……」

「はみ出している？ 命が？」

「はい……」

「それで？ 向井君たちはなんて？」

「何も……」

「でも、命を繋げるんでしょ？」

「……でも、秋山さんを……秋山さんを……命を、繋いで？」

「繋いで？」

ふいに、綾音は涙が零れた。理由はよくわからなかった。

「命を……繋いだ？ もしかして……私も？ でも、なんで私にだけ、こんな……」

「何も知らないのと、知っているのと、どっちが良い？」

「……」

「見てしまったのでしょうか？」

知らずに怯えるより、知って悩む方が良いと——見てしまったから。

「綾音ちゃん」

「はい」

「一番怖かったのは何？」

「……秋山さんが、鬼に……内臓を……」

「それは、本当にあったことなの？」

「……いえ」

「じゃあ、なんでそんなことを思ったの？」

（それはつまり……〈魂糸〉を使って何かが行なえるように、あなたの〈魂糸〉を切って、引きずり出してあげます……ということだ）
ふいに、穀瑠の言葉が蘇った。そうだ、すべては穀瑠のあの言葉が想起させたイメージからだ――

「……向井君の、悪趣味な一言が原因です」

綾音の言葉から深刻さが消えた。

「あら」夏目が笑う。

「……あのサド男がいけないんです。変なこと言うから……そうだわ、すべてはそれが原因です」

「そう。じゃあ、もう大丈夫ね？」

「あ……」

綾音は、まじまじと夏目を見つめた。夏目は微笑んでいた。少し、悪戯っぽく。

「向井君のことだから、二年C組へどんな説明をするのか、まだ話してないでしょ？」

「聞いてません」

「これから説明すると思うけど、きっとこれは話さないわ。でも、特別に教えてあげる」

「何ですか？」

「仕込みよ。二年C組全体にマジックを仕掛けるつもりなのよ、あの男は」

「ええ――？」

夏目の語ったマジックの内容は、仕組みはわかるものの、かなり大がかりなもので、綾音は目を丸くした。

「綾音ちゃんは、仕込まなくても引っかかるようになってるのよ」

「あの男――」

「だから、知らないふりして、本番であつと驚かせてあげなさい」
「はい」

二人はくすくすと笑った。

「戸時先輩もこれから仕込みですか？」

「ええ、そうよ」

「がんばってくださいね」

「綾音ちゃん。見返すのは向井君だけね。申し訳ないけど、クラスメイトには内緒にしといてね」

「はい。先輩方の努力は無駄にしません」

「よし」

夏目は最後にもう一度綾音を抱きしめると、暇を告げた。

その日の夜、明日、八千穂も含めて三人で会えないか、と毅瑠から連絡があった。

テレパシー事件 17

翌日、日曜日の午後。

K 駅前の喫茶店に、綾音、毅瑠、八千穂の三人が顔を揃えていた。
「まず……ごめん」毅瑠が綾音に頭を下げた。

「何が？」

「説明の仕方が悪趣味だった。それに、言葉も足りなかった。だから、怖い思いをさせてしまったみたいで……本当にごめん」

「本当よ。やっぱり、向井君はサドなんじゃない？」

毅瑠は押し黙ったまま。隣に座る八千穂が口を開いた。

「毅瑠。サドって何？」

「サドってのはサディストのこと。人を痛めつけるのが嬉しい人のことよ」綾音が説明する。

「毅瑠。そうなの？」

「そんなつもりはないんだけど……」

今までの毅瑠なら徹底的に抗弁するだろうに、今日は幾分殊勝な態度だ。

ぷつと綾音は吹き出した。

「向井君。もしかして、戸時先輩に怒られた？」

「ああ。こっぴどくね」

それでも、こうして顔を出すのだから、生徒会役員としてはまじめだ。意地悪を意図しての発言ではなかった、というのも本当かもしれない。ただ、自分の嗜好に毅瑠が気付いていないだけ——という可能性は捨てきれないが。

「わかったわ。戸時先輩のお陰で、なんとか私も浮上できたし、こちら辺で良しとするわ。ああ、もちろん、ここは奢ってくれるのよね？ 向井君」

「え？……ああ、もちろん」

「すいませーん。パフェとクレープの追加をお願いします」

「ちょ……」

慌てる毅瑠に、八千穂が追い打ちをかけた。

「私はコーヒーゼリー追加」

「チホまで！」

それからしばらく、テーブルの下で財布の中身を数える毅瑠の眩きが、ぶつぶつと辺りを漂い続けた。

「さて、気を取り直して本題にはいるよ」

追加オーダーが揃ったのを見計らって、毅瑠が言った。

「明日の月曜日、すべてを決着させる。昼休みに蛭原先生、放課後に二年C組だ」

「別々にやるんだ」

「まあね。それで、乙蔵さんにも手伝ってもらいたいんだ」

「何をやるの？」

「蛭原先生との交渉。それから、二年C組の方はサクラだね」

昨日の夏目の話が蘇る。毅瑠はどこまで話すだろうか。

毅瑠は、傍らの鞆から書類を引っ張り出すと、説明を始めた。最初の説明——蛭原教諭との交渉内容を聞いているうちに、綾音は呆れ、ついには笑い出してしまった。

「ねえ、蛭原先生のこれ……全部本物なの？」

「ああ。道生が集めてくれたんだ。本物だよ」

「これで、よく私たちのことを言えたものね」

「最初に乙蔵さんの話を聞いたときに、頭に浮かんだ原稿用紙は最初から完成していたのか？ それとも、順次浮かんできたのか？ と訊いたのを覚えている？」

「ええ。完成していたって答えたわよね？」

「だからさ。もしかしたらって思って調べたら、案の定だった」

「ふーん」綾音はコピーの束を取り、矯めつ眇めつした。「わかった。じゃあ、明日朝一番で蛭原先生にアポを取るわ」

「よろしく。で、放課後は二年C組だ。これは全部俺が説明する」毅瑠は計画を説明した。それは、昨日、夏目に聞いた通りの内容

だった。綾音は苦勞して、初めて聞くような表情を作った。そして――夏目の予想通り、穀溜は、生徒会役員たちが走り回っているはずの仕込みについては言及しなかった。

「ええと……つまり、蛭原先生に説明した内容については、クラス全員で口裏を合わせると。その上で、人形の呪いだってことで、お祓いをするのね？」

「お祓いといっても、チホが巫女の格好をして、大幣おおぬぎを振るくらいだ。重要なのは、ここで必ず、チホが全員に触れることだ」

「〈魂糸〉……だっけ？ その環を繋ぐのね？」

「そう。施術と呼んでいる」

綾音は八千穂を見た。無表情で――綾音にはそう見えた――コーヒ―ゼリーをつっている。

「ねえ、訊いていい？」綾音は八千穂に言った。
「？」

「一昨日、屋上で、私に何をしたの？」

「施術。〈魂糸〉の環を繋いだ」

「商店街での女の人も、秋山さんも同じね？」

こくん、と八千穂が頷いた。

ほーっ、と綾音は大きく息を吐いた。心の重荷が減った気がした。
「向井君が、鬼を狩る、なんて物騒な言い方をするから、私、神坂さんが、何か悪いことをしているように感じていたわ。でも、全部、〈魂糸〉がはみ出してしまった人のために……ええと、施術？ それをしてあげたのね」

「違う」八千穂は言下に否定した。

「え？」

「あのままだと、被害者も鬼も増えてしまうから」

「結果的には同じことですよ？」

八千穂が小首を傾げる。答えたのは穀溜だった。

「誰の命がすり減ろうと、誰の寿命が短くなろうと、本来〈靈鬼割〉には関係ないんだ。切れた〈魂糸〉を片端から繋いでいく正義の

味方でも、慈善事業でもないんだよ。他人に害をなすようになって初めて、〈霊鬼割〉は施術を行う。そうなってしまった人を〈鬼〉と呼んでね」

「じゃあ……本来、私たちは……」

毅瑠の瞳は悲しげで、それは、残酷なことを雄弁に語っていた。

「基本的に被害者は対象外だった」

「加害者だけが救われるの？」

「救われない。大抵生きる意味を失う」八千穂が淡々と言葉を挟んだ。「人形を売っていた女は、客の願いを叶えることが生き甲斐だった。でも、施術したから、それはもうできない」

「じゃあ、神坂さんは、何のためにそれをしているの？」

「自分のため」

綾音は絶句し、それ以上言葉を継げなかった。

「乙蔵さん。チホに施術してもらってどうだった？」毅瑠が静かに問う。「四月の事件のとき、チホは始め、鬼以外には目もくれなかったんだ。でも……話をして、お願いをして……最後には、被害者の〈魂糸〉を繋いでもらった。今回、チホじゃなかったら、あの女子大学生を施術して終わりだった可能性が大きいんだ」

綾音は自分の手を見た。八千穂の施術は――暖かかった。あのと、なんだかほっとしたのを覚えている。

「チホはチホの基準で、できることを精一杯やってくれる。もしかしたら、乙蔵さんの基準では理解できないことがあるかもしれない。でも……世界なんて、俺たちにはわからないことだらけだろう？　そう考えたら、理解できないことが、イコール受け入れられないことにはならないよね？」

毅瑠は一生懸命だった。残酷な内容も、それがありのままだと、今回は感じられた。

「戸時先輩に話したことある？」

「チホのこと？　いや、ない」

それでも、夏目は綾音の話を否定せずに聞いてくれた。恐らく、

何を言っているのか、ほとんどわからなかっただろうに――綾音の言葉を受け止め、一緒に考え、答えへと導いてくれた――

「理解はできなくても、受け入れることはできるか……」

「……」

「わかったわ。全面的に協力する。元々こちらからしたお願い事だしね。結論が気に入らない……なんて言っていられないわ」

八千穂のこと。穀瑠のこと。綾音には、尋ねてみたいことが山程あった。しかし、今はそれは置いておいて、〈二年C組テレパシーカンニング事件〉を決着させるのが先決だった。

テレパシー事件 18

月曜日の昼休み。

綾音、毅瑠、八千穂の三人は、職員室で、蛭原教諭と倉持教諭に向かい合っていた。

「蛭原先生、二年C組クラス委員の乙蔵です。こちらは、生徒会書記の向井君と、事務員の神坂さんです」

顔も名前も知っているだろうが、綾音は形式的な挨拶から始めた。八千穂が生徒会事務員になったことは、昨日聞いたばかりだった。

「ふん、それで？」蛭原がつまらなそうな表情で言う。

五人は、職員室の一角にある応接セットにいた。ここは本来客用で、生徒が使うことはないのだが、倉持がそこを指定したのだった。教員二人と、綾音、毅瑠の二人が向かい合って座り、毅瑠の背後に八千穂が立っている。

蛭原の態度に飲まれないように自分を律しながら、綾音は続けた。「先週火曜日の小論文の件です。生徒会の協力を得て、私たちが調べてみました。その結果を持って、二年C組の総代としてお話に参りました」

「カンニングを認めて謝りに来たか？」

「半分当り、半分はずれです」

「何？」

綾音は毅瑠に目配せをした。毅瑠は心得顔で頷くと、八千穂から封筒を受け取り、その中身を応接テーブルの上に広げた。

「何だこれは？」蛭原が不審げに眉を顰める。倉持がその一枚を手に取り、さっと目を通した。

「国語の勉強をする意味とは何か……模範解答？」

「えっ？」と蛭原が身を乗り出し、コピーの束を鷲掴みにした。それを見ながら、毅瑠が冷静に言った。

「そうです。ただし、それらは以前、蛭原先生が授業で配布された

ものです。これが昨年、つまり今の三年生のとき。こちらは今年の卒業生、そっちはその前です」

「どこからこんなものを……」

「生徒はちゃんと、先生の配られた模範解答を、大事に持っているんですよ」

「それで？　これがどうしたんだ」

蛭原が、綾音と毅瑠を睨み付けた。しかし、倉持はあることに気付いた様子で、蛭原を小突いた。

「蛭原先生、これはその都度書かれたものですか？」

「そうですよ。小論文の模範解答は、私も生徒たちと一緒に考えることにしているんです」

「それにしては……」　倉持が言葉を濁す。

「全部同じ」

そう、ずばっと言ったのは八千穂だった。

意外なところからの一言に、蛭原の顔が見る見る赤くなった。コピーの束を見つめて肩を震わせている。

「先生、別にそれが悪いとか、そういう話をしに来たんじゃないんです」　綾音が慌てて言った。

「何だと？」

綾音の後を毅瑠が継ぐ。

「さっき、半分半分だと乙蔵さんが言いました。蛭原先生は、二年生の現代国語の授業で、時期はまちまちですが、必ず一回はこのテーマの小論文を出題される。それは、ここ数年ずっと続いている。で、その模範解答ですが、先生はいつも教卓で書かれているようですが、先生程国語の授業に熱心な方が、国語の勉強をする意味について、毎回違うことを書かれたりするはずがない」

「ま、まあ、そうだな」

「年に一度で、先生ご自身、前回書いた模範解答を覚えていらっしやらなかったのかもしれませんが、同じ人間が同じテーマについて書けば、原稿用紙一枚です、同じ文章ができ上がってもおかしくな

い」

「それで？」

「生徒たちの間に蛭原先生の小論文のことが伝わっていたんですよ。このテーマは一回は必ず出るから、これが模範解答だぞって。先輩から後輩へ。それをそのまま書いてしまっただけは元も子もないんですが、突然の出題に慌てた二年C組は、今回それをやってしまった。みんな、自分ぐらいそのままの文章を書いても平気だろう、と思っただけなんです。そこは、謝らなければいけないところだと思います」

「う、うむ」

「でも、あの場でカンニングはしなかった。それから、考えが足りなかったにしろ、蛭原先生の授業を予習したことで、偶然こういう結果になってしまった。そのことは認めてあげて欲しいんです」

「何故それを直後に言わなかった？」

蛭原は綾音を見た。

「実は……過去の模範解答の出所が、数カ所あったんです。みんな、自分だけ、もしくは仲間数人だけが模範解答を知っていると思っていたらしくて……。後でみんなに確認したらわかって……。申し訳ありませんでした」

綾音は殊勝に頭を下げた。

蛭原は、いかにも「しょうがないな」という諦めの表情をした。

「わかったわかった。今回は赤点はなしだ。小論文はやり直すからな。ああ、それから、論文は丸暗記じゃ意味ないぞって、皆に言うておけ」

蛭原は面倒臭そうにそう言うと言った。倉持は何も言わない。話し合いは、そこで終わった。

三人は揃ってお辞儀をし、職員室を後にした。

テレパシー事件 19

「先生程国語の授業に熱心な方が……て、何それ？」

焼きそばパンを頬張りながら、綾音が笑った。

「言葉通りの意味だよ」

「それにしたって」

綾音、毅瑠、八千穂の三人は〈食堂〉で簡単な昼食を取っていた。蛭原教諭との話し合いがあることがわかっていたため、三人とも最初から総菜パンで済ませることにしていたのだ。昼休みは残り十五分だった。

「あの場合、蛭原先生にはできるだけ気分良くなってもらう必要があったからね」

「煽^{おだ}てるなんて……なんかやだ」

「その潔癖な意見は、女子高生としては清純でいいかもしれないけど、交渉事だからね」

「私は清純なの」

ふふん、と鼻で笑った綾音の顔を見て、八千穂がぼそつと言った。

「毅瑠。今、煽^{おだ}てた？」

「え？」綾音の顔が急に険しくなる。「……ああ、そうね。向井君で、そういう人だったわよね」

毅瑠はあらぬ方向を見ている。綾音はため息をついた。

「……でも、とりあえずありがとう。これで、うちのクラスの赤点は回避されたわけだし」

「上手くいって良かった。残るは二年C組だな」

「ホームルーム、倉持先生はどうするの？」

「倉持先生なら、今日のホームルームは急用ができることになるよ」

「……また」

「え？」

「秘密主義もいい加減にして」

「いや、ごめん。これは忘れていただけだ。ちょっと生徒会から手を回した」

「ふーん。まあいいわ。今のところは何も言わない。でも、約束して欲しいことがあるの」

「何？」

「これが終わったら、私、二人に訊きたいことが山程あるのよ。その質問に答えてくれるわね？」

毅瑠と八千穂は顔を見合わせた。

「どうなの？」

「可能な限り努力はするよ」

八千穂も小さく頷いた。

「それにしても……生徒会の役員で、みんなタヌキよね」

「たぬき？」

「人を化かすってことよ。私、今回のことがあるまで、生徒会の活動とか、あんまり気にしたことなかったのよ。そりゃ、役員の名前くらい知っていたけどね。生徒会って、もっと品行方正な活動をしているんだと思っていたわ」

「品行方正だけど？」

「そうね。でも、煽てたり、裏から手を回したり……内実は悪の秘密結社みたい」

「学校は聖域じゃない。社会の縮図だ」

「何それ？」

「戸時会長が俺たちに言ったんだよ。高校生だって一人一人は独立した人間で、これだけ集まれば色々なことが起る。だから俺たちは、絵空事の綺麗事じゃなくて、現実的な信念を持つてことにあたらなければならぬ……」

「生徒会の信念？ 『友達以上、恋人未満』 ってあれ？」

「それは戸時会長が掲げた標語だよ。生徒会の信念は『全校生徒の滞りのない日常』」

「普通ね」

「だから、俺たちは普通なんだよ」

綾音は八千穂を見た。彼女の存在は、はたして普通といえるだろうか？——何が普通で、何が普通でないのか？ 理解できることが普通で、理解できないことが異常なのか？——それを、誰か一人が決めつけることはできない——でも、それでも、日常が滞りなく進んでいくなら、いつか何かの答えに辿り着くかもしれない。自分の普通が変わるかもしれない。

「そうね……滞りないって大事だわ。水も滞ると腐るものね」

蛭原との話し合いで、滞っていた二年C組の日常に半分穴が開いた。後は放課後、もう半分を突き破らなければならない。

「頼むわね、向井君。神坂さん」

綾音が立ち上がったのと、昼休みの終了を告げる予鈴が鳴り響いたのが、ほぼ同時だった。

テレパシー事件 20

毅瑠が予告した通り、二年C組担任の倉持教諭は、急用ができたから、とホームルームには出てこなかった。代りに教壇に立ったクラス委員の綾音は、ざわつく生徒たちに向かって声をあげた。

「今日は報告があります。先週の、蛭原先生の授業のこと」

クラス中の視線が綾音に集中した。一瞬で、水を打ったように静まり返る。

「みんなも知っての通り、生徒会の人に協力してもらって色々調べたの。これからその報告をしたいんだけど、いいかしら」

もちろん、クラスに否はなかった。綾音は教壇から飛び降りると、教室前方の扉を開けた。ゆっくりとした足取りで、毅瑠と八千穂が入ってきた。

ざわつ、と教室中が揺れた。全員の視線が一点に集中する。それもそのはずで、毅瑠の後ろを歩く八千穂は、ひばかま 緋袴を穿いた巫女姿だった。

まっすぐ、二人は教壇に上がった。

「今回、うちのクラスの問題を担当してくれた、生徒会書記の向井君と、事務員の神坂さん。じゃあ、説明は向井君からお願いするわ」綾音はそう紹介すると、後を二人に託して自分の席へと戻った。

「どうも。生徒会書記の向井毅瑠です。〈銅像生け贄事件〉の向井です、と言った方が通りがいいかな」

ははは、と毅瑠が一人で笑う。教室は、しんとしている――というより、明らかに毅瑠のテンションに引いている。しかし、毅瑠は、そんな雰囲気を用意することなく話を続けた。

「さて、今回生徒会は、このクラスで発生した、俗に言う〈二年C組テレパシーカンニング事件〉についての依頼を受けました。一つ、蛭原先生との和解を仲立ちして欲しい。一つ、今回の現象を解明して欲しい。生徒会としても、皆さんが『普通の意味でのカンニング

はしていない』という観点から、ここ数日調査をさせていただきました」

相変わらず悪趣味な話し方だな、と綾音は思った。――校内で知らない人はいない不思議美少女〈神坂八千穂〉、しかも〈巫女装束〉。加えて〈銅像生け贄事件〉の〈向井毅瑠〉。聞き取り調査のときに、これ見よがしに訊かれた〈マスコット人形〉。そして今の、「普通の意味でのカンニング」などという意味深な言葉――これだけの餌を目の前に吊して、それでもなお、毅瑠は平然と引っ張ろうとしている。まだ足りないらしい――このクラス全体にマジックを仕掛けるには――

「で、報告その一です。蛭原先生は赤点を取り下げました」

おお――、と教室中が揺れた。

「この件については、これ以上の追求はないと思います。でも、もう一回同じ小論文が実施されると思いますので、今度は皆さん、自分で考えてくださいね」

一瞬にして教室内が凍り付いた。しかし、それでも毅瑠は動じることなく話を続ける。コピー紙を何枚も黒板に貼ると、昼休みに職員室で行った説明を繰り返した。その内容の白々さたるや、聞いている綾音が恥ずかしくなってしまうほどだった。

「――というわけで、皆さんにお願いです。蛭原先生は今の説明を受け入れました。ですから、是非、口裏を合わせてくれるようお願いします」

教室内、どん引きの空気は続いていた。毅瑠はクラス中を見回すと、小さく肩を竦める。

「ええと、皆さんご不満のようですね？」

「蛭原先生にそんな嘘を言うってことは、生徒会は俺たちを信じてないってことだろ？」

誰かがそう言った。

「あれ？ そんな風に聞こえましたか？」

「さっき、今度は自分で考えろって、そんなこと言ったじゃないか

？」

「でも、結果的に赤点は免れたんだから、いいじゃないですか」

「ふざけるな！」

誰かが叫び、ブーイングの嵐が巻き起る。それはひとしきり続き、綾音が壇上に飛び出して、ようやく制した。

「待って待って。向井君……本当にこのままで終わらせるつもり？」

穀瑠は、ちらっと八千穂を見た。その視線にクラス中が釣られた。「ええと……皆さん。ことの真相、本当に知りたいですか？」

ここまで引っ張っておいて、話をせずに済まそう、というのは無理な話だった。クラス中が、早く話せ、という雰囲気で満たされている。

「それでは……」

穀瑠の雰囲気さがらりと変わった。ここからが本番だ、と誰もが思う。綾音だけが、苦虫をかみ潰したような顔をした。

「生徒会には色々な相談が寄せられます。その中には、我々が〈Xレベル〉と呼んでいる類のものがたまにあります」

アメリカの人気ドラマを振った安直なネーミング。しかし、その安直さは、聞き手の想像を一方向に簡単に誘導する。そのドラマは、科学では説明できない事件を扱った物だった。

穀瑠は、聞き手が想像を巡らせるに充分な、考えを巡らすには足りないだけの、絶妙な間を取って続けた。

「たとえば、四月のあの事件が〈Xレベル〉でした」

綾音は、クラス中の生徒の血の気が引く音を聞いた気がした。

「俗に言う〈銅像生け贄事件〉は、最終的に二人が亡くなり、大勢の怪我人が出ました。生徒会があの事件を終わらせるためにやったこと……それは、皆さんも知っていると思います」

教室中の誰もが、四月の事件の顛末を思い出しているに違いない。「あの事件のとき、原因を突き止めたのは、誰だろう、ここにいる神坂さんです」

四月の事件については、綾音は、穀瑠達から何も聞かされていない

かった。だから、この発言の真偽はわからない。しかし、穀瑠が何をしたかは知っている。それは他の生徒たちも同じで、憑かれたように、穀瑠の話に耳を傾けている。

「今回の件も、生徒会は〈Xレベル〉に分類しました。そして、神坂さんによれば、『蛭原先生の頭の中が見えてしまった』原因が、確かにこの教室にあるようです」

穀瑠は意味ありげに八千穂の顔を見た。八千穂は神妙な顔で室内を見渡すと、ずっと一人の生徒を指さした。秋山彰子だった。

「な……何？」

「秋山彰子さん。最近、あなたが流行らせたものがありますね？」
教室中がどよめいた。「やっぱり」という呟きが、あちこちで聞こえる。

「これのこと？」

彰子は携帯電話にぶら下がったマスコット人形を掲げた。

「見せてください」

穀瑠は教壇を下りて彰子に近付いた。

彰子が携帯電話ごと人形を差し出す。そして、穀瑠の伸ばした手が人形に触れた瞬間――

ガシャン！

穀瑠がそれを取り落とした。

携帯電話が床にぶつかる硬質な音が、パニックの引き金を引いた。誰もがポケットや鞆から人形を取り出し、床に投げ捨てる。教室は大騒ぎとなった。

どンドン、と穀瑠が乱暴に教卓を叩く。

「皆さん、落ち着いてください！　まだ、人形が原因だと決まったわけではありません」

しかし、ざわめきは止まらない。穀瑠は再度教卓を叩き、声を張り上げた。

「では、ちょっと実験をしてみましよう」

話の展開が意外だったのか、騒ぎは一旦沈静化した。その隙を逃さず、毅瑠が真っ白な紙を全員に配る。B5サイズのコピー紙だった。

「はい。それでは、今配った紙に、皆さん俳句を書いてみてください。名前は書かなくて結構です」

「俳句？」クラス中から疑問の声上がる。

「そうです。五・七・五。なんでもいいですよ。すぐに集めます」

綾音は白紙の前で悩んだ——悩んで、一つの決断を下した。

その間にも、毅瑠はどんどん紙を集めていった。追い立てられるように、生徒たちは俳句を書き、紙を毅瑠に渡した。

全員分、三十八枚の紙を集め終わった毅瑠は、最前列に座っている男子生徒に声をかけた。

「これ、読み上げてもらえますか？」

男子生徒は、毅瑠から渡された紙の束を手にとると、立ち上がった。

「じゃあ、一枚目……『長梅雨は いやだいやだよ ああいやだ』

……」

「ははは。面白い句ですね」毅瑠が笑った。

しかし、読み上げた男子生徒の顔が真っ青になっている。

「次をお願いします」

「二枚目……『長梅雨は いやだいやだよ ああいやだ』」

「三枚目は？」

「……同じだ」

「同じ？」

「全部……全部同じだ」

男子生徒がパニックになって放り出した紙束を、毅瑠は拾い上げた。そして、むしろ楽しそうな様子で、一枚一枚をマグネットで黒板に貼っていく――

「……！」

クラス中が息を飲んだ。

三十八枚中——三十枚に同じ俳句が書かれていた。

『長梅雨は いやだいやだよ ああいやだ』

今度こそ本当にパニックになった。人形を放り出した生徒たちは、椅子から立ち上がり、教室の後ろへと、転がるように逃げた。綾音だけがタイミングを逸して自分の席に留まっていた。

「ああ……まだ、続いているようですね」

感慨深げに、穀溜が黒板を眺めて呟いた。教室は、四十人もの生徒が居ると思えないほど、しんと静まり返っている。

「乙蔵さん、全員の人形を集めてもらえますか？」

「……え、ええ」

綾音は、床に投げ捨てられた人形を集めて回った。全部で二十九个。自分の物は既に燃やしてしまったている。

穀溜は、綾音が教壇に積み上げた人形の一つを手にとると、引き千切った——そして、中から糸のような物を引っ張り出す——

穀溜の指先に、二年C組の生徒たち全員の視線が集中する。

「髪の毛ですね。髪には怨念が宿るといいますから……ほら、こっちにも」

穀溜は、もうひとつ人形を壊してみせた。やはり、中から髪の毛が現れた。

「実験の結果は……明らかです。間違いなく、この人形のせいだったようです。こんな、冗談みたいな俳句が三十枚も重なるなんて偶然、起きるわけがない」

クラス中が穀溜の言葉に頷かざるをえなかった。

「神坂さん」

穀溜は八千穂に向き直ると、髪の毛をかざした。八千穂がゆっくりと手を近づけると、突然、髪の毛に火が点る。髪の毛が焼ける嫌な匂いが教室に漂った。

それは恐らく、綾音が商店街で八千穂を見たあのときに、人形を燃やしたのと同じ力——しかし、巫女装束でその力を見せられると、とても神聖に思えるから不思議だった。

「願いを叶える人形が、どうしてこんな呪いの人形になってしまったのか……それはわかりません。でも、大丈夫です。この通り、呪いの髪の毛も、神坂さんの神通力には負けたようです。浄化の炎が清めてくれます」

穀瑠は、髪の毛の燃えかすを、ポケットから出したハンカチの上に慎重に置いた。

「人形はすべて生徒会で処分します。それで、この事件も終了です。処分が完了したらお知らせします。そのとき、もう一度試してみてください」

穀瑠は、黒板に貼った俳句を指さした。

「もう、同じことは起らないでしょうから。……それでも皆さん、今後も充分注意してください……いつどこでまた、同じようなモノに巡り会うかもわかりません。安直に叶う願い事は……何か大切なものを犠牲にしているのかもしれないから……」

殊更陰惨な口調で穀瑠が言った。相変わらず悪趣味だ——と綾音は思った。

「さて、神坂さんのこの神通力ですが、実は彼女は神坂神社の娘さんなのです。それで、今回皆さんのために、お祓いの準備と、お札を用意してもらいました。肌身離さず持っていれば、人形の呪いも晴れるでしょう。人形を持っていなかった人も、せっくなので祓ってもらってください。これで、本当に終わりです」

穀瑠の大芝居を、今や二年C組はすっかり信じていた——いや、逆に呪われたのではないかしら？ と綾音は内心苦笑する。しかし、肝心なのはここからである。

綾音は、まず私が、と八千穂の前に進み出た。

「今回、人形の呪いは『書く』という行為で、手に現れました。だから、手を中心に祓います」

毅瑠が尤もらしいことを言う。綾音は、右掌を上にして、八千穂へと差し出した。

八千穂は、綾音の右手に左手を乗せると、右手で大幣を左右に振った。

「魂の綾は己が内へ、環を廻し命を紡^{つむ}げ……」

八千穂の口からこの言葉を聴くのは三度目だった。とんとん、と綾音の右掌で八千穂の左指が躍る。そして――「封!」という気合

い。
この前の屋上での経験から、今は施術をしていないのがわかる。でも、綾音の後ろにいる三十七人には――いや、繋ぐ必要のない人を除いて二十八人か――〈靈鬼割〉の施術が行われるのだ。時間にして十秒程――この十秒の重大さに、どれほどの人が気付くのだろうか。

綾音は、ここに来て初めて、ことを明かしてくれた毅瑠に感謝をした。そして八千穂にも。

「はい」八千穂がお札を差し出していた。

「ありがとう」綾音は本当の感謝を込めて言った。

それ以降、二年C組の生徒たちは、順番に八千穂のお祓いを受けた。

普段は左一本の八千穂の三つ編みが、左右揃っていることに気が付いた生徒は、綾音以外にはいなかった。

テレパシー事件 21

雲の隙間から覗く夕日が、屋上を斑に染めていた。
綾音、毅瑠、八千穂の三人が金網に寄りかかって雲を見上げてい
る。

「右の三つ編み、力を使うときに現われるのね？」

綾音の言葉に八千穂が頷く。今は、三つ編みは左一本だけだった。

「それにしても、相変わらず悪趣味な話し方だったわね。向井君」

「今回は認めるよ。意図したからね……」

「あの俳句……」

「ああ、あれ？ 実は……」

毅瑠が説明しようとするのを、綾音は手で制した。

「？」

「私、事前に戸時先輩に聞いて知ってた」

「え？」

「……だから、あのとき、違う俳句を書いても良かったんだ」

「でも、三十枚ちゃんと同じ俳句があった……」

「うん。違うのを書けば、きっと私の溜飲は下がったと思う。でも、

それは、二年C組全体のためにならないと思ったの。この事件は、
しっかり祓う必要があると思ったのよ」

「……」

毅瑠の仕込み。それは、テレパシーを再現することだった。

今の高校生は普段俳句に馴染みがない。だから、聞いたばかりの
印象的で忘れがたい俳句があれば、俳句を書けと急かされたとき、
咄嗟にそれを選ぶ可能性が高い——そう毅瑠は考えたのだ。そして、
あの手この手を使って、生徒たちに例の俳句を印象づける作戦に出
ることにした。

同じ小論文を書いた生徒のうち、綾音を除いた二十九人に対して、
それぞれ別の方法で、それは行われた。毅瑠を除いた生徒会役員六

人が実働部隊だった。担当は、一人頭五人――

たとえば、最近俳句にはまっている先輩が、こんな俳句どうだ？
と声をかける。

たとえば、最近俳句を始めた両親が、こんな俳句どう？　と声をかける。

たとえば、兄弟が、先生が、恋人が――

よく行くお店の店員とか、通りがかりの人とかでも良いだろう。
とにかく、生徒会役員の、可能な限りの人脈と行動力が費やされたのだった。

それは、想像を絶する作業だったと言って良い。それでも、彼らはそれをやってのけた。結果は――綾音の知る通りだ。

「しかし、先輩方もよくやってくれたわね」

「すごいだろ？」

「でも、いずればはれるんじゃない？」

「大丈夫だよ。こんなこと、考えても、実行する人間がいるとは思わないだろ？」

「そうね」

俳句が選ばれたのは、言葉数が少なくて仕込みやすい、という理由だけでないのだろう。この程度なら、誰も切羽詰まることはない。

――あのときのように、〈魂糸〉を伸ばしてしまう生徒もいない――
綾音は笑った。気分は上々だった。

「そう言えば、私がここで神坂さんに施術してもらったとき、唄うたがなかったような気がする……」

「唄？」

「ほら、魂のなんたらって……」

「ああ、詠唱か。なくてもいいんだ。最初はなしにしようかとも思った。でも、チホがやりづらいらしいんだ」

「ふーん」

夕焼け雲を見上げる八千穂の横顔は綺麗だった。さっき教室で八千穂を前に感じたことが蘇ってくる。

綾音は思う。毅瑠にも、八千穂にも、冷たく思われる行動があったり、怖い思いをさせられたり、ここ数日で随分と振り回された気がする。でも、そのすべてを、自分が心の中で理解して正当化する必要はないんだと。怖いと思ったことはそのまま、嫌だと思ったこともそのまま、そして、命を繋いでくれた感謝もそのまま、一緒にたにして向き合えば良い。

そう――憧れのあの人なら、きっとそうするに違いないから。

「神坂さんに施術してもらったとき、とても安心したわ。それに、みんなを施術してくれてとても嬉しかった。……だから、たとえね……向井君に頼まれて嫌々やってくれたんだとしても、私は感謝しているわ。どうもありがとう」

「何もない」

ぼそっと八千穂が言った。思わず、綾音は毅瑠の顔を見た。

「どういう意味かしら？」

「感謝される程のことはしていない……という意味だよ。たぶんね」
「神坂さんて……なんだか味があるわね」綾音は笑いをかみ殺しながら言う。

「まあね。かめばかむほど味が出るタイプだ」

八千穂は意味がわからないらしく、小首を傾げた。

テレパシー事件 22

「やっぱりここだったわね」

夏目が屋上に顔を出した。手には、封筒やらビニール袋やら、色々抱えている。

「はい、乙蔵さん」

封筒は綾音に向かって差し出された。

「何ですか？ これ」

「請求書よ」

「え？ お金取るんですか？」

「あら、向井君伝えてなかったの？」

「すいません。忘れてました」 穀瑠がしまったという顔で頭を叩いた。

封筒の中には、確かに請求書が入っていた。明細には『お札一式』と書いてある。

「必要経費よ。そのお札代、生徒会費で出すわけにはいかないですよ？」

「うー、わかりました」

「こっちは私の奢りね^{おご}」

夏目は、ビニール袋からジュースのパックを取り出して全員に配った。そして、自分が真っ先にストローを差すと、「乾杯！」と言って、高く掲げた。

「しかし向井君、今回は少し欲張っちゃったわね」

「ははは……そうですかね」

「欲張り、ですか？」 綾音がジュースに口を付けながら訊く。「あの、テレパシーの再現のことですか？」

「んー、それもあるけど、二年C組の事件に託^{かこ}けて、神坂さんの問題も前進させようとしたのよね」

穀瑠は居心地悪そうに身動き^{みじろ}した。八千穂は、そもそも聞いてい

るかどうか怪しい。

「わからない？　今回、あなたのクラスの問題を実質解決したのは、神坂さんということになっているのよ」

「あ！」

「そうするとどう？　彼女の株は急上昇。友達の少ない彼女を、もっと学校に溶け込ませよう、そういう向井君の作戦だったのよ」

先輩は知らないでしょうけど、実は施術が——綾音はそう考えかけて、しかし、違うのだと気が付いた。さっきも言っていたではないか。あの場での詠唱はなくても良かったのだ。況^{いわ}んや巫女装束は、だ。なら、あれほど派手に八千穂を前面に出さずとも、施術を行うためだけなら握手程度で良かった——二年C組への暗示効果を狙ったとしても、確かにやり過ぎだ。

「俳句のことも併せると、ちよつと欲張り過ぎね。そりゃもう大変だったんだから……。でも、結果は上々だったわね。そうでしょ？」

綾音ちゃん

「はい。もう、見事に」

「蛭原先生の方も、いいきっかけになったんじゃないかしら」

「きっかけですか？」

「蛭原先生は、良くも悪くも大人だから。ちゃんと落とし所つてのがわかっているのよ。生徒全員が赤点なんて、自分の指導力も問われちゃうわけだから、本当にやるつもりがあったとは思えないわ」

「でも、過去の模範解答はちよつとでき過ぎじゃあ……」

「あれはね——、きつと蛭原先生の自己暗示よ。無意識にいつも同じ文章を書いていて、毎回考えていると、そう思い込んでいたんじゃないかしら」

「へー」

「まあ、気が付いた向井君はお手柄だったわね」

綾音は少し唇を突き出して呟いた。

「なんか……みんなタヌキですね」

「そうね。学校は社会の縮図。人は本音や正論だけで生きているわ

けじゃないもの。それをわかっていないと、集団はまとまらないわ」
そこまで言って、でも、と夏目は言葉を繋いだ。

「本当は、正面から本音でぶつかることが一番大切よね」
「そうですね」

綾音は力一杯頷いた。正面から本音でぶつかる。穀瑠みたいに詭弁を弄さず、心からの言葉で話をする。――それは、とても素敵なことだ。

「先輩、聞いてくれますか？」

「ん？」

綾音は声を大にして宣言したくなった。

「私、今、興味がある女の子がいるんです。綺麗で、不思議で、ちよつと怖くて……でも、なんか味がありそうな女の子。まず、私のこと、名前を覚えてもらうところから始めたいと思います」

「あら」と夏目が笑った。「向井君。君の悪戦苦闘も、無駄じゃなかったみたいね」

ますます居心地が悪そうに、穀瑠は頭をかいた。

八千穂は、聞いているのかいないのか、沈み行く夕日を眺めている。
これは手強そうだな、と思い、なんだか綾音はとても嬉しくなっ

た。

翌日、〈二年C組テレパシーカンニング事件〉は人形の呪いだっ
た、という話題で校内が持ちきりだったのは言うまでもない。

《テレパシー事件 了》

テレパシー事件 22（後書き）

第一幕「テレパシー事件」はこれにて終了です。

幕間を経て、毅瑠と八千穂の出会い「銅像生け贄事件」が始まります。

乞うご期待。

綾音のお友達大作戦

おとくらあやね
乙蔵綾音は悩んでいた。

〈二年C組テレパシーカンニング事件〉が無事解決し、クラスには平穏が戻っていた。だから綾音の悩みは、クラスとは別のことだ。

「どうしたの？ 綾音」

はねだあつこ
クラスメイトの羽田厚子が、机に突っ伏した綾音に声をかけた。

「あー、厚子。今朝ふられたの」

「え？ だれにだれに？ 私の知っている人？」

「もちろん。この前会ったばかりよ」

「この前……もしかして、テレパシー事件のとき？」

「そ」

厚子は、綾音が誰のことを言っているのかわかったらしく、そうかそうかと頷いている。

「でも綾音、あれはやめておきな」

「何で？」

「だって、あんまりいい噂を聞かないよ。そりゃ、生徒会に関わっているから頭良いんだろうけどさ。綾音には、もっと普通のがいいよ」

「それは聞き捨てならないわ」

綾音は上体を起こすと、厚子を見た。

「髪型とか、噂とか、そんなことで人を判断するのは悲しいことよ」

「なにそれ？」

「……て、戸時先輩が言ってた」

「ふーん。ところで、髪型って？」

「あれ？ 髪型のこと言ってたなかった？ やっぱり、すぐそれが出るでしょ？」

「そんなに珍しい髪型してたかしら。まあ、天パーってくらい？」

「……厚子、誰の話をしているの？」

「向井毅瑠じゃないの？」
むかいかる

綾音は勢いよく立ち上がった。

「冗談じゃないわ。あんな悪趣味サド男なんて、百万円積まれてもお断り」

「酷い言いようね。じゃあ……誰？」

「決まっているじゃない。神坂八千穂さんよ」

「は？」

綾音は、八千穂とどうしたら友達になれるかで悩んでいたのだっ
た。

今朝、綾音は登校時に八千穂を見かけた。

いつも通り、左一本だけの三つ編みを揺らし、背筋をまっすぐ伸ばし、孤高の雰囲気振りまいて歩いていた。

それでも、綾音は勇気を振り絞って声をかけた。

「おはよう。神坂さん！」

「おはよう」

立ち止まった八千穂は、綾音を見ながら小さく答えた。

「今日も良いお天気ね」

「そう」

「朝ご飯は何を食べたの？」

「目玉焼き」

「洋食なんだ？」

「和食」

「……」

「……」

「ねえ、私の名前覚えてる？」

八千穂は小首を傾げた。

綾音はがっくりと肩を落とした。そして、頭を上げたときには、八千穂はさっさと行ってしまっていた。綾音は、その場で名乗るこ

とできなかった。

「向井君」

「な……何？」

凄まじい形相で生徒会室に飛び込んできた綾音に、向井毅瑠はたじろいだ。

「ちょっと来て」

綾音は毅瑠の手を掴むと、強引に生徒会室から引っ張り出した。

そのままの勢いで特別教室棟三階の廊下を突進し、階段の前の防火扉に毅瑠を叩き付けた。

「ちょ……痛って……」

「神坂さんてどんな子？」

「は？」

「私、神坂さんに忘れられていたわ」

「……」

「笑わないで」

毅瑠は綾音の手をふりほどくと、シャツの襟を整えた。

「笑ってないよ。でも変だな」

「変？」

「ほら、K駅前で乙蔵さんがチホを見かけた日。夜の電話で、チホは乙蔵さんに見られたって、わかっていただけ」

「じゃあ、なんで今朝挨拶しても、首を傾げられたのよ？」

「……さてよ。あのとき……そうか。チホは、乙蔵さんの名前を言ったわけじゃない。あれだ、ほら……バレンタイン？」

「バレンタイン？ 何？」

「……髪につける」

「バレッタ？」

「そう、それだ。チホは乙蔵さんのバレッタに見覚えがあったようなんだ」

綾音は自分の頭に手をやった。トレードマークのバレッタ。好きでいろいろな物を集めている。そうだ――女の子なら、これに反応して当たり前だ。

「チホの反応は僅かだから、わかりづら……」

再び、綾音は毅瑠を防火扉に押しつけた。

「神坂さんの好きなものって何？」

「好きなもの？ ……コーヒーカーな。あと……あれ？」

綾音は、毅瑠の言葉を最後まで聞かずに、その場を後にした。

翌朝、綾音は早めに登校した。

そして、正門の少し手前で八千穂が登校してくるのを待っていた。八千穂はいつも通りの時間に登校してきた。

綾音は意を決すると、後ろから八千穂を追い越した。そして、八千穂に後頭部を見せつけるように歩く。

「あ」

八千穂が小さな声をあげたのを、綾音は聞き逃さなかった。振り返り、そして八千穂を見る。

「神坂さん。おはよう」

「おはよう……」

「ねえ、気が付いた？」

何を？ とは言わなかったが、八千穂は頷いた。

「かわいい」

「ふふふ」

綾音は前を向くと、八千穂によく見えるように、もう一度後頭部を見せる。そこには、コーヒーカーップを象ったバレッタがついていた。花やリボンを象った物^{かたど}は多いが、コーヒーカーップは珍しい。綾音は昨日、商店街を隅から隅まで探して、これを買ってきたのだった。

「神坂さんは、バレッタはしないの？」

「髪型が……」

八千穂の言葉が、幾分しゅんとした。普段、無表情でぶっきらぼうなのでわかりづらいが、普通の女の子ではないか。

「全然大丈夫よ。左の三つ編みの根本につけてもいいし、いっそ、その三つ編みをどうにかする手もあるわね」

「どうにか？」

「うん……じゃあ、お昼休みに一緒にご飯しない？ やってあげる。迎えに行くから」

そう言って綾音は駆けだした。

少し先で立ち止まると、くるっと振り返る。

「そうだ。私は綾音よ。あ・や・ね。今度こそ覚えてね」

その日の放課後。

生徒会室に現れた八千穂を見て、その場にいた誰もが驚きの声をあげた。

いつもは無造作に下がっている三つ編みが、左側頭部に綺麗な輪を作っている。そして、巻いた三つ編みは、コーヒークップを象ったかわいいバレッタで止められていた。

「あら、八千穂ちゃん。素敵ね」夏目が、感心しきりといった表情で言った。

「随分と大人っぽく見えるわ。色っぽいし」希奈がうらやましそうに言う。

「これは、男どもの目に毒だわね」と笑ったのは作だ。

太一は顔を真っ赤にして声が出ない。

「いつもそうしていれば、髪型でどうこう言われることないのに」と道生。

「ひとりじゃできない」八千穂がぽつりと呟いた。

「確かに面倒臭そうだね」と力。

「で、誰にやってももらったんだ？」と穀瑠が訊いた。

八千穂は髪をいじりつつ、嬉しそうな声で答えた。
「綾音」

《綾音のお友達大作戦 了》

銅像生け贄事件 プロローグ&1

事件は、まだ桜が満開の四月に幕を開けた。

私立涼心学園高校の始業式の日、一人の女生徒が校舎の屋上から身を投げた。彼女が身を躍らせた先には、学園の創設者涼原心一すずはらしんいちの銅像が建っており、直撃した彼女は、学園の中庭に凄惨な血の華を咲かせた。

このとき、中庭に面した各教室では新学期のホームルームが行われていた。結果、二・三年生のほぼ全員が現場を目撃することになった。

学園は翌日に入学式を控えていたが、やむなく延期を決定。二・三年生も、新学期早々休校となった。

休校が明けると、誰が調べたのか、銅像の前での自殺には前例があるとの噂が流れ、いつしかこの事件は〈銅像生け贄事件〉と物騒な呼ばれ方を始める――

しかしこれは、事件のほんの序章に過ぎなかった。

銅像生け贄事件 1

「新学期早々の仕事がこれとはね……」

生徒会長戸時夏目とときなつめのぼやきも当然といえた。

涼心学園高校の入学式は一週間遅れで行われた。二・三年生の通常授業もなんとか始まっていたが、事件は、未だ学園中に色濃く影を落としていた。授業が始まってでも登校できない生徒が続出しているのだ。学園は、教職員はもちろんのこと、系列大学病院の医師やカウンセラー、果てはPTAのボランティアまで募って対応に追わ

れた。

学園側が事態の沈静化に東奔西走しているもう一方で、生徒たちの間では、事件現場の写真が携帯電話のメールで回されたり、事件がまことしやかな怪談に仕立て上げられたりしていた。学園側はなんとか歯止めをかけようとしたが至らず、苦慮していた。

そんなわけで、生徒会長戸時夏目のもとへ、生徒間の噂や、写真の流出をなんとかするよう、と学校長から正式な協力要請が入ったのである。

朝早くから、特別教室棟三階にある生徒会室には、生徒会のメンバーが勢揃いしていた。

生徒会長	戸時夏目	とときなつめ	三年生
生徒会副会長	縁田太一	えにしだいち	三年生
生徒会副会長	山瀬道生	やませみちお	二年生
生徒会書記	木谷希奈	きたにきな	三年生
生徒会書記	向井毅瑠	むかいかたる	二年生
生徒会会計	水村作	みずむらさく	三年生
生徒会事務員	水村力	みずむらりき	三年生

「校長先生から直々に協力要請があったわ。しかも学園長の意向でもあるそうよ。必要経費は特別予算として計上する、とまで言われたわ。まあ、要請がなくても、『友達以上、恋人未満』の生徒会としては、看過できないと思っていた所だったけどね。とにかく、早急に行動方針を決めるわよ」

『友達以上・恋人未満』というのは、現生徒会のモットーだ。昨年十二月に改選された折、夏目が掲げたもので、以来生徒会は、生徒たちの悩み・相談・不満などに、可能な限り親身に対応してきた。その背景もあって、今回の協力要請になったわけである。

さらには、生徒会には、行動の指針となる方針が存在する。それは『全校生徒の滞りのない日常』というもの。新学期早々、生徒た

ちの日常は大いに滞っている――

「まず、事実確認をしたいと思う」夏目の後を受けて太一が口を開いた。「手元の資料を見て欲しい。飛び降りたのは、三年A組の挽^{ひき}田香^{だかおり}。四月二日水曜日の午前十一時三分。一般教室棟の屋上から、柵を乗り越えて、校舎五階分の高さを落下、中庭の銅像に直撃して即死した。同日十二時頃には、駆けつけた警察が屋上で遺書を発見。両親の離婚を苦にしていたことと、母親と二人暮らしになって進路選択に悩んでいたこと、が書いてあったらしい。不謹慎な言い方になるが……不審な点はないそうだ。よくある飛び降り自殺ということになったらしい」

「よくある」という表現は、同級生の自殺について言及するのには不適切な言葉だったが、今回に限っていえば重要な意味を持っていた。なにしろ、結果が凄惨なものだっただけに、動機や、自殺そのものについて、不穏な噂が絶えないのだ。

太一に続いて、今度は道生が発言する。

「俺の方では、生徒たちの間で流れている噂をまとめてみました。時間内に拾えた分だけですけど。」

その一、挽田香さんは学園に恨みを持っていた。だから、創設者の銅像に向かって飛び降りた。

その二、あの銅像は呪われている。以前にも、銅像の前で自殺した生徒がいた。

その三、挽田香さんは何者かに突き落とされた。

その四、一人で屋上に行くと、挽田香さんの幽霊に突き落とされそうになる。

その五、挽田香さんの幽霊が出る。顔の右半分がつぶれている。

その六、挽田香さんの遺体の一部が見つからない。

その七、現場の写真をメールで受け取ったら、一時間以内に十人に送らなければ死ぬ。

――以上、順不同です」

生徒会室を嫌な沈黙が満ちた。

「そんなにあるの？」希奈が、眼鏡の奥の眼を瞬かせながら呟いた。「バリエーションは様々ですが、概ねこの七通りでした」

「俺もいくつか聞いたよ」と力が言った。

「私もいくつか聞いたわ」と双子の姉の作が同意する。

「細かい話は後回しにしましょう。次は？」と夏目が促した。

希奈が手を挙げる。

「登校できない人たちのことです。大体が事件現場を目撃してしまったことによるショックのようです。先週の水曜日から授業が再開されて今日で四日目ですが、昨日の段階で、二年生が十八人、三年生が十四人欠席しています。新入生は現場を見ていませんから、それが原因で欠席している子はいないようです。加えて、昨日一昨日で、授業中に気分が悪くなったり、体調不良を訴えた生徒が、十人前後いた模様です。男女比は半分半分といったところです」

希奈に促されて毅瑠が続く。

「学校側の対応です。欠席している生徒には、各担任が電話連絡をした上で、必要なら医師やカウンセラーを紹介、もしくは派遣しています。校内では、保健室に非常勤の養護教諭がついて、常時二名体制になっています。あと、進路指導室にカウンセラーと教員が常駐していて、生徒の相談を受けています。とりあえず、今週一杯は続けるということです。それから、屋上は立ち入り禁止。常時施錠されています。銅像は、周辺も含めてブルーシートで覆われている上に、半径十メートル以内は立ち入り禁止です。さすがに「見るな」とまでは言っていないですけど」

「新聞やテレビの報道は沈静化しています」と今度は作が言った。

「事件直後も、それほど大きな扱いではありませんでしたし、いじめ等の背景ありませんでしたから。学校側の対外的な対応も、上手く切り抜けたって感じかしら。……もつとも、現場は酷い状況だったから、いずれゴシップ誌辺りが何か記事にするかもしれませんけど。ネット関係は……力、お願い」

「現場写真と挽田さんの顔写真が流出している掲示板がありました。

出所は特定できませんが、現場写真は校内で回されているものだと思います。顔写真は中学校の卒業アルバムのようにです。学園外の同級生じゃないかと思います」

授業が再開されて以降、生徒会のメンバーたちは独自に状況把握に走り回っていたのだ。その報告をまとめて聞いた夏目は、しばらく天井を見上げて考えを巡らせていた。

ぱんっ、と夏目が手を打った。全員の顔を均等に見渡す。

「対応は三つね。」

一つ、生徒会独自の相談室を作る。

一つ、校内の巡回を行う。

一つ、噂話を集約して対策を練る。

基本的に対応は校内に限ることにするわ。メディアやネットは私たちではどうしようもないから放っておきましょう。縁田君と向井君は校内の巡回。山瀬君は噂話の収集。残りは相談室ね」

全員が頷いた。

それから、実際の運営について細かい打ち合わせが行われた。

一通りの事柄が決まると、太一が立ち上がって檄を飛ばした。

「これは学園の危機である。全力で職務を全うして欲しい。解散！」

「待って待って！」

全員が勢いよく立ち上がったところを、夏目が制した。

「縁田君、突っ走り過ぎ。まだ話があるから座って頂戴」

太一を筆頭に、全員が訝しげな表情のまま、浮かした腰を再び下ろした。

「ええと、事件現場を実際に見た人、手を挙げてくれる？」

ばらばらと、ほぼ全員の手が挙がる。しかし、希奈だけが下を向いたままだ。

「あれ、希奈先輩休んでましたっけ？」と毅瑠。

「ううん、来てたけど……」希奈の顔が見る見る蒼白になる。

それを見た夏目は、音もなく席を立った。そして、希奈の背後に回ると、優しく抱きしめた。

「大丈夫よ、希奈。……怖かったのは、あなただけじゃないわ」

希奈は一瞬意表を突かれた顔をしたが、「うん」と小さく頷いて体の力を抜いた。

しばらく、生徒会室の中の時間が止まった。やがて――

「もう平気。ありがとう、夏目」と、しっかりした声で希奈が言った。

夏目は体を離すと、生徒会室を見回した。

「さあ、今日は特別サービスよ。私に抱きしめて欲しい人は他にいない？　男子だっていいわよ」

「そ、それはセクハラ発言だ！」

太一が顔を真っ赤にしてモゴモゴ抗議し、全員が弾けるように笑った。

「じゃあ、俺、お願いしようかな……」

鼻の下を伸ばした力が腰を浮かせたが、その足を、作が力一杯踏みつけた。

「痛って！」

「馬鹿言わないの、力。後で私がやってあげるから」

「なら、作には私がやってあげるわね」

そう言った夏目は、作の頭を抱いた。

「わ、ちょ、夏目！　私、そんな趣味ないって」

作の「そんな趣味」発言に、男子全員が顔を赤らめる。

「私にあるって言ったら？」

「ないないない」

作は大暴れをして夏目を振り払った。

「あら。つれないわね」夏目は肩を竦めて見せると、隣に座る力の肩に手を乗せた。「力もよろしくね」

「ああ、任せてくれ」

ぱんぱん、と夏目が手を叩く。

「さて、縁田君。仕切り直してくれる？」

「あ――、というわけで、まず自分たちが潰れないようにな。では、

解散」

生徒会のメンバーといえども一生徒なのだ。使命感だけでがんばっている、どこかに無理が出てしまう——夏目は、そのことをよく心得ていた。

「特別サービスはしばらく有効よ」

生徒会室を出て行くメンバーの背中を、夏目の声が追いかけた。

銅像生け贄事件 2

その日の昼休み、毅瑠はげんなりした顔で校内を歩いていた。

校内の巡回は、即日始めることになった。その開始にあたって太一が毅瑠に手渡したものの――それは、サッカー部が練習に使うビブスだった。

「授業中に作ったんだ」

サッカー部所属で、体が大きく、よく日に焼けた太一が、照れたように五分刈りの頭をかいた。ビブスには『生徒会巡回中 話しかけてください』と大書したゼッケンが、がちりと縫いつけられていた。

（いい笑いものだ……）

まさか嫌だとは言えず、毅瑠は渋々そのビブスを受け取ったのだった。

毅瑠と太一は二手に分かれ、太一は一般教室棟の一階から、毅瑠は五階から巡回を開始した。一般教室棟は、二階に三年生、三階に二年生、四階に一年生の各教室が並んでいる。一階には昇降口と家庭科実習室、五階にはコンピュータ実習室といくつかの空き教室があった。新学期が始まったばかりのこの時期、昼休みにコンピュータ実習室を使っている生徒はおらず、五階はしんとしていた。

保健室や相談室を使用してくれる生徒は、まだ話をする余地があるだけ良い。心配されているのは、誰にも相談をせず、後追い自殺を企てようとする生徒が現れることだった。高校生は感受性が強い時期だけに、同級生の自殺に感化されないとも限らない。毅瑠達の巡回は、そういう兆候を示す生徒がいなかを監視する意味も含まれている。そういう意味では、今毅瑠がいる五階や、一つ下の四階は要注意だった。

「ご苦勞様」

下の階から上がってきた女生徒が、毅瑠に声をかけてきた。上履

きの色から二年生と知れるが、毅瑠はその顔を知らなかった。

「ありがとう。実習室に用？」

女生徒は、痩せていて、どこか儚げな雰囲気を漂わせていた。肩甲骨辺りで切り揃えられた髪も、あまり艶がない。後追い自殺のことが頭を掠め、毅瑠は僅かに緊張した。

「お手洗いよ」

悪戯っぽい微笑みで女生徒が答えた。その眼が意外に強い光を湛えている。毅瑠は少し決まりが悪くなり、足早にその場を離れた。

五階は問題なしと判断して、毅瑠は下の階へ下りることにした。四階の一年生達にビブスを見られるのかと思うと少し気が重い。しかし、そんなことを言っている場合ではなかった。

「！」

下り階段に足をかけたとき、階段の踊り場に一人の女生徒が立っていることに毅瑠は気付いた。

窓を背にして立つその姿は、すらりとして美しく、毅瑠は見とれた。正面から見るとボブカット風の髪型。しかし、腰の辺りでは、左右二本の三つ編みが揺れている。上履きの色は一年生のものだ。さっきの女生徒のことであって、この子もお手洗いだろうと毅瑠は思った。下の階は混んでいるのだろう。

三つ編みの女生徒が、まっすぐ階段を上がってくる。毅瑠は階段の中程に立ち尽くしていた。

「役立たず……」

すれ違いざまに彼女が発した声は、非常に小さかったが、毅瑠の耳にはしっかりと届いた。

事件のことで、知らず気持ちが昂^{たか}ぶっていたのかもしれない。ビブスをつけての巡回で、神経質になっていたのかもしれない。見とれていた気恥ずかしさも手伝ったのかもしれない。とにかく——毅瑠はかっとなった。

「ちょっと待って！」

毅瑠は、右側をすれ違った女生徒の肩を掴もうとした。しかし、

伸ばした手は空を切り、それでも食い下がった結果、右の三つ編みを掴んでしまった。

「な……！」

いきなり三つ編みを引っ張られた女生徒は、驚きの声をあげて振り向いた。それが、二人のバランスを崩す結果となった。毅瑠と女生徒は、もんどり打って踊り場まで転げ落ちた。

「痛——」

毅瑠が頭を振りながら立ち上がると、先に立ち上がっていた女生徒が、下を向いて肩を震わせていた。泣かせてしまったか、と思いき、毅瑠は焦った。

「ごめん、悪かったよ。怪我は……」

ぱんつ、と乾いた音が踊り場に響いた。

毅瑠は視界がぶれ、一瞬、何が起きたのかわからなかった。じわじわと押し寄せた頬の痛みで事態を認識し、女生徒へと向き直る。目の前の顔は、憤怒に彩られていた。

「髪を掴むなんて……」

「え？」

女生徒の声は淡々としていた。それがかえって、彼女の怒りの深さを物語っているように感じられた。一発叩いただけでは収まらないのか、彼女の右手が再度振り上げられた。そのとき――

「何をしているの？」

階段の上からの声が割って入った。声の主は、さっき五階で会った女生徒だった。

三つ編みの一年生は、階段を下りてくる二年生を見ると身を翻^{ひるがえ}した。一瞬で毅瑠に興味を失ったような顔になり、階下へと駆け下りていく。

「すごい音がしたけど、何かあったの？」

毅瑠は、右手の甲に擦り傷ができていた。落ちたとき、三つ編みの女生徒の下になったため、腰も少し打ったようだ。しかし、それ以上に、張られた左頬が痛む――

「ちょっとぶつかって、二人して転げ落ちた。あの子、怒らせちゃったかな……」

女生徒が、まじまじと毅瑠を見ていた。

考えてみれば、彼女の言った「すごい音」というのは、転げ落ちた音のことだったのか？ それとも、頬を張られた音のことだったのか？ ——毅瑠は、までも決まりが悪くなった。

「向井君だよね？」

「うん」

「……」

「……」

「やっぱり、私のこと覚えていないのね？」

「さっき、五階で会ったこと……じゃないよね？」

「今年と同じクラスじゃない」

「え……？」

「そんな困った顔しないで」彼女はくすくすと笑い出した。「一年生のときは休みがちで印象が薄かったし、向井君とはクラスも違ってたんだから」

始業式の日には事件があり、授業が始まってからも、休み時間ともなれば生徒会の用事で奔走していた毅瑠は、自分のクラスメイト——二年E組全員の顔と名前を覚えている自信がなかった。言われてみれば、窓際の席に座っていた女生徒のような気がしないでもない——しかし、名前は思い出せなかった。

「正子よ。佐藤正子^{さとうまほろ}。ありがちな名前だし、印象薄いのよね」

なんと答えたものやら、毅瑠は言葉を探して途方に暮れた。

「あ、ごめん。お仕事だったわね」正子はビブスを指さした。

「格好悪いよな、これ」

「大事なものは格好じゃないんじゃない？ がんばってね」

そう言うと、正子は笑いながら階段を下りていった。痩せて儂^{はかな}げな外見とは裏腹に、悪戯^{いたずら}っぽくはきはきとした言動が、毅瑠には妙にアンバランスに感じられた。

「……？」

自分も階段を下りようとして、穀瑠は足下に落ちているものに気付いた。

（眼鏡……だよな？）

それは、小説の表紙で、かの怪盗アルセーヌ・ルパンがシルクハットとセットでかけているような、時代がかったデザインの片眼鏡かためがねだった。

銅像生け贄事件 3

事件の第二幕は、その日の放課後に幕を上げた。

下校しようとしていた数人の生徒たちが、立ち入りが禁止されているはずの屋上に、人の姿を認めたのだ。しかも、それが男子生徒で、柵から身を乗り出していたのだから、校内は蜂の巣をつついたような大騒ぎとなった。

校舎一階には、万が一に備えて、走り高跳びなどで使うマットが数枚用意されていた。五階からの落下に対してどれほどの効果があるのかは不明だったが、可能な限りの備えはしておくべきだ、と生徒会が主張した結果だった。

騒ぎを聞きつけて中庭に飛び出してきた教員たちは、慌ててマットを引っ張り出した。それが男子生徒の真下に置かれたのと、彼が屋上から落ちたのがほぼ同時だった。

現場を見ていた誰もが、挽田香のときの再現を確信した——また人が落ちた——その恐怖に、誰もが凍り付く——

ぼすん！ という鈍い音がして、マットの周りに砂埃が舞った。

男子生徒は、ちょうどマットの真ん中に落下した。

まず、恐る恐る教員が近付いた。男子生徒は気を失っていたが、しかし、目立った外傷は見あたらない。息もあるようだった。

「生きてる！ 救急車を呼べ！」

その声に弾かれて、わっ、と中庭中の人動き出した。生徒たちは胸を撫で下ろし、教員たちは走り回る。しかし——男子生徒が落ちた場所が例の銅像のすぐ近くだったことを、このときは誰も気にする余裕はなかった。

その騒ぎが始まったとき、穀溜は一般教室棟の三階にいた。数人の生徒に囲まれて話をしているところで、携帯電話が鳴った。

「向井、屋上だ！」 太一からだった。

穀溜は弾かれたように駆けだした。五階まで階段を駆け上がった

ところで、男子生徒が屋上から落ちた——しかし、そのときの毅瑠には、それはわからなかった。

一般教室棟には北と南に階段があり、屋上に上がれるのは北の階段だけだった。南の階段を上がってきた毅瑠は、五階の廊下を全力で走った。目指す北階段が目に入ったとき——屋上から駆け下りてくる人影があった。その人物は毅瑠には気付かず、下の階へと下りていく——

（あれは……）

たなびく二本の三つ編みが目に焼き付いた。昼休みに会った一年生の女生徒——

しかし、今は屋上へと急ぐときだった。毅瑠は迷わず、階段を駆け上がった。

屋上への扉は開いていた。

屋上に出た毅瑠は周囲を見渡した。誰もいない。恐る恐る中庭を覗き込むと——そこは大騒ぎになっていた。

マットが敷かれ、男子生徒がその上に倒れている。教員たちが走り回り、生徒たちが遠巻きに眺めている。そして——無情に起立する、ブルーシートに包まれた銅像。

やがて、遠くから救急車のサイレンが聞こえてきた。

「くそっ」

こういう事態を防ぐための巡回だったはずなのだ。毅瑠は、両の拳を、何度も何度も柵に打ちつけた。いくらマットに落ちたとはいえ、この高さからでは到底助かるとは思えない——

「向井！」

屋上に太一が飛び出してきた。教員たちがそれに続く。全員顔面蒼白だった。

それから、手分けをして辺りを隈無く探したが、遺書の類は発見されなかった。

銅像生け贄事件 4

「とりあえず、これを飲んで落ち着いて」

希奈が差し出した紙コップは、いれ立てのミルクティーで満たされていた。

場所は視聴覚室。今は、生徒会の〈相談室〉として使用されている。

時刻は午後七時近くなっていた。一般の生徒の姿は既になく、夏目を除いた生徒会のメンバーが揃っていた。

「縁田君もそんなに落ち込まないで」

巡回要員である毅瑠と太一の落ち込みようは、大変なものだった。「二人が責任を感じることはないわよ」さっきから希奈が、なんとか二人を元気づけようとしてくれていた。

自分たちなら防ぐことができた——いや、防がなければならなかった——そう考えるのは思い上がりだろうか。六百人からいる全校生徒に、すべて目を光らせることなどではしない。それはわかっている——わかつているのだが、可能性を想定してただけに、毅瑠は悔やまれて仕方がなかった。

「クッキーもあるよ。疲れたときは糖分が効くわ」そう言ったのは作だった。

夏目の提案で、〈相談室〉には紅茶とクッキーが用意されていた。少しでも生徒たちにリラックスしてもらおうとの配慮で、学園側もそれを認めた。その甲斐あって、昼間はかなりの生徒がここを訪れたようだった。

ミルクティーを一口飲んで、毅瑠は誰にもなく呟いた。

「屋上の鍵は確にかかっていた」

昼休みに巡回をしたとき、屋上への扉が施錠されていることは間違いない確認した。しかし、さっき屋上に出たとき、無理にこじ開けた様子などなかった。

「先生方が見廻りをしたときに、閉め忘れたってことはないか？」と力。

しかし、それはありそうになかった。殊更、屋上に注意が払われているのだ。閉め忘れるなど論外だ。

「あの男の子が開けたのかしら」希奈が首を傾げる。

屋上の鍵は全部で四つ。守衛室、事務室、職員室、用務員室にそれぞれ保管されているはずだった。

「俺、鍵が全部あるかどうか確認してきます」

居ても立ってもいられなくなった毅瑠は、視聴覚室を飛び出した。「あら、向井君。どうしたの？」

飛び出したところで、毅瑠は夏目と鉢合わせた。簡単に鍵のことを説明し、夏目の脇をすり抜ける。しかし、その首根っこを夏目が抑えた。

「待ちなさい」

「なんでですか？」毅瑠が食ってかかる。

「鍵なら先生方が確認したわ。用務員室にあった鍵が、行方不明になっているそうよ。ちなみに、落ちた彼は持っていなかったわ」

毅瑠は呆然と立ち尽くした。

「彼、命に別状はないそうよ」

「え？」

「それが気になっていたんでしょ？　今、病院から連絡があったのよ。話すから中に入りなさい」

夏目が優しく言った。

「特別サービス、してあげようか？」

「いえ、大丈夫です」

夏目は頷くと、視聴覚室へと入った。毅瑠も大人しくそれに続いた。

銅像生け贄事件 5

落ちたのは、一年B組の松広孝司まつひろたかしという生徒だった。

救急車で運ばれた孝司は、病院で目を覚ました。徹底的に精密検査が行われたが、結果は良好だった。なんと、入院の必要すらないくらいだったが、大事を取って一晩だけ入院をして様子を見ることになった。左腕前腕さわんぜんとうこつ腕橈骨折、打撲数カ所。診察をした医師は、付き添った教員から経緯を聞き絶句した。普通なら、その程度の怪我で済むような状況ではないのだ。

そして、本人は屋上から落ちたことを覚えていなかった。医師はショックによる一時的な記憶喪失と診断した。

「掃除当番で、ゴミを分別して捨てに行ったところまでは覚えています。でも、それ以降はよくわかりません。気が付いたら病院でした」そう、孝司は語ったという。

大騒ぎにはなったものの、孝司の命に別状がないこともあって、学校は翌日も通常授業が行われた。屋上への階段にはロープが何重にも張られ、鍵の交換が完了するまでは、ドアノブは針金でがちがちに固められた。

屋上の鍵が一つ行方不明になっていることについては箱口令かんこうれいが敷かれた。用務員室は常に誰かが居るわけではなく、その気になれば誰でも入ることができる。そして、孝司は鍵を持っていなかった——このことは、ある一つの恐ろしい推論を成り立たせる。

誰かが屋上へのドアを開けた。そして、松広孝司を突き落としたのではないか？

現に、屋上に孝司以外の人影を見た気がする、と言う者が何人かいた。しかし、下から屋上を見上げたとき、どれほどの範囲が見えるのか。孝司の背後に人がいたとして、はたして判別がつくものか——結局、誰かいたとする証言は信憑性を欠いたままだった。

事故の翌日、学園側は「屋上の柵が壊れて松広君は誤って落ちた」

という説明を生徒たちにした。しかし、それをそのまま信じる生徒などいるはずもなく、生徒間の噂話はますますエスカレートしていった。

銅像生け贄事件 6

松広孝司の事故の翌日。

生徒会室で、毅瑠と道生の二年生コンビが弁当を使っていた。

昨日の今日で早々に軌道修正を迫られた生徒会は、校内の巡回に部活動の三年生を中心としたボランティアを手配した。これにより、毅瑠と太一の負担が大幅に軽減された。

一方で、道生は精力的に噂話を収集していた。

「全体的に、随分と下火になってきてたんだけどなあ……」

道生が呟く。昨日の孝司の一件で、噂話が再燃してきているようだ。

「なんだか、噂を補強するみたいになっちゃったからなあ、昨日の事故」と毅瑠。

「ああ。挽田さんも松広君も、何者かに突き落とされたって、そんな噂が飛び交っているよ」

「以前も銅像絡みで自殺した生徒がいたって話、あれはどうなんだろう？」

「デマだったよ。十年ぐらい前に、保健室でリストカットした生徒がいたというのが真相で、銅像の前ではなかった。しかも、その生徒は死んでいない」

「でも、学校での自殺というのは正しかったんだな」

「……まあね。もっとも、噂に根拠を求める方がどうかしてるのかもしれない。『学園を恨んでいた』『何者かに突き落とされた』『柵の外から引っ張られる』『メールを送らなければ死ぬ』……どれも、ありがちな噂だろ？『遺体の一部が見つかっていない』というのは、あれだけの惨状じゃあ……それも仕方ないだろう」

挽田香の自殺現場を思い出し、二人は食事の手が止まった。

「で？ 生徒会としての見解はどうする？」

道生はしばらく考えてから答えた。

「無理に否定するより、屋上に出なければ大丈夫、という話に誘導するのが妥当な線かな。加えて、学園が銅像のお祓いでもしてくれればわかりやすくていいかもしれない」

上手くいくかどうかはともかく、生徒会としては、そういう方向で対応していくしかないだろう、と毅瑠も思った。孝司が落ちた理由が、実は未だにはっきりしていない――はっきりしていないが、本人が自殺ではないと言い張る以上、生徒会もそれを信じる他ないとすれば、彼は屋上に行ったが故に落ちた――行かなければ落ちなかった、と生徒たちを誘導することに矛盾は生じない。

「あれ、そういえば幽霊の話は？」

毅瑠の問いに、道生は眉をひそめた。

「その話だけは、ちょっと困ったことになっているんだ」
「？」

「どうもその話、特定の生徒のことを指している可能性が高い。屋上周辺や、銅像近辺でその生徒を見かけて、それが幽霊話と重なってしまったようなんだ」

「でも、顔の右半分潰れているって……」

「その生徒っていうのは、一年F組の神坂八千穂^{かみさかやちほ}。彼女、腰まである髪を三つ編みにしているんだが、左側一本だけで、右はないんだよ」

「右がない？」

「普通の二本の三つ編みを、右だけ根本から切ってしまった様を想像すれば間違いない。入学したときからそんな髪型だったらしい。もっとも、まだ数日だけだね」

「詳しいな」

「彼女、背が高くて、スタイルも良くて、おまけに美人なんだ。たった数日でも、一年生の間では話題で持ちきりだ。事件の噂に混じって、いろいろと聞こえてきたよ」

「三つ編みが一本だけの理由とかか？」

「ああ。聞きたいか？」

「いや、いいよ」

どうせ、ろくな噂ではないだろう。

穀瑠は、昨日会った三つ編みの一年生のことを思い出していた。彼女はちゃんと左右の三つ編みが揃っていた。なんだかわけもわからず殴られ、咎められたが、不思議と、もう一度話してみたいと思えた。

「あ！」

穀瑠は声をあげた。すっかり忘れていた。

「どうした？」

「これ」

穀瑠がポケットから引っ張り出したのは、時代がかったデザイン
の片眼鏡だった。三つ編みの一年生に会った直後に拾った物だ。

「落とし物。昨日の騒ぎですっかり忘れてた」

「随分と年代物だな」

道生はそれを手に取ると、矯めつ眇めつした。しかし、それほど
興味が湧かなかったらしく、早々に穀瑠に返してよこした。

「事務室前の落とし物箱にでも入れておいたらいい」

心当たりはあるんだ——と穀瑠は心中で答えた。恐らく、あの三
つ編みの女生徒の物だろう。後で、校内巡回のついでに彼女を探そ
うと思う。そして返してやろう——穀瑠は少し心が浮き立つのを感じた。

よく見れば、その片眼鏡は、ガラスが入っているだけの伊達眼鏡
のようだった。真円を描くフレームと、いわゆる鼻当ての部分の金
属が微妙に違う。鼻当ては後から付けたもののようだ。フレームに
には小さな輪が持ち手のように付いている。紐か鎖を付けるところ
だろうが、今は何も付いていない。なんとなく——穀瑠はそれをか
けてみた。鼻当てはレンズの左側にあり、眼鏡は右目にかけること
になる。ガラスの曇りのせいだろうか、眼鏡越しの世界はぼんやり
としていた。

「失礼します」と声がかかって、一人の男子生徒が生徒会室へと入

ってきた。左腕をギブスで固定し、首から釣っている。

「あれ？ 君は確か……」道生が立ち上がった。「松広孝司君だね。今日退院だって聞いていたけれど、大丈夫なの？」

「はい。病院から立ち寄りしました。先生方と生徒会の人に挨拶しろって、母が言うので」

孝司の背後で、母親と思しき女性が深々と頭を下げた。

「先生に聞いたんですけど、マットを用意するように進言してくれたのは生徒会だって」

「ああ、それは生徒会長だよ。今は〈相談室〉にいるはず……」

——道生と孝司の会話が続いていた。

しかし、毅瑠は金縛りにあったように動けなくなっていた。

(……なんだ？ これは……)

毅瑠は片眼鏡をかけたまま、入ってきた孝司を目にした。そして——飛び込んだできた光景が理解できず——自分の目を疑った。

——孝司の体のあちこちから、淡く光る紐か糸のようなものが飛び出していた。それはまるで、酷く糸のほつれたぬいぐるみのような有様だ。——向かい合って話す道生も、背後に立つ孝司の母親にも、そんな糸は見えない。孝司だけが——体中から何かをはみ出させて——何かを——それは、とても不気味な眺めだった——

「毅瑠」

道生に声をかけられて、毅瑠は我に帰った。

「松広君を生徒会室の戸時会長のところに案内するの、頼んでもいいか？ 俺はここで作業を続けなきゃならないんだけど」

「……わかった」毅瑠は頷くと立ち上がった。

「お前、それ外した方がいいよ」

「え？」

道生に指摘されて、毅瑠は慌てて片眼鏡を外した。

それで、孝司の体からはみ出しているものは見えなくなった。

銅像生け贄事件 7

孝司とその母親を夏目に引き合わせると、毅瑠は一般教室棟へと急いだ。

ボランティア全員分のビブスが用意できないため、巡回するときには生徒会の腕章をつけることになった。太一は残念がったが、毅瑠はありがたく腕章に変更した。その腕章を腕に巻くのもどかしく、四階を目指す。――目的は、あの三つ編みの一年生だ。

一般教室棟は、南から北へ、A組からF組まで順番に教室が並んでいる。特別教室棟と一般教室棟を繋ぐ渡り廊下は、B組とC組の間に位置しているので、毅瑠はA組から探すことにした。

昼休みの教室では、生徒たちが思い思いに過ごしている。一年生に混じって、生徒会の腕章をつけた巡回ボランティアの三年生達が散見される。彼らは巡回すると同時に、部活動の勧誘も行っている。昼休みに教室内で部活動への勧誘することは禁止されているのだが――かつてそれがエスカレートし過ぎたためだと毅瑠は聞いている――今回のボランティアには、それを大目に見るという条件が付けられていた。新入生も、熱心に上級生の話に耳を傾けているようだった。

腕章のせいもあり、一年生が次々と挨拶をしってくる。それに答えながら、毅瑠は順番に教室を覗いていた。

昼休みなのだから、必ずしも全員が教室にいるわけではない。あの女生徒だって、どこか他の場所で昼食を取っているかもしれない。しかし、毅瑠は構わず教室を見て回った。

生徒会室には、写真入りの新入生名簿がある。認められた自治権の大きさに比例して、多くの情報が生徒会には集まっているのだ。しかし、毅瑠はそれを見ようとは思わなかった。これは、あくまでも個人的な用事だからだ。

一年D組を過ぎ、一年E組を覗く。そこにもいなかった。三つ編

みをしている女生徒自体が少ない。

最後の一年F組に向かいながら、毅瑠は、道生が話していた〈神坂〉という女生徒が、一年F組だったことを思い出した。しかし、今はそんなことはどうでも良かった。

さっき見えたおぞましい世界——何かがほつれた孝司の体——あれは、片眼鏡のせいだと思えない。なら、その持ち主であろう彼女は——何かを知っているはずだ。それを——訊かなければならない。

道生と話していたときの浮き立つような気持ちは、どこかへ消えてしまっていた。

はたして、一年F組の教室にあの女生徒はいた。机でひとり、文庫本を広げている。

毅瑠は、教室の入り口付近で、手近な女生徒に声をかけた。

「ちよつといいかな。あの窓際で文庫を読んでいる子、呼んでくれないか？」

声をかけられた女生徒は、毅瑠の腕章を見てびっくりしたような顔をした。

「落とし物を届けに来ただけだよ」

「そうですか。ちよつと待っていてください」

女生徒は目に見えて安堵の表情を浮かべると、窓際へと向かった。我ながら姑息だな、と毅瑠は思う。これだけ巡回の上級生がいるのだ。直に彼女の席まで行っても、何の問題もなかっただろう。頼まれた女生徒も、何の呼び出しと勘違いしたのか——

毅瑠は呼びに行ってくれた女生徒を目で追った。恐らく呼びかけるであろう、三つ編みの彼女の名前をしっかりと聞こうと耳を澄ませる。

そして、毅瑠の耳に届いたのは、予想だにしていなかった名前だった。

かみさか

「神坂さん。生徒会の人^{かみさか}が落とし物を届けに来たって」

（神坂？）

不審げに、神坂と呼ばれた女生徒は顔を上げた。文庫本を閉じると、ゆっくりと立ち上がる。用件を伝えてくれたクラスメイトに、礼の一言もない。

穀瑠は、ゆっくりと近付いてくる彼女から目が離せなかった。

間違いなく、昨日階段ですれ違い、一緒に転げ落ちたあの一年生だ。すらりとした長身。高校生離れして大人っぽい雰囲気。切れ長の目と、すっと通った鼻筋。無表情な口元。正面から見るとボブカット風の髪。その背には、腰の辺りまでの三つ編みが揺れている――「何？」

短い必要最低限の言葉が、何の感情も含まず投げつけられた。

穀瑠は――唾を飲み込んだ。

彼女の三つ編みは、左一本しかなかった。

銅像生け贄事件 8

（放課後の体育館裏に呼び出すなんて、我ながら芸がないな……）
体育館の壁に寄りかかって、毅瑠は思った。手にはあの片眼鏡が握られている。

一年F組を訪ねた時点で、昼休みは残り十分もなかった。少々後ろめたく思いながらも、毅瑠は、放課後体育館裏にくるように彼女——かみさかやちほ神坂八千穂に言った。

「何故？」

「あの片眼鏡、君の物だろ？」

「……」

毅瑠はそれ以上は言わなかった。片眼鏡をポケットから出しもしなかった。

しばしの沈黙の後、八千穂は小さく頷くと、自分の席へと戻っていった。その後ろ姿に——やはり、三つ編みは左一本しかなかった。昨日は確かに左右二本あった。なにしろ、右の三つ編みを毅瑠が引っ張ってしまったのだから、間違いようがない。しかし、道生の話では、入学当初から一本だったということだった——それを信じるならば、毅瑠と会って以降に切った、ということもないはずだ。

さらには、昨日の放課後、松広孝司の落下騒ぎの直後に、屋上からの階段を駆け下りる二本の三つ編みを見た——あれも、彼女ではなかったか？

毅瑠は手の中の片眼鏡を眺めた。孝司を見て以降、これをかけてはいない。何が見えてしまうのか、それがわからずに怖い。

「向井君？」

物思いに耽っていた毅瑠は、ふいに声をかけられて、思わず片眼鏡を取り落とした。

毅瑠の狼狽ぶりに逆に驚いているのは、正子だった。

「何しているの？ こんなところで」

正子は、分別したごみの袋を抱えて小首を傾げている。

「佐藤さんこそ、どうしたの？」

「今週は掃除当番。私、ごみ係なのよ」

見ればわかることだった。しかも、毅瑠と正子は同じクラスだ。

微妙に気まずい空気が流れた。

「ええと……あ、何これ？」正子が毅瑠の足下に落ちている片眼鏡を拾い上げた。「めがね？……かな」

屈託なく、正子はそれを右目にかけた。毅瑠は唾を飲み込んだ。

「どう？ 似合う？」

「似合わない」

「……」

「……」

ぶつと正子が吹き出し、片眼鏡を返してよこした。

「変な向井君」

「佐藤さん。これかけて……何か変な物が見えなかった？」

「変な物？ 変な向井君なら見えたわ」

「なんていうか、世界がぼやけて見えるっていうか……」

「何を言っているの？」

コスプレでもするのか、と訊く正子に答えつつ、毅瑠は首を傾げた。昼休みに見たあれは気のせいだったのだろうか。

毅瑠は片眼鏡を右目にかけた。

そして、正子を見た。そこには――

色取り取りの糸がはみ出し、それらが醜く絡み合い、暗く不吉な色を纏った――見るに堪えない正子の姿があった。

毅瑠の背を冷たい汗が伝った。血の気が引き、気が遠くなる。呼吸が速く浅くなりあえぐ――

「向井君？ どうかしたの？」

正子がそう言ったとき、一人の女生徒が現れた。――神坂八千穂だった。

八千穂は正子を一瞥すると、毅瑠に近付いた。そして、迷わず右

手を振り上げる――

ぱんっ、と乾いた音が体育館裏に響いた。

叩かれた勢いで片眼鏡が飛び、毅瑠は我に帰った。

八千穂が正子を睨み付ける。

「あ、ごめんなさい。そうじゃないのよ」何を誤解したのか、正子は顔を赤らめて首を振った。「私と向井君はなんでもないの。たまたまここで会っただけ。誤解しないでね。……じゃあ、ごゆっくり」

正子はそう捲まぐし立てると、慌てて走り去った。

毅瑠は、体育館の壁に背を預けて息を整えた。

地面に落ちた片眼鏡を八千穂が拾い上げる。

「それ、君のだろ？」

「見えたの？」

「え？」

「あの女の、つぎはぎだらけの〈魂糸〉たまいと、見えたの？」

毅瑠は先ほどの光景を思い出して震えた。

「いったい何だったんだ……あれ」

「あれは〈魂糸〉。たましいのいと」

「たましい？」

「そう。あの女は、人の命を自分の命に継ぎ足している」

「何を言って……」

「昨日の事故は、あの女が犯人」

場違いに爽やかな春の風が吹き抜け、八千穂の一本だけの三つ編みが揺れた。

銅像生け贄事件 9

「どうぞ」

「あ、お構いなく」

毅瑠の目の前に、コーヒーカップとケーキが置かれた。

「ごゆっくり」

上品な声でそう言い、和服の女性が部屋から出て行く。彼女は神坂八千穂の母親だ。

ここは、八千穂の自室だった。

体育館の裏で、八千穂は毅瑠を自宅へと誘った。話が長くなるから、と。

昨日今日初めて会った女の子の部屋に上がるなんて、と普段の毅瑠なら気を回すところだが、そんな余裕はまったくなかった。八千穂も拘こたわっている様子はない。

学校から歩くこと三十分、着いたのは『神坂神社』という神社だった。八千穂は、社の裏手にある自宅に毅瑠を招き入れた。家は純和風。八千穂の部屋も障子張りの和室だった。

小さなテーブルを挟んで向かい合い、二人でコーヒーを啜すする。当然日本茶が出てくるだろうと勝手に想像していた毅瑠は、コーヒーのもてなしが意外だった。

「コーヒー……好きなの？」

八千穂がマグカップを両手で包みながら頷く。学校にいるときよりも、幾分表情が柔らかいように、毅瑠には感じられた。

その後、一向に話が始まらず、毅瑠が痺れを切らした。

「ちゃんと自己紹介をしていなかったよな。俺は向井毅瑠。二年E組。生徒会書記もやっている」

「むかい……」

「君は、神坂八千穂さんで良いんだよね？」

自宅にまで上がり込んでおいて、今更自己紹介もないもんだよな、

と毅瑠はひとり苦笑した。八千穂はというと、目だけで天井を見上げて何かを考えている。

「むかいてどんな字？」

「方向の向に、井戸の井だ」

「そう」

会話が途切れた。毅瑠は辛抱強く待つことにした。長い話になると言って誘ったのは八千穂なのだから。

「これは〈魂見鏡〉^{たまみきょう}という」八千穂が例の片眼鏡をテーブル上に置いた。「能力のある人間が使うと、〈魂糸〉^{たまいと}を直に見ることができる」

「さっきも言っていたね。〈魂糸〉って何？」

「命」

「いのち？」

「命は、糸のように体中に張り巡らされた力」

八千穂の言葉は、核心に絞られた必要最低限の言葉のみで構成されていた。できるだけわかりやすく、という配慮は欠片もない。しかし、話すこと自体が億劫なわけではなさそうだった。毅瑠は、わからないところを何度も聞き返し、できる限り、彼女の言わんとするところを理解しようとした。

彼女の説明は以下のようなものだった。

人間——他の生物も同様——が生きているのは、体中に〈命〉が満ちているからである。〈命〉とは、細胞と細胞、組織と組織を繋いで、まとめて、動かしている力である。それは細い糸状で、ビーズ細工の糸のように体中の細胞や組織を貫いて、切れ目のない〈環〉^わになっている。それは〈魂糸〉と呼ばれている。〈魂糸〉の力は、一個の人間の中で回り続け、個人を個人たらしめ続ける。そして、徐々に消耗し、やがて死に至る——

言葉が混同されやすいが、〈魂糸〉はあくまでも生命力を指す言葉らしい。所謂〈魂〉^{いゝめ}——心などを含む概念が示すものは、〈魂の要〉^{かなめ}というもので、それは〈魂糸〉が編み上げた核のようなものら

しい。

本来切れ目なく〈環〉になっているはずの〈魂糸〉だが、何かの拍子に切れることもあるらしい。切れても、普通ならすぐ復元する。しかし、それが体の外にはみ出してしまうと、もう〈環〉に復元することができなくなってしまう。はみ出したところから〈魂糸〉はすり切れてしまい、寿命が大幅に減ってしまう――

「俺が見たのは、はみ出した命ってことか？」

「さっきからそう言っている」

穀溜は混乱した。なんとも――突拍子もない話――しかし、嘘だと、一概に切って捨てることはできなかった。なにしろ、その眼で見えてしまっているのだから。

さらに言うと、〈命〉とは如何なるものか――という説明を、穀溜は生まれて初めて聞いた。八千穂の話は、現代科学との矛盾を何一つ抱えていないように思える。

「この眼鏡を使えるのは、能力のある人間だって、そう言ったよね」

「そう」

「なんで俺に使えたんだ？」

「私の髪に触れたから」

「え？」

八千穂が立ち上がった。

閉めきった和室の中に、微かに風が吹いたように穀溜は感じた。

八千穂の髪がざわざわと揺れている。

――異変は突然起った。

八千穂の右のうなじ辺りから、淡く輝く光の束が現れ始めた。虹色に輝くそれは見る見る長くなり、腰までの長さの三つ編みを形作る。やがて光は消え、それは本当に艶やかな黒髪となって揺れた。

「私は、ひきわり霊鬼割。〈魂糸〉を喰らう〈鬼おに〉を狩る者」

目を丸くする穀溜の前で、異変はさらに続いた。

現れた右の三つ編みが、先端から解け始めた――それはまるで、絡み合った三匹の蛇が、お互いの体を離していくようだった。そし

て、解けた三つ編みの中から、一振りの漆黒の剣が姿を現した。鰐つばのない、黒光る直刀。八千穂は右手でそれを逆手に握ると、引き抜いた。髪と同じ艶やかな黒色の剣が、凜とした気配を放出した。

「お前は、顕現していた私の髪に触れた。それは、この剣に触れたのと同じこと。それで能力が発現した」

昨日、階段で思わず掴んでしまった右の三つ編み――

そして、八千穂はさらに意外なことを言った。

「かつて、〈魂糸〉を操った一族は数多存在した。あまたお前の祖先もそういう血筋」

「血筋？」

「普通は、髪に触れた程度では能力は発現しない。素地があつたはず。むかいという名字は、恐らく〈夢飼い〉……夢を通して〈魂糸〉を操った一族の末裔だ」

「君は、この〈魂見鏡〉を使わなくても〈魂糸〉が見えるの？」

八千穂が頷く。右の三つ編みも剣も消えている。

「ただし、能力を使うときは、右の三つ編みが現れるとか？」

再び八千穂が頷く。

毅瑠は、八千穂との会話に大分慣れてきていた。八千穂は質問に対する答えを面倒がったりはしないようだ。

「〈霊鬼割〉は鬼を狩る者って言ったよね？ 鬼ってどういうこと

？ 〈魂糸〉を喰らうって……」

「自らの〈魂糸〉を使って、他人に害をなす者。それが〈鬼〉」

「〈魂糸〉を使って？」

「はみ出した〈魂糸〉は力だ」

体からはみ出した〈魂糸〉も、自らの命の一部であることに変わりはない。そのため、本人の意志で操ることが可能だという。世に言う〈超能力〉などの現象は、このはみ出した〈魂糸〉が原因らしい。そして、スプーンを曲げている程度なら問題ないが、命の力を他人の命へと伸ばそうとする者が現れることがある。命そのものである〈魂糸〉は、大抵のことは可能にするだけの力を持っている――それはもちろん、命と引き替えにという意味だが。他人の〈魂糸〉を引き千切り、自分の〈魂糸〉に結ぶこともできないはない――

「そうなった鬼は、狩って良いことになっている」

「……殺すの？」

「〈魂糸〉を環に繋ぎ直す。そうすれば、もう鬼の力は使えない」

「そうすることで、君にメリットはあるの？」

答えはなかった。否定も、肯定も。

「その、鬼の被害にあった人達の〈魂糸〉はどうするの？」

八千穂は小首を傾げた。何を言われているのかわからない、という表情だった。

「だって、君は切れた〈魂糸〉を繋ぐことができるんだろ？」
肯定。

「鬼の〈魂糸〉を繋いで、力を使えないようにするんだよね？」
肯定。

「当然、被害者の〈魂糸〉も元に繋ぐんだよね？」

否定――

「なんで？」

「なんでって？」

「〈魂糸〉が切れてはみ出してしまったら、寿命が短くなってしま
うんだろ？」

肯定。

「なら、被害者の〈魂糸〉は繋ぐべきじゃないか」
「なぜ？」

毅瑠は絶句した。この議論は、恐らく、続けても平行線で終わる
だろう。〈霊鬼割〉という存在の価値観なのか、神坂八千穂という
個人の価値観なのか、それはわからなかったが。

毅瑠は両手を肩の高さに挙げて、降参のポーズを取った。

「わかった。とりあえず君の説明を信じるよ。なにしろ、俺自身こ
の目で見ているからね。……で、本題に入りたい。事件のことだ」
体育館裏で八千穂は、昨日の事件の犯人は佐藤正子だと言った。
それについての説明が、まだ手付かずだった。

銅像生け贄事件 11

翌日の放課後、毅瑠は学校の中庭にいた。

特別教室棟を背に、銅像が見える位置に立つ。銅像には未だにブルーシートが被せられ、周囲は黄色と黒のロープで立ち入り禁止にされている。その背後には、一般教室棟――

毅瑠は〈魂見鏡〉を右目にかけた。持っていて良い、と八千穂に渡された物だった。

銅像は二年E組の真下に建っている。そして、挽田香が飛び降りたのと、松広孝司が落ちたのは、その真上――その三点を繋ぐように、一般教室棟の壁には、淡く光る何本もの痕跡を見ることができた。それは、命の糸――〈魂糸〉がそこを通った痕跡だ。

毅瑠は生唾を飲み込んだ。嫌な眺めだった。

二年E組の窓の一つから、その痕跡は屋上へと伸びていた。何本もの触手が、獲物を求めて壁をはい上がっていく様が浮かんた。そして、同じ窓から銅像へも、幾筋もの痕跡がある。あの窓辺には――佐藤正子が座っていたはずだ。

昨日、八千穂の家から帰ると、毅瑠は道生に電話をかけた。道生は一年生のとき、佐藤正子と同じクラスだったからだ。毅瑠が当時の正子の様子を訊くと、道生は訝しがりつつも答えてくれた。

「たまにしか登校してこなかったよ。始業式とか、終業式とかにはがんばって出てきてたけど……。よく進級できたなって思うよ」

それは、毅瑠が知る佐藤正子という少女とは、まるで違った。元気になったのなら良いのだ――良いのだけれど、そんなに急に元気になるものだろうか？

始業式の日、挽田香が飛び降りたのは、ちょうど正子の席の真上からだった。恐らく、正子は落ちていく香を見た。そして――思わず手を伸ばした。もちろん、窓越しに本当の手は伸ばせなかった。しかし、既に環が切れていた正子の〈魂糸〉が差し出された――そ

して、あの惨劇で急激に肉体が四散し、中に浮いた香の命を、本来ならばそこで消えてしまうはずの〈魂糸〉の塊を、正子は自らに取り込んだに違いない――

それが、昨日八千穂が語った推論だった。

惨劇の一週間後、現場を見た八千穂は、被害者の〈魂糸〉がどこかに引きずられた痕跡を見つけた。一週間も経てば、普通は〈魂糸〉の痕跡は残らないという。しかし、人ひとり分丸々の〈魂糸〉を引きずった結果、通常よりも長く、その跡が残ったのだという。

八千穂は、誰がそれを取り込んだのかを探していた。そして今週の月曜日、正子を見つけた。ちょうど、毅瑠と会った昼休みのことだった。

「あのとき施術していれば、あの女は鬼にならずに済んでいたかもしれない」

香の自殺は正子のせいではない。自ら投げ出された命に手を伸ばしたからといって、正子が責められるいわれはなかった。しかし――癖になるのだという。

「無理やり繋いだ命は、長くは持たない」八千穂はそう言った。「だから、まだ鬼ではないけれど、施術しようと思った」

〈施術〉とは、〈霊鬼割〉が〈魂糸〉を環に繋ぐことをいう。

あの日、人のいない五階へと正子が上がったのを見て、八千穂は施術の好機と考えた。素早くことを済ますつもりで階段を上がった。だから、右の三つ編みも顕現していたのだ。しかし、毅瑠と出会ったことで機会は失われてしまった。

そして放課後、孝司の事件が起った。

あれは、正子が孝司を屋上へと誘い出し、〈魂糸〉を使って引っ張り落としたのだろう、と八千穂は言った。そして今、その推論を裏付ける証拠を、毅瑠はその目で見ている。

「あの女はまたやる。昨日は失敗したから」

結局、正子は孝司の命を取り込むことはできなかった。他人の〈魂糸〉を取り込んでも長くは持たないと言うが、人ひとり分取り込

めば、しばらくは元気にもなるらしい。命の糸――〈魂糸〉。その仕組みを正子が理解しているということはないだろう。しかし、彼女の体は、他人の命の味を覚えてしまった――

穀瑠は、正子の屈託のない笑顔を思い出した。あの生命力に輝いていた目。あれは、挽田香の命の輝きだったのだ。痩せた体と妙にアンバランスだと、最初から感じていた。

正子の体が弱いという事実は、残念なことに違いない。しかし、それは他人の命に手を出して良い理由にはならない。

今日、屋上に、再度の警察の現場検証が入るという。正子はそれを狙うのではないか、と八千穂は言った。恐らく、二年E組の教室に放課後残り、好機を狙っているだろう。だから――八千穂もそこを狙うという。正子に施術をするという。

「命の環を繋ぐ術……か」

言葉の耳障りはよいが、それは、正子が元の病弱な体に戻るということを意味している。

穀瑠は、邪魔はするな、と言われていた。しかし、見届けないことには気が済まなかった。

「さて、どこに隠れていようかな」

そろそろ現場検証が始まる時間だった。

穀瑠は〈魂見鏡〉を外すと、中庭を後にした。

銅像生け贄事件 12

「あれ、向井君。どうしたの？」

「佐藤さんこそ、どうしたの？」

結局毅瑠は、堂々と二年E組の教室で待っていた。毅瑠が教室に入ったとき、部活動をやっているわけでもないのに、正子の鞆は机にかかっていた。そして今、図書室の本を抱えて正子が教室に飛び込んできて、毅瑠を見つけて目を丸くしたのだった。

（さあ、どうする？）

毅瑠は、自分がいることで、正子が他人の命に手をかけるのを思い止まってくれば良いと思っていた。それとも、毅瑠をなんとか追い出して、一人になろうとするだろうか。あるいは――毅瑠の命に手を伸ばすだろうか。

「そっか。生徒会の仕事ね」

毅瑠の予想に反して、正子は何の拘りもなく近付いてきた。

「まあね。生徒会室は狭いから、自分の机でかたそうかと思って」

「私はねえ、この教室が好きだから」正子は照れたように笑っている。「なんだか帰るのもったいなくて、いつも、こうやって図書室の本を読んでいるの」

正子は抱えていた本を毅瑠の前に並べて見せた。

「私ってほら、一年生のときは、あんまり学校に出てこれられなかったから……こうして教室にいられることが嬉しいの」

「道生に聞いた」

「道生って、山瀬君ね？ 生徒会副会長の。そっか、仲良いの？」

「まあね」

正子は毅瑠の前の席に腰を下ろした。

「あ、邪魔？」

「いや。そんなに急ぎの仕事でもないし」

「昨日はごめんね。あの後、彼女と仲直りできた？」

「もともとそんな仲じゃないし」

「うそ？」

「本当」

「あれ？　じゃあ、私の勘違いなの？」

正子は両の頬に手をあてて、「え——」と驚いた顔を作った。

「でも、すごく綺麗な子だったよね。一年生？」

「そうだけど。彼女に興味があるの？」

「うーん、どっちかというと、向井君に興味があるなあ」

「は？」

「うふふ。暮れなずむ教室での読書って素敵じゃない？　静かで、一人だけの世界に浸れて……でも、二人だともっと素敵ね」

話の雲行きが怪しくなってきたことを感じて、毅瑠は内心焦った。女の子と二人きりだ、と妙に意識されて頬が熱を帯びる。昨日——八千穂の部屋ではそんなことはなかったのに。

今のこの状況を、どこかで八千穂が伺っているはずだ。D組かF組か、どちらか隣の教室だろうか？　それとも、すぐそのドアの外か——

「佐藤さん。今、屋上で警察が現場検証をやっているのを知ってる？」

「現場検証？　ああ、一昨日の事故ね」

「うん。一年生の男子が落ちた件。閉めたはずの屋上の鍵が開いていて……」

「それ、私」

正子が制服のポケットから鍵を一つ取り出した。

「あの日、お昼休みに向井君と会ったじゃない？　あのとき開けたの」

「……何で？」

毅瑠は自分の声が震えていることに気付いた。防げなかったと——あの日の後悔が、再び鎌首をもたげてくる。

「屋上って出たことなかったから。三年生の先輩の自殺で、もしか

したらもう出られなくなっちゃうかなあって思ってた。そうなる前に、一度出てみたかったのよ。本当は鍵をかけ直しておくつもりだったんだけど……すごい音がして、びっくりして忘れちゃった。向井君が階段から落ちて、ひっぱたかれたんだっけ？」

正子がほくそ笑む。しかし、毅瑠はまるっきり余裕がなかった。

「鍵はどうしたの？」

「用務員室からの無断借用で――す。どうせ、立ち入り禁止だし、なくてもそんなに困らないでしょう？」

「それで！」毅瑠は叫んで立ち上がった。「それで、松広君は事故にあった」

荒い息をして見下ろす毅瑠を、正子は冷めた目で見上げた。

「それ、私のせいなの？」

「え？」

「先生は事故だって言っていたけど、私知ってる。屋上の柵に異常なんてなかったわ。あの子、自分から飛び降りたんでしょ？ でもそれって、鍵を開けたっただけで、私のせいになるの？」

「彼は飛び降りたときの記憶が……」

「馬鹿じゃないの？ そんなの嘘に決まってるじゃない！ 親や先生に言いたくない理由があるだけよ」

正子は手の中の鍵を毅瑠に投げつけた。目には涙が溜まっている。
「私だって……」

そこまで言いかけて、しかし正子は押し黙ると、自分の荷物を掴んで教室を飛び出していった。

どれくらいの時間が経ったのだろうか。呆然と立ち尽くしている毅瑠に、八千穂が近付いてきた。

「何やってる？」

「その……」

八千穂は床に落ちている鍵を拾い上げた。

「どうする？ これ」

「用務員室に返さなくちゃな」

そう言いつつも、穀瑠は鍵を見つめたまま、しばらく動くことができなかった。

銅像生け贄事件 13

どこをどう通ったのか覚えていなかった。気が付くと、毅瑠は生徒会室の前に立っていた。

時刻はまだ六時前で、室内にはみんないるはずだったが、毅瑠は立ち尽くしたまま中に入ることができなかった。

「あら」

扉を開けて出てきたのは夏目だった。

「戸時会長……」

ふわっ、と空気が揺れた。暖かい体温と、弾力のある感触。毅瑠が避ける暇を与えず、夏目は毅瑠を抱きしめていた。

「酷い顔しているわよ」

その感触を楽しむ余裕も、慌てて振り払う余裕も、今の毅瑠にはなかった。ただただ抱きしめられるだけ——幼い子供のように——やがて、そっと夏目が体を離れた。

「付いていらっしやい」

促されるままに、毅瑠は歩き出していた。

夏目は毅瑠を夕方の食堂へと誘った。この時間は営業していないが、テーブルは談話スペースとして使うことができる。夏目は毅瑠を座らせると、自動販売機でカップのカフェオレを二杯買った。一杯を毅瑠の前に、もう一杯を自分の前に置く。

「少しは落ち着いた？ 向井君」

「どきどきしています」

「それは結構」

夏目は、にひひひ、と嫌らしい笑い方をした。毅瑠も釣られて苦笑した。

「今は特別サービス期間だからね」

本当にこの人は——と毅瑠は感心する。いきなり説明しろとも、相談に乗るとも言わないのだ。抱きしめて、話を聞いてくれる。そ

れが、生徒会長戸時夏目という存在だ。

しかし、想いはすぐに自分の内側へと向いた。自分はいったい、何にあれほどのショックを受けたのだろうか――と。

昨日の八千穂の話には、驚きこそすれ、それ程のショックは受けなかった。正子が犯人だと教えられたときも同様だ。〈魂糸〉が見えたときはかなり動揺したが、ショックとは違う。さらに言えば、挽田香の自殺も、松広孝司の事故も、今ほどのショックを毅瑠に与えはしなかった――

（結局、他人事だと思っていたってことか……）

涼心学園高校の生徒会は、夏目を筆頭に、歴代海千山千の人物が揃っている。学園を向こうに回して堂々と論陣を張り、政治力を駆使してきた。学校内に限ったこととはいえ、毅瑠はそれに憧れていた。

しかし――自分は、すべてをパズルかゲームのように考えてはいなかっただろうか。人ひとりを、駒のように考えてはいなかっただろうか。

だから、今回の事件も、八千穂という駒を得て、優越感に浸ってはいなかったか。〈魂糸〉というピースを知り、〈佐藤正子〉に辿り着いた。そのことで、正子をゲームのラスボス（最後の敵）と勘違いしてはいなかっただろうか。

――そうだ、と思う。八千穂の話を聞いた毅瑠は、正子のこれまでの言動が、すべて生徒会役員たる毅瑠への牽制だと、そう断じてしまっていた。自分と正子はゲーム盤を挟んで対峙しているのだと、そう決めつけてしまった。

そして、八千穂の言動がそれに拍車をかけた。

屋上で無防備でいる警察官を狙う――確かにそれは、正子にとって絶好の機会だったに違いない。しかし、それは知る者の理屈だ。これがゲームなら、きっと予想はあたっただろう。

しかし、さっき教室で正子と話をして、それらが間違いだったことを思い知らされた。ゲーム盤など存在はしない。正子が毅瑠に向

けてくれた笑顔は本物だった。

そのことが、毅瑠を狼狽させ、必要以上にショックを与えたのだった。

「戸時会長……」

「ん？」

「人間で難しいですね」

「そうですね。でも、簡単じゃつまらないでしょ？」

「……ある事件の犯人がいたとします」

「ええ」

「真犯人なのは間違いない。そして、その人は会長に好意を持っている。でも、見逃してしまうと、間違いなく再犯する……戸時会長ならどうしますか？」

「通報するわ」

「即答ですね」

「その真犯人が私に好意を持ってくれなことを、私はいつ知るの？」

毅瑠は苦笑した。さすがに話のポイントがわかっている。

「今、知ったばかりです」

「そう。でも、罪は罪。私たちは社会を形成して暮らしている。そのルールは守るべきよね。その人が私に好意を寄せてくれているなら、それは嬉しいし、誠意ある対応をしたいと思うわ。でもね、それに引きずられて、犯した罪にまで同情してはいけないと思うの。情状酌量の余地があれば、当然それは考慮するべきだけれど、情状酌量というのは、それ自体社会システムの一部なのよ。私への好意とは別の話よね」

唐突に始めた漠然とした毅瑠の例え話に、夏目は真摯に答えてくれた。

「もつとも、実際にそういう状況になったら、冷静に対応できるかどうかはわからないけれどね。きっと私、ぐっちゃぐちゃになっちゃうかも」

「まさか」

ふふふ、と悪戯っぽく夏目が笑った。

「向井君の私を見る目、なんだか危ないわよ。私を万能の超人とでも勘違いしていない？ 私だって、十七歳の女の子よ」

毅瑠は嘆息せざるをえなかった。この人が、ぐちゃぐちゃに思い悩むことなどあるのだろうか？

「もし、私がそんな状態になったら、今度は向井君の番ね」

「え？」

「人はね、自分一人では客観的になれないのよ。だから、誰かがそれを言ってあげる必要があるの」

「はい」

夏目の言葉が、素直に心に沁みってくる気がした。

「最後に先輩としてアドバイスさせてもらえばね……人は、その時々、自分が最善だと思ったことを精一杯やるしかない。私はそう思っているわ」

毅瑠は本当にそうだと思った。正子のことも、八千穂のことも、自分なりの最善を探してみよう。

方向が定まったことで、毅瑠はようやく人心地がついた。カフェオレに手を伸ばす。

「何かしら」と夏目が食堂の外を気にした。

見れば、中庭がざわついていた。何やら剣呑な雰囲気漂っている。

このとき、事態は最善とはほど遠い方向へと、転がり始めていた。

銅像生け贄事件 14

毅瑠は屋上の鍵のことをすっかり忘れていた。

鍵は八千穂の手によって用務員室に届けられた。何の工夫もなく、ただ、届けられた。当然の結果として、何故八千穂がそれを持っているのかが問題となった。八千穂は「拾った」の一点で通した。

神坂八千穂は、決して反抗的な生徒ではなかった。しかし、言葉遣いがぶっきらぼうなことで、容姿が目を引きことが相まって、一部の教員から目を付けられかけていた。新学期からのトラブル続きでぴりぴりしていた教員たちは、用務員室から数人がかりで八千穂を取り囲み、生活指導室まで連行した。そして、一時間に渡って、生活指導という名の尋問を行った。

結果的には、八千穂が嘘を付いている様子は認められず、止むなく無罪放免となったのだが、連行される彼女の姿を、部活動をしていた多くの生徒が目撃していた。

その話は瞬く間に広がり、翌日の授業が始まる頃には、事件は神坂八千穂が犯人だという噂が学園中に響き渡っていた。

午前中の授業をもどかしい思いで終えた毅瑠は、昼休みになると同時に一年F組へと走った。腕章はつけず、訪いもいれず、まっすぐ八千穂の席まで行くと、彼女の手を引いて教室を飛び出した。

人のいない場所、しかも近くで——と考えて、毅瑠は五階への階段を上がる。封鎖された屋上へと続く階段の踊り場までくると、毅瑠はようやく足を止めた。

「ごめん」

毅瑠は八千穂に深く頭を下げた。

「何で？」

「昨日の鍵のこと。もっと上手いやり方があったはずなんだ。なの

に俺、ぼーっとしていて、全然考えが回らなかった。結果、君に迷惑をかけることになってしまった」

「別にいい」

毅瑠は頭を上げた。八千穂は相変わらずの無表情だった。しかし、八千穂は表情は乏しいが、感情がないわけではない。一昨日話を試みて、毅瑠はそれを感じていた。

だから、今の無表情がかえって痛々しく感じられた。

「それよりも……」

「それよりも？」

「お弁当」

「あ……ああ、そうだな」

昼休みが始まってすぐに引っ張ってきてしまった。毅瑠と八千穂は、連れだって一年F組に引き返した。教室の少し手前で別れ、毅瑠は、八千穂が教室に入っていく様子を見守った。

「？」

八千穂の様子がおかしかった。自分の机の前で立ち尽くしている。毅瑠は一年F組の教室に一歩足を踏み入れ、刺すような視線を感じて立ち止まった。クラス中の視線が毅瑠に集中している。

八千穂の机の上には——お弁当がぶちまけられていた。白いご飯。綺麗な卵焼き。タコさんウインナー——恐らく、あの母親の手作り。毅瑠の喉元まで、誰がやったのだ、という詰問がせり上がった。しかし、生徒会役員の自分がそれをやると、噂はさらにエスカレートしやしないだろうか？

毅瑠は思考が空回りし、結局、何もすることができなかった。

銅像生け贄事件 15

しかし、お弁当の話を聞いて、夏目が動いた。

どこからどう話をねじ込んだのか、その日の六時限目に緊急の生徒集会が組まれた。

体育館に集合する生徒たちは、事件に関係したことらしいとの感触から、ざわざわと落ち着きがない。

「夏目。何も用意してないんだけど」希奈が悲鳴をあげた。

「いい。私がしゃべるだけだから」

夏目の声がいともより低かった。そして恐ろしいほど静かだ。

「まずいなあ、夏目完全にキレてるよ……」

そう言ったのは作。力は既に逃げ腰だ。

毅瑠は、夏目に話しては拙かったのか、と後悔していた。昨日の今日で精神的に浮上し切れておらず、つい夏目に甘えてしまったのだ。幽霊の噂話と八千穂の関係、屋上の鍵の件、そして弁当のこと——昼休みのうちにすべてを話してしまった。聞き終わった夏目は、無表情で生徒会室を飛び出していったのだが——

「荒れるぞ。二人とも覚悟しておけ」太一が、毅瑠と道生に耳打ちをした。

二年生の二人は、物腰が柔らかく、優しく、茶目っ気たっぷり、頼りになる夏目しか知らない。だから、これから起ることが想像できないでいた。

キーン、とマイクのスイッチが入る音がして、体育館中が静まり返った。生徒会のメンバーを除いたほぼ全員が、何が起るのか、期待を込めて舞台上を見つめている。

舞台袖から、マイクを手にした夏目が現れた。演壇の手前で立ち止まり、生徒たちを見渡す。

美人で、面倒見がよく、生徒たちに人望が厚い生徒会長——戸時夏目。彼女は軽く息を吸うと、低い声で話し始めた。

「噂話ぐらいなら、まだいい。でも、憶測で断じて、物理的な嫌がらせ？ ……あんた達、最低だ」

その言葉の冷たさに、体育館中が凍り付いた。痛いほどの静寂が体育館を満たす。

「相談室も巡回も止めるわ。死にたい人は死ねば？」

教員たちでさえ、言葉を失い立ち尽くしている。一年生の女子だろうか、しくしくと泣き出す声が聞こえる。

「それでも生徒会長か」と、誰かが声をあげた。

ガアアアン！

スイッチが入ったままのマイクが舞台上に叩き付けられた。スピーカーから飛び出した轟音に空気がびりびりと震える。――泣き声も、呼吸音さえ消えて――静寂が体育館を支配した。

――だから、最後の一言は、マイクなしでも全員の耳に届いた。

「じゃあ、あんたがやれば？」

銅像生け贄事件 16

体育館を出た夏目は、生徒会室に鍵をかけて閉じこもってしまった。

生徒会の面々は、生徒集会をほったらかしにして夏目を追ってきたが、締め出しを食らった格好になってしまった。仕方なく、〈相談室〉として使っている視聴覚室に集まっていた。

「戸時会長、大丈夫でしょうか？」

「たぶん、泣いているね」道生の質問に答えたのは作だった。

穀瑠は、昨日の夏目との会話を思い出す。

（もし、私がそんな状態になったら、今度は向井君の番ね）

穀瑠は勢いよく立ち上がり、視聴覚室を飛び出そうとした。しかし、三本の腕がそれを阻む。太一と力と道生だった。

「「「抜け駆けは許さん」」」

「馬鹿どもが……」作がこめかみを震わせて頭を抱えた。

そして希奈が諭すように言う。

「ねえ、向井君。気持ちはわかるけど、今はそつとしておいてあげて。女の子が一人で泣いているところを見られるのは、お手洗いを覗かれるのと同じよ」

その言葉に、男四人の動きが止まった。

「希奈、それは言い過ぎでしょう」と作。

「そうかしら」

「つまり、あんたはそう感じるのね？」

「作ちゃんは違うの？」

「まあ、泣いてるところなんて、力には散々見られてるし。お風呂ぐらいの感じかな」

「何の話だ！」

太一が顔を真っ赤にして突っ込んだ。

「それにしても、事件は今後どうなるんでしょう」穀瑠が独りごち

る。

「向井、お前何か知っているのか？　まるで、まだ終わっていないと言わんばかりじゃないか」太一が言う。

「そういうやあ、今回会長がキレたのだって、向井の話を聞いた後だったって？」と力。

全員の視線が、毅瑠に集中した。

「ええと、質問に答える前に訊きたいことがあります。どうなったら、事件は終わったといえるんでしょうか？」

今回の事件は、同じ場所で自殺と事故が起きた。誰もが、挽田香の自殺と、松広孝司の事故――自殺だと思っている生徒が多いが――の間に、相関関係などないのだろうと理屈ではわかっている。理屈ではわかっているのだが、でも、感情的に、生理的に納得できないのだ。

点が二つあれば線を引くことができる。過去から今へと二点を結んだ線分を見れば、大抵の人は、それが未来へも続いているだろうと想像する。だから、事件が終わったという確信など、今は誰も持ちえていないのだ。

八千穂から話を聞いた毅瑠は、事件の本当の連なりと、その終結の形を知っている。終結の形――それは八千穂による正子の施術――しかし、〈魂糸〉の真実を知らない生徒たちや、学園側や、生徒会にしてみれば、どうなったら終結だと思えるのだろうか。

「校長先生が終結宣言をしたらかしら」と希奈。

「ほとぼりが冷めたらだろ？」と太一。

「真犯人が現れて捕まったら、とか」と力。

「みんなが終わったと思ったら終わりよ」と作。

「これも、戸時会長が作った一つの終結の形では？」と道生。夏目による強引な幕引き、ということらしい。

「まさか。あれは単にキレただけよ」と作が苦笑しながら言う。

しかし、と毅瑠は思う。これで、学園中の噂は夏目に集中することになるだろう。この後何も起らなければ、事件は早々に風化する。

可能性もある。だが――

「噂をそのまま利用するってのは駄目でしょうか？」と穀留が言った。

全員が目丸くする。

「何だって？」と太一。

「今流れている噂を逆手に取るんです。銅像は呪われている、だからそれを壊す。そんな結末はどうでしょう？」

「お祓いするとか、な」と道生。

「何だっていいんじゃない？ ああ、終わったんだって思えば。そこは理屈じゃないでしょ？」希奈が言う。

「元々、学校側から生徒会への要請は、噂話をどうにかしろってことでしたよね。なら、その噂話の大半を肯定した上で、元を絶ってしまえばいいんじゃないかと思うんです」

穀留の話に、全員が「なるほど」と頷いた。そして、太一が言う。「方向性はいいだろう。しかし、さっきの俺の質問はどうした？」

「実は……今回、戸時会長を怒らせる原因になった子なんですけど――」穀留は手短に経緯を説明した。「――で、彼女神社の娘さんで、その神主さんに今回の事件について意見を聞いてみたんですよ」

半分は出任せだった。しかし、〈靈鬼割〉や〈魂糸〉のことを、ここで一から説明するわけにもいかない。

「そうしたらですね……最初の挽田さんは間違いなく自殺。松広君は、何か悪い場……みたいなものに引き寄せられたとか。だから、場所をどうにかしないと続くと……」

「事件は終わっていないか」太一が深刻な様子で考え込んだ。

「あの、信じるんですか？ この話？」

「俺は意外に信心深いんだ。向井は信じていないのか？」

「信じています」

「なら問題ないだろう。大体、今でも家を建てる時には神主を呼ぶ。ご神木は避けて道路を造ったりする。お墓の上に建てた家は悪

いことが重なるというじゃないか。今回の件がその手の類で、そっち方面に解決……じゃなくて、終結の道が開けるならいいじゃないか」

毅瑠が他のメンバーを見ると、特に気にしている者はいないようだった。

「みんな、意外とフレキシブルな思考の持ち主ですね……」

太一が、親指をぐっと立てた。

道生が、眼鏡の奥でふっと笑った。

希奈が、意外に興味深げな顔をした。

作が、満面の笑みを作った。

力が、右手でオーケーの形を作った。

「戸時があんな状態だが、なんとか事態は収拾させたい。神主さんの協力が仰げるなら、そっちは向井、お前に任せる。好きなように動け。何か変化があったら報告してくれればいい。俺たちは俺たちで、今まで通りできることをやろう」

太一が言って、ばんばん、と毅瑠の背中を叩いた。

「向井君。一つ忘れないで欲しいんだけど」希奈が柔らかい口調で付け足した。「あなた一人がすべてを負う必要はないのよ。だから手伝いが必要だったり、困ったことがあったら、遠慮なく言って頂戴。夏目が怒る原因になった、例の女の子のことも……何かあったら相談してね」

「それからさ」と今度は作。「仮にまた事件が起きてしまったとしても、それは向井君のせいではないからね。まあ、起きないに越したことはないけど」

「……はい」

毅瑠はなんだか胸が詰まってしまって、そう答えるのがやっとだった。

銅像生け贄事件 17

放課後、毅瑠は神坂神社を訪れた。

夏目の様子も気になったが、それは希奈達に任せることにした。神社の鳥居の前に立つ毅瑠の手には、ケーキ屋の箱が握られていた。

八千穂を訪ねるにあたって、毅瑠は何かお土産を持参しようと思いついた。しかし、何を持っていったら良いか皆目見当が付かなかった。そういうことについて、本来一番頼りになるであろう夏目は閉じこもったまま。毅瑠と同じ書記である希奈は、なんだか微妙にズレたアドバイスをされそうな気がした。結局、毅瑠は作に助言を求めた。

「女の子の家に手土産？」作は目を丸くした。「プロポーズでもするの？」

「違います。でも、お弁当のこともあるし……」

「別に向井君がひっくり返したわけじゃないでしょ？」

「それはそうですが……」

困る毅瑠を見て、作はくつくつ笑った。

「はいはい。わかった。安くて美味しいケーキ屋さん教えてあげるから」

そうして教えてもらったケーキ屋で、毅瑠は悩んだ末にクリームに乗ったコーヒージェリーを買った。八千穂について辛うじて知っていること——コーヒージェリーが好きらしい、という点が決め手となった。

コーヒージェリーをぶら下げながら、毅瑠は妙な気後れがしていた。前回の訪問はなんでもなかったというのに。人気のない神社の境内に足を踏み入れてからも、毅瑠は相変わらず二の足を踏んでいた。

「どちら様？」

上品な声に顔を向けると、裏手の住居から、買い物かごを下げた八千穂の母親が出てきたところだった。

「あら、この間の」

穀溜の顔を見ると、彼女は華やかに微笑んだ。

「こんにちは。向井穀溜です」

「はい、こんにちは。八千穂の母の七穂です。八千穂ね？ 帰っているわ。今呼んでくるわね」

玄関の中へ戻ろうとする七穂を、穀溜は呼び止めた。

「あの、お母さん。申し訳ありませんでした」

穀溜は深々と頭を下げた。

「あらあら、何事？」

「今日、八千穂さんのお弁当をひっくり返してしまって……」

ああ、と七穂は思い当たることがあるような顔をした。

「それである子、元気がなかったのかしら」

元気がなかった、という七穂の言葉が、穀溜の心に重くのしかかる。

「お腹がすくとね、ときめんに元気がなくなるのよ」

「これ、つまらないものですけど」

穀溜はケーキ屋の箱を差し出した。

「お弁当くらいで随分と大袈裟ね。本当にあなたがひっくり返したの？」

「はい」

七穂はじつと穀溜の目を覗き込んだ。どこまでも見透かされそうな、澄んだ瞳だった。

「……」

「……」

「わかったわ。さあ、どうぞ上がって頂戴」七穂は穀溜を玄関へと導いた。「中身は何かしら。あの子、きっと喜ぶわね」

ケーキ屋の箱を受け取って七穂が破顔する。八千穂が笑ったらこんな笑顔になるのだろうか、と穀溜はぼんやり考えた。

箱に詰められた六つのコーヒーズリーを前にして、八千穂はしばし硬直した。

「いくつ……」

「私とお父さんで一つずつ、あと、向井さんにも一つ。後はあなたが食べなさい」

穀溜は、このときの八千穂の顔を一生忘れないだろう、と思った。破顔とはいえない、控えめにその目許と口許に浮かんだ微笑み。極寒の冬に春の到来を予感させる、小さなフキノトウのような――そんなほころび。常が無表情なだけに、その小さな輝きは印象的だった。

（これは……反則だ）

八千穂はいそいそとコーヒーズリーを手にとると、スプーンで少しずつ攻め始めた。穀溜は自分の前に置かれたコーヒーズリーに手も付けず、その光景に見とれた。

「ごゆっくり」

七穂が二人分のカップを運んでくると――さすがに今日は紅茶だった――買い物に行くと告げてその場を離れた。

二人は庭に面した廊下に並んで腰掛けていた。

穀溜が案内されたとき、八千穂は裏庭にいて、竹刀で素振りをしていた。その場で七穂がケーキ屋の箱を開けたため、穀溜もそこに落ち着くことになった。神坂家は神社側に玄関があり、家の裏手に庭がある。その庭は、花壇や小さな菜園があり、神社の境内であることを忘れさせる居心地の良い空間だった。

「会長さん……」一つ目のコーヒーズリーを平らげた八千穂が口を開いた。「すごい人……」

「あれには俺も驚いたよ」

聞けば、夏目が退場した後、生徒たちは三十分も体育館に立ち続

けたらしい。教員たちも、あの場をどうしたら良いか悩んだようだ。

「それから、クラスの人達が謝った」

「お弁当のことか？」

「そう」

あの生徒集会に出た生徒の大半は、夏目が何を怒っているのかわからなかったに違いない。しかし、優等生でならしている夏目をして、あそこまで激怒させる何かがあったのだと、その答えを探す必要に迫らせたはずだ。一年F組の所行はすぐに知れ渡っただろうし、夏目の対応の早さ、そしてその規模に、誰もが驚いたに違いない。当該の一年F組にしてみれば、その驚きと恐怖はいかほどのものだったろう。

〈へいじめ〉という行為への糾弾は難しい。中途半端な注意は、それを助長しかねないからだ。だからこそ、夏目は徹底的にやった。いじめた本人たちにしてみれば些細な嫌がらせだったかもしれない。しかしそれが、あつという間に学園中を巻き込んで、あれだけの騒動へと発展した――行為とリスクの割が合わないことを、その身に体感させたのだ。もちろん、関わらなかった大半の生徒たちも、それは実感したに違いない。

夏目は『友達以上・恋人未満』を掲げていた。しかし、それは馴れ合いを意味しない。間違いは間違いだと指摘する。怒るべきところは怒らなければならないのだ。

恐怖政治だ、という指摘があるかもしれない。八千穂への嫌がらせが、見えないところへと潜る可能性も否定はできない。しかし、夏目は自分の信念を貫いて行動している。その時点で最良だと思ったことを、まっすぐ実行に移している。生徒会役員として、後輩として、穀溜はその背中をしっかりと見た。

自分もできる限りのことをしよう、と穀溜は心に誓ったのだった。「佐藤さんのこと、君のこと、事件のこと、いくつか確認したいことがある。今日はそれで来たんだ」

穀溜は本題に入ることにした。

「佐藤さんを今日まで放っておいたのは何故？」

「？」

「松広君の事故が起きたのが月曜日。今日は木曜日だ。月曜日の昼休みに機会がつぶれたのは俺のせいだ。それはわかる。でも、それ以降、君は特に急いでいないように見える。本当に佐藤さんはまたやるのか？」

「やる」

「なら、昨日の夕方、佐藤さんに術を施しても良かったんじゃないのか？」

「お前がいた」

「俺がいたから遠慮をしたと？」

「……」

「いずれ、佐藤さんは誰かを襲うはずだね？　それは、学校だとは限らない。そうだろ？」

「そう」

「なら、一刻も早く彼女をどうにかするべきじゃないのか？　このままでは、被害者が増える可能性がある。命を落とす人、〈魂糸〉がはみ出して寿命が減る人、そこまでいなくても怪我人が出るかもしれない」

毅瑠の語気が強くなった。八千穂は無表情に毅瑠を見つめていたが、やがてゆっくりと言葉を紡いだ。

「そういう風に考えたことなかった。あの女みたいに、他人の〈魂糸〉を大量に取り込んだ鬼は、覚醒すると施術にも一苦労する。覚醒した鬼は本能的にあの剣を嫌う。結果として〈霊鬼割〉も警戒される。月曜日の昼はまだ覚醒していなかった。でも、放課後の事件以降は覚醒した。こちら準備万端であたる必要があるから、タイミングを見計らっていた。それに、時間をおけば取り込んだ〈魂糸^{かみさか}〉はすり減る。……あと、〈髪逆〉を使うところを、あまり人に見せてはいけない」

「〈髪逆〉って？」

「剣」

八千穂の右の三つ編みが顕現したとき、内から現れた漆黒の剣。毅瑠の質問に、八千穂は焦りも、怒りもしなかった。彼女が見せた反応、それは「初めて聞いた」というような驚きだ。鬼と自分、それ以外には斟酌しんしゃくをしない。それは、一昨日話をしたときと同じ、八千穂の一貫した態度だった。神坂八千穂という人格が形成される前に、〈霊鬼割〉としての使命がすり込まれている――毅瑠はそんな風に感じた。

「でも、それじゃあ困るんだ」

「？」

毅瑠の知る限り、今回の事件を真に解決できるのは八千穂だけだ。毅瑠は八千穂をしっかりと見た。今日の訪問に際して、毅瑠は心に決めてきたことがある。それは、いろいろある質問とは根本的に違うこと――そして、一番重要なことだった。

「神坂八千穂さん。友達になってくれないか」

「ともだち……」

八千穂が小首を傾げる。

「そう、友達だ。君は、いつも友達から何て呼ばれているの？」

「……」

「じゃあ、ご両親からは？」

「八千穂」

「そうか。……じゃあ、『チホ』ってのはどうかな。八千穂のチホ。俺は君のことをそう呼ぶ。だめ？」

八千穂はしばらく考えていたが、ゆっくりと首を振った。それは肯定だと、毅瑠は判じた。

「よし。俺のことは毅瑠と呼んでくれ」

「たる」

「え？」

「毅瑠のたる」

「……それはやめて欲しい……」

毅瑠は本当に嫌そうな顔をして、それを見た八千穂の口許がほころんだ。

「毅瑠」

「うん。……それで、俺はチホに頼みがあるんだ」

「何？」

「事件の解決に手を貸して欲しい」

あくまでも友達としての頼みだった。だから、断られても文句を言うつもりはない。さっきまでの毅瑠と八千穂の関係は、同じ学校の先輩と後輩、それだけだった。しかも毅瑠は生徒会役員だ。どうやっても対等なお願いにはならない。だから、友達。

もっとも、拘っているのは毅瑠だけで、八千穂はそんなことは気にしていないかもしれない。

それでも、と毅瑠は思う。口に出して始めて伝わることは多いのだ。恥ずかしくてもなんでも、友達になろうと宣言することは大切だ。

「できるだけ早く佐藤さんの〈魂糸〉を繋いで、これ以上犠牲者が出ないようにしたい」

「頼まれなくても施術はする」

「そうだな。でも、それだけじゃない。佐藤さんのせいで〈魂糸〉がはみ出した松広君にも、術を施して欲しい。仮に、不幸にも次の犠牲者が出てしまったら、その被害者も対処して欲しい。〈霊鬼割〉について俺は何も知らないから、もしかしたら難しいことを頼んでいるかもしれないけど……。手伝えることはなんでもする。だから、考えてくれないか」

まっすぐ見つめ返してくる八千穂の瞳は、七穂とよく似ていた。透き通った瞳の奥で、彼女は何を考えているのだろうか。春の夕暮れが、八千穂の顔に神秘的な陰影を刻んでいた。

どのくらいの時間が経っただろうか。八千穂が口を開いた。

「お店」

「え？」

「ここのお店を教えて欲しい」

手伝えること。匪か、隠蔽工作か、と考えていた毅瑠は、肩すかしを喰った。でも、これはとても友達らしい取引だ。対価があった方が気を遣わない。でも、その損得は秤にかけないのが友達だ。

もちろん、毅瑠はその条件を快諾した。

銅像生け贄事件 19

「実際のところ、施術ってどうやるの？」

二人は八千穂の部屋に場所を移していた。買い物から帰った七穂が、暗くなっても廊下で話し込んでいる二人を見咎めた結果だった。「こう」

八千穂が身振り手振りで何かを伝えようとする。しかし、穀瑠にはさっぱりだった。

「簡単に言葉で説明してくれ」

「触る」

「さわる？」

「肌に直に触る。そしてこう」身振り手振り。

「どうやら、〈魂糸〉を繋ぐという行為を表現したいらしい。」

「それはもういいよ。触る……か。握手程度でいいのか？」

「〈魂糸〉の状態による。一箇所切れたばかりなら、その位で平気でも、鬼になってしまうと長くかかる」

「時間がかかれば反撃されたりするだろう？」

「そのための〈髪逆〉。〈髪逆〉は襲ってくる〈魂糸〉を切ることをできる。〈魂の要〉^{たましいのかなめ}を貫けば、〈魂糸〉が一時麻痺する」

「貫くって……麻痺どころか死なないか？」

「〈髪逆〉は〈魂糸〉と同じモノ。肉体を傷つけずに〈魂の要〉を貫ける」

それはつまり、あの剣は〈魂糸〉でできている、ということだろうか。それを訊くと、八千穂は頷いた。

「〈髪逆〉は、神坂家代々の力」

「神坂神社が〈霊鬼割〉の家系ということ？」

「そう」

なら、七穂も〈霊鬼割〉なのだろうか。その疑問には、八千穂は首を振った。

「おばあちゃんから受け継いだ」

〈霊鬼割〉という存在。その歴史。その継承。毅瑠はそれらに興味を覚えたが、今は深く訊いているときではなかった。

「既に鬼となってしまうた佐藤さんは〈髪逆〉を使ってなんとかする必要がある。でも、松広君は素肌に触る程度でなんとかなる。そういうことだね？」

「彼はもう少しかかる」

「どうして？」

「屋上から引き落とされた彼を、私が〈魂糸〉で吊った。それで勢いが弱まった。でも、彼の〈魂糸〉は余計に傷ついた」

五階もの高さから落ちて、腕の骨折と打撲だけで済んだ松広孝司。あの事件のとき、屋上から駆け下りてきた三つ編みは、やはり八千穂だったのだ。

正子が〈魂糸〉を大々的に使った気配を察した八千穂は、その方向から屋上にあたりをつけた。しかし、八千穂が屋上に飛び出したのと、孝司が柵を越えたのがほぼ同時だった。八千穂は〈魂糸〉を伸ばし、なんとか彼を引っ張りあげようとしたが、それは叶わず、落下速度を和らげる位しかできなかった。

それでも、孝司が命を取り留めたことで、正子が〈魂糸〉を再び取り込むこと――鬼が力を増すのを防ぐ結果にはなった。

「ちょっと待って。チホは〈魂糸〉を使えるの」

「使える」

「それは……〈魂糸〉が切れてはみ出しているということ？」

「生まれながらにして〈魂糸〉が切れてはみ出している。それが〈霊鬼割〉を継ぐ条件」

八千穂はそれをさらっと言った。

毅瑠は血の気が引くのを感じた。

――生まれながらにして？

「自分で自分の〈魂糸〉を繋ぐことはできないの？」
「できない」

「他の〈霊鬼割〉。たとえば、おばあちゃんでも？」

「できない」

「まさか、他人を施術するときは……〈魂糸〉を使うの？」

「使う」

（ああ……）

毅瑠は、自分がいかに残酷なことを頼んでいたのかを知った。自分の命を削って人の命を繋いでくれと、そう頼んでいたのだ。

「だから鬼を狩る」

「？」

「鬼の〈魂糸〉を繋ぐとき、その命を少しもらって良いことになっている」

以前八千穂は「鬼は狩っていいことになっている」と言った。それは、他人に害をなす鬼の力を封じる代りに、その命の一部を取り込んで良い、そういう意味だったのだ。どれ程の命を取り込み、それによってどれ程永らえるのか――

「でも、他人の〈魂糸〉を繋いでも、長くは持たないんだろ？」

「〈髪逆〉があるから大丈夫」

「人に見せたくない理由って……それは、〈髪逆〉が〈霊鬼割〉の命を繋ぎ止める物だから？」

八千穂が頷く。

鬼を狩り、幾何かの〈魂糸〉を取り込み、それを繋ぎ止めるための〈髪逆〉――生まれながらにして〈魂糸〉が切れ、はみ出し、鬼の命を狩り続けなければ生きられない、そんな子孫に対して、先祖が代々残した秘宝――

八千穂は鬼にしか興味を示さない理由――今やそれは明白だった。毅瑠は言葉が継げなくなっていた。

「毅瑠。気にしないでいい。私は頼まれた通りのことを、私の意志でやる」

「でも……」

「友達だから」

そう言われてしまつては、毅瑠にはもう返す言葉がなかった。ここまで話を進めて、〈靈鬼割〉の真実に怖じ気づいて逃げるわけにはいかない。

ぱん、と両頬を自分で張って気合をいれると、毅瑠はあえて明るい顔をした。

「もうひとつ訊きたいことがあったんだ。初めて会ったときに『役立たず』って言っただろ？ あれはどういう意味だったの？」

「巡回なんかしても役に立たない」

「俺をなじったわけじゃないのか？」

なんというか――普通はそういう言い方はしない。でも、あの一言がなければ、今ここでこうしていることもなかったはずだ。

毅瑠は思う。

夏目は、常に自分の信じることを物怖せずに実行している。

八千穂は自分の命を張っている。それが〈靈鬼割〉の避けえぬ宿命だとしても。

そして正子も命懸けだ。八千穂が彼女を狩ろうとしているとは、考えてもいないだろうが。

――自分も、覚悟を決めなければいけない。

視聴覚室には〈懺悔室〉という札が掲げられていた。

「なんですか、これ？」

毅瑠の問いに、太一が困ったような顔で答える。

「戸時が張り替えたんだ。相談室は終わりだって宣言したからな」

「巡回は？」

「ヤメだ。ただし、休み時間の一般教室棟での部活動勧誘を解禁する」

部活動の勧誘は、あまりにエスカレートしたために、ここ数年は、休み時間に一般教室棟で行うことは禁じられていた。それを全面解禁するという。

「戸時会長らしいですね」

「まったくだな」

夏目の様子を気にしながら朝早く登校した毅瑠は、相談室として使っていた視聴覚室がどうなっているかを覗きに来て、この札に遭遇したのだった。札の前では、太一が先に立ちつくしていた。

生徒集会で「相談室も巡回も止める」と宣言したからには止めるのだ。しかし、懺悔室と部活動の勧誘解禁で、同じ効果を狙っている。太一はサッカー部だから、勧誘と称して校内を回るに違いない。――さすがだな、と毅瑠は感心してしまった。

太一と共に生徒会室に入ると、夏目以外の全員が揃っていた。夏目はというと「職員室に呼び出された」とのことだった。

「向井君、あのお店どうだった？」

「はあ。好評でした」

「そーかそーか」

作がバンバンと毅瑠の背中を叩く。上機嫌だ。他のメンバーの顔も明るい。――つまり、今朝の夏目はいつもの調子に戻ったということだろう。

「昨日、毅瑠が帰った後が大変だったよ」道生が感慨深げに呟いた。あの後、七時を過ぎても夏目は生徒会室から出てこなかった。仕方なく、道生達は事務室からマスターキーを借り、生徒会室に踏み込んだ。

「そしたら、なんと」力が身を乗り出した。「もぬけの殻だったんだよ」

あろうことか、夏目は三階にある生徒会室の窓から抜け出してしまっていた。いつの間に用意したのか、体育祭などでグラウンドに張るロープが、窓のサッシに結びつけられていたという。そのロープは今でも生徒会室の中にあつた。

「目撃者はいない。当然だよな。生徒も教員の殆ども体育館に集まっていた時間だ」と道生。

「確信犯よね。事前にロープを用意しておくなんてさ」作が嘆息する。

生徒集会の前に、生徒会室にロープがあつただろうか？ 誰もそんなことは覚えていなかった。

「中で泣いてる、なんて言ったの誰だよ」と力。

「泣きながら出て行ったかもしれないじゃない」と作。

しかし、泣きながらロープを結んでいる夏目の姿など、毅瑠には想像できなかった。

結局、昨日はその後どうすることもできず、そのまま解散となった。そして今日。全員がかなり早く登校したにもかかわらず、既に夏目は登校していた。一番早かった希奈が生徒会室に入った時点で、ホワイトボードには懺悔室と部活動勧誘解禁のことが書いてあったという。

毅瑠は感心を通り越して呆れていた。夏目の行動を、毅瑠の基準では評価のしようがない――

「さすがは夏目ね」

希奈の一言が、その場にいる全員の気持ちを代弁していた。

「全員揃っているわね」

扉が開いて夏目が入ってきた。何の拘りもない、爽やかな様子で一斉に何かを訊きたそうに動き出す面々を制して、夏目は咳払いを一つした。

「まず、昨日の件。ごめんなさい」夏目は深く頭を下げた。「暴走したわ。みんなにも迷惑をかけたわね。さっき職員室に呼ばれて、こっぴどく叱られたわ」

「処分は？」と作が聞く。

「トイレ掃除一週間」

どっと全員が笑った。

「校則を破ったわけではないし、噂のエスカレートには先生たちもほとんど困っていたみたいね。とりあえず停学などの処分はなし。私自身、後悔はしていないわ。ちよっと言葉遣いが下品だったかしら、とは思うけど」

「これで、戸時政権は盤石だな」

太一が言う。確かに、夏目を怒らせるとどうなるか学園中が思い知った。しかも、ほとんどお咎めなしのようなものだ。

「やあね、独裁者みたいに。生徒会は、私達全員でようやく生徒会なのよ。でも、今日以降の対応は勝手に考えさせてもらったわ。いい？」

メンバーに否はなかった。

「それじゃあ、各部活への連絡を手分けしてお願いね。懺悔室については、私から学園側に伝えるわ」

ぱん、と夏目が手を叩いた。それを合図に全員が動き出す。始業の予鈴の時間が迫っていた。

「向井君」夏目が毅瑠を指名する。「このロープ、体育倉庫に戻しておいてくれない？」

三階から下りるのに使うには長すぎるそのロープは、ずしりと重かった。

銅像生け贄事件 21

ホームルームまで時間がなかったので、毅瑠はとりあえず、ロープを生徒用の下駄箱脇に置いた。こんな物を持ち去る人もいないだろう。昼休みに体育倉庫まで持っていけば良い。

毅瑠が二年E組の教室に入ると、窓際の正子の席が空いていた。

「あれ、佐藤さんは？」

「体調崩して……」

ちょうど予鈴が鳴って、クラスメイトの言葉と重なった。欠席らしい。出欠確認では、担任は最初から正子を呼ばずに、出席簿に何やらチェックをいれていた。

一時間目の担当教員が入ってきて授業が始まった。しかし、毅瑠は上の空で聞き流す。

思うのは、昨日八千穂と決めたこと――毅瑠が正子を人気のない場所に誘い出す。そして、八千穂が施術を行う。

水曜日のことがあるので、正子が毅瑠の誘いに乗ってくれるかが心配だったが、それはあたって碎けるしかない。もともと、正子は二人の意図を知らないのだから、それほど警戒されるとは思われなかった。

場所は体育館裏を考えていたが、タイミングまでは事前に決められない。八千穂との連絡には携帯電話を使うことにした。

（しかし……）

毅瑠はくすつと笑う。八千穂が携帯電話を持っていたことが意外だった。女子高生が携帯電話を持っていて、意外なことなど何一つないというのに。

何はともあれ、正子が休みとなれば、今日は作戦を実行することはできない。今日は金曜日だから、決行するのは来週の月曜日になるだろう。

「そろそろ、最初に取り込んだ〈魂糸〉がすり減ってくる頃」八千

穂は昨日、そう言った。

新学期以降、挽田香の〈魂糸〉を取り込んで元気になっていた正子が、本来の病弱な体に戻りつつあるということだ。

「殺さずに、〈魂糸〉の一部だけを抜き取ることはできるんだろう？」

「人による」

「チホは？」

「できる」

「じゃあ、佐藤さんは？」

「できないと思う。全部抜き取る方が簡単」

それは、人死に出ていなければ、正子は誰も傷つけていないということ。一方で、正子には殺すしか手がないということだ。

——正子は、自分の身に起きたことをどれ程理解しているのだろう。挽田香の死と、自分が元気になったことの因果関係に気付いているのだろうか？

それは、八千穂もわからないという。しかし、松広孝司の事件のとき、方法はともかく、正子が屋上へ彼を誘い出し、〈魂糸〉で引き落としたのは間違いない。校舎側面にあった〈魂糸〉の痕跡が、雄弁にそれを物語っている。落ちろ、と念じたのだろうか。それとも、挽田香の再現を、と願ったのだろうか。無意識だったのだろうか。——もしかしたら、この教室で人の死に立ち会う、それが特別なことだと思っているかもしれない。八千穂は言った。正子が強く願えば、物理的な手段を使わずとも、人を死に至らしめることができるはずだと。

正子の生への強い思いが、次の犠牲者を出すのは時間の問題だろう。今はまだ、事故への遭遇という形式に無意識に拘っているから歯止めがかかっている。でもそれは、遠からず外れてしまうだろう――

今日の欠席は体調が悪くなってきた証拠だ。このまま休み続けるようなら、別の手を考える必要があるだろう。できることならば、

八千穂と正子が争うようなことは避けたい。鬼は本能的にへ靈鬼割
ゝを嫌うというが、無造作に近付いて一気に施術すればなんとかな
らないのだろうか？

授業中、穀瑠はずっとそんなことを考えていた。

銅像生け贄事件 22

異変は四時間目の授業が終わりに近付いた頃始まった。

中庭に面した窓ガラスが、ガタガタと小刻みに揺れ始めたのだ。

毅瑠は最初、地震かと思った。しかし、足元は揺れていない。

次第にガラスの揺れは強くなってくる。ビシッとどこかにひびが入った音がして、クラス中が騒然となる。

（おかしい……）

何かが毅瑠の中で警鐘をならした。嫌な予感がした。毅瑠はポケットから〈魂見鏡〉を取り出すと、もどかしい思いでそれをかけた。そして見たものは――

無数の〈魂糸〉が窓ガラスを叩く、異形の光景だった。

「佐藤さんは？」

周りを気にする余裕もなく、毅瑠はクラスメイトに質す。

「だから、体調を崩して保健室で……」

毅瑠は最後まで聞かずに教室を飛び出した。直後に、盛大な音を立てて窓ガラスが飛び散った。

悲鳴、怒号、泣き声――それらを背後に聞きながら階段をかけ下りる。

朝、予鈴で聞き取れなかった言葉を、何故しっかりと聞き直さなかったのだろうか。担任は正子が保健室にいることを知っていたに違いない。

欠席だと思った。正直ほっとした。それが――落とし穴だった。

毅瑠は唇をかみつつ、特別棟の一階まで駆けた。保健室に辿り着くと、直後に八千穂が現れた。

「すまない」

「後で」

二人はそれだけ言葉を交わすと、勢いよく保健室のドアを開けた。ベッドの上に正子が座っていた。

「あら、向井君」

それは――穀瑠の知らない正子だった。げっそりと痩せて、唇は乾き、肌は張りを失っている。しかし――目だけが爛々と輝いていた。

そして――〈魂糸〉が――

「佐藤さん……」穀瑠はそれ以上の言葉を失った。

保健室中に蜘蛛の巣のごとく〈魂糸〉が張り巡らされている。そしてそれは、開いた窓から外へと溢れていた。

ベッドの脇には養護教諭が倒れていた。既に〈魂糸〉がすべて抜き取られているようだった。

立ち尽くす穀瑠を押し退けて、八千穂が前に進み出た。

「あら、あなた……」

正子には八千穂の登場が意外だったようだ。

「鬼は狩る」

「私のこと？」

「そう」

八千穂の右のうなじ辺りから、淡く輝く光の束が現れた。虹色に輝くそれは、見る見る長くなり、腰までの長さの三つ編みを形作る。その三つ編みは先端から解け、中から一振りの漆黒の剣が姿を現した。八千穂は右手でそれを逆手に握ると、引き抜いた。

「お前は、その人の〈魂糸〉を抜いた」

「なにを言っているの？」

間髪をいれず、八千穂が〈髪逆〉を突き出した。その切っ先が正子の胸に届く――刹那、大量の〈魂糸〉が八千穂を後方に弾き飛ばした。

「何……これ……」

正子が呆然と呟いた。〈髪逆〉が触れたためか、〈魂糸〉が見え始めたようだ。

「命だ」八千穂が立ち上がりながら言う。

正子の理解は早かった。その顔が見る見るゆがむ。そして、盛大

に笑い始めた。

「あははははは。いのち？　これが私の？」保健室中の〈魂糸〉がどくどくと脈動する。「そういうこと。私、飛び降りたあの三年生の命を喰ったのね？　この保健の先生の命も喰ったのね。私、命を喰えるんでしょう？」

正子の瞳に仄暗い光が宿る。

「〈鬼〉って言ったわね？　人を喰うから鬼なのね？　そうでしょう？　向井君！」

毅瑠は保健室の隅で、ただ見つめることしかできなかった。

正子がベッドの上でゆらりと立ち上がる。

「あはははは。本当だわ。随分と気分がよくなった。この先生の命を喰ったから？　あはははは。これでずっと生きられるのね？　私、生き続けることができるのね！」

「そうはさせない」

八千穂が〈髮逆〉を構える。正子はそれを鋭い目で見据えた。

「大方、あなたは私みたいな〈鬼〉を退治するっていうんでしょう？」正子は〈鬼〉という言葉をも楽しそうに使った。「自分も鬼のくせに！」

その言葉を合図に八千穂が飛び出した。部屋中の〈魂糸〉が八千穂に襲いかかる。八千穂は無表情で〈髮逆〉を振るい、襲いくる〈魂糸〉を次々と切り裂いた。それでも、正子が操る〈魂糸〉の量は一向に減らない。千切れた〈魂糸〉が宙を舞い、毅瑠の目の前で消えていく――それは間違いなく、お互いの命の削り合いだった。

毅瑠は見えていられなくなり叫んだ。

「佐藤さん！　やめてくれ！」

〈魂糸〉の攻勢が止まり、八千穂も間合いを取った。

正子は毅瑠を見据えると、静かな声で言った。

「なんでそんなこと言うの？」

「何だって……」

「私に死ねって言うの？」

「そうじゃない。寿命をまっとう……」

「ふざけるんじゃないわよ!」

爆発的に攻撃が再開された。正子の顔は泣いていた。

「病弱な私が、今までどんな想いをしてきたと思うの? 二十歳まで生きられないだろうって。私だって、みんなと一緒に毎日学校に通いたかった。友達と寄り道したり、誰かとデートしたり。なのに、病弱だから全部諦めろって言うの? 私、生きようとしちゃ駄目なの? 悪いことなの? ねえ、向井君! 答えてよ、向井君!」

八千穂と闘いながら、正子の顔は毅瑠を向いていた。――毅瑠は一言も返すことができなかった。

しかし八千穂は、正子の言葉に動揺した様子はない。確実に〈魂糸〉の攻撃を退けながら、正子との間合いを詰めていった。少しずつ――確実に――

そうして気が付けば、襲いくる〈魂糸〉が減っていた。正子の顔に微かな焦りが浮かぶ。窓の外に伸びた〈魂糸〉が脈動する――また、誰かの命を取り込むつもりか――

毅瑠は反射的に飛び出した。

「それ以上はやめるんだ!」

「毅瑠!」

八千穂の声が聞こえた。

正子が驚いた顔をしている。

八千穂と正子の間で――〈魂糸〉の束が毅瑠を貫いていた。

「向井……君?」

正子の〈魂糸〉の動きが一瞬止まった。

そして――

八千穂が突き出した〈髪逆〉が、正子の胸を貫いた。

銅像生け贄事件 23

〈髪逆〉に〈魂の要〉を貫かれると、〈魂糸〉が一時麻痺するといふ。

正子は、胸を〈髪逆〉に貫かれたまま床に崩れ落ちた。今まで光り脈動していた〈魂糸〉が、光を失って静かになっていた。

八千穂は左掌を広げると、ゆっくりと正子の額にあてた。その左手の指が、操り人形を繰るがごとく、正子の額にリズムを刻む。

正子は意識があった。しかし、思い通りに体を動かせないようだった。それでも、彼女は口を開いた。

「向井君……」

穀瑠は正子の傍らに座り込んでいた。〈魂糸〉は刺さったままだ。

「私……死ぬの？」

「命を本来の形に戻すんだ。だから、死なない」

「……また、逆戻りなのね……」

「魂の綾は己が内へ、環を廻し命を紡げ」

八千穂の口から低い詠唱が漏れた。それを合図に、部屋中の〈魂糸〉が少しずつ引き始めた。穀瑠に刺さっていた〈魂糸〉も抜ける。それはすべて——吸い込まれるように、正子の体へと収まっていた。

どれ程の時間が経ったのだろうか。すべての〈魂糸〉が正子へと収まった。八千穂の左手がさらに激しく正子の額にリズムを刻む。穀瑠は〈魂見鏡〉を通して、正子の中の魂が編み上げられていくのを見た——そして、同時に、八千穂自身の〈魂糸〉が編み直されるのも見た。

生きるために、八千穂もまた他人の命を取り込んでいる。鬼を狩る——という名目の元に。正子と八千穂の差、それが許されるか許されないかは、いったい誰が決めたことだろう——

穀瑠の目の前で、正子の命があるべき姿を取り戻した——それは

〈靈鬼割〉の力——命の輪^わの復元——

「封！」八千穂が気合い入れると、正子の体が大きく跳ねた。それで、終わりだった。

毅瑠は、気を失った正子をベッドへ運んだ。養護教諭についてはどうすることもできない。完全に失われてしまった〈魂糸〉は、〈靈鬼割〉をもってしても、元に戻すことはできないのだ。

開け放ったままの扉から一般教室棟が見える。そこには、叫び声や怒声が溢れている。すぐに、ここ保健室に大勢が押しかけてくるだろう。

正子の施術が完了した今、事件の半分は終わったといえる。しかし、学園全体では事件はまだ進行中だ。

「すべてに決着を付けなくちゃいけない」

八千穂は〈靈鬼割〉としての役割を果たした。毅瑠も生徒会役員としての役割を果たさねばならない。正子のこと、養護教諭のこと——挫けそうになる心を奮い立たせ、本当の意味で事件を終結させるために、毅瑠と八千穂は保健室を後にした。

銅像生け贄事件 24

一般教室棟は大騒ぎだった。

二階から四階まで、各クラスの窓ガラスがすべて割れていた。正子がいる保健室は校庭に面していて、窓から一般教室棟は見えない。窓から溢れた正子の〈魂糸〉は、わざわざ特別教室棟を回り込んで、一般教室棟の各クラスまで達していたのだ。毅瑠はその事態の大きさにおののいた。

多くの生徒が飛び散ったガラスで怪我をしていた。特に、グラウンドでの体育の授業が早めに終わり、中庭を歩いていた生徒の何人かが、降ってきたガラスを受けて重傷だった。

しかし、今の時点で命さえ落としていなければ大丈夫――毅瑠は自分にそう言い聞かせながら、廊下を走った。目指すは生徒用の昇降口。下駄箱脇に今朝置いたロープ。

毅瑠はロープを抱えると、上履きのまま中庭に飛び出した。怪我をした生徒と、それを介抱する教員たちが見える。挽田香のときと同じく、学園中の生徒の視線が中庭に集まっている。

「毅瑠」

八千穂が何かを抱えて駆け寄ってきた。事務室に常備してある拡声器だった。毅瑠はそれを受け取ると、ボリュームを最大にした。

「生徒会書記の向井毅瑠です」

その場違いな名乗りは、学園中に響いた。中庭も教室もしんと静まり返る。遠く聞こえる救急車のサイレンは、ここを目指しているに違いない。

「これは一連の事件の最終章です」毅瑠は声を張り上げた。「挽田さんのことは残念でした。でも、結果的にあれが目覚めさせてしまったのです」

毅瑠は一旦間を取った。そして、右手を挙げると、ブルーシートがかけられた銅像を指さした。

「この銅像が血の味を覚えてしまった」

学園中が息を飲んだ。

「だから壊します」

毅瑠が学園中の目を引きつけている間に、八千穂が身軽に銅像にとりついていった。そして、頭にあたる部分にロープをぐるぐるに巻き付けた。中庭には教職員も多くいたが、毅瑠の言葉に気を取られていて、八千穂を止めようとするものはいなかった。

拡声器を放り出した毅瑠は、ロープの端を拾い上げると、近くに止めてあったRV車の後部バンパーに結びつけた。誰の車だったか思い出せなかったが、今の毅瑠にはそんなことは関係なかった。

毅瑠は花壇の縁石の一つを持ち上げると、それを力一杯運転席のガラスに叩き付けた。鈍い音と共にガラスにひびが広がる。何度か石を振るってガラスを割ると、毅瑠は運転席に飛び込んだ。

しかし、鍵がない。どうしようか——と思った瞬間、車のエンジンがかかった。

毅瑠が顔を上げると、少し離れたところに八千穂がいた。今はへ魂見鏡をつけていないから見るできないが、彼女がへ魂系を使ってエンジンをかけたのは間違いなかった。

毅瑠は八千穂に向かって小さく頷いた。八千穂は無表情で身を翻した。

毅瑠は父親の車を思い浮かべる——ギアは確かD。それからサイドブレーキを外す。そしてハンドルをぎゅっと握ると、アクセルを力一杯踏み込んだ。

がくん、と衝撃が来て、ロープが一杯に張られる。タイヤが空転し、ゴムの焦げる匂いが立ちこめる。エンジンが甲高い音を立て、ボンネットから煙が出始める。それでも毅瑠はアクセルを踏み続ける——

少しずつ、少しずつ、車は進み——突然、手応えが消えて、目の前の駐輪場へと突っ込んだ。そして——

大地を揺るがすような轟音と共に、盛大な砂埃が中庭に舞った。

銅像は見事横倒しになり、校舎からは大歓声があがり、直後に救急車が到着した。しかし、車の運転席で気を失っていた毅瑠は、そのどれにも気が付かなかった。

銅像生け贄事件 25

毅瑠は停学一週間の処分となった。

もつとも、シートベルトをしていなかった毅瑠は、駐輪場に突っ込んだ際にハンドルに額を打ち付けたため、停学の殆どを病院で過ごした。だから、停学になっていなくても、その週は登校することは無理だっただろう。

自宅に戻ったのは、事件の一週間後の金曜日だった。その日、道生から電話があった。

「お疲れさん」

それが道生の第一声だった。それから、事件の報告がなされた。窓ガラスが一斉に割れた原因は不明。重傷四名、軽傷九七名。加えて、同じ時刻に保健室で非常勤の養護教諭が心臓発作で亡くなった。

「心臓発作……」

毅瑠は胸が締め付けられる思いがした。あの先生は——名前も知らない。

「お陰で、騒ぎは益々大きくなったよ」

ガラスのこともあり、週明けの月曜日は休校となった。学校中の窓ガラスの張り替えは、そう簡単にできるものではない。今でも、一部ひびが入ったままのガラスがあるという。

「あれ、休校の一日って、俺の停学ではどう計算するんだろう？」

「どうだっていいよ。月曜日から出てこい」

学園全体を、事件は終わったという空気が満ちているという。毅瑠の大芝居に夏目が乗ったのだ。

授業が再開された火曜日、夏目は大々的に収束宣言をして懺悔室を撤収した。部活動の勧誘については、目にあまることはしないという条件付きで継続を認めたという。

そして、毅瑠の行動については、全面的に生徒会の意向によるも

のだと言い切った。あろうことか、毅瑠が壊した車と駐輪場の修理代まで、必要経費として学園に請求したのである。

「信じられないな」

「俺もだよ」

どのような駆け引きがあったかはわからないが、学園は経費の負担を了承した。銅像については、正式にお祓いを執り行った上で撤去するという。創設者の銅像を撤去するという事案になかなか踏み切れないでいた校長が、これ幸いと夏目の提案に乗ったのではないか、というのが道生の推測だった。

その後、毅瑠の携帯電話には、次々と退院祝いの電話が入った。しかし、毅瑠が一番待っていた電話は、結局かかってこなかった。

そして土曜日。

夏目が向井家を訪れた。

土曜日だというのに、一分の隙もなく制服を着込んだ夏目は、毅瑠の両親に菓子折りを渡すと、深々と頭を下げた。

「生徒会長をしています、戸時夏目です。この度は、私が至らなかったばかりに、息子さんに怪我をさせてしまいました。誠に申し訳ありませんでした」

この挨拶に、逆に両親の方が飲まれてしまい、こんな愚息どうなっただって、とわけのわからない受け答えをする始末だった。

毅瑠は、今回の顛末について、大幅に端折って両親に説明していた。ただ、金銭的な迷惑をかけるかもしれない、それだけはしっかりと伝えた。父親はこっぴどく叱ったが、結局、何かあったら払ってやる、と胸を叩いた。それでも、内心かなり心配していたのだろう。毅瑠が学校が払ってくれるらしいとの話をする、あからさまに胸を撫で下ろした。それが夏目のお陰であることを、当然毅瑠は話していた。

だから、毅瑠の両親が夏目を見る目は、救いの女神を崇めるようだった。

「戸時会長、上がっていきませんか？」

「またにするわ。先に私が上がっちゃ悪いもの」

「？」

夏目は意味不明のことを言い、玄関先で向井家を辞した。門のところまで夏目を送り、玄関に戻ろうとした穀瑠は、遠巻きに見つめる視線に気が付いた。こちらも、土曜日だというのに制服を着ている。

（なるほどね）

夏目の言葉の意味が腑に落ちる。

「電話してくれればいいのに。家、わからなかっただろ？」

「会長さんに聞いた」

八千穂は何やら紙袋下げていた。和菓子のようなだ。

「上がるか？」

八千穂が頷く。そして、紙袋を差し出して固まった。口上が思い出せないようだ。

「お土産？」

「そう」

八千穂は、ずいっとそれを穀瑠に差し出した。

穀瑠は苦笑しつつ、「ありがとう」と受け取った。

銅像生け贄事件 26

向井家では、客に出すのは日本茶だ。八千穂の土産の饅頭が、早速お茶請けとして並んでいる。

「あれからどうだ？」

「変わらない」

「変な嫌がらせとか、ないか？」

八千穂が頷く。

嫌がらせはなくても、友達もあまりいないのだろう、と毅瑠は思った。

「そういえば、松広孝司君の事件さ」毅瑠は話題を変えた。「道生が面白いことを言っていた。懺悔室に松広君が来たって言うんだ。それで、屋上から落ちたあの日、自分の意志で屋上に行ったっていうんだよ」

「何で？」

「上級生の女子に誘われたって。屋上でいいことしなかった」

「いいこと？」

八千穂が小首を傾げる。毅瑠は苦笑した。

誘ったのは恐らく佐藤正子。孝司は当初、分別したごみを捨てに行って、そこから先の記憶がないと言っていた。考えてみれば、先週は正子もごみ係だった。

恐らく正子は、孝司をからかったただけなのだろう。一年生を誘惑してみても、赤くなる顔を楽しんだ。そんな些細なことも、病弱だった彼女には新鮮だった。

放課後の教室で、あの一年生はどうしたかしら、と想像を膨らませて楽しんだのだろう。もし彼が落ちたらどうなるかしら、と考えたかもしれない。それが〈魂糸〉によって孝司を引きずり落とすことになったのかもしれない。もちろん、憶測の域は出ない。しかし、今なら毅瑠は確信できる。正子は孝司をどうこうしようとして誘っ

たわけではないのだ。

正子が言った「私だって……」という言葉。あれは「私だって責任を感じているんだからね」と言いたかったのか。それとも、「私だって本当に落ちるとは思わなかった」だろうか――

とにかく、孝司にしてみれば、誘惑されてふらふら屋上に行ったなどと、口が裂けても言いたくなかったに違いない。

「佐藤さんはどうしてるかな」

「登校している」

「そりゃ……」

当然そうだろう、と言いかけて、毅瑠はたと気が付いた。八千穂の顔をまじまじと見る。八千穂は毅瑠が何を言いたいのか察したようだった。

「死んだ人間の〈魂糸〉は、もう本人には戻せない。毅瑠、見ていたでしょ？」

だから、あの非常勤の養護教諭の〈魂糸〉を、全部正子に収めたということか。人の〈魂糸〉の総量がわからない毅瑠は、それに気が付かなかった。

「たいした量じゃない。でも、環になっているし、前よりは元気」
結局、正子によって命を落としたのはあの養護教諭だけだった。

正子の生と、名前も知らない養護教諭の死。天秤にかけてはいけな
いと知りつつ、正子が元気になったことが嬉しいと感じる自分の心
が辛い。

「そうだ。あのとき、佐藤さんは〈魂糸〉が見えるようになったよ
ね。まだ見えるの？」

八千穂は首を振った。

「〈髪逆〉で〈魂の要〉に触れた。そうすると、誰でも見えるよう
になる。でも、施術をすればその力は消える」

ふいに、八千穂が毅瑠の側ににじり寄ってきた。

「？」

「でも、毅瑠は平気」

その近さに、毅瑠は鼓動が跳ね上がる。

——いいことしない？

正子が孝司に言ったであろう言葉が、頭の中でリフレインする。八千穂は毅瑠に顔を近づけると——「施術する」そう言った。

「え？」

「あのとき、毅瑠の〈魂糸〉も傷ついた。だから施術する。でも、毅瑠の力は消えない」

八千穂は左手を毅瑠の額にあてた。低い詠唱が漏れる。

（これで、命を救われるのは二度目だな……）

車で駐輪場突っ込んだとき、毅瑠はブレーキを踏んでいなかった。普通なら、こんな短期間で退院できるような怪我で済むはずがなかったのだ——それは、五階から落ちた松広孝司と同じ。八千穂が〈魂糸〉で守ってくれたのだ。八千穂は言わないが、毅瑠にはその確信があった。

額の上でリズムを刻む八千穂の左手から、暖かい何かが流れ込んできく。それは〈魂糸〉。命の環の復元——

「動かないで、毅瑠」

ずい、と目の前に八千穂の胸元が迫り、毅瑠は慌てて視線だけを泳がせた。

右。

左。

どちらを見ても、腰までの長さの三つ編みが揺れていた。

翌週。

人気のないところで突然幽霊に首筋を捕まれる、という新たな噂話が学園中に蔓延した。

どうやら、八千穂が毅瑠のお願いを実行に移してくれているようだった。

《銅像生け贄事件
了》

銅像生け贄事件 26 (後書き)

「銅像生け贄事件」はこれにて完結です。
幕間を経て、第三幕「夢喰い事件」が始まります。

毅瑠の遊園地大作戦

「チホ、ゴールデンウィークはどこかに遊びに行く予定あるのか？」
「ない」

四月下旬。学園中を震撼させた〈銅像生け贄事件〉が一段落し、涼心学園高校は平静を取り戻していた。そして、明日からゴールデンウィークに入る。

事件を通して知り合った向井毅瑠と神坂八千穂は、最近一緒に行動することが多い。今は、二人揃って下校途中だ。

「何かその他の予定があるのか？」

「別がない。なんで？」

「……もし良かったらだけど、一緒に遊園地でも行かないか？」

「遊園地？」

「そ。暇なら遊びに行こう。……友達同士」

八千穂はしばらく考えていたが、「行く」と言って頷いた。

「すごい人」

「そうだな……」

ゴールデンウィークの一日。毅瑠と八千穂は、郊外の遊園地へとやってきていた。

毅瑠としては、駅前で待ち合わせなどをしたかったのだが、その提案には八千穂が首を傾げた。確かに、駅で待ち合わせるより、どちらかの家まで行った方が近いのだが……。仕方なく、毅瑠は神坂神社まで八千穂を迎えに行ったのだった。

淡い色のワンピースの上にパーカーを羽織った八千穂は、制服姿より幼く見えた。変な話だが、制服姿が非常に大人っぽく見える八千穂は、これでやっと年相応といえた。

「とにかく入場しなくちゃ。列に並ぼう」

ゴールデンウィークの遊園地は混んでいた。入場券売り場から長蛇の列ができています。

「チホは遊園地に来たことあるか？」

「小さい頃、お父さんとお母さんと」

基本的に八千穂は言葉数が少ない。遊びに来れば少しはしゃぐだろうかと、と毅瑠は考えていたが、そんな様子もあまりなかった。三十分ほど並んで、二人はようやく入園することができた。

「さて、何から乗ろうか」

「わからない」

周囲をきよろきよろと見回しながら、八千穂が呆然と言った。本当に判断が付かないようだった。

「よし。じゃあ、端から乗るか」

ここぞとばかり、毅瑠は先頭に立って歩き始めた。

一番近いアトラクションはメリーゴーラウンドだった。端からと宣言したものの、高校生でこれは恥ずかしい——と毅瑠は腰が引けた。

「これは……やめておこうか」

「なぜ？」

いきなり発言を翻したとあっては男らしくないと考えた毅瑠は、腹を決めて列に並んだ。

小さい子供が多いのは当然だが、毅瑠達と同一年くらいのカップルも結構並んでいた。そして、ここでも長蛇の列。八千穂は文句一つ言わずに並んでいるが、毅瑠は先が思いやられた。

毅瑠達の目の前で、メリーゴーラウンドは何度となく回った。軽やかな音楽に合わせて、くるくると回る。八千穂がそれを憑かれたように見入っていた。

「綺麗」

「そうかな？ 随分と痛んでるし、ちょっと白々しいよな」

「……」

八千穂から向けられた非難の眼差しに、毅瑠は口をつぐんだ。

「毅瑠、夢がない」

「でも、俺は〈夢飼い〉かもしれないんだろ？」

「違う気がしてきた」

本人が夢のある思考形態をとることと、〈夢飼い〉なる能力者であることに、何か相関関係があるのだろうか。じりじりと進む列の中で、毅瑠はぼんやり考えた。

「やっぱり、乗り物を選ぶ」

メリーゴーラウンドを下りた毅瑠は、八千穂に提案した。メリーゴーラウンドだけで三十分以上を要している。このペースで端から乗っていたら、半分も行かないうちに日が暮れる。

「毅瑠に任せる」

「チホは、ジェットコースターは大丈夫か？」

「乗ったことない」

「あれだ」

毅瑠が指さした先には、遊園地の目玉であるジェットコースターが聳^{そび}えていた。疾走するコースターから、乗客の甲高い叫び声が聞こえる。

「乗る」

「よし」

当然だが、ここでも長蛇の列ができていた。毅瑠は事前に二人分のジュースと菓子を買って、列に並んだ。

「お行儀悪い」

立って菓子の袋を開ける毅瑠を、八千穂が咎めた。

「遊園地ではいいんだよ」

「本当？」

「……七穂小母さんて、そういうところ厳しいのか？」

八千穂が首を傾げる。比較対象がないのだから、厳しいのかどうかわからないのだろう。

穀瑠が差し出した菓子袋に、八千穂は恐る恐る手を入れた。そして、幾分居心地悪そうにそれを口に運ぶ。

「……」

なんだろう。穀瑠は、そんな些細な初々しさに、妙に胸が高鳴るのを感じた。

一時間近く並んで、ようやく二人はジェットコースターに辿り着いた。

「前のバーをしっかりと握ってください」

係員の言葉に、八千穂がきまじめに頷く。はたして、八千穂は叫び声をあげるだろうか？

ジェットコースターがゆっくりと動き出した。穀瑠はちらちらと八千穂を見る。バーをしっかりと握り、前を直視している。その瞳に揺らめくのは期待か――

がくん、と唐突にコースターが下を向き、急加速が始まった。

上へ、下へ、右へ、左へ、ジェットコースターは限界まで客を揺さぶり、その叫び声を絞り出そうとする。さすがの穀瑠も八千穂を見る余裕がなく、楽しい叫び声をあげる。すぐ脇では八千穂の声が――

「叫び声上げなかったな」

ジェットコースターを下りて、ふらつく体で穀瑠は言った。終始気にしていたわけではないが、八千穂の叫び声は聞こえなかった。

八千穂は無言で小さく頷いた。

「面白かったか？」

「……」

八千穂の返事がない。と――

「あ！」

穀瑠の背後で、小さな女の子らしき声がした。同時に八千穂が飛び出す。一瞬遅れて振り返った穀瑠が見たものは――転んだ女の子

と、同じく転んだ八千穂と、空へと舞い上がる風船だった。

「チホ？」

どうやら、女の子が転んで風船を放してしまったので、それを捕まえようと飛び出したらしい。そして、上手くいかずに自分も転んだ――普段の八千穂ならそんなことはありえないから、これはそうとうジェットコースターが効いているようだ。

「あらあら大丈夫？」

母親が女の子を抱き起こした。

「うん、みなこ平気。でもお姉ちゃんが」

女の子は自分が転んだことよりも、目の前で同じように転んだ八千穂に驚いてしまったようだ。飛んでいってしまった風船も忘れている。

「あなた、大丈夫？」 母親が今度は八千穂に訊いた。

「平気」

八千穂は悔しそうに風船を見上げながら言った。

穀溜は八千穂に手を差し出すと、助け起こした。

「ジェットコースター、苦手だったんだな」

「知らなかった」

よく見れば、八千穂の顔色が幾分蒼いような気がする。

「よし、一休みして昼飯にしよう。午後はあんまり激しいのはやめような」

八千穂はゆっくり頷いた。

夕方、家路につく人混みに紛れて、穀溜と八千穂も遊園地を後にした。

午後はアトラクションにはあまり乗らず、売店を見たり、園内を歩くキャラクターのぬいぐるみを眺めたりして過ごした。それでも二人は、充分遊園地気分を満喫した。

遊園地からバスに乗り、地元のK駅前に到着した二人は、駅前の

喫茶店に入った。チェーン店ではない、ちょっと洒落た喫茶店だった。ちょうど空いた窓際の席に座り、二人ともブレンドコーヒーを頼む。

「喫茶店初めて」 八千穂が呟いた。

「え？ 嘘だろ？」

「……根岸さんの店以外は初めて」

根岸さんの店というのは、八千穂の家の近所にある喫茶店らしい。父親と一緒に何度か入ったことがあるという。

「意外だな。コーヒー好きのチホなら、あっちこっちの喫茶店に行っているもんだと思っていた」

「喫茶店に入るのには勇気がある」

「まあ、女子高生ひとりじゃ入りづらいか」

「値段も高い」

「チェーン店は安いだろ？」

「家で飲んだ方が安い」

「まあ、そうだな」

一人喫茶店でだらだらする理由も趣味も八千穂にはないのだろう。そうこうしているうちに、ブレンドコーヒーが運ばれてきた。

最初の一口で、八千穂の顔色が変わった。

「美味しい」

「そうだな」

「この風味は初めて」

「喫茶店も、店によって違うからな」

「……」

しばし無言で、八千穂はコーヒーを堪能した。穀瑠はその様子を見ながら、幾分複雑な心境だった。一日かけた遊園地よりも、今の八千穂の方が楽しそうだ。

「なあ、チホ」

「なに？」

「今度、喫茶店巡りをしようか？」

「本当？」

八千穂が身を乗り出す。

「俺もそんなに知っているわけじゃないけど、一緒に調べよう。一日中ならだらと、じゃべったり、本を読んだりしてさ。遊園地とどっちがいい？」

「喫茶店」

八千穂は即答した。毅瑠は苦笑せざるをえなかった。

ゴールデンウィークに際して、毅瑠は道生に相談をしていた。八千穂と一緒に遊びに行くのに最初はどこがいいか？と。道生のお薦めは遊園地だった。自分はいつもそうだ、と言っていた。恋愛ごとでは道生の方が進んでいると思っている毅瑠は、そのアドバイスをいれることにした。それで、今日のデート——八千穂はデートだなどと思っていなさそうだが——となったのだが。

「道生……人それぞれってことだな」

「なに？」

「いや、なんでもない」

それでも今日は収穫がいっぱいあった。

八千穂は立ってお菓子を食べるのは行儀が悪いと言った。

八千穂はメリーゴーラウンドが綺麗だと言った。

八千穂はジェットコースターが苦手だった。

八千穂は喫茶店に入ったことがなかった。（近所の根岸さんのところは除く）

そして、八千穂と喫茶店巡りの約束をした。

八千穂は俺について少しでも新しい発見をしてくれただろうか、と毅瑠は思う。

こうして、少しずつ——少しずつ——

神坂八千穂という女の子が、毅瑠の中で大きくなっていく——

夢喰い事件 プロローグ

彼はそこをよく知っていた。

いつも、姉や友人たちとの待ち合わせに使っているからだ。

しかし、今日の待ち合わせはいつもと違う。今日は特別な日だ。

広場の時計を見ると、ちょうど待ち合わせの時間だった。でも、待ち人はまだこない。いいのだ。彼女はいつも十分ほど遅れてくるのだ。

——いつも？

今まで、彼女と待ち合わせたことがあっただろうか？

彼は思い出せなかった。でも、気にすることはない。これから、楽しいデートが待っているのだ。

まず、この駅前広場の噴水前で待ち合わせ。

彼女は十分ほど遅れてくる。真っ白なワンピースと、麦わら帽子、籐のバスケットで駆けてくるのだ。

それから、映画を観る。映画の後は、公園で彼女の手作りのお弁当を食べる。午後はウインドウショッピングを楽しんで、夕暮れ時には海が見える公園へ。二人はいいムードになるのだ。

彼は時計を見た。待ち合わせの時間から九分が過ぎていた。

駅の改札から人がはき出され始める。あの中に彼女がいる。そうだ——彼女は遅刻は九分だと言い張り、自分は十分だと主張する。

白いワンピース姿が駆け寄ってきた。

——ごめんなさい。九分の遅刻ね。

——大丈夫だよ。でも、遅刻は十分だ。

——細かいのね？

——細かいのは君だろ？

二人は見つめ合い、笑った。

空は一点の曇りもなく晴れ上がっている。

彼女との初めてのデートは、きつと絵に描いたように楽しいに違

いない。

夢喰い事件 1

照りつける太陽が石畳から陽炎を立ち上らせている。蝉たちの鳴き声が、これでもかと響き渡る。八月。神坂神社の境内は夏真っ盛りだった。

神社の裏手に建つ神坂家の居間では、高校生たちの声が喧し^{かまびす}かった。

「あー、純和風、日本の夏、落ち着くわねえ」

タンクトップにミニスカート、加えて見目涼しげなショートカットの水村作^{みずむらさく}が、盛大に団扇を仰ぎながら言った。畳に両足を投げ出し、なんとも恥じらいがない。

「作ちゃん！ 遊びに来てるんじゃないのよ」

その脇でノートパソコンとにらめっこをしている木谷希奈^{きたにきな}が口を尖らせた。こちらは麻の半袖シャツに膝丈スカートで、きっちり正座している。ヘアバンドに眼鏡というアイテムが相まって、幾分垢抜けない。

「希奈先輩、そんなに根を詰めなくても、全部夏休み明けのイベントじゃないですか」

ノートパソコンと繋がったプリンターの前で、吐き出される書類の校正をしていた向井毅瑠^{むかいかる}が言う。Tシャツにジャージの膝丈ズボン姿だ。

「縁田先輩^{えにしだ}はサッカー部の合宿ですか？ どこまで行ってるんですか？」

チューブトップに膝丈ジーンズで、毅瑠と並んで校正をしていた乙蔵綾音^{おとくらあやね}が訊いた。トレードマークのバレッタは、涼しげなイルカを模した物だ。

「長野県らしいよ」

何やら本を積み上げて調べ物をしていた山瀬道生^{やませみちお}が、顔も上げずに答えた。夏だというのに、長袖の綿のシャツを着込んでいる。

「はいはい、お疲れ様。神坂家特製麦茶と、西瓜の差し入れよ」
大きなお盆を持って居間に入ってきたのは、戸時夏目とときなつめと神坂八千穂かみさかやちほだ。二人は申し合わせたように白いワンピースを着ていた。夏目は、長い髪を珍しく二本の三つ編みにしている。八千穂はいつも通り、左一本だけの三つ編み姿だ。

夏目の言葉に、居間にいた全員が仕事を放り出した。

梅雨の時期に発生した〈二年C組テレパシーカンニング事件〉。あの事件以降、八千穂は正式に生徒会の仕事を手伝うようになっていた。加えて、なんのかんのと綾音も顔を出すようになった。生徒会としては、手伝ってくれる人数が多いに越したことはない。なにしろ、二学期は体育祭や文化祭などの行事が目白押しなのだ。この分だと、綾音も正式に生徒会事務員になることになりそうだった。その生徒会の面々が、神坂家の居間に集まっているのは理由がある。

夏休み当初は、律儀に学校の生徒会室に集まっていたのだが、これだけの人数が集まると狭い。申し訳程度のアエアコンはあるのだが、夏休み中は使用が制限されているため、とにかく暑い。あまりの暑さに閉口した夏目が、どこか涼しい場所を探せと命じたのだった。

図書館だ、喫茶店だ――と、ありきたりな場所が数々挙がったが、生徒会活動をする場所としては適さない。全員のネタが尽きた頃に、八千穂がぼそつと呟いた。

「うち」

純和風建築の神坂家は、エアコンはないものの、天井が高く広い。敷地が広く、木立も多い。高台にあるため風通しも良い――と、良いことづくめだった。

結果、ここが臨時の生徒会室となり、集まるのは今日で三度目だった。

「作先輩、力先輩はどうしたんですか？」 穀留が西瓜にかぶりつきながら訊いた。

「私が出てくるとき、まだ寝てたのよ」

作と力は双子の姉弟だ。

「この暑いのに、よく眠れるわね」希奈が心底感心したように言う。
「寝る子は育つって言うけどね」と夏目。

「げ……、これ以上あいつに大きくなれたら、姉の威厳はどうしたらしいの？」

最近、力に身長で追い越されたことが、作はかなりショックだったらしい。

「それはしょうがないんじゃないですか？ 男子と女子なもの」

綾音が慰めようとするが、あまり効果はなかったようだ。

「それにしても、ここどころ、力の奴寝過ぎのような気がするのよね。起きてきてもぼーっとしてて、変なこと言うし」

「変なことってなんですか？」と道生。

「夢の中でランデブー」

一瞬の静寂——そして、大爆笑。八千穂だけが首を傾げている。

「な、な、なんですかそれ？」綾音が畳の上で腹を抱えて悶えてた。

「綾音。ランデブーって何？」

八千穂が本気で訊いたことが、さらに綾音の笑いのツボを突いたようだ。既に声にならない。

「八千穂ちゃん。ランデブーっていうのは逢引きのことよ。簡単に言えばデートかな」そう答えたのは夏目だった。

「で、力君は夢の中で誰と逢引きしているの？」

希奈が目を輝かせて作に詰め寄った。どうやら興味津々のようだ。

「言わないのよ、これが」

「力君の好きな人って誰だっけ？」

「夏目でしょ？」

「あら、私？」

「じゃ、夢で夏目とランデブー？」

更なる笑いの爆弾が、神坂家の居間に落ちた瞬間だった。

夢喰い事件 2

「七穂小母様、お邪魔いたしました」

夏目の口上に続いて、全員が揃って頭を下げた。

「何のお構いもできませんで。また来て頂戴いね」

「はい。お言葉に甘えさせていただきます」

夏目は、その気になればいくらでも優等生を演じることができる。どうしたらこんな風に言えるようになるのだろう、と八千穂はいつもながら驚嘆していた。歳は二つ上。でも、二年後の自分が、夏目のような挨拶をするところなんて想像がつかない。

神社の鳥居の下から、綾音が手を振っていた。八千穂も小さく振り返した。

八千穂は、所属する一年F組の中では、未だに友達ができなかった。

四月の事件——俗に言う〈銅像生け贄事件〉——のとき、ちょっとした嫌がらせがあった。でも、夏目や穀瑠のお陰で、目に見えて八千穂にちょっかいを出す生徒はいなくなった。でも、それだけ。普段彼女に話しかけるクラスメイトはいない。

それでも、八千穂はあまり苦にしていなかった。元々、小中学校のときも友達はほとんどいなかった。なにより、今は生徒会の仲間たちがいる。穀瑠。綾音。夏目。そして、希奈、作、道生、太一、力——八千穂は正直に、好きな順番にその顔を思い浮かべた。もちろん、最後になったからといって、力が嫌いなわけじゃない。今日はいなかった力。八千穂は、最後になってしまった力への言い訳を、必要もないのにしきりに考えた。

気が付くと、夏の遅い夕日が、鳥居の朱色を溶かしたように空を染めていた。

八千穂が玄関に入ると、見覚えのない靴があった。

「八千穂。お客様が居間にいらっしゃっているの。後片付けはいい

わ」

七穂の言葉に、八千穂は黙って頷いた。しかし、生徒会の書類などは部屋に引き上げたい。七穂にそう言うと、廊下にまとめてあるとのことだった。

はたして、居間の前の廊下に、書類は綺麗に積み上げられていた。

「眠ったまま起きんのです」

その声は居間から聞こえた。父、神坂弦悟かみさかげんごのものではない。

「いつからですか？」今度は弦悟の声だ。

「もう二週間になります。最初は、朝寝坊程度だったのですが……段々酷くなりまして、起きていても譫言うわごとを言うようになって……」

「譫言？」

「その……夢の中で、誰かと会ったようなんです」

（――？）

八千穂は思わず耳をそばだてた。昼間の、力話を思い出したからだ。

「医者とは、ただ眠っただけだ、と言うんです。でも……なんというか……私は、何か悪いものに取り憑かれたんじゃないかと思いついて……。だから神坂さん、家内を一度、祓ってやってくれませんか？」

弦悟は神坂神社の神主だ。その弦悟を頼っての客のようだった。

「あら、八千穂。何やってるの？」

廊下でじつと聞き耳を立てていた八千穂は、七穂に声をかけられて飛び上がった。

「お母さん。ええと……」

「何をやっているんだ。お客様がお帰りだ」

居間の障子が開いて、弦悟が客を従って出てきた。客は五十がらみの、疲れた姿をした男性だった。

「じゃあ、神坂さん、よろしく願います」

玄関で何度も頭を下げ、その客は帰っていった。

勢い、八千穂も七穂も一緒に見送ることになった。玄関を閉める

と、弦悟が深いため息をついた。

「八千穂、〈魂見鏡〉たまみきょうを貸しなさい」

「ない」

「何？」

「毅瑠が持ってる」

「毅瑠って……誰だ？」

「ほら、以前お話ししたじゃない。八千穂のボーイフレンド」

七穂が言い、八千穂は小首を傾げた。

「な……何故だ？」

「あなた。八千穂だって年頃なんですから」

「馬鹿！ そうじゃない。〈魂見鏡〉を渡しただと？ つまり、そ

の何とかって奴は、お前のことを知っているってことか？」

「毅瑠」

「名前なんてどうでもいい！」弦悟は呆れたように首を振った。「……仕方がない。八千穂。明日、父さんと一緒に来なさい。さっきのお客さんのところだ」

何とかって男のことはまた今度だ、弦悟はそう言って自室に引き上げた。

「お母さん」

「なあに？」

「私、悪いことした？」

七穂が首を振った。

「八千穂がそうした方がいいって、そう思ったんでしょ？」

「そう」

「なら、何も悪いことはないわ」

ぽんぽん、と軽く八千穂の頭を撫でて、七穂は台所に向かった。

取り残された八千穂は、書類の束を抱えたまま、毅瑠のことを考えた。

夢喰い事件 3

翌日の午後。弦悟は御祓いの準備を整えると、八千穂を従って家を出た。弦悟は神主装束を、八千穂は巫女装束を身につけている。

お互い、昨日の晩から一言も口をきいていなかった。しかし、元来二人とも無口なので、それがどうということもなかった。

炎天下、大汗をかきながら、二人は黙々と歩いた。

「これは、八千穂のおばあちゃんから聞いた話だ」

前を歩く弦悟が口を開いた。後ろで八千穂が頷く。弦悟には八千穂が見えていないのだが、親子の会話はそれでも成立する。

「お前のお母さん……七穂が生まれたとき、おばあちゃんは泣いて喜んだそうだ。何故だかわかるか？」

八千穂が首を振る。それも、弦悟は見えていない。

「自分の子供だ、当然嬉しい。しかし、それ以上に、七穂の〈魂糸〉たまいとは綺麗な環を描いていた」

弦悟は言葉を切った。

八千穂は赤ん坊の七穂を思った。子供の〈魂糸〉は綺麗だ。お母さんの〈魂糸〉は、さぞ綺麗だったに違いない。

「この子は、〈霊鬼割〉ひきわりの宿命から逃れた。そして、自分の命もまた永らえた……」

蝉時雨せみしぐれが空を満たしていた。夏の日射しが町を脱色している。

立ち止まり振り返った弦悟の顔は、町と共に脱色されてしまったように見えた。

「八千穂」

八千穂も立ち止まった。

「子供を産むということは、その子の〈魂糸〉が切れてはみ出していたら、〈髪逆〉を譲るということだ。お前自身が命を永らえる術を、その子に譲らなければならないということなんだぞ」

「お父さん」

「なんだ？」

「私が子供を産むの？」

八千穂が小首を傾げた。脱色されていた弦悟の顔に、急激に色が戻ってくる。

「いや、あのな……何とかって男と……」

「毅瑠」

「そいつだ。ボーイフレンド何だろ？」

「友達」

「え？」

「毅瑠は友達。綾音も夏目も、生徒会のみんなも」

弦悟は口を大きく開けたまま固まった。そして、目に見えて脱力する。

「なんだ……七穂の奴。ボーイフレンドだなんて言うから……」

「ボーイフレンドと友達は違うの？」

「え？……いやあ、どうだろうな。最近の事情はよくわからん……」
慌てて言い繕った後、弦悟は静かな口調に戻った。「……ちよっと、お父さんが先走ったみたいだな。でも、さっきのおばあちゃんの話は、覚えておきなさい」

弦悟が八千穂の頭に軽く手を乗せる。八千穂は小さく頷いた。

「よし、じゃあ行くか」

さっきまでの様子が嘘のように、弦悟の足取りが軽くなっていた。

「友達、友達」と鼻歌まで歌っている。それに触発されて、八千穂は力のことを思い出した。

「お父さん」

「ん？」

「私の友達でも、眠る時間が長くなって、起きても譫言を言うようになった人がいる」

「何？」

「しかも、夢の中でランデブー」

「……」

事態は、冗談では済まされない事件へと発展しようとしていた。

夢喰い事件 4

そこは古ぼけたアパートの一室だった。

弦悟と八千穂は、玄関からまっすぐ寝室に通された。蒲団を二組敷けば一杯になってしまうその部屋で、彼女は寝ていた。

「娘の八千穂です」弦悟が昨日の男に紹介をした。

「茂庭もにわです。こちらが家内の幸江きちえです。どうか、よろしくお願いいたします」

茂庭は弦悟と八千穂に深々と頭を下げた。弦悟は軽く頷くと、幸江の傍らに膝を付いた。八千穂は立ったまま見下ろす。幸江は、普通に眠っているようにしか見えなかった。しかし、もう一週間もこのままなのだという。

弦悟は幸江の肩を揺すってみた。始めは軽く、やがて大きく。続いて軽く頬を張る。最後は大きな声で活をいれる。しかし、幸江はまるっきり反応しなかった。緩やかに上下する胸だけが生きていることの証だ。弦悟は幸江のまぶたを無理やり開いてみた。瞳球が小刻みに動いていた。

「夢を見ているようですね。しかし……」

まぶたを強引に開けば、部屋の蛍光灯の光が目に入る。普通なら、その眩しさに反応しそうなものだが、それもなかった。

「一通りのことはやってみました」と茂庭。

「まあ、そうでしょうな」

弦悟と八千穂は、幸江が寝ている蒲団の脇に簡易の神棚を設えた。榊を差し、清めの水を撒く。そして弦悟が神棚の前に正座をした。

「では、始めさせていただきます」弦悟は大幣おおぬさを振り、祝詞のりとを唱え始めた。「たかあまはらにかむづまります——」

部屋の隅では、茂庭が手を合せて一心に拝んでいた。その目はきつく閉じられている。それを見て、弦悟が八千穂に目配せをした。八千穂は小さく頷いた。その右のうなじ辺りから、淡く輝く光の

束が現れる。虹色に輝くそれは、見る見る長くなり、腰までの長さの三つ編みを形作った。

八千穂は〈靈鬼割^{ひきわり}〉の力で、幸江の〈魂糸^{たまいと}〉を視^みた。命そのものである見えない命の糸〈魂糸〉——幸江のそれは随分と減っていた。しかし、〈魂糸〉が減っていることと、目を覚まさないことの因果関係がよくわからない。減っていても、環^わは切れているわけではない。やはり、医者が気付かなかっただけで、何かの病気ではないのか——

と、幸江の〈魂糸〉が体の外へ伸びたように見えた。それはあまりにも一瞬で、八千穂は気のせいかと思った。しかし、幸江の〈魂糸〉は減っていた。

(何?)

それは——細い、細い糸だった。通常の〈魂糸〉よりもさらに細い——

(これも……〈魂糸〉?)

その微かな糸は、幸江の頭付近から出て、閉めきられた雨戸をすり抜け、外へと続いていた。八千穂は意識を集中した。気を抜くと見失ってしまいそうだった。でも、間違いない。

この糸はどこかに——いや、誰かに繋がっている。その誰かは、この細い〈魂糸〉を経由して、幸江の命を少しずつ吸い上げている。〈魂糸〉が吸い上げられる瞬間、この細い糸は通常の〈魂糸〉の太さになる——それが、さっき八千穂が見たものだろう。恐らく、彼女が眠り続けているのも、この細い〈魂糸〉の先に存在する何者かが原因だろう。眠る人間から〈魂糸〉を吸う者——〈魂糸〉を使って他人を傷つける存在——鬼。外へと続くこの糸を辿れば、その先にきつと鬼がいる——

しかし、八千穂は素早く背後へ手を回すと、解けた右の三つ編みの中から漆黒の剣〈髪逆^{かみさか}〉を抜き、それを振るった。糸は手応えもなく千切れた。

これには弦悟が驚いた。祝詞が止まる。

異変に気がついて茂庭も顔を上げたが、そのときには〈髪逆〉は既に八千穂の三つ編みの中へと収まっていた。

茂庭がもの問いたげな表情で見ている。弦悟が一瞬言葉に詰まる中、八千穂は蒲団を跨ぐと、幸江の頬を思い切り張った。そして、雨戸を乱暴に開ける。窓から、強烈な夏の日差しが部屋に飛び込んできた。

「あんた、何をする！」

驚いた茂庭が八千穂に詰め寄ろうとしたとき、幸江がむずかった。はっ、と茂庭が幸江に近寄る。

「おい！」

「あら、もう朝？」幸江が伸びをした。

「もう昼」八千穂が窓際でぶっきらぼうに言う。

巫女装束の八千穂。神主装束の弦悟。そして神棚――室内の様子を見渡して、幸江は口をあんぐりと開けた。

「あんた、これは何の真似よ？」

それを合図に、茂庭がわっと泣き出し、幸江に抱きついた。

弦悟はその様子を見ると、さっさと神棚を片付け始めた。

夢喰い事件 5

茂庭夫婦のお辞儀に送られて、神坂父娘はアパートを後にした。閉めきつた寝室は蒸し暑く、二人とも汗だくになっていた。

「ちょっと休んでいこう」

弦悟はそう言うと、近くの喫茶店へと入った。神主と巫女の来店に先客たちは目を丸くしたが、店の主人は笑顔で二人を迎え入れた。「いらっしゃい、神坂さん。仕事帰りですか？」

「まあね。暑くてなあ。一休みさせてくれ」

主人は二人を、冷房のよく効いた席に案内してくれた。父娘は揃ってアイスコーヒーを注文した。

「しかし、いきなりだったな」出されたアイスコーヒーに盛大にガムシロップを入れながら、弦悟が八千穂に言った。「お父さんには見えなかった。説明しなさい」

八千穂はブラックでアイスコーヒーを啜り、一息ついてから説明を始めた。幸江の頭から出ていた細い細い〈魂糸〉らしきもの。そして、それが〈魂糸〉を吸い上げたこと――

「それは〈魂糸〉というより〈夢糸〉ゆめいとだな」

「〈夢糸〉……あれが？」

話には聞いたことがあった。環が切れていないにもかかわらず、〈魂糸〉の一部が体の外にはみ出る唯一の現象――それが〈夢糸〉だという。しかし、実際に見るのは初めてだった。

「〈夢糸〉は、〈魂糸〉がほつれて漂い出るものらしい。だから環は切れず、糸も細い。普通はたいした長さにはならず、本人の周囲を漂うだけだ。たまに〈夢糸〉同士が絡むと、複数人が同じ夢を見る……なんて現象が起きる」

「〈夢糸〉から〈魂糸〉が吸い上げられるなんて、聞いたことない」「うん……しかし、〈夢糸〉が〈魂糸〉からほつれたものなら、それは〈魂糸〉と同じだ。〈魂糸〉でできることは、〈夢糸〉でもで

きるだろう。どこかの誰かが、他人の〈夢糸〉を絡め取って、そこから本体の〈魂糸〉を吸うこともできるかもしれない。それは、辿ってみればわかったはずだ。何故切った？」

「あのままだと衰弱する」

「なるほど。でも、それは〈霊鬼割〉らしくない考え方だな。お父さんの知っている八千穂は、もっとクールだったはずだ」

「そう？」

「ああ。おばあちゃんがそういう人だったからね」

確かに、今まで鬼に対する以外に、〈霊鬼割〉の力を使うことはあまりなかった。今回のような場合は、あの糸を辿って鬼を探すのが、最も効率的なやり方だったはずだ。鬼が力を失えば、結果的に幸江も目覚めただろう。でも――八千穂はそれでは間に合わないと思った。

「毅瑠」八千穂は呟いた。「毅瑠なら、きっとそうしろって言う」それを八千穂は確信できた。だから、自分の判断は間違っていない。

「その毅瑠とやらは、〈霊鬼割〉がどういう存在なのかを知っているのか？ 知った上で、なお被害者のことまで考えろと？」

八千穂は頷いた。

弦悟はグラスに残った氷を口に放り込むと、渋い顔をしてそれをかみ砕いた。

夢喰い事件 6

神坂家の居間には、いつもの生徒会の面々が集まっていた。とっても全員ではない。太一は相変わらずサッカー部の合宿で不参加だったし、力もいなかった。

「縁田君は力仕事担当だからね。二学期にがんばってもらうわ」
何の拘りなく夏目が言っただけだ。

確かに、この集まりには何の強制力もない。しかし、生徒会役員をやるような人間は基本的に律儀者が多い。強制されなくても、こうして集まってくるのだった。

仕事が一段落したところで、七穂が差し入れを持って現れた。見目涼しげなコーヒーゼリーだった。

「八千穂のお気に入りなのよ」

それは、四月の〈銅像生け贄事件〉の折、毅瑠が神坂家に持参した物だった。それを売っている店を教える約束で、毅瑠は八千穂の協力を取り付けた。

「向井さんに教わったの」

内緒話をするように、七穂は口の脇に手をあてて言った。しかし、当の八千穂は、既にコーヒーゼリーに夢中で気にも止めていない。

「隅に置けませんね」と道生が約束通りの答えを返す。

「あら、でも美味しい」と希奈が声を上げる。

「このお店知ってます。ケーキしか食べたことなかったです」と綾音。

「八千穂ちゃんのこんなに嬉しそうな顔、始めて見たわ」と夏目。完全に肴にされてしまった毅瑠は、しかし、別のことに気を取られていた。

「作先輩？　ここ、先輩に教えてもらったお店ですよ」

「そんなこと、あったっけ？」

嫌な沈黙が下りた。普段の作ならば、自分が毅瑠に教えたことを

アピールし、大いにからかうはずの場面だ。それが、心ここにあらずといった状態だ。穀瑠が気にするのも仕方がないことだといえた。結局、その日は最後まで、作はそんな調子だった。

「お願いがあるの」

作が八千穂にそう切り出したのは、全員が帰り支度を始めた頃だった。

「何？」

「ここじゃあ、ちょっと……」

作が他人の目を気にするのも珍しかった。八千穂は、空いたグラスを乗せたお盆を持って台所へと向かった。作が手ぶらでそれに続く。台所の手前の廊下で二人は立ち止まった。

「お祓い……お願いできないかな？」

「お祓い？」

「茂庭さんの奥さんの話、聞いたわ」

八千穂は、一昨日訪問した夫婦のことを思い浮かべた。そのときの、道すがら弦悟と交わした会話も蘇る。あのとき、八千穂が力のことを告げると、弦悟はこう答えた。

「その友達が、茂庭さんの奥さんと同じとは限らない。八千穂くらいの歳の子はよく寝る。寝る子は育つっていうしな。あまり先走るんじゃないぞ」

そのときの八千穂は、もやもやしたものを抱きつつも頷いたのだ。つたが――

「力？」

うん、と作が頷いた。

「また後で来て。お父さんに話をする」

八千穂の言葉に、作は悄然とした顔で頷いた。

夢喰い事件 7

茂庭幸江の〈夢糸〉を切って以降、八千穂は手がかりを失っていた。

幸江の〈夢糸〉を切ったことを悔やんではいなかったが、鬼の存在が確定的なのにもかかわらず、その手がかりが見つからないことに焦りが募った。

何度か、力を訪問して確認しようかとも考えた。しかし、なんと行って訪問すれば良いかわからなかった。弦悟の言う通り、以前の八千穂なら、もっとクールに事態に臨めていたのかもしれない。問答無用で訪問し、説明の必要など感じなかったに違いない。しかし――力と作の顔を思い浮かべると、なぜか足がすくんだ。

力が幸江と同じ状態だとしたら、家の外からでも〈夢糸〉を確認できるかもしれない、とも考えた。しかし、〈夢糸〉は非常に細く、気配も〈魂糸〉のそれと比べてないに等しい。珍しい現象ではないにもかかわらず、八千穂が今まで見たことがなかったのは、それほど微かで、捉えづらいからだ。〈霊鬼割〉は、〈魂糸〉を見ている――というより、気配を感じている。もちろん、視覚的に見えているのだが、相対的に気配に重きを置く。だから、気配がほとんどない〈夢糸〉は、〈魂糸〉からほつれたものだから〈魂糸〉と同じ、と言われても見つけにくいのだ。幸江のときも、目の前で、〈夢糸〉経由で〈魂糸〉が吸い上げられなかったら、その存在に気が付いたかどうか怪しい。だから、力の家の外から〈夢糸〉を確認できるかどうか――八千穂は自信がなかった。

なら、どうすれば良いのか？ その答えが見つからない。

「眠ったまま起きないんです」

作の言葉は、三日前の茂庭と同じだった。

神坂家の居間には、弦悟と八千穂、そして作が座っていた。皆と一緒に一旦神坂家を辞した作は、三十分程して、再びその門を叩い

たのだった。

「いつからだね？」と弦悟。

「二日前からです。呼んでも、叩いても、起きないんです」

「それで？」

「近所の茂庭さんの奥さんが、やっぱり起きなくなっちゃったのを、神坂神社の神主さんにお祓いしてもらった目が覚めたって聞いて……。だから、お願いします。力にもお祓いをしてあげてください」
作は畳みに頭をこすり付けた。

「頭を上げなさい。娘の友達にそんな風にされたら、居心地が悪い」

「それじゃあ……」

「医者には診せたのか？」

「眠っているだけだって」

「……」

「でも、私たち双子だし、わかるんです。あいつ……なんか変なのに取り憑かれています」

作の目に涙が浮かんでいた。膝の上で握った拳が白い。

「わかる？」八千穂が小首を傾げた。

「ええ。力と私はよく同じ夢を見たの。さすがは双子だねって、よく言われたわ」

双子は〈夢糸〉が絡みやすいのだろうか、と八千穂は考えた。

「さすがにこの歳になるとね、外ではそんなこと言わないけど。でも、同じ夢を見ているなって、それはわかるのよ」語る作の目は優しい。「昔から、力は寝穢いぎたなかったから、最初は気にしてなかったの。でも、一週間くらい前から、夢でランデブーなんて呟き初めて……。それで、昨日……」

作は、ごくりと唾を飲み込んだ。目つきが陰しくなる。

「K駅前の広場に噴水があるじゃない？ あそこに力がいるのよ」

「夢？」

「そう、夢の中の話よ。私は力の隣に立っているんだけど、あいつ気が付かないの。広場の時計がちょうど十時を指して、力がそわそ

わし始める。十分ほどすると、駅から一人の女の子が出てくるの。白いワンピースに、麦わら帽子、籐のバスケット……時代錯誤もいところだけど……で、彼女が言うのよ『ごめんなさい。九分の遅刻ね』って」

「九分……」

「そ。で、力が『大丈夫だよ。でも、遅刻は十分だ』

『細かいのね』

『細かいのは君だろ?』

『あなたのために服を選んでいたのよ』

『とても似合うよ』……」

作は臨場感たっぷりに演じ、それから苦笑した。

「なんじゃそりゃって、べたべたな会話の後は、絵に描いたようなデート。映画、手作りのお弁当。ウインドウショッピング。アイスクリーム。お茶。最後は海に見える公園でキス」

「キス?」

「笑っちゃうわよね。でもまあ、力らしいって言えば力らしい。それだけならね。でも、またねって言って別れた後……」

「?」

「噴水の場面に戻るのよ」

八千穂は、作の話は信用できると思った。力が夢の螺旋にはまり込んでいる——しかし——

「その話、誰かにしたかい?」弦悟の声は冷めていた。作が首を振る。

「そうか。あまりしない方がいい。変な風に思われるからね」

「な……」作がかつとなって腰を浮かせた。「嘘じゃありません!」

「誰も嘘だなんて言っていない。ただ、夢の話だ。確かめる術がない」

身を乗り出そうとした八千穂を、弦悟が手で制した。

「お祓いの話は、ご両親には?」

「まだです」

「そうか。では、代金はどうするね？」

作がはっとした。「いくらですか？」

「子供が払える額じゃない」

「でも！」

腕組みをした弦悟と、膝を付いて身を乗り出した作が、しばし睨み合った。

やがて、弦悟が静かな声で諭すように言った。

「今日のところは帰りなさい」

作が俯いた。涙が畳にぱたぱたと落ちる。作は無言で立ち上がると、おざなりに一礼をして飛び出していった。

追いかけようと立ち上がった八千穂を、またも弦悟が制した。

「今はやめておけ」

「お父さん」

「それよりも」弦悟は意外なことを言った。「向井毅瑠君を呼びなさい」

夢喰い事件 8

日はとつぷりと暮れていた。夜の神社には特別な雰囲気がある。暑さに紛れて、暗がりから何かが湧いて出てきそうだった。

神坂家の居間で、毅瑠は小さくなって座っていた。目の前には弦悟と八千穂がいる。今、七穂が麦茶を出してくれたところだ。

弦悟は腕組みをして毅瑠を見据えている。しかし、まだ一言もない。八千穂は途方に暮れている。携帯電話で八千穂に呼び出された毅瑠も^{いっ}沈んや、である。

見かねた七穂が口を開いた。

「あなた。向井毅瑠さんよ」

毅瑠はとりあえず頭を下げた。八千穂と知り合って四ヶ月以上経つが、父親の弦悟に会うのは初めてだった。弦悟はむっとりとしたまま頷き、麦茶に手を伸ばした。しかし、相変わらずの無言。

また沈黙。そして――

「まだ子供のこと心配している」

ぼそっと八千穂が呟いた。

不意を突かれた弦悟は盛大に麦茶を吹き出し、咳き込んだ。

「ば、馬鹿！ 何を言い出すんだ」

さっきまでの威圧感はどこへやら、弦悟は慌てふためいた。

「あなた」

「な、なんだ？」

「そんな馬鹿な心配をなさっていたんですか？」

「馬鹿とはなんだ！ お前がボーイフレンドなどと言うから……」
呆氣に取られている毅瑠に、七穂が言った。

「みつともないところをお見せしてごめんなさいね。この人、向井さんに焼き餅を焼いているのよ」

「はあ……」

「大方、ボーイフレンドと聞いて、短絡的に孫の心配でもしたんで

しょ」

「まご？」

今度は毅瑠が慌てた。八千穂を見て、見る見る自分の顔が赤くなるのを自覚する。そんな毅瑠の様子を、八千穂は小首を傾げて眺めていた。

夢喰い事件 9

「向井毅瑠です」

「神坂弦悟だ」

改めて仕切り直し、二人は名乗り合った。

「こんな時間に呼び付けて済まなかったね。お願いしていた物は持ってきてくれたかな」

毅瑠は〈魂見鏡〉たまみきょうをテーブルの上に置いた。

「お嬢さんからお借りしたままになってしまつて。お返しします」

「君は、これがどんな物か知っているね？」

「〈魂糸〉を見るための物です」

「そうだ。では〈霊鬼割〉がこれを持つ意味はあまりない、というのはわかるかな？」

「そういえば……」

「〈霊鬼割〉という存在は、〈魂見鏡〉などなくても〈魂糸〉を見ることが出来る。八千穂の場合なら、右の三つ編みを顕現させずに〈魂糸〉を見ることが出来るという利点はあるが、本人はあまり気にしていないようだった。だから君に預けたのだろう」

「じゃあ、これは……」

「うん。本来は〈霊鬼割〉とは別の者たちが使っていた物だ。かつて、〈魂糸〉を操る術は数多あまた存在した。術者の中には、素で〈魂糸〉を見ることができない者もいた。しかし、見えなくても〈魂糸〉は存在し、操ることもできる。そんな者たちが使ったのがこれだ。神坂家の祖先が、どこかで手に入れたんだね」

弦悟は〈魂見鏡〉を手にとると、顔の高さに掲げた。

「片眼鏡というのは、本来眼窩がんかに直に填めるものだ。だから、人によってサイズが違う。見てご覧、これは鼻当てを後から溶接してある。手にいれた〈魂見鏡〉を、誰でもかけられるように改造したんだね。きつと、多くの術者の手を経てきたんだろうな。そして……」

そんな術者の一族の一つが、〈夢飼い〉だ」

「ゆめかい……」

「古来、夢は意味を持つとされた。夢占や夢解は政治の行方を左右した。〈夢飼い〉というのは、人が見る夢を自在に操った者たちだ。自らの出世のために力を使った者、金で頼まれて力を使った者、それは色々だったろう」

弦悟は麦茶を一口飲んだ。そして毅瑠を見据えた。

「向井君。君の名字は〈夢飼い〉の一族の末裔の可能性がある」

「それは、以前チホにも言われたことがあります」

「うん。八千穂の考えそうなことだ」

え？ と、八千穂が驚いた。

「違うんですか？」と毅瑠。

「考えても見たまえ。この日本に〈向井〉という名字がどれ程あると思う？ 言葉遊びとしてなら面白い。でも、本当のところはわからないし、さほど重要でもない」弦悟は〈魂見鏡〉を毅瑠に突きつけた。「重要なのは、君がこれを使う才能を持っている、その一点だけだ」

毅瑠が〈魂見鏡〉を受け取った。

「君は八千穂の右の三つ編みに触れただけで、それが使えるようになったという。これは恐るべきことだ。私も使えるが、私の場合は〈髪逆〉で〈魂の要〉を貫いた末に得た力だ」

これには毅瑠は驚いたが、八千穂も目を丸くした。知らなかったらしい。

「八千穂にも話していなかったね。神坂神社に婿養子として入るとき、先代の〈霊鬼割〉、つまり八千穂のおばあちゃんに施されたものだ。それが、七穂との結婚の条件の一つだった。そこまですれば、誰でも〈魂見鏡〉を使えるようになる」

弦悟は試すような目で毅瑠を見つめた。

「……俺は、何をすればいいんですか？」

「うん。〈魂見鏡〉は見るだけのものだが、手練は〈霊鬼割〉以上

に世界を見通す。君にはその力で、辿ってもらいたいものがあるんだ」

そして弦悟は、茂庭幸江のこと、〈夢糸〉のこと、力のことを話し始めた。

夢喰い事件 10

既に夜の十一時を回っていたが、三人は弦悟の車で水村家へと向かった。

「恐らく、力君は茂庭さんの奥さんと同じ状態だろう。何者かにへ夢糸」に絡め取られているに違いはない」

弦悟は作の話をそう断じた。

「なら」と、八千穂が抗議の声を上げる。それなら、なぜ作を追い返すようなことを言ったのか。早々に、共に水村家に向かえば良かったではないか。

「そして、また〈髪逆〉で切るのか？」

それでは振り出しだ、と弦悟は言った。

今現在、幸江や力のように、夢の世界に捕らわれている人がどれ程いるのだろうか。八千穂の目に止まった二人だけが例外で、他に被害者がいないと考えるのは、あまりにも樂觀的すぎると思われた。どれ程の範囲に被害が及び、夢に捕らわれた人はどうなってしまうのか――

八千穂は幸江を思い出す。彼女の〈魂糸〉は随分と減っていた。気付いてすぐに〈夢糸〉を切りはしたものの、寿命は大幅に減ってしまっただろう。

かつて、八千穂に〈霊鬼割〉の手ほどきをした祖母は言った。鬼に〈魂糸〉を喰われてしまった人は、それが寿命――宿命なのだと。それを八千穂が気に病む必要はないのだと。鬼狩りに専念することが、結果的に被害を減らすのだと。

鬼の施術こそ大事とした祖母の信念だったのか、いずれ悩むことになるであろう孫娘への思い遣りだったのか、それは今となってはわからない。八千穂の祖母は八年前に他界してしまっている。

中学生までの八千穂は、その教えに疑問を覚えたりはしなかった。自分が、〈霊鬼割〉に関わるのは〈鬼〉そのもののみ。〈魂糸〉を

引きずり出されたり、喰われたりした人は、そういう運命だったのだと断じてくることができた。

しかし——毅瑠に会ってから何かが変わった。

鬼の〈魂糸〉の環が繋げるなら、被害者の〈魂糸〉もそうするべきだと、毅瑠は言った。その考え方は八千穂には新鮮だった。そして、正しいことに思われた。

だから、四月の事件のときも、七月の事件のときも、頼まれるままに生徒たちの〈魂糸〉を繋いだ。幸江のときも、考えるより先に体が反応した——

（私……）八千穂は思う。（〈霊鬼割〉として駄目になったのかな……）

神坂家に婿養子として入った弦悟は、八千穂の祖母から、〈魂糸〉について、〈霊鬼割〉について、鬼について、いろいろと教えを受けたようだった。だから、祖母亡き後、八千穂に〈霊鬼割〉のことを教えてくれたのは弦悟だった。しかし、鬼の施術に関して、八千穂のやり方に口を挟んだことはなかった。それが今回は、まるでお前のやり方では駄目だと言わんばかりだ。

「着いたぞ」との弦悟の声に、八千穂は我に返った。八千穂が千々に思い悩んでいるうちに、車は水村家に到着していた。

そこは、比較的新しい分譲マンションだった。

「どの部屋だね？」

弦悟の問いに、毅瑠は三階の窓を指さした。

「見えるかい？」

毅瑠は〈魂見鏡〉をかけて目を凝らした。八千穂には何の気配も感じられない——

すつ、と毅瑠が空の一点を指した。その指が空をゆっくりとなぞる。八千穂はその指先が示す先に意識を集中する——そして——

見つけた。細い——細い、魂の糸——〈夢糸〉。微かに感じる気配は力のか——

「俺では駄目だ」

弦悟も〈魂見鏡〉を覗いていたが、すぐに諦めて毅瑠に返した。

毅瑠はそれをかけ直すと、〈夢糸〉を辿って歩き始めた。

「かなり遠くまで続いています」

「よし、時間との勝負だ」弦悟が言う。

八千穂は、力が眠り、作が泣いているであろう、三階の窓を見上げた。

夢喰い事件 11

翌日、神坂家の居間は随分と寂しかった。

集まったのは、夏目、道生、希奈、綾音、そして八千穂。太一は相変わらず合宿。水村姉弟も来ていない。そして毅瑠は、昨晚以降、弦悟と共に力の〈夢糸〉を辿り続けている。

弦悟が毅瑠に託したこと――それはもちろん、力の〈夢糸〉を辿ることだった。八千穂の顕現した三つ編みに触れただけで能力を発現した毅瑠は、弦悟よりも安定して〈魂見鏡〉を使うことができた。気配に頼らない分、視認能力は八千穂よりも高い。

しかし、〈夢糸〉がどこまで続いているのかわからない以上、これは賭けだった。辿り切れなかった場合、力が危ない。

「二日だ」弦悟は八千穂に言った。「丸二日待て。それ以上は力君が心配だし、向井君も集中力が持たないだろう。だから二日経っても辿り切れなかった場合は、力君の〈夢糸〉を切りなさい」

それは、二日間、力を今のままで放置しろということだった。八千穂の脳裏に、幸江の〈魂糸〉が吸い上げられた光景が蘇る。――なぜ、毅瑠は今回に限って、すぐに力を助けろと言わないのだろうか。それが八千穂には解せなかった。

八千穂の思いを察したのか、出発前に毅瑠が言った。

「できるだけ急ぐよ。力先輩のために。それに、ここで鬼を見つけないと、次は作先輩かもしれない。乙蔵さんか、戸時会長かもしれないだろう？」

その言い方はずるい、と八千穂は思った。力なら良いのかと、八千穂は珍しく天の邪鬼に考えた。しかし、毅瑠は八千穂の扱いを心得ていた。

「それよりも、二日間の俺のアリバイ、頼むな」

それは、八千穂が最も苦手とする類の頼み事だ。一瞬の思考停止に陥っている間に、毅瑠と弦悟は行ってしまった。そして、今日に

至る――

「どうかしたの？」

ぼーっとしている八千穂を気にして、綾音が覗き込んできた。

結局、昨晩は時間が深夜だったこともあり、八千穂は向井家に何の連絡もいれなかった。そして、今でもいれることができていない。

「アリバイ……」

「え？」

「毅瑠のアリバイが必要」

「向井君、何かしたの？」

綾音は、毅瑠が罪でも犯したのかと、そんな誤解をしたようだった。

「違う。ええと……」

「神坂の親父さんと一緒なのか？」と道生が訊いた。「いつも駐めてある車がなかったからさ」

「八千穂ちゃんのお父さんのお手伝いってことは、アルバイト？」と希奈。「それが、向井君のご両親には内緒なのね？」

八千穂は彼らの顔をまじまじと見た。何故、そんなことがわかるのだろうか。まだ何も言っていないのに――

「生徒会の合宿ってことにでもすればいい」道生がそう提案し、綾音が賛同した。

「でも、八千穂ちゃん、嘘つくの下手そうね」希奈が笑う。

そこで、今まで黙って聞いていた夏目が口を挟んだ。

「じゃあ、本当の合宿にしちゃいましょう」

え？ と全員が夏目に注目する。

「向井君のアリバイはいつまで必要なの？」

「明日の夜」

夏目はすっと立ち上がると、台所にいる七穂に声をかけた。

「七穂小母様、お願いがあるんですけど」

話ほとんどん拍子に進み、神坂家に夜七時、荷物を持って再集合ということになった。話の展開の速さについて行けない八千穂の脇

で、道生が深いため息をつく。

「結局、毅瑠の家に連絡するのは俺なのに、合宿には参加できないんですか？」

「ごめんね、山瀬君。女五人に、男一人じゃね」夏目が悪びれもせずと言った。

「わかりました。明日また来ます。毅瑠の家には上手く言っておきますから」

「あ……」

八千穂が口を開きかけたのを、夏目が止めた。

「いいのよ。山瀬君から連絡があれば、向井君のご両親も心配はしないわ。男の子って意外と信頼されているものなのよ。それに、向井君だって、携帯電話持って行ってるんじゃない？」

「……」

それでは、合宿をする必要などないのではないか――

ふふふ、と夏目が笑った。「それはそれ、これはこれよ」

じゃあ後でね、と手を振って、夏目たちが鳥居をくぐった。八千穂はただ呆気にとられて見送ることしかできなかった。

夢喰い事件 12

神坂家に再集合した面々は、まずはお風呂にしようということになった。

「合宿と言えば、裸の付き合いよね」と言ったのは夏目で、それを聞いて顔を赤らめたのは希奈だった。

ガス炊きの神坂家の風呂は大きかったが、それでも、一度に四人で入れるほどの広さはない。結局、二回に分けて、二人ずつ入ることで落ち着いた。

「八千穂、肌綺麗ね」湯船に浸かりながら綾音が言う。

「綾音は胸が大きい」

たいした感慨も込めずに八千穂が言い、綾音は「そうかしら」と言って湯面に視線を落とした。

入浴の組み合わせを決めるにあたって、夏目、希奈、綾音が、三人とも八千穂と入りたがったことに、八千穂は驚いた。最終的には、三年生の二人が綾音に譲ったのだが、先に上がった夏目と希奈が、八千穂の脱衣を興味津々で眺めていたのには閉口した。

「向井君のお手伝いって、例の件？」

綾音は、〈魂糸〉のことも、〈霊鬼割〉のことも知っている。七月の事件のとき、彼女は渦中の人だったのだ。

八千穂は頷きながら湯船に入ると、綾音と向き合った。力のことをどう説明しようかと考える。しかし、綾音は全然別のことを訊いてきた。

「八千穂、向井君とはどこまでいったの？」

「作の家まで」

綾音の目が点になる。

「作先輩の？……質問が悪かったかしら。八千穂は、向井君とデートとかしないの？」

「デート？」

「そ、デート」

八千穂は首を捻り、昨日の作の言葉を思い出した。

「駅前の噴水で待ち合わせて……」

綾音の目が輝く。うんうん、とにじり寄ってくる。

「服選んで遅刻。映画。お弁当。買い物。アイスクリーム。海の見える公園。……キス？」

キスという発言に、おーっと盛り上がった綾音だが、すぐに気が付いた。

「八千穂、それなんかで読んだの？」

「作に聞いた。デートでしょ？」

八千穂の左半分だけの三つ編みは、今は解かれて湯の中を漂っている。綾音はそれを指ですくっていじりながら、優しい口調で言った。

「八千穂は、今言ってみたみたいなデート、向井君としてみたいの？」

八千穂は考えてみたが、よくわからなかった。毅瑠と一緒に出かけたことはある。でも、それがデートだったのかどうか――

「じゃあ、八千穂が向井君と一緒にしたいことって何？」

「一緒に……」

「一緒に？」

「本が読みたい。コーヒー飲みながら」

その静かな光景を想像すると、八千穂はなぜか幸せな気分になった。

「それがデートだよ」

「待ち合わせは？」

「なくてもいいの。ついでに言えば、映画も、買い物も、お弁当も、アイスもキスもなくてもいいの。二人が楽しければそれでいいの」

「……」

「うふふ」

「何？」

「嬉しくて」

「お風呂が？」

「そうね。八千穂とのお風呂も、こういうお話もね。うふふ」

綾音は本当に嬉しそうだった。

なんだろう——今まで、こんな風に女の子同士で話をしたことはなかった。一緒にお風呂に入るのだって始めてだ。二人で浸かる湯船は、少し狭いけれど、不思議な心地よさがあった。

「上がるうか。先輩たちが待ってるわ」

綾音の肢体が、お湯を弾きながら湯船から露わになる。風呂場の照明に、湯滴がきらきらと光る。

「綾音、綺麗」

そう言った八千穂の声は、自分でも驚くほど、湯気の中に優しく響いた。

夢喰い事件 13

八千穂は、雨戸を開けて、庭に面した廊下に座っていた。

携帯電話の時計が午後十一時を伝えている。弦悟と毅瑠が〈夢糸〉を辿り始めてから、二十四時間が経過しようとしていた。鬼に辿り着いたら即座に連絡がくることになっている。しかし――未だ連絡はなかった。

携帯電話のリダイヤルボタンを押すと、画面に表示されるのは毅瑠の電話番号だった。発信ボタンに指をかけ、そしてやめる。もう何度、そんなことを繰り返しただろうか。毅瑠は今、必死に〈夢糸〉を辿っている。邪魔をするべきでないことぐらいわかっている――でも、ただ待つということが、こんなに辛いとは八千穂は知らなかった。

お風呂の後は、七穂を含めた全員で夕食の支度をした。メニューはカレーライスだった。これも合宿の定番だと夏目が言った。食卓は大騒ぎだった。

食後は、綾音が用意した花火を庭でやった。神社の境内に咲いた炎の華は、とても綺麗だった。

七穂を交えたトランプ大会は、夏目の圧勝で幕を閉じた。希奈と綾音は顔に出やすい。八千穂は自分が意外に強かったことに驚いた。それから、居間に蒲団を四組並べて敷いた。枕投げをして七穂に怒られた。気を取り直して、車座になり、怪談をやった。八千穂はなんとも思わなかったが、夜の神社での怪談に、みんな随分と肝を冷やしたようだった。

その後、一人ひとつずつ、秘密を打ち明けた。

そのどれも、八千穂は皆に言われるままに参加するのが精一杯だった。もちろん、とても楽しかった。しかし――毅瑠がいなかった。作も力もいなかった。道生も太一もいなかった。お父さんもいなかった――全員が揃っていたら、もっともっと楽しかったのだろうか、

と八千穂は思った。

「眠れないの？」

気が付くと、パジャマ姿の夏目が立っていた。夏目は八千穂の隣に腰を下ろした。

「夜は随分と過ごしやすいわね」

星明かりに照らされた庭は、昼の暑さの余韻を残しつつ、夏に一息入れたような涼しげな佇まいを見せている。気の早い秋の虫が、時折鈴を転がしたような鳴き声をあげる。

「八千穂ちゃんの将来の夢ってなあに？」

星を見上げながら、突然夏目がそう訊いた。

「夢……」

その言葉から、八千穂はまず〈夢糸〉を連想した。力が捕らわれ、穀瑠が辿っている――

でも、夏目が言っているのはそういうことではない。

夢。希望。

八千穂は自分の将来など考えたこともなかった。

「私の夢はね、世界中を訪ねて回ることなの」

「世界中……」

「そう。アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、中東、アジア。行ってみたいところが沢山あるわ。色々な場所を見て、色々な人と話をしてみたい。だから、沢山の言葉を覚えたいの。英語、フランス語、ドイツ語、中国語……。それを活かした仕事に就けたら嬉しいと思うわ。通訳とかね」

語る夏目の目は輝いていた。

私は何になりたいのだろうか、と八千穂は思う。自分は既に〈霊鬼割〉という存在だ。これからずっと、ただ〈霊鬼割〉であり続けるのだろう――漠然とそう思っていた。しかし、学校を卒業すれば、八千穂として収入を得る必要がある。生活の方便^{たすき}として働かなければならないだろう。大人になった自分、働く自分を、八千穂は想像できなかった。

「そんなに悩ませるつもりはなかったんだけど……」夏目が八千穂の浴衣の肩を抱き寄せた。「二学期になると大変よ。体育祭に文化祭、その他のイベントも重なるから。八千穂ちゃんにも大いに働いてもらわなくちゃね」

数えたり、揃えたりという地味な事務仕事で、思いの外自分の性に合っていると八千穂が気付いたのは最近のことだ。生徒会の仕事を手伝う自分など、半年前は想像もしていなかった。

「勉強して、生徒会の仕事をして、遊んで、恋して、そうこうしているうちに、自分がやりたいこと、将来の夢がきつと見つかるわよ」
そういうものだろうか。

「私だって、いつ考えが変わるかもしれない。運命の人に出会って、突然結婚する気になるかもしれないわ」

夏目の瞳が、八千穂のそれを覗き込んだ。お互いの顔が映り込む。「結婚？」

「たとえばよ。つまり、今はまだ何を夢見てもいいってことね。あなたも、私も、まだ何者でもないんだから」

「何者でもない？ 私が？」

「そうよ。若い命は真っ白なのよ。何にでもなれるわ」
未来。

真っ白な未来。

八千穂は、きゅっと胸が締め付けられる思いがした。力の未来も――真っ白なはずだ。

「八千穂ちゃん？」

八千穂は寝間着として着ている浴衣のままサンダルを突っ掛けると、家を飛び出していった。

夢喰い事件 14

二十分ほど走り続けて、八千穂は水村家のマンションの前に着いた。

携帯電話の時計は午前零時三分を示していた。

勢いでここまで来てしまったものの、八千穂はどうしようかまだ迷っていた。今すぐにでも力の〈夢糸〉を切ってしまいたい——しかし、〈霊鬼割〉としての理性が、毅瑠と弦悟の努力を無駄にするのかと、そう言っている。弦悟が言った丸二日には、まだ一日残っている。八千穂は決めきれないまま、二十五時間前に毅瑠が指さした場所に〈夢糸〉の気配を探した。

(あれか)

依然〈夢糸〉はそこにあった。それこそ、夢のような儂い気配しか感じられない、力の〈夢糸〉——それが、八千穂の目の前で、一瞬太く脈動した。

(！)

八千穂の理性が飛んだ。それは、力の〈魂糸〉が吸い上げられた脈動だった。右の三つ編みが顕現し、中から現れた〈髪逆〉を逆手に握る——しかし、三階から伸びたその〈夢糸〉に、地上からでは届かなかった。

八千穂はマンションの入り口に向かった。そこは、暗証番号式のオートロックがかかっていた。暗証番号を入力するか、住人に中から開けてもらう必要がある。しかし、八千穂は躊躇なく〈魂糸〉を使った。自らの〈魂糸〉をオートロックへと伸ばし、回路をショートさせる。〈魂糸〉の環が切れている〈霊鬼割〉だからできること——世間では超能力として認識されている力——命をすり減らす力だった。

一瞬後、入り口のガラスの扉は、軋みながらその道を開いた。完全に開ききる前に、八千穂は中へと飛び込んだ。

マンションに入った八千穂は、エレベーターを使わず、階段で三階まで駆け上がった。三階には部屋が三つ並んでいる。一、二、三。三軒目が水村家だった。

廊下側から部屋の中は何えなかったが、外から見たときは灯りはついていなかった。力以外も寝ているはずの時間帯だ。

待つか、切るか、辛うじて残った八千穂の理性が、一瞬の待ったをかけた——その時——

携帯電話が着信した。

（毅瑠！）

着信相手を確認することなく、八千穂は確信した。電話に出ずに〈髪逆〉を構える。基本的に〈魂糸〉で編み上げられている〈髪逆〉は、使い手の意志によって、通常の物質にも効果を及ぼすことができる。入り口のオートロックのように、〈魂糸〉で鍵を開ける余裕を失った八千穂は、即座に〈髪逆〉を振るった。水村家の玄関の鍵が弾けた。

八千穂は勢いよく扉を開けると中に飛び込んだ。そのまま〈魂糸〉の気配を頼りに力の部屋を探す。部屋はすぐに見つかった。

真っ暗な部屋の中で、ベッドに力が眠っていた。灯りもつけず、作がその顔を見つめている。

「八千穂？」

げっそりとした作が、八千穂に気が付いた。八千穂はそれに構わず力に近付くと、〈夢糸〉を見極めた。細い細い〈夢糸〉が、力の頭から窓の外へと伸びていた。そして——やはり〈魂糸〉が減っていた。

茂庭幸江程ではない。それでも、眠り続けた三日分、確かに〈魂糸〉が吸い上げられている——

八千穂は唇をかみしめ、〈髪逆〉を振るった。

軽い、微かな手応え——〈夢糸〉が切れて四散した。

八千穂は小さく息を吐くと、〈髪逆〉を下ろした。

「作、これで……」

力は大丈夫、と続けようとした。しかし、作の表情を見て言葉が詰まった。

「どうして？」作が八千穂を睨んでいた。「どうして最初からやってくれなかったの？」

作が〈魂糸〉のことを知っているはずはない。八千穂は狼狽^{うろた}えた。「今が夢から覚ますお祓いなんでしょう？　なんで、すぐやってくれなかったのよ！　力、こんなに弱っちゃったじゃない！」

「作……見えるの？」

「見える？　わかるわよ！　双子なのよ！　姉弟^{きょうだい}なのよ！　この子の命がどんどどこかに吸われちゃってることぐらい、わかるわよ」それは理屈ではなかった。双子の姉弟^{きょうだい}故に、姉が弟を想うが故に、理屈はわからなくても、〈魂糸〉が抜かれていくことが肌で感じられたのだろう。八千穂に何かが見えている——それを前提にしなければ成り立たない文脈——しかし、今この場では、そんなことは些細なことだった。

作は泣いていた。

「ねえ。なんで丸一日も置いたのよ」

「鬼を探すのに……」

「力を出しにしたってこと？」

追い詰められたが故の、すべてを越えた理解力。作の本能が本質を鋭く言い当てる。

八千穂は言葉を返すことができなかった。

「あれ、作……」

「力！」

力がベッドの上で上体を起こしていた。作が飛びつき、力を力一杯抱きしめる。

「お願い。ねえ、お願い。私の命を、力に分けてあげてよ！」

作の悲痛な叫びは、八千穂に向けられたわけではない。彼女は、〈魂糸〉のことも、〈霊鬼割〉のことも、鬼のことも知らない。ただ——力の命を吸い上げた理不尽な存在に対して、心のままに叫ん

ただけだ。叶えられることのない願いと知って、それでもなお――
叫ばすにはいられなかったのだ。ずっと二人で歩いてきた自分の半
身が、こんなところで道を分けるなど、認めることはできない――
神でも、悪魔でも、鬼でもいいから、力に私の命を半分あげてと――
作の魂は叫んだ。誰か！ と。

神も、悪魔も、鬼も、彼女の叫びは聞いていなかった。

ただ――〈靈鬼割〉が聞いていた。

八千穂は〈髪逆〉を握りしめた。

夢喰い事件 15

『見つけた』

電話の向こうで毅瑠が言った。

時間にして二十五時間。毅瑠は〈夢糸〉を辿り続け、ついにその行き着く先を見つけた。

『今、神坂さんが車でそっちに向かっている』

毅瑠は、八千穂が電話にすぐ出なかったことを質したりはしなかった。力のことに触れなかった。電話をかけた直後に〈夢糸〉が切れたのを見て、八千穂の行動を察したに違いなかった。

徒歩で辿って二十五時間かかる場所。車でバックアップに付いていた弦悟が戻ってくるのに、一時間以上は優にかかるだろう。家を飛び出してきたときは違って、とぼとぼとした足取りで、八千穂は神坂神社への帰路を歩いていた。

寝間着にしている浴衣に素足。突っ掛けてきたサンダルは、くるときにどこかへ行ってしまった。夏でなければ風邪をひきそうな姿そして、女の子が夜一人で歩く格好ではなかった。

しかし、八千穂はそんなことは気にならなかった。頭の中では、作の言葉がぐるぐると回っている。

（どうして最初からやってくれなかったの？）

（力を出しにしたってこと？）

（私の命を力に分けてあげてよ！）

どうしたら作は許してくれるのだろうか？ もう、許しを請うことさえできないのだろうか――

せめて――せめて、元凶となった鬼は狩らなくてはならない。

八千穂は立ち止まった。住宅街の中を流れる小さな川のほとり。川面に星明かりが映って、ちらちらと揺れている。その揺らめきの中に、八千穂は皆の顔を見た。

毅瑠が辿った時間。

力が命を晒した時間。

作が涙を枯らした時間。

そして、自分が待った時間。

そのすべてを無駄にしてはいけない。

八千穂は拳をきつく握ると、浴衣の裾を翻して駆けだした。

八千穂が神坂神社に帰りつくと、弦悟は既に着いていた。

浴衣のまま車に飛び乗ろうとする八千穂を、弦悟は強引に着替えさせた。

「向井君にそんな姿を見られていいのか？」

そんなことを気にしている場合ではないと思いつつ、八千穂はその言葉に従った。着て出たのは学校の制服だった。

家中が眠っていた。夏目は、八千穂が飛び出していったことを、誰にも告げなかったようだ。

「行き先は、山の中の療養所だ」車が走り出してから、弦悟が言った。

毅瑠と弦悟が辿り着いたのは、町から離れた山奥だったという。神坂神社からの距離にして七十キロ。車でも二時間近くはかかる距離だ。

「どんな鬼？」

「見ていない」

二十四時間を過ぎた頃に、毅瑠が「近い」と言った。力の〈夢糸〉に、別の〈夢糸〉が混じり始めたというのだ。二人は地図で糸の行く先を確認し、あたりをつけると、弦悟はその場から取って返した。少しでも時間を稼ぐためだった。

力のためだった。でも――

「力の〈魂糸〉……減っていた」

「そうか」

「それだけ？」

「ああ」

八千穂は、弦悟に対して、これほどの感情を持ったのは始めてだった。憤りなのか、悲しみなのか、怒鳴りたいのか、泣きわめきたいのか――結局わからず、八千穂は押し黙るしかできなかった。

弦悟は無表情に前を見つめている。

それから一時間半、二人は一言も口をきかなかった。

夢喰い事件 16

「チホ」

現場に着くと、目の下に隈を作った毅瑠が待っていた。毅瑠が立っているのは、丸太を組んで作られた門の前だった。〈飯丘療養所〉という看板が掲げられている。

そこは、山の中腹に建てられた療養所だった。敷地内には、自然の木立をそのまま利用した広い庭がある。療養所の建物は、古い学校のように白いペンキで塗られた、木造の三階建てだった。

「予想以上の規模だ」毅瑠は〈魂見鏡〉越しに療養所を見た。「力先輩だけじゃない。四方八方から、すごい数の〈夢糸〉がここに集まっている。俺には……この療養所そのものが鬼に見えるよ」

着いたときから、療養所は異様な気配がしていた。夜とはいえ、静かすぎるのだ。木々のさざめき、虫の声、鳥の声、そんなものがまるっきり聞こえない。まるで、療養所一帯すべてが眠りについてしまっているように――

八千穂の右の三つ編みが顕現した。そして――見た。

療養所の敷地中に、細い〈夢糸〉――〈魂糸〉か？――が張り巡らされていた。まるで、大きな繭のように。

〈魂糸〉は、生きとし生けるものすべてが持っている。〈夢糸〉が〈魂糸〉からほつれたものならば、生けるものすべてにそれがあつてしかるべきだ。〈夢糸〉があるなら、木々も動物も、力や幸江と同じように、眠り続ける可能性もあるだろう。つまり――療養所周辺が、まるごと眠ってしまったということだ。

そして、毅瑠の言う通り、四方八方へと糸が伸びていた。ものすごい数だった。この一本が、力と繋がっていたのだ。

ここまですなるのに、どれだけの時間がかかり、どれ程の〈魂糸〉が使われ、どれ程の人が犠牲になったのか――八千穂には想像もつかなかった。これ程の〈魂糸〉を取り込んだ鬼を見たのは始めて

だった。

「大丈夫か？」と毅瑠が訊く。

八千穂は無言で頷いた。怖じ気づくわけにはいかない——力の、そして作の顔を思い出す。どんなに巨大だろうと、強力だろうと、狩ると決めたのだ。

八千穂は、解けた右の三つ編みから現れた漆黒の剣〈髪逆〉を逆手に引き抜いた。そして、くるっと順手に握り直す。

「毅瑠はここで待ってて」

八千穂はそう言い置くと、門の中へと飛び込んでいった。

〈髪逆〉を振るいながら、八千穂は違和感を拭えなかった。

殆どの鬼は、生理的に〈髪逆〉を嫌う。理屈を知らずとも、〈霊鬼割〉に対して本能的に牙をむく。だから、圧倒的な抵抗を予想していた。しかし、予想に反して抵抗はなかった。張り巡らされた〈夢糸〉を切りながら進むと、程なく療養所の建物に辿り着いた。あまりに手応えがなさ過ぎた。まるで――まるで、招いてすらいるように感じる。

畏だろうか。それとも、もう抵抗する力も残っていないのだろうか。

疑念は尽きないが、立ち止まるわけにはいかない。八千穂は慎重に建物の中に足を踏み入れた。

療養所の中はしんと静まり返っていた。入り口正面の受付も、待合室の灯りも消えている。所々にある非常灯が、何やらまがまがしい輝きを放っている。深夜という時間帯を考えれば、人がいないことに不思議はないのだが――

どれ程の人がここで療養をしているのだろうか。当然、大勢の職員もいるはずだ。彼らも含めて、全員が鬼に〈夢糸〉を絡め取られてしまったのだろうか。

八千穂は、入り口脇の案内板を確認した。病室は二階と三階だ。

恐らく――眠り続ける患者の一人が鬼となったのだろう。

八千穂は階段で二階へと上がった。手近な病室の扉を開けて中を確認する。

最初の部屋には老人が一人寝ていた。次の部屋は四十代の男性。その次は小さな男の子だった。どの部屋の患者も、不審なところなどなかった。

(……おかしい)

八千穂は、さっきから〈魂糸〉の気配をまるっきり感じていない

ことに気が付いた。右の三つ編みは顕現しているにもかかわらずだ。そして――右手に握っていたはずの〈髪逆〉が、なかった。

(しまった。ここは……)

「気が付いたね」

目の前のベッドで、男の子が上体を起こし、八千穂を見つめていた。

ここは――鬼が見る夢の世界だ。いつの間にか、八千穂の〈魂糸〉が絡め取られ、意識が夢の世界に引きずり込まれてしまったらしい。

八千穂は、自分の体はどうなっているのだろうか、と考えた。療養所の建物の中で倒れているか――それとも、庭の途中だろうか。

「お姉さんも、これでこの住人だよ」

男の子がそう言った途端、建物中の照明が灯った。ざわざわと人の話し声が溢れる。

「順君、どうしたね？」

最初に八千穂が覗いた部屋の老人が、八千穂の背後から現れた。

「新しい住人だよ」

八千穂は厳しい視線を、順と呼ばれた男の子に向けた。

「お前が鬼か？」

「鬼？」

「力の命を吸ったのはお前か？」

「ああ、華子^{はなこ}がお気に入りのお兄さんのこと？」

「お前が力の夢を絡め取った。命を吸い上げ、眠らせ続けた」

「違うよ。あれは華子が連れてきたんだ。それに、僕たちは無理強いないんかしていない。ここににいる人たちは、みんな自分の意志でここにいる」

「何？」

「お姉さんは、ちょっと困ったことをしたから強引に連れてきたけどね。ここは、みんな楽しいことだけを繰り返していただける場所だよ」

「力も、自分の意志で眠り続けたというのか？」

「力がなくなったのは、あなたのせいなの？」

背後から別の声が聞こえた。声の主は、白いワンピースを着た少女だった。

「また会おうって約束したのよ。でも、さっきから力が見つからないよ！」

突然、少女の手が八千穂の喉笛に伸びた。八千穂はそれを辛うじて躲すと、廊下にまろび出る。廊下には、騒ぎを聞きつけたらしい他の患者たちが、わらわらと溢れ出てきた。その数は、とても療養所の建物の収まる人数だとは思えないほど多い。

（なんてこと……）

八千穂は、溢れる人を掻き分け、押し分け、階段を駆け上がった。外から見たとき、屋上があったはずだ。

（全員が……鬼だ）

発端が誰だったのかは、こうなってしまうともうわからない。一人の鬼が、別の一人の〈夢糸〉を絡め取り、夢の世界に取り込んだ。その一人が、また別の一人を捕まえた。そうして、この療養所の患者たちは、全員が夢の中の住人となった。療養所の中の人間をすべて取り込み、草も木も動物も取り込み、そして、外へと〈魂糸〉を伸ばし、外部の〈夢糸〉を絡め取り始めた——きっと、寝たきりの患者が多かったのだろう。彼らは、友達と仲良く普通の生活をしたかっただけかもしれない——しかし——

八千穂は屋上へと飛び出した。

振り返ると、屋上に人が溢れていた。一番前にいるのは、順と、華子と呼ばれた少女。

「お姉さん。僕たち、何か悪いことをしたの？」

「人の命を喰った。それは悪いことだ」

「そんなの知らないよ。みんな、僕たちの友達になってくれた。彼らの夢を叶えてあげたら、喜んで一緒にいてくれたんだよ」

そう——八千穂には最初から気になっていることがあった。作は

言った。最近力が寝過ぎだと。それはつまり、いきなり〈夢糸〉を絡め取られたわけではない、ということだ。最初の接触から、眠り続けるまでの段階が存在しているのだ。それは、茂庭幸江も同じだった。

だから、この事件には、被害者自信の意志も少なからず反映している、というのは決して嘘ではないのだろう。しかし――

「なら、お前らは、力の記憶をまるっきりいじっていないと言えるのか？」

華子が一瞬たじろいだ。

「作……力のお姉さんが言っていた。力が同じ夢を見続けていると、いつも同じデートの夢」

「それは力が望んだからよ」

「望んでも、繰り返せば飽きる。前の記憶を消したな？」

「だって！」

「それは許されない。人の心を操って、それで一緒にいても、そんなのはまやかしだ」

「だって！ 私たちは病気なのよ。しょうがないじゃない！」

華子が叫んだ。それを合図に、八千穂に向かって人垣が押し寄せた。

この夢の世界は、一人の人間が見ているものではない。複数人の夢の集合体だ。だから、それなりのルールが存在するようだった。それは恐らく現実の世界に近い。ここが誰か一人の夢ならば、とうの昔に八千穂の〈魂糸〉は切り刻まれていたに違いない。

人の意識は〈魂の要〉に宿ると考えられている。八千穂の意志がここに表出しているということは、体と繋がっているということだ。〈魂の要〉は体から外には出せない。だから、被害者たちは、体が眠り続けたまま〈夢糸〉で繋がる、という状態に留め置かれたのだ。〈魂糸〉を全部抜いてしまえば、せっかく夢に招いたその人物の意識は消えてしまう。鬼たちが八千穂の意識を保持しようとは考えないだろうが、まだ〈魂糸〉のすべてを取り込まれるだけの時間は経

っていない。急げば、間に合うはずだ。

八千穂は屋上の端まで逃れると、意識を集中した。どこかに——どこかに、現実世界との繋がりがあるはずだ。

八千穂にとっての現実世界、大好きな仲間達の顔を思い浮かべる。丸一に置いてしまった力。泣かせてしまった作。一緒にお風呂に入った綾音。星を見ながら話をした夏目。希奈、道生、太一。お父さんにお母さん。そして——毅瑠。

柔らかいくせつ毛の、眉毛の太い毅瑠の笑顔が浮かぶ。毅瑠に会ってから、八千穂の世界は変わった。世界はどんどん変わるのだ。同じことを繰り返すような、夢の世界に取り込まれるわけにはいかない。

八千穂は、迫りくる華子達を見据えた。お前たちだって、現実の世界でいずれ変化は訪れるはずだ。儚い希望でも、僅かな希望でも、それは希望なのだ。来るべき未来を受け入れるためには、現実世界で生きていなければならないのだ。

八千穂は屋上から下を見ると、その身を宙に躍らせた。

夢喰い事件 18

「チホ、待たせた」

K 駅前広場の噴水前で、八千穂は毅瑠と待ち合わせていた。

「毅瑠。遅い」

「すまん。出がけに道生から電話があつてね。そしたら、電車を一本乗り損ねた」

「コーヒーゼリー」

「え？」

「罰」

「……わかったよ。後で奢^{おご}るから。ほら、映画に遅れるぞ」

二人は、先週封切られたばかりの新作映画を観る約束にしていた。八千穂は両親以外と映画を観にくるのは初めてだった。

「しかし、本当にこんな映画観るのか？」

毅瑠の持つチケットは、日本映画の大作時代劇のものだった。高校生カップルが入るには、あまりに渋すぎる選択だ。

「観る」

「はいはい」

案の定というか、二人が入った映画館は、年齢層の高い時代劇ファンばかりで、二人はかなり浮いていた。それでも、八千穂は存分に映画を楽しんだ。

「さ、食事はどうしようか？」

「コーヒーゼリー」

「それは食後、もしくはお茶のときにな。とりあえず歩くか」

二人は、デパートのレストラン街を回った。しかし、意外に値段が高い。悩んだ挙げ句、昼食はファーストフードで済ませることにした。

「悪いな、こんなんぞ」

「別にいい。毅瑠と一緒なら」

八千穂はハンバーガーにかぶりつきながら、臆面もなくそう言った。

「あら、お二人さん」唐突に、二人の背後から声がした。「休みの日にデート？ 隅に置けないわね」

声の主は夏目だった。一緒に綾音もいる。

「いやあ、まあ」毅瑠が照れたように頭をかいた。「二人は何してるんですか？」

「バーゲンよ、バーゲン」

答えたのは綾音だった。よく見れば、二人とも大きな紙袋を下げている。

「おかげですっからかん」綾音がため息をつき、全員が笑った。

「じゃあ、ごゆっくり」

夏目はそう言うと、綾音を促して離れた席へと歩いていった。

「一緒に食べればいいのに」と八千穂。

「俺らに気を利かせたんだよ」

「気を？」

「恋人同士だからね」

八千穂の鼓動が一つ、跳ね上がった。恋人同士——私と毅瑠が？「どうした？」

八千穂は無言で首を振る。心は嬉しさと躍っている——でも、この違和感はなんだろう？

食事が終わると、二人はあちこちの店を見て回った。昼食代に事欠くくらいだから、今日は特に買い物をする予定はない。それでも、毅瑠と二人のウインドウショッピングは楽しかった。

「お茶にしようか」

「うん」

二人は喫茶店に入った。毅瑠はホットコーヒー。八千穂はホットコーヒーとコーヒーゼリー。

「その組み合わせはどうか」

毅瑠が幾分うんざりした顔で指摘する。

「いいの」

「そうか」

コーヒーを飲みながら、二人は延々と、たわいもない話に興じた。喫茶店を出ると、空は夕暮れに染まっていた。毅瑠がどこかに向かっている。それに付いて歩いていると、いつの間にか、海が見える公園に出ていた。

「どう？ とっておきの場所」

「……」

夕日に染まる海は、言葉では表せないほど綺麗だった。八千穂が呆然と見つめていると、毅瑠が肩を抱いてきた。

「毅瑠？」

「チホ」

今このとき、世界には二人しかない。自分と毅瑠と。八千穂は頭がぼうつとした。毅瑠の顔が近付いてくる。キス——八千穂は思った。そうだ、ここはキスをする場面だ。

八千穂は目を閉じた。

夢のようなデートの時間がここで終わる。デートの締めはキスなのだ——夢に見たような楽しいデート——

——違う。

何かがそう告げた。

（八千穂が向井君と一緒にしたいことって何？）

綾音の声が脳裏に木霊する。こだま

あのとき、あのお風呂場で、私はなんと答えただろうか——私は毅瑠とこんなデートがしたかったのだろうか——

それに、毅瑠は二人を「恋人同士」だと言った。でも、違う。私と毅瑠は友達だ——掛け替えのない、大切な友達だ。将来がどうなるかはわからない。でも、今は、友達という言葉が最優先で出てこなければいけないはずなのだ——

八千穂は目を開いた。

現前に迫った毅瑠の顔を、思いつきりひっぱたいた。

夢喰い事件 19

八千穂が毅瑠の頬を張った途端、世界がゆがんだ。

「あーあ」

気が付くと、八千穂は療養所の屋上にいて、順が顔を覗き込んでいた。体は大勢に抑え込まれている。

「せっかく楽しいデートを演出してあげたのに」

「ふざけるな！ ……こうやって、力も夢に絡め取ったのか」

八千穂は激昂げっこうした。毅瑠との茶番のデートが、この上ない侮辱に感じられた。

「力の場合、相手は私。まやかしじゃなくて、私は私だもの。今のとは違うわ」

華子が言った。八千穂が体験したデートは、八千穂の記憶から、鬼たちがでっち上げた毅瑠だった。しかし、力の相手をした華子は、華子の意識そのもの——そう言いたいらしい。

「私と力のデートは本物なの」

「なんと言おうと、それはまやかしだ。お前は力の何を知っている？ お前が書いた筋書き以上に、何かを知ろうとしたのか？」

「しょうがないじゃない。私、ベッドから動けないんだから！」

「動けなくても、デートのやりようはある。形に拘る必要はないんだ。二人が楽しければ、それでいい」

それは、綾音の受け売りだった。八千穂自身よくわかってなどいない。しかし、言葉を紡がずにはいられなかった。

「力は優しい。夢でお前と知り合って約束をしたら、それを果たそうとするような人だ」

「そんな……そんな都合の良いこと、あるわけじゃない！」

華子は、八千穂を抑えていた全員を退かせると、一人、八千穂に馬乗りになった。

「綺麗事は嫌い。パパもママも、結局は約束を守ってくれなかった。

守ってくれなかったのよ」

華子は八千穂の喉笛に手をあてた。

「あんたなんか死んじゃえ」

「力を信じられないの？」

「え？」

「力を信じられないの？」

「だって……」

「私は友達のこととは信じる」

「……」

「私を信じてくれた人のことは、絶対に信じる」

華子の手の力が緩んだ。

「……ねえ、今からでも間に合うかな」

「間に合う」

「力は約束を守ってくれるかな」

「守る」

「力に伝えてくれる？ 待ってるって」

「わかった」

二人の会話を聞いていた順が慌てた。

「おい、華子。何を……」

「行って！」

華子は八千穂から飛び退ると、そう叫んだ。

八千穂は急いで立ち上がると、屋上の縁へと向かって駆けた。意識を集中し、再び現実世界との繋がりを探す。

穀溜の顔が浮かぶ。そして叫んだ。

「穀溜！ どこ？」

——チホ

叫んだ八千穂の唇に、微かな温かさが触れた。

体全体が穀溜の存在を確信する。

今度こそ、確信を持って、八千穂は屋上から飛び降りた。

夢喰い事件 20

「チホ」

そこは、療養所の入り口前だった。

八千穂は石畳の上に倒れ、毅瑠に抱き抱えられていた。毅瑠の顔が驚く程近い。八千穂は飛び起きた。

同時に、療養所の建物の中から、爆発的な勢いで〈魂糸〉が襲いかかってきた。色取り取りのそれは、一人の鬼のものではありえない。全員が鬼であることは間違いないようだった。

八千穂は〈髪逆〉を構えると、裂帛れっぱくの気合いを発した。

「もう、やめろ！」

気合いと共に、八千穂の左右の三つ編みが一瞬で解けた。解けた髪は逆立ち、迫りくる〈魂糸〉の束を前にして、弾けた。

それは一瞬だった。

髪の毛の一本一本が槍となって伸び、〈魂糸〉と同じように障害物を抜け、建物中の鬼を貫いた。

空を埋め尽くすほどの〈魂糸〉が、すべて動きを止めていた。

「これが、本当の〈髪逆〉……？」 毅瑠が小さく呟く。

八千穂は鬼を施術するために、療養所の中へと足を踏み入れた。

〈髪逆〉かみさか

——それは、髪に〈魂糸〉を乗せて武器となす、神坂家の

〈霊鬼割〉に伝わる奥義。大量の〈魂糸〉を消費するため、滅多に使うことはない。剣の〈髪逆〉は、代々の〈霊鬼割〉の髪に〈魂糸〉を込めて、編み上げられてきたものだ。八千穂はこの奥義を使つたのは初めてだった。

「すごいな」

毅瑠が感嘆の言葉を漏らす。しかし、八千穂は複雑だった。髪を

振り乱したこの姿は、あまり人に見せられたものではない。そして、そんなことを気にしている自分が、八千穂は意外でしうがなかった。

療養所の中には、患者と職員を合わせて五十人からの鬼がいた。彼らの〈魂糸〉は残り少なく、環を繋いだからといって、どれ程元氣を取り戻すのか、それはわからなかった。順も、華子も、患者たちの中にいた。

すべての鬼の施術が終わり、二人が療養所の外に出たときには、夜が明けていた。

「力先輩、どうだった？」

ここにきて、ようやく毅瑠がそう訊いた。

あのとき――抱き合った力と作を、八千穂は〈髪逆〉で貰った。そして、作に請われた通り、二人の〈魂糸〉を繋ぎ、均等に分け直した。そんなことが可能だとは考えたこともなかったが、結果的には可能だった。双子の〈魂糸〉はそっくりで、それが功を奏したのだろう。

「でも、作は私を許してくれないと思う」

それでも、鬼を狩ることができて、力と作に申し訳が立ったような気がした。でも――弦悟のことは、まだ許せそうにない。八千穂は唇をかんだ。

毅瑠が、ぼんぼんと八千穂の背中を叩いた。きつとまた、小難しい理屈をこねて慰めたりするに違いない、と八千穂は身構える。しかし、毅瑠は全然別のことを言った。

「あのときのこと、覚えてるのか？」

「あのとき？」

「入り口のところで、俺が起こしたときだよ」

八千穂は、妙に毅瑠の顔が近かったことを思い出した。手が、自然と唇へ行く。そういえば――唇に温かな感触があったような気がする。

八千穂の仕草を見て、毅瑠が顔を赤くした。

「お……覚えていないならいいよ」

閃くものがあつた。まさか――

唇と唇が触れ合ったから、二人の〈魂糸〉が触れたから、毅瑠の声は夢の中に届いた。八千穂まで届いたのだ。

あるとき、毅瑠は〈夢糸〉に絡め取られることはなかった。鬼たちは八千穂に手一杯だったのか。それとも、毅瑠の〈夢飼い〉としての才能故か。とにかく――八千穂は毅瑠に助けられたのだ。

八千穂は毅瑠の顔を見た。

頬が紅潮するのを感じた。

それから二人は無言で、朝焼けの中を、弦悟が待つ車まで歩いた。車の中では、弦悟が大いびきをかきながら眠っていた。

夢喰い事件 21

数日後、力と作が神坂神社を訪れた。

作はなんとなく気まずそうな顔をしていたが、力はほがらかな様子だった。

「八千穂ちゃんがお祓いをしてくれたんだって？」

「お祓いとは違う」

「でも、俺を起こしてくれたんだろ？」

力は、ありがとうな、と言って、それから作の腕を引く。「ほら、作もお礼を言えよ」

「ええと、八千穂ちゃん。ありがとうね。それから……ごめん」作はぺこんと頭を下げた。「あの晩はさ、パニックになっちゃって、なんか私、酷い言いがかりをつけた。全部忘れてくれると嬉しい。八千穂ちゃんは、力のこと、本当に心配してくれてたんだよね。私、神坂の小父さんに追い返されたからって、八千穂ちゃんにあたるなんて、最低だよね」

「あ……」

それは、天啓と言っても良かった。弦悟の今回の行動が、八千穂の中ですべて腑に落ちる。

弦悟はわざと憎まれ役を買って出たに違いない。力を囚にして鬼を探す。その判断を弦悟がすることで、八千穂が友達を出しにするような判断をしなくて良いようにと——そう考えたに違いない。

ふっ、と八千穂の肩の力が抜けた。たぶん、穀瑠も気が付いていたのだろう。でも、あえて口にしなかったのだ。事件以降続いている弦悟との冷戦を、そろそろ終わりにしても良い、八千穂はそう思えた。

「それにしても、さすがは神社の娘ね。なんかちょっと不思議な力

が使えるみたいじゃない」

その大雑把さは、いつもの作だった。そして力が言う。

「その不思議な力ってやつで、探してもらいたい人がいるんだよ」

「人？」

まさか、と八千穂は思った。

「俺、眠っている間に、その子と約束したんだ。また、デートしようねって」

「名前は？」

「文野華子ちゃんていうんだ」
ふみのはなこ

華子——あの少女。

八千穂は華子のことを思った。あの少女は今でも〈飯丘療養所〉にいる。目を覚ましたかどうかはわからないが、力が訪ねてくるのを待っているはずだ。白いワンピースを着て、麦わら帽子をかぶって——

どうやって彼女を紹介するかは、今度毅瑠に相談してみよう。八千穂はそう思った。

華子は、力とのデートが楽しくて、力を夢に留め続けてしまった。それは許されることではないが、でも、八千穂はその気持ちが変わらなくはないと思っていた。絵に描いたようなデートはできなくても、二人が出会えば、きっとまた楽しい時間を過ごせるはずだ。

ふと、八千穂は夏目が言っていたことも思い出した。ランデブーはデートだと。

作と仲直りができたことで浮かれていたのかもしれない。八千穂は自分でも信じられないような冗談を口走っていた。

「力。今度は本当にランデブー？」

「何それ？」

力がきょとんとし、作が腹を抱えて笑い出した。

かまびす
喧しい蝉たちまでもが、笑っているような気がした。

《夢喰い事件 了》

夢喰い事件 21 (後書き)

「夢喰い事件」はこれにて了です。

お付き合いいただきましてありがとうございます。

幕間を経て、「八千穂事件」が始まります。

引き続きお付き合いください。

八千穂の水着で悩殺大作戦

一

夏休みも終盤。

一時〈夢糸〉を鬼に絡め取られて眠り続けていた水村力と、サッカー部の合宿から戻った縁田太一えにしだたいちが加わり、神坂家の居間には生徒会のメンバーが勢揃いしていた。

「会長、もう一度合宿やりましょうよ」そう言ったのは力だった。自分が眠り続けていた間に行われた、女性だけの合宿の話の聞かされた、だだをこね始めたのだった。

「それは私も賛成」

合宿に参加しなかった双子の姉、水村作みずむらさくも同意する。

「そうは言ってもね、そんなにこの家に迷惑をかけるわけにはいかないわ」と戸時夏目とときなつめが困ったように言う。「学園の合宿所は今からは抑えられないし、これだけの人数で泊まるとなると、普通の旅館ももう無理だわ」

「合宿でいったい何をするつもりだ」と太一が力に訊く。

「そうですよ。夏休み中に済ませなきゃならない仕事は、概ね終わりましたよ」と山瀬道生やませみちおが付け加えた。

「いや、そのな。生徒会メンバーの親睦をだね……」

「力先輩、遊びたいだけじゃないんですか？」と言ったのは乙蔵綾おとくらあや音。やね

「スケベなこと考えているに違いないわ」と呟いたのは木谷希奈きたにきなだ。話を聞きながら首を傾げたのが神坂八千穂かみさかやちほで、「先輩、分が悪いです。諦めてください」と言ったのが、向井毅瑠むかいかたるだった。

「そうは言っても、三年生最後の夏休み、仲間と思いい出を作りたいと思っちゃダメなのか？」

それでも力は食い下がる。周囲は半分呆れ顔だ。

「……力の言うことも一理あるわね。合宿は無理だけれど、海にでも遊びに行きましようか？」

「会長！　そうこなくっちゃ！」

夏目の提案に、力が歓声をあげた。他の面々にも反対の理由などなかった。

「海に行くなら水着を買わなくちゃ」　そう言い出したのは綾音だ。

「八千穂は水着もってる？」

「中学のとき学校で使ったやつならある」と八千穂。

「それ、スクール水着でしょ。しかも、もう着られないんじゃない？　」作が突っ込む。

「私も水着なんて持ってないわ」と希奈。

「じゃあ、今から買いに行きましようか」

夏目のさらなる提案に女性陣全員が賛成した。

「あのお、俺らも一緒に行っていくですか？」

そんなことを訊いたのはもちろん力で、周囲の冷たい視線に晒されて、「冗談だよ」と言って小さくなった。

二

夏目、作、希奈、綾音そして八千穂の五人は、連れだってK駅前の百貨店を訪れた。

夏休みも終わりが近いとあって、水着売り場も縮小され、商品には赤札が多く付けられている。

「さすがにこの時期だと、新作は残ってませんね」と綾音。

「まあ、一緒に行くのがあの連中だから、適当なやつで良いでしょ？」と作。

「でも、運命の出逢いがあるかもしれないわ」と頬を赤らめたのは

希奈だ。

「希奈、ナンパ待ちするの？　ならこんなのはどう？」

そう言って作が手に取ったのは、なんとも生地が少ないビキニだ。それを受け取った希奈は、「とても無理」と呟きつつ、それでも矯^ためつ眇^{すが}めつしている。

「夏目はどうするの？」

「私はこれにしようかしら」

夏目が手にしているのは、パレオ付きの黒ビキニセパレートだ。胸元とパレオにあしらわれた大きなリボンがアクセントになっている。

「なるほど。下手に純真ぶらず、下品にもならない。さすがは夏目ね。私は別路線で、こういうのはどう？」

作が選んだのは、白地にブルーのストライプが入ったタンキニスタイル。しかもボーイズパンツタイプのものだった。ストライプのブルーは、微妙に濃さの違う三種類を組み合わせている。

「作先輩、それ似合いそうですね。私はこれでいこうと思います」

綾音は、赤を基調とした花柄プリントのビキニセパレートを掲げた。パンツにベルトが付いているタイプだ。

「八千穂はどうするの？」

「……」

綾音達がわいわいと水着選びをするなか、八千穂はひとり立ち往生していた。正直、どれを選んだらいいか皆目見当が付かないのだ。事情を察した四人が、八千穂の周りに集まった。

「八千穂ちゃん。セパレートとワンピースどっちがいいの？」と夏目が訊く。

「ちよつと夏目、今時ワンピースはないでしょう」と作。

「向井君はどんなのが好きなのかしらね」と希奈。

「穀溜？　……わからない」

首を傾げる八千穂に、綾音が同情的な目を向けた。

「あの男は、おしゃれのことなんかわからなそうだものね。そうね

……じゃ、テーマは『向井君を水着で悩殺』って線でどう？」
八千穂は絶句したが、他の三人は諸手を挙げて賛成した。
こうして『向井毅瑠を水着で悩殺大作戦』が始まった。

三

「向井君はむっとりスケベだと思います」綾音は容赦なく言った。
「でも、紐みたいなビキニとか、生々しいのは逆に敬遠しそうですね」

「ひも？」
八千穂が口をぽくぽくする中、他の四人は勝手に話をどんどん進める。

「色はどうかしら」と希奈。「向井君、白とか好きそうだけど」
「白にするんだったら、リボンとかデザインの派手なやつがいいわじゃないとほとんど下着と変わらないもの」と夏目。

「でも、八千穂ちゃんにフリフリは似合わないわ」そう言って、作が上から下まで八千穂の体をなめ回すように見た。「このスタイルなんだからシンプルに行くべきでしょう」

「濃いめの……ブルー系の色が良いかしら。それとも、もっとビビットな色かしら」綾音は何枚かの水着を八千穂に差し出した。「さ、端から試着してみよう！」

八千穂は、水着など、体育の授業以外で着たことはなかった。しかも、今手の中にあるのは、なんとも大胆なデザインの物ばかりだ。なんというか——恥ずかしい。それでも、せっかくみんなが選んでくれたのだから、試着ぐらいはしなければ申し訳なかった。

「ひゅー」

一着目を着て試着室から顔だけ出すと、勢いよくカーテンが引かれた。四人が鈴なりになって八千穂を眺め、作が口笛を吹いた。今

八千穂が着ているのは、ブルーのシンプルなビキニセパレート。ビキニは首に紐で結ぶデザインで、パンツの両サイドも紐だ。

「どう？ 八千穂」

綾音の言葉に、八千穂は鏡に映った自分をしげしげと眺めた。

「紐はちよつと心細い」

「そう？ じゃあ、次いつてみよう」

次はグリーンのパレート。ビキニのアンダーバストはホック式になっている。パンツはローライズだった。

「ちよつと色が合わないか」

綾音が首を捻り、他の三人に意見を求める。概ね同じような意見だった。

その次はネイビーのパレート。いたって普通のデザインの三角ビキニとパンツ。

「ああ、やっぱりシンプルなのが似合うわね。かっこいいわ」夏目が感心したように言う。

「確かに似合うけど、面白くないわね。想像通りっていうか……もう少し意外性を演出したくない？」と作。

「そうね。大人っぽすぎるかも」と希奈。

「よし、じゃあこんな色でどう？」と綾音。

八千穂が着る水着だというのに、選ぶ基準は、完全に穀溜を喜ばせる——ということになってしまっている。八千穂は複雑な気持ちで、次の水着を試着した。

「わお！」綾音がそう呟いて、しばし呆然と八千穂を見つめた。「素敵」

ビキニは胸全部を覆うタイプだった。首と背中も紐で結ぶデザインだったが、三角ビキニほどの心細さはない。パンツは適当なハイレグで、見た目のバランスがとても良い。そして生地の色は赤。情熱の赤だ。

「これは……向井君じゃなくても悩殺できるね」と作。

「健康的で、しかもかっこいいわ。もともと色っぽいんだから、大

人っぽい演出はいらないわね」と希奈。

「髪の毛はまとめた方が良いわね。そこに髪飾りでもつけましょう」と夏目。

絶賛の嵐の中、八千穂は鏡を見た。この位なら、まあ抵抗なく着ることが出来る。そして本当に――毅瑠はこれを見て喜ぶのだろうか？

ひとしきり大騒ぎをした後、全員思い思いの水着を買って、百貨店を後にした。八千穂はもちろん、みんなが選んでくれた水着を買ったのだった。

四

海で披露された八千穂の水着姿を見て、毅瑠は絶句した。

「どう？ 毅瑠」

「いや……その……とても似合うよ」

「……」

その様子をビーチパラソルの下から見ていた綾音は、隣に座る夏目に言った。

「よく考えたら、どんな水着でも、向井君は悩殺されたんでしょうね」

「ふふふ。そうね。でも、八千穂ちゃんにとっても意味があったと思うわ。向井君のために水着を選んだ。それを喜んでもらえた。ね？」

「そうですね。一つレベルアップって感じですね」

毅瑠と共に水と戯れる八千穂を眺めながら綾音は思った。

ああ、意外に二人はお似合いだな――と。

《八千穂の水着で悩殺大作戦》了

八千穂事件 プロローグ

お前の目つきのせいだ、と奴は言った。

俺の目を見ると、嗜虐的しぎやくな気分が喚起されるのだという——いや、奴はそんな語彙ごいに満ちた言葉は発しなかった。ただ、「その目を見ていると痛めつけたくなる」と言っただけだ。それは、日本語ですらなかったのだから——

物心ついた頃から、俺は極端な扱いを受ける子供だった。大人や、一部の友人たちからは熱烈に可愛がられた。彼らは一様に「その目が魅力的だ」と言った。一方で、不良どもからは、ことある毎にちよっかいを出された。奴らは意味もなく俺を攻撃し、こう言った。「その目が気に入らない」と。

自分の目が、曰く言い難い存在であることを、俺は徐々に自覚した。俺の目は、人の心をかき乱す——

それでも、俺は普通に暮らしていた。敵は多かったが、味方も多かった。他人はそのどちらかに分類できるのだから、それなりに処すれば良いだけだった。

しかし、大学三年生の夏、留学していたアメリカで出会った奴は、今まで会った連中とはわけが違った。奴は俺と目が合うなり、俺の腕を掴んで路地裏に引っ張り込んだのだ。都会の人混みが冷たいのは世界共通だ。引っ張られる俺を助けようとする人間はいなかった。俺は、今までの経験則に基づいて、大人しく暴力を受け入れることにした。怪我をしない殴られ方、蹴られ方、倒れ方——それらは充分心得ていた。俺に暴力を振るう連中の大概は、気が済むまでやれば大人しくなる。挙げ句、俺に優しく手を差し伸べたりする始末だ。それは、俺の目が持つ魔力故だ。

しかし、奴はどこまでいっても満足しなかった。殴り、蹴り、自分の拳から血が滲んでも、まだ飽き足らなかった。ついには、ポケットから何かを取り出すと、それを俺に向けた。黒光りする金属の

塊——拳銃だった。

「その目のせいだ。忘れていたのに！」

いったい奴は何を忘れていたというのか。そして、俺の目で何を思い出したのか。俺はそんなことに興味はなかった。重要なのは自分の命だけだ。しかし、俺は奴に物理的に対抗する術^{すべ}を持っていなかった。体を動かすことは苦手ではなかったが、武術などは野蛮な人間のやるものだと思っていた。

だから、俺に残された手段は、もう睨み付けることだけだった。

幼い頃から人生を左右してきた自分の目に、すべての想いを乗せて、俺はただひたすらに奴を睨み付けた。

死んでしまえ——と。

八千穂事件 1

九月。

始業式に集まった涼心学園高校の生徒たちは、夏休みの余韻を引きずっていた。

ざわざわと落ち着かない体育館の片隅で、生徒会の面々が勢揃いし、出番を待っていた。生徒会長戸時夏目とときなつめを筆頭に、生徒会副会長縁田太一えにしたいちと山瀬道生やませみちお、書記の本谷希奈きたにきなと向井毅瑠むかいかたる、会計の水村作みずむらさく、事務員の水村力みずむらきと神坂八千穂かみさかやちほだ。二期期は生徒会が関わる行事が多い。始業式の式次第が終了した後、生徒会から体育祭と文化祭についての説明が予定されているのだ。

舞台上では校長先生の話が終わり、夏休み中に行われた部活動の各種大会の結果報告が行われていた。真っ黒に日焼けした生徒たちが舞台上に整列し、進行役の教頭先生が順番に結果を発表していた。

「さて、この後は生徒会ですが、その前にお知らせがあります」紹介された生徒たちが舞台上から下りると、教頭先生が言った。「英語科の山科先生やましなが産休に入られました。代りに、新しい先生がお見えになりましたので、この場でご紹介します。鶴牧先生つるまき、舞台上にお願いします」

促されて、二十代半ばの細身の男が舞台上上がった。少し色を抜いた柔らかそうな髪を持ち、端正な顔立ちをしている。一部の女子生徒の間からため息が漏れた。

「ただいまご紹介にあずかりました鶴牧有人つるまきありひとです。担当は英語です。山科先生が戻られるまでの短い間ですが、仲良くやりましょう。よろしく願います」

にっこり笑う鶴牧に、さらに黄色い声があがる。「かっこいい」「こっち向いて」「彼女いますかー」などの声に、男子生徒のやっかみが混じる。

「はい、静かにして。シャープ。これから生徒会からの連絡があるからね」

鶴牧はオーバーアクションで手を広げてそう言うと、踵を返した。騒いでいた生徒たちも、潮時と見て静まり返る。しかし、タイミン
グのずれた声の一つ、静かになった体育館に響いた。

「何がシャープだよ。きもっ」

言葉を発した男子生徒は、意外に響いてしまった自分の声に驚いている。鶴牧も聞こえたらしく、舞台上隅で足を止めた。居心地の悪い沈黙が体育館を支配する。

「はいはい。それじゃあ、生徒会からの連絡を始めるわね」

絶妙のタイミングで、マイクを持った夏目が舞台上に飛び出した。体育館全体がほっと息をつく。それで終わるはずだった。しかし――

「ちょっと待て」

舞台上から退きかけていた鶴牧が、中央へと戻り、夏目を制した。

「え？」

「今、言った奴誰だ！」鶴牧は舞台の縁まで出ると、生徒たちを見渡した。

鶴牧の予想外の行動に生徒たちは動揺した。その動揺は、声の主
に目を向けるという行動で現れた。だから、自然、発言の主が誰な
のか鶴牧に知れることとなった。

「お前か……」

鶴牧の視線は、ひとと当該の生徒に向けられた。二年生の男子生
徒だった。

「今日は最初だからな。はっきりさせておいてやる。俺に逆らった
り、俺を馬鹿にした奴がどうなるか」

そのとき、八千穂は舞台袖にいた。微妙な空気を感じ取った夏目
が先に飛び出したため、他の面々は、出て行くタイミングを伺わざ
るをえなくなっていた。

「やばいな。止めない」と

太一が舞台に飛び出した。鶴牧が悪口を言った生徒を殴ると思っ

たに違いない。しかし、鶴牧が舞台から下りる気配はなかった。

「？」

唐突に、八千穂の背筋を悪寒が走った。嫌な気配が舞台上に溢れる——これは——

「チホ？」

八千穂の異変に気付いた毅瑠が声をかけた。

「鬼だ」

「え？」

八千穂の呟きに、毅瑠の顔色が変わる。

「みんなもよく見ろ。そいつがどうなるかをな」舞台上で鶴牧が叫んだ。

八千穂は周囲を気にする余裕なく〈靈鬼割^{ひきわり}〉の力を解放した。一瞬で右の三つ編みが顕現し、その目に、鶴牧の体から伸びた〈魂糸^{たまいと}〉が飛び込んできた。それは、件の男子生徒目^{くだん}がけて一直線に伸びている。

「だめだ」

毅瑠がそう言ったのが聞こえたが、体が反応していた。

八千穂は右の三つ編みの中から剣〈髪逆^{かみさか}〉を引き抜くと、舞台上に飛び出した。鶴牧の〈魂糸〉を一刀両断し、返す刀を鶴牧の胸元へと向ける。剣〈髪逆〉は、鶴牧の胸を深々と貫いた。

「なんだ？ これは」

痛みがないためか、鶴牧は意外に冷静だった。いや、虚を突かれて、感情が対応しきれなかっただけかもしれない。

「？」

そしてなぜか、〈魂の要^{たましいかなめ}〉を貫いたはずなのに、鶴牧の〈魂糸〉が麻痺した様子がなかった。八千穂は混乱し、とにかく鶴牧を施術しようと左手を伸ばした。そのとき——

「きゃ—————」

生徒たちの間から悲鳴があがった。

それで八千穂の動きが止まった。

鶴牧は一步後ろへとよろけ、しかし踏みとどまって八千穂を睨み付けた。自分の胸に刺さった〈髪逆〉を見つめて、ごくりと唾を飲み込む。

「チホ！」

舞台袖から飛び出してきた毅瑠の声に、八千穂はようやく我に返った。

「毅瑠……」

毅瑠は無言で八千穂の手を引くと、舞台袖へと引っ張り込んだ。やがて、鶴牧の怒声が響き渡り、体育館の中は騒然となった。

それが、〈神坂八千穂事件〉の幕開けだった――

八千穂事件 2

当然のことながら、八千穂の処分を巡って職員会議は紛糾した。突然飛び出してきた八千穂が刃物のようなものを振り回し、挙げ句の果てに、それを鶴牧の胸に突き立てたところを、始業式に参加していた全員が目撃していた。それだけを取り上げれば、八千穂は即退学になってもおかしくない。下手をすれば、警察沙汰にまでなるような話だった。

しかし、事態はそれほど簡単ではなかった。まず、八千穂が振り回していた刃物が何だったのか、それを誰も特定することができなかった。毅瑠に舞台袖に引っ張り込まれた八千穂は、教員たちに取り抑えられた。その時点で、八千穂は何も持っていなかったのだ。当然、八千穂と仲の良い毅瑠が隠したことが疑われ、舞台袖を中心に徹底的に搜索が行われた。しかし、結局何も見つからなかった。「鶴牧先生を止めようと思った」教員たちの尋問に対して、八千穂はそれで通した。あまりに埒が開かず、尋問の矛先は毅瑠に向けられた。しかし、毅瑠は毅瑠で「神坂さんが、鶴牧先生に殴られると思って」としか答えなかった。

もちろん、鶴牧は、自分が刀のような刃物で貫かれたことを主張して、八千穂の退学を職員会議で迫った。しかし、職員たちは一樣に、面倒なことになった、という顔をしてため息をついた。八千穂が飛び出す前、悪口を言った生徒に対する鶴牧の態度が、なんとも教員たちの心証を悪くしていた。その場で鶴牧が何をするつもりだったのか、誰もがそれを訊きたいと思い、そして訊けずにいた。それにもまして問題だったのは、刃物で貫かれたはずの鶴牧の胸元には、傷一つ残っていないことだった。

結局、八千穂は停学二日の処分となった。それは、刃物を振り回したためではなく、単に始業式を混乱させたため、という理由だった。

実質的な被害者は出ず、結果的には、鶴牧が二年生の男子生徒に行おうとしていた何かを阻止することになった――最終的には学園もそう判断せざるをえなかったようだ。そこに、生徒会からの強い働きかけがあったのは言うまでもない。

しかし――公式見解はそれで落ち着いたとしても、見てしまった者たちの記憶を消すことはできない。あれが何だったのか、生徒達の間で憶測が憶測を呼んだ。

そして、当該の鶴牧も、納まりが付こうはなかった。

八千穂事件 3

「向井君。向井君?……向井君!」

「……え?」

毅瑠の顔を乙蔵綾音が覗き込んでいた。おとくらあやね

「ぼーっとして、全然仕事が進んでないわ。そんなに八千穂のことが気になる?」

始業式の事件から二日目の放課後。場所は生徒会室だった。

八千穂のことがあったからといって、学校行事がなくなるわけではない。生徒会の仕事が忙しいのは相変わらずで、毅瑠としても、八千穂が気になるからといってそれを放り出すわけにはいかない。八千穂が抜けている分、綾音が手伝いに来てくれていた。

「乙蔵さんも、正式に事務員になってもらいたいんだけど、良いかしら?」夏目が言った。

「本当ですか? わ、がんばります」綾音が嬉しそうに手を叩く。誰からともなく、生徒会室に拍手が沸き起こった。

「さ、今日も、もう一踏ん張りよ」

夏目が檄を飛ばし、生徒会室中が頷いた。

「……ですか?」

「え?」

毅瑠が何かを呟き、一番近くにいた綾音が聞き返した。

「チホは、もう生徒会にはいないんですか?」

「向井。お前何を」

太一が毅瑠を咎めようとするが、毅瑠はそれには取り合わず、夏目へと詰め寄った。

「乙蔵さんを事務員にするってことは、チホがいらないってことですね?」

「違うわよ」夏目が冷静な口調で返す。

「だって、そうじゃないですか。停学処分になったチホがいたら、

生徒会の信用に傷が付きますからね？」

「違うわ。乙蔵さんに事務員をやってもらうのは、もう決まっていたことよ」

「それでも……彼女がいれば、チホがいなくなっても平気ですよ」

夏目は無言で毅瑠を見据えた。

「……あれは何だったんだって、みんな思ってますよね？ どうです？」

「やめろ、向井」力が強い口調で言う「俺たちは、八千穂ちゃんが意味もなく人を傷つけようとするような子じゃないって、知っている。何か理由があるんだろ？」

「理由ってなんですか？」と毅瑠。

「何？」

「わからないですよ？ それは気味が悪いし、印象が悪い。なんとかしないと……このタイミングでの新事務員は……」

「もうやめて！」叫んだのは綾音だった。「やめて、向井君。邪魔なら出て行くから……」

綾音は、溢れる涙を抑えながら、生徒会室を飛び出していった。

「向井君」

夏目が抑えた口調で毅瑠を呼んだ。そして、毅瑠の振り向きざま——ぱんっ、とその頬を張った。

「あ……」

「八千穂ちゃんは、誰がなんと言おうと生徒会の仲間よ。でも、仲間が信じられないなら……あんたは出て行きなさい！」

じわじわと、頬に痛みの波がやってきた。頭の中が真っ白になる。静かな憤怒を湛えた夏目が、毅瑠を睨み付けている。この顔を見たのは二度目だ。一度目は、四月に八千穂がクラスの中でイジメを受けたとき——

毅瑠は、かつて自分も停学処分になったことがあるのを忘れていた。それでも、夏目達の自分への態度に変化などなかった——毅瑠は夏目の顔を見ていられなくなり、ふいと視線を逸らした。すると

今度は、他の五組の視線に晒される――

「……」

やがてそれにも耐えられなくなった毅瑠は、自分の鞆を掴むと、生徒会室を飛び出した。

八千穂事件 4

八千穂は、涼心学園高校の正門を、少し離れたところから見つめていた。さすがに今日は制服ではない。ジーンズにブラウス。かぶり慣れない野球帽をかぶり、三つ編みは帽子の中に押し込んでいる。時刻は午後四時半を回っていた。授業が終わり、帰宅する生徒たちが正門から吐き出されるのも一段落付いた。今校内に残っているのは、部活動をしている生徒たちだけだ。

（さてどうしようか）

昨日も一日こうしていたが、特に問題はなかった。今日も今のところ異変はない。明日は停学が明けるから、普通に登校すればいい――

八千穂が見張っていたのは、生徒たちの〈魂糸〉の状態だった。

あの鶴牧という教員が鬼なのは間違いない。そして、あの始業式で、〈魂糸〉を使って男子生徒をどうにかしようとした。鶴牧は自分の〈魂糸〉――見えざる力が、他人に影響を及ぼすことができることを知っている――つまり、それは鬼だ。

あれだけカッとなりやすい鶴牧のことだ、被害者が次々と出てくる懸念があった。そうなるようなら、停学明けを待たずにどうにかしなくてはいけない、と八千穂は思っていた。だから、鶴牧の被害にあった生徒がいらないか見張っていたのだ。

しかし、別の懸念もあった。一昨日の始業式で、八千穂は間違はなく鶴牧の〈魂の要〉を貫いたと思った。しかし、効果はなかった。通常〈魂の要〉は体の中央――ほとんど心臓と同じ場所にある。あの男――鶴牧は〈髪逆〉に対して耐性でもあるのだろうか。それとも、〈魂の要〉の位置が違ってもいいのか。つぎはぎだらけの鶴牧の〈魂糸〉は醜く、あの一瞬では八千穂には判別が付かなかった。し
確実なのは、穀瑠に〈魂見鏡〉で確認してもらったことだった。しかし、一昨日学校で別れて以降、穀瑠と連絡が取れていない。八千

穂が電話しても出ないのだ。

部活動をしている以外の生徒の大半に問題がなかったため、今日は帰っても大丈夫だろうと八千穂は判断した。しかし、毅瑠のことが気になる――

「八千穂？」

ふいに声がかけられた。綾音だった。

「……ばれた？」

綾音は丸く目を見開き、そして、ぷっと吹き出した。

「八千穂、それ変装のつもりなの？」

「そう」

「あはははは」

綾音は豪快に笑った。涙が滲むほど笑った。そして、笑いが突然、涙に転じた。

「綾音。どうしたの？」

「……」

綾音は悔しそうな顔で、八千穂にしがみついた。八千穂はただ、不器用に抱き返すことしかできなかった。

八千穂事件 5

「毅瑠……そんなこと言ったの？」

八千穂の部屋で、八千穂と綾音は向かい合っていた。

学校の前で泣いていては目立つ。停学中の八千穂は目立ちたくない——そんなこんなで、泣きやまない綾音をなんとか引っ張って、八千穂は自宅の髪逆神社へと帰ってきたのだった。

綾音を見ると、七穂ななほは何も言わずに温かいミルクをいれてくれた。それを飲み、ひとしきり泣いた綾音は、ようやく落ち着いていた。そして今、事情を八千穂に話しているところだった。

「……夏休み前の事件のときさ、向井君には散々酷い目にあわされたけど、悪意はなかったと思っていたのよ。でも、今回はちよつと……悔しかった。私が八千穂と仲良くなったの知ってて、それでもあの男は、自分一人ですべてを背負っているようなことを言うのよ」

「私、停学は平気。毅瑠だって停学になった」

「そうよね。そんなことも忘れちゃっているのよ、あいつ」

「……たぶん、毅瑠は責任を感じているんだと思う」

「責任？」

八千穂は、自分用のマグカップを両手に包み込んだ。コーヒーの香が鼻をくすぐる。

「綾音。前に屋上で話をしたとき、以前の私について毅瑠が話したのを覚えてる？」

「被害者は施術の対象外だったって話？」

「そう。それは本当の話。被害者に施術するなんて考えてもみたことなかった。でも、毅瑠が言ったの。被害者の〈魂糸〉の環を繋いで欲しいって。友達として頼みたいって」

「友達……」

「私、友達になろうって言われたの、毅瑠が初めてだった。綾音は二番目」

「……」

「鬼の施術のときは、必要な〈魂糸〉は鬼から調達する。だから、〈霊鬼割〉の命は減らない。でも、被害者の場合はそうはいかない。〈霊鬼割〉は、自分の命を永らえるための術だから、被害者の施術は理に反する……」

「それでもやってくれって？」

綾音の目つきが険しくなる。しかし、八千穂は穏やかに首を振った。

「それを私に頼んだときの毅瑠は、そのことを知らなかった。でも、私が了解した。友達だから」

「八千穂……」

「やってみたら、それが正しい気がした。だから、それからは、被害者にも目を向けるようになった。誰かに鬼の〈魂糸〉が伸びたとき、その誰かは守らなきゃって……。だから、一昨日も体が反応した。考えるより先に。毅瑠は、自分が私をそうしちゃったんだって思っていると思う。責任を感じているんだと思う。……違うのに」

「違うの？」

「毅瑠のお陰でこうなれたの。自分の命を永らえるためだけに鬼を狩るより、誰かを守るために鬼を狩る方が、ずっと心が軽い。私ひとりじゃ全部は無理でも、目に見えるところだけでも……随分違う。だから、あの二年生を守れた私を、毅瑠にはほめてもらいたい……」
ふわっと綾音が八千穂に抱きついた。さっき、泣きながら抱きついてきたのとは違う、優しい抱擁だった。

「八千穂……良い子だね」

「なに？」

「なんでもない……」

何故だかわからなかったが、綾音はまた泣いているようだった。

「八千穂。ずっと友達でいようね」

「綾音はずっと友達」

体を離して微笑んだ綾音の顔は、涙でぐしゃぐしゃになっていた。

八千穂事件 6

生徒会室を飛び出した毅瑠は、知らず神坂神社へと辿り着いていた。

一昨日学校で別れて以降、八千穂とは会っていない。何度か電話がかかってきたが、出ることはできなかった。どんな言葉をかければいいのか、それがわからない。

この数ヶ月で、自分が八千穂を変えたという自覚が毅瑠にはあった。もちろん、綾音や、夏目や、生徒会の皆の影響もあるだろう。でも、きっかけは自分なんだという自負があった。すべては、良い方向に向かっているのだという自負があった。しかし――

一昨日の始業式での鶴牧教諭の騒動。まさか、あそこで八千穂が剣〈髪逆〉を抜くとは思わなかった。どれだけ鶴牧が危険な鬼だったとしても、以前の八千穂なら、剣〈髪逆〉を衆人環視の中に晒すなどありえなかったはずだ――〈霊鬼割〉としての理性が効かなくなっているのだ。

今、校内は八千穂が振り回していたものは何だったのかが話題になっている。当然だが――好意的な噂ではない。二日経ち、生徒たちは自分の記憶に自信が持てなくなり始めている。結果、気味の悪さだけが残ってしまっている。

毅瑠は、八千穂にどうなってもらいたいか、それがわからなくなっていた。八千穂には、普通の女の子として高校生活を楽しんでもらいたい。しかしそれは、〈霊鬼割〉の宿命を蔑ろにしろと言っているわけではない。八千穂が普通の女子高生として学校になじめばなじむほど、それが原因で立場が危うくなるのでは、本末転倒だ。

あの、始業式での八千穂の行動をどう評価するべきか――毅瑠は迷っていた。

「向井君？」

「乙蔵さん……」

神社の鳥居の下で二の足を踏んでいた毅瑠に声をかけたのは、驚いたことに綾音だった。

「なんでここに……」

「それはこっちの台詞よ」

「毅瑠」綾音に続いて現れた八千穂が、毅瑠に気付いて足を止めた。

「やあ、チホ。久しぶり……」

「毅瑠。綾音に謝って」

「え？」

「泣かせたでしょ？ 謝って」

「……」

綾音が八千穂に泣きついたのだろうか？ なんとなくそれはしっくりこなかったが、とにかく綾音は、涙の理由を八千穂に打ち明けたらしい。毅瑠は素直に頭を下げた。

「乙蔵さん……ごめん」

綾音は、毅瑠と八千穂の顔を交互に見ると、深いため息をついた。そして「向井君。ちょっと来て」と毅瑠を誘うと、八千穂の目の届かないところまで移動した。

「ええと……本当にごめん」

「それはもう良いわ。それより、八千穂のことよ」

「チホの？」

「向井君、八千穂の前で必要以上に自分を責めないようにしてね。あの子、あなたが教えた道が正しい道だと、そう信じてる。今回の件だって、自分の行動をちっとも後悔してないわ。なのに向井君が迷ったら……あの子どうなっちゃうと思う？」

「……」

「だから、向井君は、いつもの毒舌で趣味の悪い向井君のままでもいいのよ」

「ありがとう」

「私が感謝される筋合いはないわ。あなたを信じているのは八千穂なの。私はねえ……酷い目にばかりあわされて、ちよっとむかつ

いてるわ。そうね……一発くらい殴ろうかしら」

「……わかった」

毅瑠は目を閉じて、歯を食いしばった。綾音は躊躇なく毅瑠の頬を張った。

「て——」

「当然。これは、私の分じゃないもの」

「え？」

「戸時先輩を侮辱した分よ。私の分は、たぶん先輩がやってくれたんでしょ？」

毅瑠は頬を抑えた。まさに、凶星だった。

「何やってる？」

毅瑠と綾音がなかなか戻ってこないのを怪しんで、八千穂が顔を覗かせた。

「なんでもないわ。こっぴどく叱っていたところよ」

八千穂は毅瑠の顔を見た。そして、腫れた頬を見て納得したようだった。

「さて、私は帰るわ。ミルクごちそうさまって、七穂小母様に伝えておいてね」

綾音は軽く手を振ると、さっさとその場を後にした。

残された毅瑠と八千穂は、しばらくその後ろ姿を見送っていた。

八千穂事件 7

「あら、向井さん。いらっしやい」

七穂の言葉に、毅瑠は反射的に謝ってしまいそうになった。この度は、八千穂さんが停学になるようなことになり云々（うんぬん）――しかし、さっきの綾音の言葉を思い出し、辛うじてそれは思い止まった。

「夏休み中はお世話になりました」

「どういたしまして。いつでも、遠慮なく使って頂戴」

生徒会の面々は、夏休み中、広くて涼しい神坂家の居間を、第二の生徒会室として便利に使わせてもらっていたのだ。

七穂の笑顔に送られて、毅瑠と八千穂は、八千穂の自室へと入った。テーブルに二枚の座布団が敷かれている。毅瑠は、さっきまで綾音が座っていただろう座布団の上に腰を下ろした。

「昨日今日とどうしていた？」

「正門の外で見張っていた」

「学校のか？」

「そう」

例の鬼――鶴牧有人による被害者がいないかどうか、それを見張っていたのだという。毅瑠は自分が悩むことで手一杯で、まるで気が付かなかった。

「よく、ばれなかったな」

「綾音にはばれた」

なるほど。生徒会室を飛び出した綾音が、学校を出たところで八千穂を見つけた、ということだったようだ。

「それで？ 被害者はいたか？」

八千穂は首を振った。

「そうか。ここ二日、俺も生徒たちには気を配っていたが、特に問題はなかった」

もちろん、毅瑠は〈魂見鏡〉で鶴牧を見た。なんとも醜い〈魂糸〉だった。あまりの醜さに、既にどれが本人の〈魂糸〉なのかわからなくなっていた。

「〈魂の要〉どこにあった？」

「どこって？」

八千穂は、鶴牧を〈髪逆〉で貫いたときのことを話した。胸にあるはずの〈魂の要〉——その手応えがなかったこと。

「……すまん。わからない。そんなこと考えても見なかった。明日、もう一度確認してみるよ」

「そう。あの鬼はだいぶ手強そう。充分に準備をして臨まない」と鶴牧を施術する算段をする八千穂を見て、毅瑠はつい口走ってしまった。

「ごめんな」

「なに？」

綾音は言った。八千穂は毅瑠を信じている、と。だから、これ以上のことは言ってはならない——たとえ毅瑠の心がその重さに耐えられなくなっても、それを八千穂に投げてはならない——

「いや……、昨日、電話に出られなくてごめんな。ねちゃっててさ」

「別にいい。それよりも施術」

「そうだな」

毅瑠は八千穂の顔を見た。鬼について語っているというのに、その表情は随分と穏やかだった。初めて会った頃の無表情とは雲泥の差だ。

今、初めて多くの仲間に囲まれた八千穂は、そちらに針が振れているのだ。〈霊鬼割〉の重さより、仲間の重さが勝っているわけではなく、乗せたばかりで、天秤がそちらに傾いているだけなのだ。なにより、〈霊鬼割〉の重さは本人の命の重さだ。時が経てば、バランスが取れる——取れるはずだ。だから、それまでの間、誰かが支えてやらなければならない。

毅瑠は思う。俺がひとりで——と思うのは、きっと思い上がりな

のだろうと。でも、なんとかこの危機は切り抜けてやりたい。明日には八千穂の停学が明ける。登校した八千穂に対し、生徒たちがどんな反応をするかはわからないが――でも、守ってやりたいと思う。なにより、八千穂の行動は、生徒を想ってのものだったのだから。

八千穂事件 8

八千穂の停学が明けた日、朝早く登校した毅瑠は、予想を遙かに越えた光景を目にして固まった。

『神坂八千穂を退学にしろ!』

そう大書した横断幕を持った鶴牧が、朝早くから正門前に陣取っていたのだった。

「あんな野蛮で得体のしれない生徒と一緒に、君たちは勉強ができるのか？ 私は、間違はなく、黒い剣でこの胸を貫かれた。傷跡が残っていないというのが、また不気味ではないか。君たちも見ただろう？ あれは夢ではない。自分たちの目を信じるのだ。いいか！

神坂八千穂は得体がしれない。本当に人か？ 今一度問う。本当に君たちは、あの女と一緒に学園生活を送ることができるのか？ どうだ？」

拡声器を使って、鶴牧は声を張り上げた。登校してくる生徒たちが、呆気にとられてその様子を見ている。

「一学期、銅像絡みの事件のとき、神坂八千穂が関係しているのではないか、という噂が立ったそうではないか。それは、たぶん真実だ。君たち、自分の直感を信じたまえ。Believe Yourself!」

不思議なことは、教職員が止めに入らないことだった。それを良いことに、鶴牧の言葉はエスカレートする。そして、次第に観衆――生徒たちも、その論調に同調し始めていた。朝の校門前に、異様な熱気の集団が出現していた。ついには、シュプレヒコールを始める。

「神坂八千穂をやめさせろ！ 神坂八千穂をやめさせろ！ 神坂八千穂をやめさせろ！」

「やめなさい！」

シュプレヒコールに負けない大音量の声が降り注いだ。一瞬、声

が止む。

「鶴牧先生、何を考えていらっしやるんですか！ 馬鹿もほどほどになさってください」

声の主、生徒会長戸時夏目は、やはり拡声器を持って校舎から正門に向かって歩いてきていた。

「先生が、一人の生徒をやめさせるために生徒たちを焚き付けるなんて、聞いたこともないわ」

「これはこれは、生徒会長さんだね」

「戸時夏目です」

「戸時君か。ときに、君はあのとき、私と神坂の一番近くにいた。違うかね？」

「その通りです」

「それなら見たはずだ。あの女が、私の胸を貫いたのを」

「見ていません」

「何だと？」

「見ていません」

「ふん……ござかしい。そうか、あいつは生徒会の関係者だったな。自分の生徒会に傷が付くからなあ。不利なことはもみ消しか」

「見ていないものは、見ていません。集まっている皆さんも、何を見たって言うんですか？」

夏目は自信満々で言い放った。鶴牧に先導されていた生徒たちが、ざわっと不安げに揺れる。そこまで自信たっぷりな訊かれて、大概の生徒は自信が揺らいでいるのだ。

「私……右側にも長い髪の毛を見たような気がする……」人垣の中から、誰かがそんな呟きを漏らした。

「俺も見た気がする」「うん、確かに左右に髪があったよ」「何だったんだあれ」――

「そら見ろ、やはり神坂八千穂は得体がしれない！ あんなの、恐らく人じゃない！」

鶴牧は勢い込んで言った。その目が異様にぎらついている。

「ではお伺いします」夏目が冷静な口調で言った。

「なんだ？」

「神坂さんが飛び出してきたとき、先生はこうおっしゃっていました。『俺に逆らったり、俺を馬鹿にした奴がどうなるか』と。いったい、何をなさろうとしていたのですか？」

どよっ、と群衆が揺れた。

「そんなことはどうでもいい！」

「よくありません。あれがなければ、神坂さんが飛び出してくる必要もなかったんですから」

「結果的に俺は何もしていないんだから、問題ではない」

「結果的に？　じゃあ、何かをするつもりだったのですね？」

「屁理屈をこねるな！」

「質問に答えてください。先生は、あの二年生に何をなさるおつもりだったのですか？　私のことが気に入らないなら、今ここで、私にそれをやってみますか？」

今や、正門前はしんと静まり返っていた。誰もが息を詰めて、鶴牧と夏目のやりとりを見つめている。

「殴るおつもりですか？　それとも蹴るのかしら？　あのときもそうだけれど、これだけの観衆の中でそれをやったら、先生の責任も問われますわね？　それとも、学園長にコネでもあるのかしら？」

鶴牧の顔が憤怒に彩られた。夏目を睨み付けている。夏目はその視線を受け止めた。

「それとも先生、手も足も出さずに、私をどうにかする術すべをお持ちなのかしら？」

その言葉は、鶴牧だけでなく、その場にいる全員に衝撃を与えた。鶴牧は虚を突かれたような顔をして、一步下がった。

「もし、先生が一步も動かずに私をどうにかできたら、先生の方が人外じんがいのものだということになってしまいますけれど」

艶然と、凄惨な笑みを浮かべた夏目に、今や鶴牧は完全に押されていた。これは鶴牧の負けだ——誰もがそう思ったとき——

「神坂だ」

その一言で人垣が割れた。正門の手前に、呆然と立つ八千穂の姿があった。

「チホ」

穀瑠はその側に駆け寄った。

八千穂は鶴牧が持つ横断幕を見上げた。

集まった生徒たちは、一様に怯えた目で八千穂を見た。

八千穂が一步前に足を踏み出すと、周りの人垣が半歩下がった。

そして――誰かが呟いた。

「よく出てきたな……」

その声に誘発されて、少しずつ、さっきのシュプレヒコールが再現される――

叩き付けられる言葉の暴力に、八千穂は踵を返すと、正門に背を向けて走り去っていった。

八千穂事件 9

〈魂見鏡〉をつけて校内を巡った毅瑠は唇をかんだ。

「うかつだった……」

八千穂が、停学中の二日間に生徒たちに気を配っていたのと同じように、毅瑠も被害を受けた生徒はいないか、ことある毎に注意していた。しかし、今朝の騒ぎで、あることに気付いた。教職員が誰も出てこない――

毅瑠は〈魂見鏡〉をかけて校舎内に入ると、職員室を覗いた。案の定、教員たちの〈魂糸〉が無惨な状態になっていた。もちろん、校舎内のどこに行っても、大人たちの〈魂糸〉が切られてはみ出していた。

〈魂糸〉は心に直結している。〈魂糸〉で編まれた〈魂の要〉に意識が宿るとされているからだ。とすれば、人の〈魂糸〉に干渉する鬼が、その心を操ることもあるかもしれない。恐怖による服従は根源的な事柄だけに、力任せに大勢に行いやすいことも考えられる。

鶴牧有人――あの鬼は、他人の〈魂糸〉を傷つけ、その心を恐怖で縛り服従させる――そういうことのようにだった。

八千穂の退学を認めなかった職員たちを、鶴牧は力で服従させた。だから、今朝の騒ぎで教職員は誰一人出てこなかったのだ。恐らく、鶴牧がもう一度職員会議で八千穂の退学を迫れば、今度は間違いなく決議されるだろう。しかし、それだけでは気が晴れないというところか――。始業式では、件の二年生男子を全員の前で屈服させようとした。衆人環視の元で、膝を付かせ、屈辱を味合わせないことは気が済まない――

（真性のサディストだ……）

毅瑠は深いため息をつくど、生徒会室へと向かった。まともに授業を受ける気になどなれず、生徒会室でサボタージュを決め込むことにする。考えなければならぬことが山ほどある――

もちろん、帰ってしまった八千穂のことが一番気になった。しかし、八千穂の後は綾音が追ってくれた。毅瑠は、今日八千穂が学校で調べようと思っていたはずのことを、代わりにやる必要があった。鬼について――被害者について――

「あら、不良ね」

生徒会室のドアを開けると、中に夏目がいた。

「お互い様でしょ？」

毅瑠は扉を閉めると、ゆっくりと中に入った。昨日の今日だったが、夏目は特に毅瑠を咎めはしなかった。

「今朝、凄かったですね、戸時会長。惚れました」

「その冗談は笑えないわ」

「……すいません」

夏目は、マグカップの中に冷めたコーヒーをかき回していた。毅瑠はポットにお湯を作り、二人分のコーヒーをいれる。その間、二人は無言だった。まだ二時限目が始まったばかりだ。午前中の授業に出る気のない二人には、時間がたっぷりあった。

温かいコーヒーを受け取って、夏目が口を開いた。

「さすがに、そろそろ話してくれるかしら？」

「……わかりました」

四月の〈銅像生け贄事件〉から約半年。〈二年C組テレパシーカニンング事件〉〈夢喰い事件〉と続いて、八千穂が何か不思議な力を持っているだろうことに、気付かない方がおかしい。ましてや、相手は夏目である。

「少し長くて複雑な話になりますが……」

「大丈夫、時間はたっぷりあるわ」

そうして毅瑠は、八千穂との出逢いから、〈靈鬼割〉〈魂糸〉〈鬼〉などのことを、順を追って話し始めた。

開け放たれた窓から、暑さの名残を含んだ風が吹き込む。夏にしがみついたような蝉の鳴き声が時折聞こえる。毅瑠の声だけが響く生徒会室は、話の内容も相まって、夢の中のように現実感がなかった。

た。

「……なるほどね」

すべて聞き終えて、夏目が一つ息を吐いた。毅瑠は、冷めてしまったコーヒーをぐいと飲む。

毅瑠の話に、夏目は特に感想を述べなかった。信じるとも、信じないとも言わない。あるがままに受け取る、それが夏目のスタイルだった。

「それで、この後はどうするつもりなの？」

「鶴牧先生を施術して、それから、チホへの誤解を解きたいと思います」

「どうやって？」

「たとえば……手品だったことにするとか。施術後の鶴牧なら言いくるめられると……」

「向井君」

「いや、集団催眠だったことにして……」

「向井君」

「戸時会長、以前みたいな仕込みをまた……」

「向井毅瑠！」

毅瑠は、びくつとして、口を半開きのまま言葉を止めた。夏目がまっすぐに毅瑠の目を覗き込んでくる。

「向井君。人を欺いて丸く収めることばかり考えていると、大切なことを見失うわよ」

「……」

「君にとって、一番大切なことは何？」

「全校生徒の滞りのない日常……」

「違うでしょ？」

「でも……」

「違うでしょ？」

「はい」

毅瑠は小さく頷いた。一番大切なもの——そんなこと、最初から

わかっている。言われるまでもなく、わかっているのだ。

「大切なものを守るために、何かを犠牲にする決断も必要よ」

「……」

「でも、忘れないで。何があっても、私は二人の味方だから」

「先輩……俺、昨日酷いことを……なのに……」

「そうね。でも、誰かのために周りが見えなくなる……それは、素敵なことだわ」

夏目は優しく笑った。窓から入る風に、秋の香が微かに混じる。

それを嗅ぎ取って、夏目は視線を外へと向けた。

「最後に一つ……女の子はね、大好きな人が側にいてくれれば、全世界が敵でも生きていけるわ」

穀瑠は生徒会室を飛び出していった。

八千穂事件 10

八千穂は、自分が何故逃げているのかわからなかった。

今朝は、倒すべき鬼のことばかり考えながら学校へ行った。その鬼が、自分を退学させようと画策していた。そこまでは状況として理解できた。しかし、その鬼に狙われている生徒たちが、鬼と一緒に八千穂を糾弾した。それがわからなかった。八千穂は混乱し――逃げ出してしまった。

どれくらい走ったかわからない。しかし、とにかくまっすぐ走ってきた。気が付くと、小さな児童公園の前にいた。

八千穂はベンチに腰を下ろすと、大きく息を吐いた。これからどうすれば――

「足、速いのね」

「？」

顔を上げると、綾音がいた。苦しそうに肩で息をしている。

「隣、いい？」

綾音の息が整うまでのしばし、二人は無言で座り続けた。平日午前中の住宅街は、人通りもなく、とても静かだった。

「あれは……酷いね」綾音が言った。「戸時先輩が随分と追い詰めてくれたんだけど……でも、先生方が誰も出てこなくて。どうなっているのかしら」

「先生方が？」

「うん」

八千穂は閃くものがあつた。そうか、そうきたか――八千穂は歯ぎしりをする。

「どうしたの？」

「あの男は鬼だ」

「うん。そうだろうと思っていた」

「だから、生徒たちには気を配っていた。でも、先に先生方をやら

れたみたい」

綾音が息を飲んだ。

先生方が鬼に〈魂糸〉を操られている——それならば、今朝の状況も説明が付く。八千穂が停学中だった二日間で、鶴牧は大人たちから地固めを行ったということだ——

でも——だとしても、どうすればいいのか。八千穂は途方に暮れた。

「綾音」

「なに？」

「私、学校やめないといけないのかな」

「馬鹿なこと言わないで」

「鬼を施術することはできる。でも、人の記憶は操れない」

「……それにしたって、八千穂はみんなを守ろうとしているのに……」

「だからかな」

「何が？」

「先代の〈霊鬼割〉、おばあちゃんが私に言ったの。〈霊鬼割〉は鬼を狩ることだけに集中すればいい。鬼に〈魂糸〉を切られて命を喰われた人は、それが寿命だ。〈霊鬼割〉が関わることじゃない……って」

八千穂は自分の顔が強ばっていることを自覚した。こんなとき、どんな顔をしたら良いのだろうか。

「たとえば私が〈魂糸〉を環に繋いでも、普通の人にはわからない。鬼の凶行を防いでも、普通の人にはわからない……ただ、変に思われるだけ……」

「八千穂？」

「あれ？」

八千穂は、自分の頬を何かが流れていることに気が付いた。手の甲でそれを拭いても、後から後から、何かが流れ落ちてきた。

「なんで……」

物心ついた頃から、八千穂は泣いた記憶がない。だから、泣いている自分に戸惑った。どうしたら良いかわからず、ただ、手の甲で涙を拭い続ける――

「泣きたいときは泣いて良いの。人はね、泣くようにできているんだから」

「でも……」

「女の子の涙に理由はいらないわ。今は思いっきり泣く。理由は後で考えればいいのよ」

そうして、綾音は優しく八千穂の肩を抱き寄せた。

泣いて良い――八千穂は心の枷を解き放った。ひっ、と喉が鳴り、知らず声が溢れた。溢れたら止まらず、八千穂は今までの分を取り返すかのように、大きな声を上げて泣いた。

八千穂事件 11

「私、初めて泣いた」泣きやんだ八千穂が呟いた。

「本当に？ どうだった？」

綾音は、赤ん坊のときはどうなのだ、などという野暮なことは言わずにいてくれた。

「すっかりしたみたい」

それは、雨上がりのような清浄感だった。涙が、いろいろなものを洗い流してくれたようだ。

「ねえ、八千穂。今私が思っていることを言っている？」

八千穂が無言で頷いた。

「八千穂は、友達とか、仲間とかに慣れていないんだと思う」
今度は、八千穂は小首を傾げた。

「八千穂は向井君が好きだよ？ どの位好き？」

「すごく好き」

「うん。じゃあ、戸時先輩は？」

「とても好き」

「ええと、私は？」

「大好き」

「それじゃあ、クラスメイトは？」

「……」

「嫌い？」

「嫌いじゃない」

「なら、好き？」

「ちよっとだけ」

「うん。そうだね。いい？ 八千穂の中には好きな人が一杯いる。

でも、向井君を好きな〈好き〉と、クラスメイトや学校を好きな〈好き〉は違うでしょ？」

「違う」

「それはね、当然なんだよ。人の心には大きさがあって、すべての好きを同じに収めることはできないの。八千穂が、向井君に頼まれて〈靈鬼割〉の力を使うのは、向井君が好きって気持ちが起こさせる行動なんだ。わかる？」

「なんとなく」

「そうして、今回の件ね。八千穂が鶴牧先生からあの二年生の男子を守ろうと思ったのは、とどのつまり、向井君のためよね？　それは、この前八千穂も自分で言っていたわよね？　ほめてもらいたいって」

「そう」

「なら、向井君以外からは、何かを期待しちゃダメよ」

「？」

「さっきの八千穂の話を聞いているとね、〈靈鬼割〉として命を張ってがんばっても、それが見えない普通の人は評価してくれない……そういう風に聞こえた。友達とかに慣れてない八千穂はさ、敵じゃない人はすべてが味方、みたいに思っちゃってたんだよ。きっとでも、それは間違い。人の心は揺れ動くの。友達と友達じゃないの間、仲間と仲間じゃないの間くらいの人は大勢いる。八千穂がクラスメイトを好き、程度の〈好き〉は、もっと好きな人が何かを言ったら、簡単に流れちゃうものよ」

「ええと……」

「わからない？　たとえば、好きでも嫌いでもないクラスメイトがいたとするわね。でも、向井君がその子を嫌いだって言ったとする。そうしたら八千穂はどうする？」

「……」

「今朝、校門のところに集まっていた生徒たちはその程度なのよ」

「なら、私はどうしたらいいの？」

「そうね……すべてを助けようとか、全部自分でどうにかしようとか、思わないことが大切だと思う。自分の好きな人だけ助ける。ぶっちゃけ、それ以外の人は放っておく」

「いいの？」

「逆に訊きたいわ。ダメなの？」

「……」

「向井君はさ、変な正義感からいろいろ言うかもしれない。男子って概ねそういうところがあるのよ。理想論ていうかね。でも、女の子はもっと現実的じゃなきゃ」

「現実的？」

「そ。実のあることを最優先。自分の好きなことを最優先。自分のできることを最優先。自分のやりたいことを最優先」

「じゃあ、私は……」

「それを考えるのは八千穂自身よ。でも、今言ってみたいに、余計な雑音はカットして、何が最優先なのかを考えるの。恐らく……あなたのおばあちゃんも、同じことで悩んだんじゃないかしら？」

八千穂が目を丸くした。

「同じように悩んで、結局、被害者には目を向けず、他人にもあまり関わらない生き方を選んだ。でも、それでも生きていけたんだよ。何故だかわかる？」

「わからない」

「八千穂のおじいちゃんがいたから」

「おじいちゃん？」

「たぶん、そういうことよ。おばあちゃんが言っているのは、大事なことだけに集中しなさいってことじゃないのかなあ」

「綾音……すごい」

「普通のこと。〈霊鬼割〉とか〈魂糸〉とかはよくわからないけど、結局はみんな人間なんだもん。そこは同じだよ」

綾音は八千穂の頭に手を乗せると、くしゃくしゃとやった。

「頑張れ、女の子！」

八千穂は、青く澄み渡った空を見上げた。それは、今日初めて見上げる空だった。

八千穂事件 12

結局八千穂は家に帰ることにした。綾音のお陰で随分と心は軽くなっていたが、今すぐ学校にとって返す気にはなれなかった。

「いい、いい。サボっちゃえ。体調が悪くなったことにでもしておけば大丈夫よ」

綾音はそう言うと、自分は学校へと戻っていった。

ぶらぶらと散歩気分で歩き、お昼前に自宅に帰り着いた八千穂を見て、七穂は「ようやく帰ってきたわね」と、ほっとした表情で言った。

「どうして？」

「向井さんがいらっしゃっているわ」

「毅瑠が？」

「今朝学校であつたことを全部話してくださったわ。だから、八千穂がどこかで泣いているんじゃないかって、私もお父さんも心配していたのよ。大丈夫？」

「泣いてない……」

七穂は微笑むと、八千穂の頬に優しく触れた。

「相変わらず嘘が下手ね」

「……でも、大丈夫。綾音がいてくれたから」

「そう。良かった。顔を洗っていらっしゃい。今鏡を見たら、嘘がすぐにばれた理由がわかるわよ」

八千穂が洗面所で鏡を覗くと、頬には涙の跡が残っていた。

身繕いを済ませた八千穂が居間に入ると、制服姿の毅瑠と、着物姿の弦悟が難しい顔をして向かい合っていた。いや、これは睨み合っていると言った方が正しい。八千穂が入ってきたことに気付かないはずはないのに、二人とも微動だにせずに相手を見据えている。

「どうしたの？」

八千穂が訝しげに二人に訊いた。

「この男に訊け」

弦悟が吐き捨てるように言った。お帰り、の一言もない。八千穂はテーブルを挟んで対峙する二人の間に腰を下ろした。

居間の障子は開け放たれ、陽光に輝く庭の緑が眩しい。それがいいそう、室内の重い空気を際立たせていた。

「毅瑠？」

「チホ」毅瑠は弦悟から目を離さずに言った。「チホはこの先どうしたい？」

「？」

「先に八千穂の言質^{げんち}を取るつもりか？」弦悟が凄む。

八千穂には、さっぱり話が見えなかった。毅瑠は八千穂を心配して、両親に今朝のことを知らせに来てくれたのではないのか――

毅瑠は小さく息を吐くと、視線を八千穂に向けた。

「チホ。俺は今日、一つの提案を持ってきた。これは、ご両親にも話した方が良いと思って、さっき神坂さんに話したところだ。……今学校にいる鬼を施術して、なおかつ、これからも二人で一緒に学校に通うための提案だ」

「毅瑠……」

八千穂が小さく身を乗り出した。本当にそんな妙案が――しかし、弦悟の声が割り込んだ。

「八千穂！ 最後まで聞きなさい」

「チホ。〈魂糸〉を全校生徒に見せよう」

「え？」

毅瑠が持ってきたのは、とんでもない提案だった。

八千穂事件 13

毅瑠の提案はこうである。

まず、全校生徒と可能な限りの教職員を一同に集める。もちろん、鬼である鶴牧有人もだ。そして、毅瑠が鶴牧を挑発する。挑発された鶴牧が〈魂糸〉を使った瞬間、八千穂が奥義〈髮逆〉——八千穂の髪の毛一本一本に〈魂糸〉を込めて武器とする業——で、その場にいる全員の〈魂の要〉を貫く。〈魂糸〉が麻痺する一方で、全員が〈魂糸〉を見ることができるようになる。それは、鶴牧が何をしようとしているのかを目撃することを意味する。そして、八千穂の髪に貫かれるということは、八千穂と繋がるということ。八千穂が鬼の施術を行えば、その意義も同時に理解してくれるのではないか——。鶴牧を施術した後は、鶴牧に〈魂糸〉を傷つけられた者の施術も行う。

それは、八千穂が考えも及ばなかった規模の作戦だった。しかし、可能性はある。可能性はあるが——問題もある。

なんと答えたら良いか迷っている八千穂を見て、弦悟が口を開いた。

「それを行うために、八千穂がどれ程命をすり減らすのか……君はわかって言っているのか？ それに、真実を目にしたからといって、全員が八千穂を理解するとは限らない。私は反対だ。涼心学園に通えなくなるというなら、転校すれば済むことだ。私は親として、娘が命を無駄にすり減らすのを見過ごすことはできない」

「無駄ではありません。それに、こんな提案をするからには、俺にも相応の覚悟があります」

「覚悟？」

「俺の〈魂糸〉を使います。チホが使った分は、俺から補えばいい」
「毅瑠？」

「別に命を捨てようって話じゃない。作先輩と力先輩のときと同じ

にしよう。二人の命を足して、半分ずつにしよう」

「随分と勝手な話だな、え？　誰が聞いても、君の独りよがりだ。反論できるかね？」

「そう思われるだろうことは、予想していました。でも、独りよがりではありません。チホは……賛成してくれると思います」

「何故そんなことが言い切れる？」

「チホのことが好きだからです」 穀瑠はきっぱりと言い切った。「俺は……チホと一緒に生きていきたい。今、二人は同じ方向を向いていると信じています」

八千穂は絶句した。今穀瑠が言っている〈好き〉は、綾音や夏目を好きな〈好き〉とはちがう〈好き〉――

弦悟は苦虫をかみ潰したような顔をした。

「……それでも、私は反対だ。剣〈髮逆〉を見られてしまったというなら、早急に鬼の施術だけをして学園を去るべきだ。……望むなら、チホがあゝの学園に通っていなくても、付き合うことは可能だろう。好きだからこそ、そういう選択をするべきではないのかね？」

「違う」 八千穂が小さく呟いた。

「八千穂？」

「私も穀瑠が好き。一番好き。この好きは、きっと特別だと思う。でも、綾音も夏目も、他のみんなも、クラスメイトも、先生たちも……好きの大きさは違うけど……好き。私はあゝの学校が好き。今日は酷い目にあっただけど……あれは鬼のせい。学校をあんふうにした鬼を許せない。〈霊鬼割〉の力は、確かに私の命を繋ぎ止めているものだけど、そのためにしか力を使わないのなら……私は鬼と同じ」

八千穂はまっすぐ弦悟を見た。

「だから、たとえば私の〈魂糸〉が減ったとしても、私はみんなを助きたい。その方法があるなら、〈霊鬼割〉にそれができるなら、穀瑠と一緒にやってくれるなら……。それでも、やっぱり学校に通えなくなったら、そのときは諦める」

「ダメだ！ わがままを言うな」

「お父さん！ 私の命よ」

「……どうしても言うなら、条件がある。私の〈魂糸〉を使いなさい」

「……」

それは反則だ——八千穂は思った。そんなこと、できるわけがない。

穀瑠はというと、鉛を飲み込んだような顔をしている。

八千穂は頭が真っ白になり、居間を飛び出した。

八千穂事件 14

「男の人ってダメね」

八千穂が飛び出していったのと入れ違いに、七穂が現れた。手の中の盆には、人数分の湯飲みが乗せられている。

「何を言っているんだ」と弦悟。

「だから、男の人は頭が固くてだめだって話です」

「それは俺のことか？」

「二人ともよ」

弦悟と穀瑠は顔を見合わせた。

湯飲みを配り終えた七穂は、自分もテーブルについた。そして、湯飲みに口を付ける。七穂の意図が読めない男二人も湯飲みに手を伸ばす。しばし、奇妙な沈黙が訪れた。

「あなた、本当に八千穂のことを考えてやっていますか？」

「当たり前だ」

「少しでも長生きするのがあの子の幸せ？」

七穂は、ここまでの会話をすっかり聞いていたらしい。

「当然だ」

「そうかしら。私にはそうは思えません。大切なのは、どれだけ長く生きたかではなくて、どれだけ幸せに生きたかだと思います」

「寿命が短くなったら幸せもくそもない」

「程度問題でしょ。今すぐ命が尽きるとか、逆縁の不幸になるとか……それは困るけれど、たとえば八十年の人生が六十年になって、その方が八千穂が幸せなら、それはいいと思うんです」

「……」

「八千穂の意志を尊重した上で、可能な限りの次善策を手伝ってやることはできないんですか？」

弦悟は言葉を失い、腕組みをしたままそっぽを向いた。

「向井さんよ」

「はあ」

「あなたが八千穂を好きでいてくれるのは嬉しいわ。あの子も喜んでいる。でも、あなたの提案は正論だとしても、唐突で、極端だわ」
「唐突ですか？」

「そうよ。話の持って行き方次第で、同じ結論でも心証が違うの」
七穂は含み笑いをしながら弦悟を見た。

「いい？ この人は向井さんに焼き餅を焼いているのよ。娘を突然脇から取られちゃった気分なんだわ。だから、あんなに強硬に反対するの」

「おい！」弦悟が声をあげる。

「なんですか？」

「いや……」

「向井さん。あなた、もっと周りを頼った方が良いわ。あなたは頭が良くて、導き出す結論も正しいけれど、でも、それだけじゃあダメなのよ」

「随分と頼っているつもりですが……」

「あなたはそのつもりでも、肝心なところは背負い込んでいないわ。今、世界にはあなたと八千穂しかいないと思っていない？」

二人の幸せは、二人にしかわからないと思っていない？ 〈霊鬼割

〉の真実は、二人にしかわからないと思っていない？」

「……」

「二人の命をまとめて、一つにして、また分ける。命って、そんな計算でどうこうしていいものじゃないわ。均等にしたら良いという問題でもない。でも、その気持ちは充分すぎるくらい伝わったわ。八千穂にも、私にも、この人にも。そして、神坂家のご先祖にもね」
「え？」

「しょうがないな」弦悟が絞り出すように呟いた。「俺は入り婿だ。神坂神社の決定権は、七穂、お前にある」

「あら、まるで私に言われて嫌々……みたいなおっしやりようですね」

「その通りだろ？」

「八千穂のためです。なのに、そんな野暮なことをおっしゃるんですか？ 私たち二人の娘でしょ？」

「そうだな」弦悟は一つ大きく息を吐くと、すつくと立ち上がった。
「向井君。付いてきたまえ」

弦悟は穀瑠を神坂神社の社の中へと導いた。

板敷きの本殿は、九月だというのにひんやりとした空気が満ちていた。本殿の奥には、標縄しめなわのかかった桐の箱が祀られている。ご神体なのだと思われた。弦悟は桐の箱に正対すると、板の間に直に正座をした。穀瑠もそれに倣う。

「この神坂神社には、古い言い伝えがある」

弦悟は桐の箱に目をやりながら言った。

「昔、鬼がいた。比類なき力を持ち、悪行の限りを尽くしていたその鬼が、あるとき、ひとりの娘に恋をした。美しく心優しいその娘は、しかし、重い病気を患っていた。鬼は自らの持つ力で娘の病を治そうとしたが、できなかった。娘の容態は悪化し、いよいよその命が尽きようというとき、鬼は自らの力の源である二本の角を折り、それを娘に差し出した。力そのものを手にすれば、娘の病は治るはず、鬼はそう考えたからだ。しかし、娘は自分が鬼の重荷になっっていることを嘆き、手にした角を自らの心の臓へと突き立てた――

すると、不思議なことが起った。突き刺さった角が光り輝き、娘は命を落とすどころか、見る見る回復したのだ。そして、角を失った鬼は、ただの人となっていた。

この奇跡に深く神に感謝した鬼は、折れた角を神の御業みわざの証として祀り、ここに神社を建立した。そして神逆かみさかと名乗り、添い遂げた娘と共に、子々孫々まで神に仕えることを誓ったという……」

「かみさか……」

「この場合は神の逆と書く。わかるかね？」

「神の逆……つまりは、鬼？」

「そうだ」弦悟は立ち上がった。桐の箱の標縄を外し、観音開きの扉を開く。「これが、折れた鬼の角だといわれている」

箱の中に収められていたのは、十センチ程の小さな剣だった。そ

こだけ世界が空白になったような、白く輝く石の剣。

「〈神逆左の剣〉……もう一本の〈かみさか〉だよ」

「じゃあ、チホが持っているのは……」

「あれは、正しくは〈神逆右の剣〉という。剣〈髪逆〉は、〈神逆右の剣〉を核にして、代々の〈霊鬼割〉がその〈魂糸〉を髪に込めて編み上げてきた物だ」

〈神逆左の剣〉を前にして、毅瑠は唾を飲み込んだ。その小さな剣には、なんともいえぬ存在感がある。それは、八千穂が振るう剣へ髪逆〉の、外へと放たれる凜とした存在感とは違う——内へと吸い込まれるような、粘り着く重さともいうべきもの——

「これが本当に鬼の角なのかどうかの議論は置いておく。しかし、力の内包した存在であることは間違いない。八千穂の持つ剣〈髪逆〉が〈魂糸〉を繋ぎ止める力を持っているのは知っての通りだ。そしてこちらの〈神逆左の剣〉は……〈魂糸〉の能力を活性化する」

「〈魂糸〉の能力ですか？」

「以前、私は〈髪逆〉で〈魂の要〉を貫いて〈魂見鏡〉を使う力を手にいれた……と話したのを覚えているかな？」

「はい」

「正確にはこの〈神逆左の剣〉で貫いたのだ。八千穂の剣〈髪逆〉でも一時的に能力は活性化するが、長くは持たない。鬼も、施術が完了すれば〈魂糸〉が見えなくなるだろう？　しかし、〈神逆左の剣〉で活性化された能力は消えない」

弦悟が静かな視線を毅瑠に向けた。

「向井毅瑠君。君は、八千穂のことが好きだと言ったね。一緒に生きていきたいと」

「はい」

「その気持ちに変わりはないかね？」

「はい」

「……ここから先は、進んでしまったら戻れない。だから、これから言うことをよく聞きなさい。聞いた後でやめても誰も咎めない。」

……この〈神逆左の剣〉で〈魂の要〉を貫くと、その個人が持つ〈魂糸〉の能力が活性化する。前に言った通り、私の場合は〈魂見鏡〉が辛うじて使える程度だった。しかし、君は、顕現した八千穂の右の三つ編みに触れただけで〈魂見鏡〉が使えるようになった。それが今でも続いている。さらに、山奥の診療所で、八千穂でさえ意識を取り込まれた〈魂糸〉の網の中で、君は意識を保ち続けた。……恐らく、君には〈夢飼い〉の素質がある。〈魂糸〉が活性化すれば……間違いなくその力が使えるようになるだろう」

弦悟は一旦言葉を切った。自分の言葉が穀瑠に染みこむのを待つ。「〈夢飼い〉とは夢を操る者……つまりは、記憶を操る者だ」

「記憶を……」

穀瑠は探していたピースを見つけた気がした。さっき八千穂に話した作戦——そこに欠けていたピースが、自分の中にある——

「しかし、実際のところ、君がどうなってしまうのかはわからない。〈夢飼い〉の能力と引き替えに……命が大幅に削られることになるかもしれない。何かあっても、八千穂の施術も効かなくなる可能性もある。君の世界は、無傷ではいられないだろう。……正直なところ、お勧めはできない」

「でも、それで俺はチホと同じところに立てるんですね」

「君がチホのことを想ってくれるのは嬉しいし、ありがたいとさえ思う。しかし、あの子の立つところは崖っぷちだ。君をそんなところに追いやるのは……君のご両親に申し訳ない……」

弦悟は〈神逆左の剣〉を手にとった。そして、懷から袱紗ふくさを取り出すと、それを丁寧に包んだ。その包みを穀瑠に差し出す。

「だから、卑怯かもしれないが、これの使い方は君自身に任せる。私の想いは言った通りだが……君にも八千穂にも、自分の人生を選ぶ権利がある。親は、辛くとも、その選択を認めてやることしかできないもんだ」

穀瑠は袱紗を受け取ると、その小さな重みを確かめた。

「訊いていいですか？」

「もちろんだ」

「チホはこの〈左の剣〉のことを知っているんですか？」

「なんとなく……教えそびれてしまっている。わかると思うが、それは気配が外に出ずうちに向かう。だから〈霊鬼割〉の能力で気配を探っても、気配の空白が存在するだけのはずだ。……背負わせたくなかったのかな」

「何をですか？」

「いろいろなものを、だよ。〈霊鬼割〉の真実だけでもあの子には荷が重いのではないかと思っていた。だから、もう一本の剣の存在は、もっと大きくなってから教えよう……そう思って今日まで来た。先代〈霊鬼割〉、つまり八千穂のおばあちゃんも、そこは私に任せてくれた。知らずとも〈霊鬼割〉に支障はないから、とね。もっとも……」

弦悟は少し言いよどんだ。

「八千穂は知っているかもしれない。剣〈髪逆〉は代々の〈霊鬼割〉の〈魂糸〉で編み上げられている。〈魂糸〉で編み上げられたもの……それは〈魂の要〉と同じ存在だと言って過言ではない。なら、そこに幾多の記憶が蓄積されている可能性だってある……」

「……。もうひとつ。神坂さんは、どんな気持ちでこの剣を使ったんですか」

「七穂と一緒に生きていきたい、そう思っただよ」

弦悟がまっすぐ毅瑠を見た。その視線を、毅瑠はしっかり受け止めた。

「七穂小母さんが言ったこと、神坂家のご先祖にも想いが届いたって……それは、剣〈髪逆〉が手伝ってくれるという意味ですか？」

「そうだな」

「でも、その後はどうなるんです？」

「わからない。しかし、どこかで断ち切らなければ、この連鎖は終わらない。この神社の言い伝えを信じるならば、神坂家の祖先は、一度は力を手放した。しかし、子孫が再び手を出した……力を使っ

て、金儲けのためにでも〈霊鬼割〉などというものを始めたのだろう。それが、きっと神の怒りを買ったのだ。生来〈魂糸〉が切れて繋がらない子が生まれてくるのは、神坂家にかけられ呪いだ。子孫のためにと伝えられた剣〈髪逆〉が、実は宿命に神坂家を絡め取っているのではないか……。剣〈髪逆〉を解放すれば……この宿命は終わるのではないか、そう思うんだ」

「でも、そんなことをしたら、チホの〈魂糸〉の環はどうなるんですか？」

「核となる〈神逆右の剣〉が残っていれば、それを使って繋ぎ止めることができるはずだ。もしかしたら……剣〈髪逆〉を解放すれば、今度こそ繋ぐことができるかもしれない……楽観的すぎるかな」

「確証は何一つないんですね？」

「そうだ。しかし……そうやって、二の足を踏んでしまうことが呪いのだよ」

「……」

沈黙が下りた。まばらに鳴く蟬の声が遠くに聞こえる。時折、車のクラクションがそれに混じる。時間が縫い止められたような錯覚が、穀瑠を支配した。

手の中にある〈神逆左の剣〉。これを自らの〈魂の要〉に刺せば、〈夢飼い〉向井穀瑠が覚醒する——それは可能性ではなく、確信だった。穀瑠の魂が確信している——しかし、理性は、弦悟の言うこともよく理解していた。それをやってしまったら、穀瑠の世界は激変することだろう。そして、それが引き金となって、八千穂の世界をも激変させることになる。でも——しかし——そうすることで、穀瑠と八千穂を取り囲む世界を守ることができる。

何を選択し、何を捨てるのか。

何を願い、何をなすのか。

それは誰のために——

それは何のために——

思考に沈む穀瑠を、弦悟は静かな表情のままで、いつまでも待つ

て
い
て
く
れ
た。
。

八千穂事件 16

夢を見ていた。

夢の中で、八千穂は鬼と闘っていた。八千穂が〈魂糸〉を使うと、弦悟の〈魂糸〉が減った。毅瑠の〈魂糸〉が減った。それなのに、鬼との闘いは一向に終わらなかった。いったい、いつまで続くのだろうか――

目が覚めると夕方になっていた。

八千穂は居間を飛び出した後、自分の部屋にこもった。そして眠ってしまった。その後、毅瑠と弦悟はどうしただろうか。八千穂は身繕いをする、忍び足で部屋を出た。

居間には誰もいなかった。それどころか、家の中にも誰もいなかった。七穂は買い物に出かけている頃合いだ。弦悟は神社だろうか。毅瑠は帰ったか――

八千穂はサンダルを突っ掛けると、ふらふらと家を出た。夕焼けで、世界が真っ赤に染まっている。その赤の中、神社の鳥居の下に、八千穂は見慣れた背中を見つけた。

「毅瑠」

呼びかけた背中が振り向いた。八千穂はなぜか、胸が締め付けられるような切なさを感じた。

「毅瑠……まだいたの？」

毅瑠は鳥居の下から続く石段に腰掛けていた。八千穂も並び、腰を下ろす。

「作戦について考えていた」

「さっきのやつ？」

毅瑠は頷いた。さっきと言っても、居間での話し合いから随分と時間が経っている。

「あの後、お父さん大丈夫だった？」

「ああ……」

毅瑠は言葉を濁した。何か酷いことでも言われたのだろうか。

「チホはどうしたい？」

「毅瑠はどうして欲しい？」

質問に問いかけで返すのがよくないのはわかっている。しかし――毅瑠の言葉が聞きたかった。

「俺は、チホと一緒に涼心学園高校に通いたい。先輩たちや、道生達と一緒に、普通の高校生活をこれからも続けたい。そのためなら、この寿命が短くなっても構わないと思っていた」

「……いた？」

「今でも思っている。でも、神坂さんと七穂小母さんがヒントをくれた。俺もチホも〈魂糸〉を減らさずに済む方法のね」

「〈髪逆〉？」

「わかっていたのか」

もちろん、それは考えた。しかし、剣〈髪逆〉は代々受け継がれてきたもので、これからも伝えていかなければならないものだ。ここで使ってしまったて良いのだろうか。

「神坂さんは言っていたよ。〈霊鬼割〉は神坂家にかけられた呪いなんじゃないかって」

「呪い？」

「未来永劫鬼を狩り、命をすり減らさなければいけないという呪いだ」毅瑠は一旦言葉を切った。「ねえ、剣〈髪逆〉で〈魂糸〉の環を繋いでいるとき、チホの〈魂糸〉はまるつきり普通の人と同じなの？」

「同じじゃない。少しずつだけ……減っていく」

「それは、普通の減り方より早いってこと？」

「そう」

「だから鬼を狩る？」

八千穂が頷いた。

「じゃあ、剣〈髪逆〉はどう？」

「どうって？」

「あれは、代々の〈霊鬼割〉の〈魂糸〉なんだろう？ 使うと〈魂糸〉が減るだろう？」

「……減らない」

「……」

空を見上げて考えを巡らしていた毅瑠が、ゆっくりと八千穂へと向いた。

「チホ……普通より減りの早いチホの〈魂糸〉が、剣〈髪逆〉に吸われている、ということはないのか？」

「？」

八千穂は、毅瑠が何を言っているのかがわからなかった。剣〈髪逆〉は八千穂の命を繋ぎ止めてきたものだ。それが、八千穂の〈魂糸〉を吸っている――？

いったいどんな顔をしていたのだろうか。八千穂の顔を見た毅瑠が、慌てて言い募った。

「剣〈髪逆〉が悪いとか、そういう話じゃないんだ。もし、俺が考えた通りの作戦を実行したとして、問題になるのはその後のチホの〈魂糸〉だ。さっき言ったことが本当なら、減りは激減するはずだろう？ 繋ぎ止めておきさえすれば、もう鬼を狩る必要もなくなるかもしれない」

「でも……伝えなきゃ」

「俺も神坂さんも、チホが一番大事だ。まずなにより、今ここにいるチホが幸せになれる選択をしたいんだ。先のことは……それから考えればいい」

「毅瑠。今までと言っていることが違う」

「そうだな。戸時会長に言われたんだ。『丸く収めることばかり考えていると、大切なことを見失う』って」

大切なこと――八千穂の大切なことは、あの学園に詰まっている。今、この時点でも増え続けているかもしれない被害者。高笑いを響かせているだろう鬼――鶴牧有人。弦悟が心配してくれていることはわかる。現状は明らかに八千穂のキャパシティを越えている。し

かし——それでも——〈靈鬼割〉として、ましてや学園の生徒として、八千穂はそれを看過することはできない。

穀瑠が手伝ってくれるという。ずっと一緒にいたいと言ってくれる。そして、〈靈鬼割〉としてのすべてをかければ、何とかできる可能性がある——

八千穂は夕焼け空を見上げた。

心は決まった。

穀瑠の言ったように、先のことは後から考えよう。

（いい？）

心の中でのその問いかけは、今は不可視の右の三つ編み——その中に宿る、代々の〈魂糸〉を宿した剣〈髪逆〉に対して向けられたものだ。

秋の香を乗せた風が吹き、八千穂のうなじを優しく撫でていった。それは、心のままに——という、剣〈髪逆〉からの答えのような気がした。

八千穂事件 17

俺の名は鶴牧有人。

ここ涼心学園高校は俺の三校目の職場だ。前の二校で、俺は優秀な教師だった。生徒たちにも人気があり、同僚からの信頼も厚い。父兄の評判も上々。俺を悪く言ったり、逆らったりするような奴はいなかった。そういう奴らは、力で強制的に従わせてしまったのだから――

四年前の夏、アメリカ留学の最中暴漢に襲われた俺は、危うく命を落とすところだった。暴漢が俺に拳銃を突きつけたのだ。しかし、その暴漢はなぜか、唐突に銃口を自らのこめかみにあてて引き金を引いた。命が助かった安堵と、目の前で脳漿が飛び散った衝撃で、頭の中が真っ白になったのを覚えている。

それが、俺の力の最初の発現だった。俺の力――睨み付けた相手を俺に従わせる力だ。

元々俺の目は人を虜にする魔眼だった。それが、命の危機に際して、特別な力を得たようだった。いろいろ試した結果、俺に睨まれた相手は、俺に対して反抗できなくなるという結論に達した。最初の奴が、俺の「死ね」という意識に反応したように感じたので、人を意のままに操れるようになったのか、とも思ったが、さすがにそこまでではできなかった。命の危険に晒されたあのときは、特別だったのかもしれない。

当初は、力を使うと非常に体力を消耗した。しかし、慣れてくるとそれもなくなり、それどころか、力を使うと体力が溢れるようにすらなった。まるで相手の体力を吸い取ってでもいるように――いや、俺は吸血鬼ではない。

留学が明ける頃には、俺は自分の力を見極めていた。もう俺に敵はいなかった。どんな奴でも、俺がひと睨みすれば震え上がり、俺に逆らえなくなるのだから。怯えた人間を意のままに操るのは簡単

だ。怯えさせた先には、特別な力などいないのだ。

しかし、俺は特段権力志向が強いわけではない。分別のある大人だ。復帰した大学でまじめに教員の資格を取り、社会人となった。なぜかって？俺は子供が好きだからだ。他に理由がいるのかい？

ふふふふ。もっとも、公立の学校にちまちまと勤めるのも面倒だったので、俺は私立高校の非常勤の口を探すことにした。

やってみて初めてわかったことがある。女子高生にかしずかれるのは気持ちが良いものだ。産休の代替教員は、長くても半年程で学校を去る。俺は支配を堪能し、爪痕も残さずに学校を去る——くくくく……俺はなんと欲なき男か！綺麗どころの女子高生を集めたあの一夜を、何の惜しげもなく捨てることができるのだから。ふふふふふ。はははははははは……

しかし、三校目のこの涼心学園高校で、奇妙な奴が現れた。俺が力を使おうとしたとき、そいつは飛び出してきた。

神坂八千穂。

奴は、真っ黒な剣のようなものを俺の胸に突き立てた——そう見えた。しかし、怪我がなかったばかりか、跡も残っていなかったことが解せない。あれは幻だったのか——奴も俺と同じように、何らかの力を持っていて、それが剣という形を見せているということも考えられる。それとも、俺が神に一步近付いたということだろうか。問題は、奴が俺の力の正体を把握しているようだ、ということだった。気付いて飛び出してきたということは、それをどうにかできる力がある、ということだ。これは少々やつかいだ。これからの人生のためにも、奴の排除は必須事項だ。

もっとも、簡単に退学にして終わらせるつもりなどない。晒し者にし、ゆがみ泣き叫ぶ姿を堪能しなければ気が済まない。なあに、上手くいく。俺は、俺を敵視する連中の攻撃を、物心ついた頃からずっと上手くいなしてきた。だから今回も大丈夫だろう。そしてなにより、奴を退けたとき、きっと俺は更なる段階へとレベルアップすることができに違いない。新たなる力を得るに違いない。

それこそ、世界をも跪ひざまづかせるような力を――

八千穂事件 18

金曜日。八千穂が、毅瑠が、綾音が、夏目が、それぞれに授業をサボった翌日。六時限目に緊急の生徒集会が組まれた。

四月の〈銅像生け贄事件〉のときも、同じように緊急の生徒集会が開かれたことがあった。事件の噂話に拍車がかかり、八千穂に対する嫌がらせがあったことで、夏目がキレたのだった。

しかし今回は、中途半端で終わってしまった始業式の続き、という位置付けだった。体育祭と文化祭について、生徒会からの説明が行われないままになっている。

この日毅瑠は、朝からまじめに授業を受けていた。そして休み時間には、教職員たちへの生徒会からの連絡に奔走した。

今回の生徒集会で、学園始まって以来の提案をします。是非、学園中の人に聞いて欲しい――

今日も八千穂は登校していなかった。

学園は穏やかで、何事もなかったように六時限目を迎えた。

「今日の集会は向井君の提案よ。だから、あなたに預けるわね」
体育館の舞台袖に集まった生徒会のメンバーを前に、夏目が言った。

始業式で伝え損ねた生徒会からのお知らせ、それは本来、わざわざ集会を開くほどの内容ではなかった。体育祭と文化祭の日程。それに伴う、準備や予行演習の日程。そして、各実行委員の紹介――その程度なのだ。後日プリントでも配布すればそれで終わってしまうような内容だ。

毅瑠は昨晚、夏目に電話をかけた。そして、この臨時の生徒集会を開催したい旨を相談した。夏目は毅瑠の意志が固いことを確認すると、了承したのだった。

「一時間もやることがないぞ」道生が言う。

「連絡事項が終わったら、俺に任せて欲しい」

「神坂と鶴牧先生の件か？」と太一。

「はい」毅瑠が頷く。

「八千穂ちゃん、大丈夫かしら」希奈が心配げに呟く。

「今日も休んでいるのよね？」と綾音。

「鶴牧の奴許せないわ。あいつになら何をしてでも許す」と息を巻いたのは作。

「停学になるようなことは避けるよ」と締めたのが力だった。

毅瑠は全員の顔を見回すと頭を下げた。

「一昨日は、戸時会長を含め、皆さんを信用していないようなことを口走ってすいませんでした。俺、話していないことがいっぱいあります。いつも助けてもらって、なのに全部一人で背負い込んでいるみたいな気分になっていて……これが終わったら、ちゃんと話します」

ばんっ、と太一が毅瑠の背中を叩いた。

「話せないことぐらい誰にだってある。それに、男は細かいことは気にしない。一昨日のことだって、もう過去のことだ」

「私たちは女なんですけど」

作が突っ込み、どっと全員が笑った。

ばんっ、と夏目が手を叩いた。

「さ、始めるわよ」

毅瑠はもう一度深く頭を下げると、ゆっくりと舞台へと歩き出した。

八千穂事件 19

生徒集会は無難に始まった。

毅瑠が司会としてマイクを握り、予定通りに進行していく。十五分ほどですべての連絡を終えた。ざわざわと、体育館の中を喧噪が満ちた。これで終わりだと思った多くの生徒が、帰れると思い浮ついていた。

舞台上に揃っていた生徒会役員たちが、舞台袖に引き上げた。マイクを握った毅瑠だけが残っている。

「学園中が一同に介しているこの場をお借りして、皆さんに提案があります」

毅瑠の言葉に、体育館のざわめきが大きくなった。何が始まるのか興味津々で見つめる者半分、面倒なことはごめんだと嘆息する者半分、といったところだ。

毅瑠はマイクを持ったまま、舞台縁ぎりぎりまで歩み出た。体育館内をゆっくりと見回し、職員席の一番後ろに座るその人物を見つけた。

「鶴牧先生」

毅瑠の呼びかけに、鶴牧は驚いたような顔をした。体育館中の視線が鶴牧へと注がれる。

「なんだ？」

「舞台上へお願いできますか？」

「……」

鶴牧は躊躇したが、雰囲気流された形で、しぶしぶ舞台へと上がった。

「鶴牧先生。生徒会書記の向井毅瑠です」

「知っている」

鶴牧は訝しげにしているが、決して警戒はしていない。自分のサプライズ歓迎会でも開かれると思っているようだった。

毅瑠は鶴牧を舞台中央まで誘い、その脇に立った。そして、生徒たちへと目を向けると、高らかに言った。

「私は、この鶴牧有人先生の免職を提案いたします！」

「な……！」

鶴牧は驚きの声をあげたが、体育館は水を打ったように静かになった。

「昨日、鶴牧先生は、あるうことか一生徒の退学を名指しで提案し、生徒たちを煽るという愚を犯しました。これは、教師としてあるまじき行為であるばかりか、人としてもあるまじき行為です」

毅瑠は声を張り上げた。鶴牧は毅瑠を見据えて真っ赤になっている。

「今日は、学校長をはじめとする学園中の先生方、職員の皆さんにも集まっていたいています。今ここで決議を下せば、鶴牧先生を免職にすることは可能です。ですから私は、ここに提案いたします。鶴牧有人をやめさせろ！」

「ふざけるな！」

鶴牧が憤怒の表情で毅瑠のマイクを奪い取った。

「ふざけていません」毅瑠は無表情で返す。

「冗談じゃない！ こんな侮辱を受けたのは生まれて初めてだ」

「そうですか。どんな感じですか？」

「なに？」

「神坂さんも、あなたに侮辱されたんですよ」

「あれは！ あのガキが先に手を出したんだ！」

鶴牧の言葉は震えていた。毅瑠は何気ない仕草で〈魂見鏡〉を取り出し、右目にかけた。しかし、そのことにさえ気が回らないほど、鶴牧は激昂していた。

「あのガキは、俺に刃物を向けたんだぞ！」

「刃物ですか？ それが本当なら、先生は生きていないでしょう？」

冗談はやめてください」

「冗談じゃねえ」鶴牧は毅瑠の胸ぐらを掴んだ。「ぶっ殺すぞ！」

「穏やかじゃありませんね。それだけでも、免職に充分だ……」

がつん、という鈍い音がして毅瑠が飛んだ。鶴牧の拳が毅瑠の頬を捉えたのだった。〈魂見鏡〉が飛び、舞台袖まで転がる。毅瑠は頬を抑えながら立ち上がった。

「今度は暴力ですか……皆さん見たでしょう？ こいつは教師にはふさわしくない！ 先生方もご覧になったはずだ！」

しかし、毅瑠のその声に反応する教師はいなかった。生徒たちが怯えた目で舞台上を見上げている。

「無駄だ。教職員は俺の言いなりだ」

「？」

「お前も馬鹿だな。俺を怒らせるとどうなるか、思い知らせてやる」
〈魂見鏡〉は舞台袖まで転がっていつてしまった。しかし、毅瑠には、鶴牧が〈魂糸〉を使おうとしているのがわかる。これは能力以前の、本能による察知だ。

「死んでしまえ！」

鶴牧が叫んだ瞬間——体育館の入り口の扉が勢いよく開いた。

八千穂事件 20

六時間目に合わせて登校した八千穂は、体育館の外で様子を伺っていた。そして、鶴牧が大量の〈魂糸〉を使う気配を察すると、体育館に飛び込んだ。

「やめろ！」

八千穂は全身全霊を込めて奥義〈髪逆〉を放った。自らの髪一本一本に〈魂糸〉を込めて無数の槍となす〈霊鬼割〉の奥義。それを、鬼に向けてではなく――鬼と毅瑠以外の全員に向けて放った。

鬼――鶴牧有人が驚いた顔でこちらを見た。しかしその〈魂糸〉は過たず毅瑠を捉えている。〈魂糸〉を引きずり出されるまでではないが、一手でかなり刻まれたようだ。

八千穂は唇をかむと、体育館の中を駆けた。長く伸びた髪の一本一本が、体育館中の人間の〈魂の要〉を貫いている。その髪を引きずり、それでも風のような速さで八千穂は駆けた。鬼の元へ――毅瑠の元へ――

「神坂……何だこれは」

舞台に飛び上がった八千穂に、鶴牧が質した。

「今お前がやっていることを、ここにいる全員が目撃している」
「？」

そう――鶴牧の〈魂糸〉が見えていないのは、今この場では鶴牧と毅瑠の二人だけだった。奥義〈髪逆〉に貫かれた全員が、一時的に体が麻痺し、一方で〈魂糸〉が見えるようになっていた。鶴牧の体から飛び出した醜い〈魂糸〉が、毅瑠を攻撃している様が見えるようになっていた。

八千穂は長く引きずった髪の中から、剣〈髪逆〉を取り出した。以前の三分の一程度の長さで太さしかなかった。たった今奥義〈髪逆〉に使った〈魂糸〉は、八千穂自身の〈魂糸〉ではなく、剣〈髪逆〉を形作っていた神坂家代々の〈霊鬼割〉の〈魂糸〉だ。八千穂

が命を削ることなく毅瑠の作戦を実行する——これがその答えだった。

八千穂は小さくなった剣〈髪逆〉を振り抜いた。毅瑠を捉えていた鶴牧の〈魂糸〉が切れる。

「チホ！ 右目だ！」毅瑠が叫んだ。

八千穂は躊躇することなく、鶴牧へと踏み込むと、その右目に剣〈髪逆〉を突き立てた。

通常の人間は胸の付近に〈魂の要〉を持つ。しかし、鶴牧のそれは右目の位置にあった。生まれつきなのか、それとも何かの拍子にそうなったのかはわからない。始業式のと、八千穂が剣〈髪逆〉で貫いたにも拘わらず鶴牧の〈魂糸〉が麻痺しなかったのは、位置が違ったからだだった。今回は、毅瑠が事前に〈魂見鏡〉で確認する手はずになっていた。

「やった」毅瑠が小さく呟いた。

八千穂はそのまま施術をするべく、左手を鶴牧の額へと伸ばした。そのとき——

「ふざけるな……」

鶴牧の右手が、八千穂の左手を掴んだ。

「？」

八千穂は慌ててそれを振り払うと、剣〈髪逆〉を抜いて飛び退った。

鶴牧はしばらく自分の右目を検分していたが、異常がないことを確認すると、八千穂を睨み付けた。睨み付けて——その目が驚愕に見開かれる。

〈魂糸〉が見えなくても、奥義〈髪逆〉で伸びた髪は目に映る。しかし、この驚きはそれを見たためではなさそうだった。鶴牧は自分の手を見つめ、そして体育館中を見渡した。

「なんだ……これは。なんだ？ これは！」

「〈魂糸〉だ」

八千穂が呟いた。

「たまいと？」

「魂の糸。命そのもの。お前が操っていたものだ」

今度こそ〈魂の要〉を貫いたにも拘わらず、鶴牧の〈魂糸〉は麻痺しなかった。しかし、〈魂糸〉は見えるようになったらしい。

やっかいなことになった——八千穂は小さくなった剣〈髪逆〉を構えて、唇をかんだ。

八千穂事件 21

〈魂見鏡〉を使って鶴牧を見たとき、〈魂の要〉は確かに右目の位置にあった。八千穂の剣〈髪逆〉は間違いなくそこを貫いた――

「魂の糸……。ふん、なるほど。そういうことか……」

「人の命に手を出すようになったお前は、鬼だ」

「鬼？　では、お前はなんなのだ」

「私は〈霊鬼割〉だ。鬼を狩る者」

「ふん。俺には、俺もお前も同じに思える。まあ、どうでもいい。生き残るのはどちらか一方……そういうことだな？」

「……」

鶴牧の〈魂糸〉による攻撃が始まった。八千穂は応戦するが、剣〈髪逆〉が短くなっているために分が悪い。しかも、体育館中の人間に繋がっている髪が、ここに来て邪魔になっている。

奥義〈髪逆〉を解いてしまえば良いのだろうが、それをやると、後々生徒や教職員を施術するときまで、彼らの〈魂糸〉の麻痺が維持できるかがわからない。それができなければ、この作戦は成功したとはいえないのだ。しかし、鬼が施術できなければ、そもそも成功がない――

毅瑠はポケットから袱紗にくるまった〈神逆左の剣〉を取り出すと、袱紗を開いた。白く輝く小さな剣を右手に握る。

〈夢飼い〉――自分にはその才能があるという。これを〈魂の要〉に突き立てればその力が手に入る。八千穂と共に生きると決めたのだ。今こそ、その力が必要なときだ――

昨日〈魂見鏡〉で自分の〈魂の要〉の位置は何度も確かめた。毅瑠は〈神逆左の剣〉を自分の左胸にあてると、力を込めて突き立てた。

「がっ……」

痛みで毅瑠は膝を付いた。手が僅かで止まる。夏服の胸に血が広

がった。

弦悟に嚴重に注意されていたことがある。この〈神逆左の剣〉を〈魂の要〉に突き立てるのは〈靈鬼割〉、つまりは八千穂でなければならぬ。そうでなければ、体を傷つけずに〈魂の要〉だけを貫くことはできない――

しかし、現状で八千穂にその余裕はなかった。そして、一瞬の猶予もない。毅瑠は自らそれを行うことにした。怪我は――あとから治せばいい――

〈神逆左の剣〉はどれくらい入ったか――まだ届かないか――痛みを耐えながら毅瑠がそう考えたとき――衝撃が走った。

頭の上から、下まで、体中の〈魂糸〉に走る閃光。かつて八千穂に施術をしてもらったときの数百倍の感覚――体中の知覚が解放し、光や、音や、感触が痛みとなって毅瑠を襲う。あまりの痛みに、毅瑠は左胸から〈神逆左の剣〉を抜いた――そして――唐突にそれは終わった。

毅瑠は辺りを見渡した。

舞台上では、八千穂と鶴牧の攻防が続いている。〈魂糸〉と剣へ神逆の鏢^{つば}迫り合いが行われている。

世界は――毅瑠の見る世界は、姿を変えていた。〈魂見鏡〉を使っていなくても〈魂糸〉が見える。そして、それを操ることができる確信が、毅瑠の中にあった。操れるなら――

「チホ！」

毅瑠は立ち上がると、八千穂へと駆け寄った。

「毅瑠？」

「生徒たちの分を俺によこせ！」
説明している暇はなかったが、八千穂は毅瑠の意図を悟ったようだった。剣〈髪逆〉を振るうと、自らの髪をぱつりと切り落とした。

毅瑠は八千穂が切り落とした髪の束を左手で掴むと、右手の〈髪逆左の剣〉を八千穂へと投げた。

「へかみさか」はそれで一対だ！」
八千穂はそれを受け取ると、二刀で剣を構えた。

八千穂事件 22

「チホ！」

毅瑠の声に振り返ると、胸を血で染めた毅瑠がいた。

「毅瑠？」

「生徒たちの分を俺によこせ！」

毅瑠の右手には、小さな白く輝く剣が握られている。あれは――剣〈髪逆〉と同じ？ 今の今まで気配がなかった。いや、今でも気配はしないが――しかし、毅瑠が変わったことはわかった。自分と同じ気配がする。〈魂糸〉を使う者の気配だ。

八千穂は即座に自分の髪を切った。鶴牧との闘いで、この髪が邪魔だと感じていた。毅瑠もそう見たに違いない。

「へかみさか」はそれで一對だ！」

毅瑠が白い剣を投げてよこした。受け取って初めて、それが剣へ髪逆〉と対の存在であることが確信できた。これは、気配が内へと向いている剣だ。いったい、今までどこにあったのだろうか――二刀で剣を振るいながら、八千穂は考えた。決して見てはいけなと言われていた神坂神社のご神体だろうか。

鶴牧の攻撃には、体がほとんど無意識に反応した。しかも、奥義〈髪逆〉の軀から抜けた。八千穂は幾分余裕を取り戻していた。

鶴牧の〈魂の要〉は、やはり右目に違いない。ただ剣〈髪逆〉に耐性があるのだ。ただでさえ位置が違う。それ以外にも他と違いがあってもおかしくはない。

ならばどうしたら良いだろうか。

〈魂糸〉が麻痺していなくても施術は可能だ。しかし、それは相手が大人しくしている場合に限る。これだけ抵抗されては、そう簡単にはいかない。

ならばいっそ、物理的な打撃を加えてみようか。剣〈髪逆〉は物理的な攻撃を行うこともできる。しかし、鶴牧の〈魂糸〉攻勢の前

に、打撃を与える間合いまで入ることができない。飛び込めたとしても、今度は殺さずに打撃を加えるのが難しい――

やはりいつものやり方しかないか――と、八千穂は結論付けた。ならば、凌ぎきるしかない。そして、〈魂の要〉をもう一度貫く。何度でも、上手くいくまで――

「チホ！ 二刀で使っちゃだめだ！」 毅瑠の声がした。
「なに？」

「繋げて一本にするんだ！」
「繋げて？」

一瞬気がそれたために隙ができた。躲し切れなかった〈魂糸〉に弾かれ、八千穂は舞台上に倒れ込んだ。

「どうした、終わりか？」 鶴牧がほくそ笑む。
「まだ」

八千穂は体を起こすと、舞台から飛び降りた。

八千穂事件 23

舞台から飛び降りた八千穂は、生徒たちの間を抜け、体育館の後ろへと走った。その後を鶴牧が追う。

穀瑠は二人を目で追いながら、自分が抱えている髪の手束へと意識を集中した。

〈夢飼い〉——それは、人の夢を飼い慣らす者——向井という名前は、〈夢飼い〉の一族の末裔ではないか——初めて八千穂と出会ったとき、そんなことを言われたことがあった。しかし、まさか本当に〈夢飼い〉の力を手にいれることになるとは思わなかった。

穀瑠の手には、数千本の髪が巻き付けられている。それは体育館中の人の〈魂の要〉に繋がっている。これも剣〈髪逆〉と同じで、八千穂が使う限り、直接人体に傷を与えることはない。穀瑠は、なんとかこれを維持しなければならなかった。

能力が身についたからといって、説明があるわけではない。しかし、髪束に導かれる感触があった。穀瑠はそれを感じるままに、〈魂糸〉の維持を行っていた。この奥義〈髪逆〉に込められた〈魂糸〉は、八千穂のそれではなく、神坂家の祖先たちのものだ。それが穀瑠を導き、〈魂糸〉を維持しているのかもしれない。

その様子に、さっき髪束から意志が伝わってきた。それぞれの髪は人の〈魂の要〉に繋がっているのだから、当然そこから意志が伝わってくる。その対象があまりに多いため、穀瑠はどれが誰だか判別ができずにいた。しかし、その意志だけははっきりと伝わってきた。剣一対を一本にしろと——

それは生徒でも、教員でもありえない。八千穂の祖先の誰かの意志に違いなかった。

そうして指摘されて初めて、穀瑠は安易に〈神逆左の剣〉を八千穂に渡した自分のうかつさに戦慄した。〈神逆左の剣〉は〈魂糸〉の能力を解放し、固定する。八千穂がそれで鬼の〈魂の要〉を貫い

た場合、さらなる力を鬼に与えてしまう可能性があったのだ。

しかし、神坂家の祖先たちの意志が「一本にしろ」と言うのだから、そうすれば打開する力になるはずだ。間違っても八千穂の不利になることはないだろう。

鶴牧と距離を取った八千穂が、体育館の隅で苦勞していた。剣へ髪逆」と〈神逆左の剣〉を一本にする方法で悩んでいる――

意志が伝わるということは、こちらの意志も伝えられるということだ。穀瑠は、髪束に宿る代々の〈靈鬼割〉の〈魂糸〉に願った。八千穂の力になってくれと。そして、そこに自分の〈魂糸〉を込めた。

髪束の中の一本が、八千穂へと伸びた。

体育館の後ろで鶴牧と距離を取る八千穂の手元へ、ふいに一本の髪の毛が伸びてきた。毅瑠が抱える奥義〈髪逆〉の一本だった。それが剣〈髪逆〉に触れる——と、それまで硬く光っていた剣〈髪逆〉のシルエットがばやけた。刃面に浮かび上がる幾重にも重なる綾模様——それは〈霊鬼割〉たちの〈魂糸〉を込めた髪で編み上げられた剣〈髪逆〉の本来の姿。そして唐突に、それが解けた。解けた髪は広がって、八千穂の手の回りに球状に漂う。まるで、何かを待っているかのように。

「！」

剣〈髪逆〉の中には、小さな剣が収まっていた。毅瑠から受け取った剣とよく似た形の、しかし色の違う、漆黒の石の剣。八千穂は両手に持った二本の剣を縦に重ねた。すると、毅瑠から伸びてきた髪が二本の剣に巻き付いた。それを合図に、一度解けた剣〈髪逆〉を構成する髪たちが、再び剣の形を編み始めた。

実際にはほんの数秒の出来事——しかし、八千穂には、編み上げられていく一本一本が認識された。それぞれが、八千穂へと繋がる代々の〈霊鬼割〉の〈魂糸〉なのだ。

そして、最後の一本が巻き付いたとき、剣は新たな形をなしていた。白銀に輝く直刀——

「？」

八千穂は確かに聴いた。その剣から語りかけられる声を——厳しかったけれど、懐かしいあの声を——

「これで終わりだ！」

鶴牧が怒声をあげて八千穂に向かってきた。わざわざ近付いてくるということは、〈魂糸〉が大分減ってきているということだ。無理して長く伸ばしたくない——本能的にそう思っているのだ。

八千穂は新たな白銀の剣を構えた。

「〈神逆〉ね……おばあちゃん」

怒濤の鶴牧の攻撃を、八千穂は〈神逆〉でさばいた。長さはかつての剣〈髪逆〉と同程度。しかし、まとう力が段違いだった。だが問題もある――力の消耗が早い。二本の剣を繋ぐ〈魂糸〉が、見る見る減っていくのがわかる。急がなければならない。

鶴牧の攻撃は変化しつつあった。それまで、正面からの攻撃が多かったが、四方八方から〈魂糸〉を仕掛けてくるようになった。腕が上がっている――鶴牧有人は、天性の〈魂糸〉使いのようだ。

一瞬、鶴牧の攻撃に隙ができた。

「はっ！」

そこを見逃さず、八千穂は一気に踏み込むと、〈神逆〉を鶴牧の右目へと突き立てた。

「やはりそうか……」

「く……」

紙一重で鶴牧は八千穂の突きを躲した。そして、逆に一步踏み込むと、八千穂の顔面にその拳を叩き込んだ。

「がっ……」

八千穂はもんどり打って体育館の床に転がった。

「狙いは俺の右目か。しかし、それさえわかってしまえば簡単だ」
頭を振って態勢を立て直した八千穂の眼前に、鶴牧の〈魂糸〉が迫る。八千穂は辛うじて〈神逆〉でそれを避ける。その隙を突いて、鶴牧の拳が再び迫る。

「ははははは！ 俺はよ、四年前まで武道の心得なんてなかったんだ」

殴ると見せかけて、今度は鶴牧の蹴りが八千穂の右脇腹に入った。
「だがな、力に目覚めてからこっち、自分の体が思い通りに動くんだよ。そうだな、あっちの大学の運動部の馬鹿どもを従わせた辺りからだ」

「喰ったな……」

「喰った？ まあ、似たようなもんか。俺は、他人の能力を自分の

ものにすることもできる。でもよ、ほら、俺って紳士だろ？ 今更金メダルとか目指そうとは思わないんだぜ。俺が勝つのがわかっていたらつまんねえしよ！」

人の能力は、ある程度〈魂糸〉の属性に左右されるところがある。それまで運動をしてこなかった鶴牧が、スポーツマンの〈魂糸〉を取り込むことによって、練習をせずにそれを体得するケースも考えられるが――しかし、この鬼は何でもありなのか――

「お前、面白い刀を持っているよな。それを、俺によこすんだ！」

「ふざけるな！ お前みたいな鬼は、のさばらせちゃいけない！」

次の瞬間、鶴牧の掌底が八千穂の喉に入った。八千穂は息が詰まり、体の自由がきかなくなる。そのままの勢いで、鶴牧は八千穂を体育館の壁に押しつけた。

「終わりだ」

八千穂事件 25

二本の剣を一本にするところまでは上手くいった。しかし、八千穂が押されていた。

鶴牧の〈魂の要〉は間違いなく右目の位置にある。鶴牧に気付かれてしまったが、結局はそこを狙うしかない。なんとか——なんとか鶴牧に隙を作ることができないだろうか。

穀瑠は、自分が鶴牧に飛びかかることを考えた。しかし、奥義へ髪逆〉を放り出すわけにはいかない。

(……がんばって)

「？」

穀瑠は意識を集中した。

(がんばれ)

(負けるな！)

(そんな奴、やつつけちゃえ)

はっと穀瑠は周囲を見渡した。〈魂糸〉が麻痺し、思うように体を動かせない七百人以上が、八千穂と鶴牧の闘いを、その目だけで追っている。そして、全員が八千穂を応援している——

見えるようになることと、それが理解できることは違う。それは弦悟も指摘していた点だ。しかし、八千穂と鶴牧の闘いは、明らかに鶴牧の方が悪だ。誰もが、それを本能的に察知している。ならば

穀瑠は髪束を抱えたまま舞台から飛び降りた。鶴牧は八千穂の喉を締め上げるのに夢中で、穀瑠に気付く気配がない。

穀瑠は左腕に髪束を抱えたまま、右掌に意識を集中した。そこに自分の〈魂糸〉を集める。さっきの鶴牧の攻撃によって、穀瑠の〈魂糸〉は切られてしまっている。しかし、今は逆にそれが武器になる。切れてはみ出した〈魂糸〉は力だ。

届け！ と穀瑠は右手を伸ばした。その手から、穀瑠の〈魂糸〉

がまっすぐに鶴牧へと伸びた。そして――届く――

「みんな、力を貸してくれ！」穀溜は全身全霊で叫んだ。

鶴牧が穀溜に気付いた。こちらを振り返る。そして――

「があっ……」

鶴牧の体が、電撃を受けたかのように仰け反った。頭を抱え、床をのたうち回る。

「チホ！ 今だ！」

喉を潰されかけていた八千穂は、苦しそうにむせ返りながら、それでも〈神逆〉を構えた。そして、のたうち回る鶴牧が顔を上げた瞬間、その右目を貫いた。

「このっ……」

鶴牧が叫び声をあげ、その手を再び八千穂の喉笛へと伸ばした。しかし――そこまでだった。

鶴牧の目が大きく見開かれままた固まった。伸ばした両腕が力なく落ちる。

荒い息を吐きながら、八千穂は左手を鶴牧の額にあてた。

「魂たまの綾あやは己おのが内うちへ、環かんを廻まわし命いのちを紡つむげ……」

切れ切れな詠唱と共に、八千穂の指が小刻みに躍った。まるで、操り人形を繰くる人形遣いのように。

「やめろ……やめ……ろ……やめ……」

〈魂糸〉が痺れてほとんど動けないにも拘わらず、鶴牧は抵抗し続けた。

「封！」

八千穂が気合いをいれると、鶴牧の体が一つ大きく跳ねた。そして、鶴牧有人は――鬼の力を失った。

「終わったな」

穀溜は、白銀の剣を引き抜いて体を起こした八千穂に言った。

八千穂は立ち上がり、小さく頷いて、そして崩れ落ちた。

八千穂事件 26

八千穂は学校の正門前に立っていた。

正門の中では、多くの生徒たちが集まって、口々に何かを言っている。

また――私をやめさせろ、と言っているのだろうか？

それでも、八千穂はこの学校が好きだった。

毅瑠がいる。綾音もいる。夏目も、生徒会のみんなもいる。他の生徒たちやクラスメイトたちも――好きになってくれなくても、自分がある所に属していればいい。

声をかけてくれない位なら問題ない。小中学校の頃からそうだったから。

嫌がらせは――少し辛い。でも、四月の事件のとき以降、目立った嫌がらせはない。今回のことがなければ、クラスでももっとうち解けることができたのだろうか。

生徒たちの声が少しずつ聞こえてきた。

八千穂は思わず耳を覆った。

しかし、誰かの手が、優しく八千穂の手を止めた。

(チホ。聴いてごらん)

(毅瑠？)

八千穂は耳を澄ませた。

(……ばれ)

(…ばって！)

(がんばれ)

(負けるんじゃないぞ！)

(踏ん張れ！)

これは――

(みんな、チホを応援してくれているんだよ)

(応援……)

幾重にも重なった声は、すべてが八千穂への応援だった。負けるなど、がんばれと、八千穂を励ましてくれていた。

温かいそれらの声に包まれて、八千穂は学校の正門をくぐった――

「……？」

「目が覚めた？」

気が付くと、八千穂は毅瑠に抱きかかえられていた。場所は体育館の中だ。八千穂は飛び起きた。

「鬼は？」

「終わったよ」

見ると、鶴牧が仰向けに倒れ、気を失っていた。〈魂糸〉の環が復元されている。八千穂は自分が施術したことを思い出した。

「〈神逆〉は？」

「これ？」

白銀に光る〈神逆〉は、毅瑠の手に握られていた。それが実体を保っているということは――

「毅瑠……」

毅瑠の胸が血に染まっている。毅瑠が持っていた白い剣――あれで〈魂の要〉を貫いたのだ。そして〈魂糸〉を操る力を手に入れた。闘いの最中は深く考える余裕がなかった。でも――

「細かい話はあとだ。みんなを施術しなくちゃ」

八千穂は体育館を見渡した。体育館にへたり込む生徒の三分の一と、教職員のほぼ全員が、鶴牧によって〈魂糸〉を傷つけられていた。

八千穂事件 27

八千穂が途方に暮れた顔をしていた。

「ひとりひとり施術するのは無理だよ。まとめてやろう。最初からそのつもりだったんだから」

穀瑠には、それができる確信があった。確信の元は、奥義〈髪逆〉に込められた〈霊鬼割〉たちの〈魂糸〉だ。

「チホの〈霊鬼割〉の力。俺の〈夢飼い〉の力。そして、この剣の力があれば大丈夫だ」

八千穂はまだ半信半疑の顔をしていたが、それでも頷いた。

「施術の前にきめなくちゃいけないことがある」

「何？」

「みんなの記憶をどうするか」

八千穂の表情が強ばった。

「俺の力は人の記憶を操る。たぶん、今回の記憶を消すこともできるし、残すこともできる。始業式でのチホのことも、全員の記憶から消すこともできる」

口には出さなかったが、全員が八千穂の友達だ、という記憶を植えることもできるだろう。しかし、それは八千穂が望まないだろう。

「俺としては、細かなことは消して、チホに助けられたって記憶だけ残すのがいいと思うんだが」

八千穂は首を振った。

「今回みんなが見たことは普通のことじゃない。でも……消してしまうと、記憶や意識に障害が出るかもしれない。だから、夢だったことにできないかな」

「夢ね。〈夢飼い〉の真骨頂だ」

「でも……」

「わかってる。生徒会のみんなの記憶はいじらない」

八千穂はほっとしたように頷いた。

「じゃあ、やるか」

「あ、待って」

「？」

「あのとき、穀瑠は鬼に何をしたの？」

「全員の意識を、俺経由で鶴牧に繋いだんだ」

「全員の？」

「そうだ。ここにいる全員が、チホを応援していたからね」

「あ……」

八千穂が驚いたような顔をした。何かに耐えるように、唇をかんで下を向く。

「チホ？」

八千穂は小さく何度も首を振ると、始めようと言った。

八千穂事件 28

八千穂と毅瑠は舞台上上がった。

髪束を抱えた毅瑠と、〈神逆〉を持った八千穂が向き合う。今、この場にいる全員の意識を、文字通り束ねている毅瑠——そんな毅瑠を通して、七百人以上をまとめて施術するには——

「大丈夫。何かあったら、俺も一緒に責任を持つよ」

「毅瑠……」

八千穂は、白銀に輝く〈神逆〉を見た。

（おばあちゃん。どうすればいいの？）

〈神逆〉が僅かに瞬いた。そして、八千穂の心に舞い降りた確信——
「わかった。おばあちゃん。やってみる」

八千穂は意を決した。左手を、髪束を抱えている毅瑠の左手に乗せ、右手に〈神逆〉を握って顔の高さに掲げる。

「魂^{たま}の綾^{あや}は己^{おの}が内^{うち}へ、環^{かん}を廻^{まわ}し命^{いのち}を紡^{つむ}げ！」

〈神逆〉が白銀の光を増した。八千穂の手の中で、それは剣の形を失い、解^{ほど}けた。核をなしていた白黒二本の剣が宙に浮き、八千穂の右手を中心に円を描いて飛び始める。次第に速度を増すその軌跡が、やがてまばゆい真円となった。そして、二本の剣をまとめていた〈魂糸〉仕込みの髪は、輝き、舞い、大きく広がった。まるで、天使の翼のように。

八千穂は、右手に輝く白銀の輝きから、力が流れ込んでくるのを感じた。その流れは、左手を通して毅瑠へと注ぎ込み、毅瑠の抱える奥義〈髪逆〉の髪束を伝って、体育館中の生徒へと、教職員へと迸った——もう、八千穂が何かをする必要はなかった。二本の剣が、全員の〈魂糸〉を環に繋いでいく——

その流れの途中で、毅瑠が〈魂糸〉を弾^ひいていた。弾^ひく——八千穂には、そうとしか表現できなかった。数百人分の〈魂糸〉を、毅瑠はまるで大きな竖琴でも弾くように、つま弾いている。それがへ

夢飼い〉の力――夢を――ひいては記憶までも操る〈夢飼い〉の力だ。

自分のために穀瑠をこんな風にしてしまった。八千穂は胸が締め付けられた。さっき穀瑠は、何かあったら一緒に責任を持つ、と言ってくれた。でも、責任を持たなければいけないのは自分ではないのだろうか。

（がんばれ、女の子）

それは、誰の声だったろうか。

あまりにたくさんの〈魂糸〉に繋がっているために、誰の声なのか定かではない。でも、八千穂の悩みを感じ取った誰かが、励ましてくれたようだ。

この施術が終われば、ここにいる大多数にとっては、これは夢だったことになってしまう。鶴牧との闘いの最中に応援してくれたことも、夢の中の出来事として埋もれてしまう。

でも、八千穂はそれでもいいと思った。励まされた八千穂の心が覚えていれば、それでいいと思った。それだけで、命をかけた甲斐があったと思える――

ふわっと何かが八千穂の心に触れた。

「おばあちゃん……」

おばあちゃんが、そのまたお母さんが、そのお父さんが、そのまた叔父さんが――代々の〈霊鬼割〉が――今まで剣〈髮逆〉として八千穂と共にあった者たちが、八千穂に別れを告げていた。

「ありがとう」八千穂の頬を涙が伝う。

「チホ」

穀瑠の声に八千穂は頷いた。最後まで、しっかりと施術を終わらせなければならぬ。

今や体育館は、白銀の輝きに完全に満たされていた。右手の周りをますます高速で回る剣を高々と掲げ、八千穂は最後の気合いを發した。

「封！」

体育館を満たしていた輝きは、唐突に八千穂の右手に収束した。
そして、そこにいる全員の体の中を、優しい風が吹き抜けた。

八千穂事件 29

体育館に集う全員が、はっとした。

今まで何をしていたのか——そうだ、生徒集会の最中だった。体育祭と文化祭の連絡があつて、それから、何か重大な発表があつたような——。しかし、思い出せない夢のように、その記憶は漠としておぼろげだ。

全員が同じような想いに囚われ、やがて、すべての視線が舞台上に集まった。

そこには、生徒会書記の向井毅瑠と、女生徒が一人向かい合っていた。

すらりとした長身の立ち姿。高校生離れして大人っぽい雰囲気。切れ長の目と、すっと通った鼻筋。そして髪型は、肩口で切りそろえられたボブカット——神坂八千穂だった。

髪を切ったんだ、と誰もが思った。そこに重大な意味があつたような気がして——しかし、その想いは誰の心をもすり抜けた。そうだ、彼女はここしばらく学校を休んでいたのだった。夏風邪をひいたという話だったか——

六時限目は残り五分だった。

そんなに時間が経っていたのか、長引くのはごめんだ、今は何をしているのか——そんな空気に反応して、舞台上で毅瑠がマイクを取った。

「ええ、それでは、以上を持ちまして……」

そこまで言いかけたとき、八千穂が毅瑠に近付いた。

「毅瑠……」

「？」

八千穂が毅瑠を見つめて、口をぱくぱくした。毅瑠が首を傾げる。体育館中の生徒たちは、八千穂の顔を見て事態を悟った。なににより、こういうことに敏感な年頃である。誰もが息を詰めた。

しかし——八千穂は固まったままだ。

「……がんばれ」体育館のどこから女生徒の声が飛んだ。

「がんばれ、神坂」今度は男子生徒だった。

「ほら、がんばれ」「どうした」「向井、しっかり聞いてやれ」

やがて、八千穂を励ます声は体育館中に波及し、大合唱となって舞台上に降り注いだ。

「ええと……」

いたたまれなくなって逃げ出そうとする毅瑠を、飛び出してきた太一、道生、力の三人が取り抑えた。綾音が八千穂の肩を抱き、希奈と作がその背中を押す。あろうことか、夏目はマイクで二人の声を拾っている。

「毅瑠……」

「はい」

「私のせいで、ごめんなさい。私、毅瑠が好き。これからずっと毅瑠と一緒にいたい」

「……こちらこそ」

わっと体育館中から歓声が上がリ、二人は生徒会のメンバーにもみくちやにされた。

六時限目の終わりを告げるチャイムが鳴っても、生徒たちの大騒ぎは止むことがなかった。

八千穂事件 30

「そうか。左右の剣は円を描いたか」

すべてが終わった翌日の土曜日。毅瑠は神坂神社を訪れていた。ことの顛末を弦悟に報告し、〈神逆左の剣〉と〈魂見鏡〉を返すために。

弦悟は〈神逆左の剣〉を受け取ると、それを桐の箱に安置し、丁寧に標縄をかけた。

「二本の剣は陰と陽……一対で初めて本当の力を発揮したんだな」
弦悟が感慨深げに呟いた。

「どちらが陰で、どちらが陽だったのでしょうか？」と毅瑠。

「どちらがどちら、ということはないのだろう。色は白と黒。気配は内と外。力は〈魂糸〉を麻痺させるか、その力を解放するか。両方が揃って環を描き、〈魂糸〉の環を繋ぐ力を発揮した……というところか」

「そうすると、神坂神社の言い伝えは、どう解釈すればいいんですかね？」

「？」

「左右の剣を角に持っていた鬼は、そのままでも娘の命を救えたはずではありませんか？」

「想像だが、力が鬼の中で完結していたのだろう。角が折れることで左右の均衡が崩れた。そうして初めて、娘を救うことができたのではないか？ 今回は、二本の剣の間に、歴代〈靈鬼割〉の〈魂糸〉と、奥義〈髪逆〉という媒介が存在したから、体育館の中にいた全員が、一つの存在として認識されたんじゃないかな」

「……難しいですね」

「まあ、言い伝えについては、あくまでも想像だ。結果的に上手く施術できたのだから、本当に良かった」

「はい」

弦悟と毅瑠は桐の箱を見つめた。静謐な空気が満ちている。屋外で猛威を振るっている残暑が、剣の力に恐れをなしたように、本殿の中はひんやりとしている。

「しかし、無茶をしたね」弦悟が口を開いた。「あれほど八千穂に使わせると言ったのに」

「そうですね。自分でも、今考えると震えます」毅瑠はまだ傷の塞がらない左胸に手をあてた。「それ程に、あの鬼は手強かった」

「〈魂の要〉が右目に位置していたんだって？」

「はい。そんなことがあるんですね」

「何事にも例外はある。その目が、人を惹き付けたり、無意味に苛立たせたりしていたのだろうな。そして、何かの拍子で〈魂糸〉がはみ出し、鬼となった」

「〈魂糸〉の理屈は知らなかったようですが、その扱いは天才的でした」

「才能があったのだな。迷惑な才能だが……そういえば、君だって才能があったのだった」

「はあ……」

「〈夢飼い〉とは、どうやって夢を操るのだ？」

「〈魂糸〉を弾くんです。楽器のように奏でるというか」

それが、毅瑠が手に入れた力だった。人の〈魂糸〉をつま弾き、その音色で夢を知り、夢を操る。夢は記憶そのものだから、結果的に記憶を操ることができる。〈夢飼い〉本人の〈魂糸〉が切れてはみ出している必要はないが、基本的に直に人に接触しないことには力が使えない。導いてくれるものがなくなってしまった今、毅瑠は自分一人で他人の夢を操れる自信などなかった。唯一、常に〈魂糸〉を視認することだけはできるようになっていた。

「それだがな、訓練すれば、〈魂糸〉を見る見ないは自在になるだろう」

「本当ですか？」

「たぶん……だがな」

「二人とも、お昼ご飯」

社の外から二人を呼ぶ声がした。八千穂だった。

「おい、今行く」弦悟が声を張り上げた。「さて、難しい話は終わりにしよう」

「チホは大丈夫でしょうか。物心ついた頃から〈髪逆〉と一緒にだったんですね」

すべての施術が終わったとき、残ったのは白黒二本の剣だけだった。かつて剣〈髪逆〉を構成していた歴代〈霊鬼割〉の〈魂糸〉を込めた髪は、一本も残っていなかった。それでも、残された小さな〈神逆右の剣〉は、八千穂の右のうなじ辺りに消えた。単体で、今でも八千穂の〈魂糸〉を繋いでいる。

「……完成した〈神逆〉をもってしても、八千穂の〈魂糸〉の環は繋がらなかったか」

「はい」

「でも、それは考えてもしょうがない。言っておくが、君のせいでもないぞ、向井君」

「……」

「色々あったが、とりあえず、八千穂を頼む」

「はい」

毅瑠が頷き、弦悟も頷き返した。

「二人とも、何やってる？」

二人が一向に現れないからか、八千穂が本殿に顔を出した。

「いやあ、すまん。向井君と男同士の話をしていたんだ」

「男同士？」

そうだ、と言って、弦悟はさっさと本殿を出て行った。肅かな板敷きの本殿に、毅瑠と八千穂の二人が残された。昨日の舞台上での大告白劇から一夜。二人きりになるのは初めてだった。

「毅瑠、お昼」

「うん」

しかし、二人とも何となく、その場を動くことができなかった。

「そういう髪型も似合うな」

三つ編みをばっさり切ってしまったので、今の八千穂は涼しげなボブカットだ。〈霊鬼割〉の力を使えば右の三つ編みが顕現するかもしれないが、まだ試していないらしい。

「その……驚いたよ。昨日。結果的には……良かったかな」

二人の大騒動は、生徒集会の空白の約三十分を吹き飛ばしてしまふほどのインパクトがあった。

「毅瑠が白い剣を使ったでしょ？ 私は毅瑠のお陰で良い方に変わった。でも、毅瑠が〈夢飼い〉になったのは良いことではない気がした。それは、私が責任を取らなくちゃいけないって、あるとき思ったの」

八千穂の言葉を聞いているうちに、毅瑠は頬が緩んできた。そして、ついには吹き出した。

「なに？」

「俺たち、似た者同士だな」

「？」

「深く考えるのはやめよう。俺はチホが好きだ。それだけだ」

「私も毅瑠が好き」

靴下を通して伝わる板敷きの感触は、硬く、ひんやりとして、毅瑠には妙に印象的だった。それは、八千穂の柔らかい唇と、正反対の感触だったからかもしれない。

毅瑠の記憶操作は上手くいった。

週が明けると〈神坂八千穂事件〉は、生徒集会での八千穂の告白事件ということになっていた。

《八千穂事件 了》

終幕

神坂八千穂は、その後も〈靈鬼割〉をやっている。自分の命云々（うんぬん）ではなく鬼を見過ごせなかったためだったが、過剰に反応することはなくなった。分をわきまえてきた、と本人は思っている。むかいがたる向井毅瑠は、〈夢飼い〉の力を手にいれたものの、だからどうというでもない。九月の事件以降、毅瑠はその力を使っていない。今は神坂弦悟かみさかげんごの元で、力を制御する修行を行っている。最近では、普段〈魂糸〉たまいとを見ずにいることができるようになってきた。

そして、二人は学園公認のカップルとして、日々生徒たちの冷やかしに晒されている。

とはいえ、人前でべたべたするような二人ではない。今まで通り一緒にいるだけだった。

それでも、八千穂にとっては良い風が吹いている。あの生徒集会での木訥な告白は、女生徒たちの心を捉えた。最近では、綾音や生徒会の面々以外にも友達が増えたようだ。

体育祭と文化祭を無事に乗り切った生徒会の三年生たちは、受験の準備に忙しい。涼心学園は大学もある。最初からそこへ進学する予定の縁田太一えにしたいちは別として、戸時夏目とどきなつめ、木谷希奈きたにきな、水村作みずむらさく、水村力は、それぞれに目標を定めて受験勉強に力をいれている。

一方で、残された二年生たちもまた忙しい。山瀬道生やませみちおは次の生徒会長を狙っている。それを推す向井毅瑠と乙蔵綾音おとくらあやねは、新しいメンバーを物色している。夏目率いた生徒会に負けられないようにがんばらなくてはならない。

そうして、季節はいつしか秋を過ぎ、冬が来て、年が変わる。

八千穂の事件以降、涼心学園高校では目立って大きな事件もなく、本来の進学校の様相を取り戻した。

しかし――世に〈魂糸〉が存在し、日々〈鬼〉が生まれ、〈靈鬼割〉のような存在がそれを狩っている事実は変わりはない。

世の真実に関わってしまった穀瑠と八千穂が、この先ずっと穏やかな生活を送ることができるのか――
それはまた、別のお話。

終幕（後書き）

最後までお付き合いいただきましてありがとうございます。
また、お会いいたしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9505e/>

ひきわり

2010年10月8日11時56分発行